電波男

本田透

Honda Toru

オタクサイト『しろはた』主宰

三才ブックス

電波男

本田透
Honda Toru

三才ブックス

わかったよ、オレは。要するに正義は向こう（行定&柴咲）にあるんだ。あいつらが世間というものであり、あいつらが正しいのが世の中というものなんだ。そして『世界の中心で、愛を叫ぶ』連中を見た瞬間に理由もなくムチャクチャにしてやりたい思いに駆られるオレは悪の側なんだ。

今こそオレはジョーカーの気持ちがわかる。カエルを刺してしまうサソリの気持ちが分かる。オレは必ずやバットマンに退治されるだろう。でも、それがわかっていても、オレは戦いを挑まずにはいられないのだ。あいつらと同じ側にだけは死んでもいられない。

——柳下毅一郎「映画評論家緊張日記」

まえがき

オタクは現実に勝ったあああっ!!

いきなりで恐縮だが、この分厚い本は歴史上初となる**「オタクによるオタクの勝利宣言書」**である。

実はそもそもこの本を書き始めた当初は、

「オタクはどうしてモテないんだろう？　何も悪いことしてないのに、うわああああーん」

というオタクの泣き言を書き連ねる「オタク負け本」にする予定だった。オタクは基本的に自分を笑いものにできる知性の持ち主が多いのだ。しかし、担当編集者から「参考資料」として手渡された『負け犬の遠吠え』※やら『だめんず・うぉ〜か〜』※やらの一連の負け犬女関連書籍を読んでいくうちに、俺の心の中で何かがスパークした。こいつらは、「自分は男にモテない負け犬」とか「自分はダメな男にばかりひっかかるだめんず」とか自嘲しながら、次の瞬間には口をそろえてこう言うのだ。

「それでも、オタク男だけは相手にしたくない！」

※『負け犬の遠吠え』ベストセラーになった酒井順子のエッセイ。講談社。「30歳以上、未婚、子ナシ」の女性を「負け犬」と定義。二〇〇四年の流行語に選ばれ、テレビドラマにもなった。

※『だめんず・うぉ〜か〜』扶桑社『週刊SPA!』に連載されている倉田真由美の漫画。女たちがつきあった男のダメさ加減を自慢しあう。

かーっ！

喝だ、こりゃあ！

俺たちオタクが、いったいお前たちに、何をしたというんだ？　なんで、日本文化を支えるオタクたちをこんなボロクソに罵れるんだ？

「30にもなると、まともな男はもう残っていない」

「まともな男に出会えない」

「でも、オタク男だけはいやだ」

なんだなんだお前ら！　結局、自嘲しているふりをして、オタクを馬鹿にしたいだけじゃないか！　オタクという「自分より下の存在」がいることで安心して「下には下がいるから、自分たちは実は全然大丈夫」と思い込みたいだけじゃないか！

ふざけるな、おんな！

なぜお前らの前にまともな男が現れないのか？

もう明らかではないか。お前らの世代のまともな独身男は、みんなオタクになってるんだよ！

それはなぜか？

お前らが、**まともな女じゃない**からだよ！

それでは、いったいどういう意味でまともではないのか？　それは、本書でおいおい説明していきたい。

このままでは、30過ぎの負け犬女によるオタクいびりがますます酷くなる恐れがある。自分の

人生がうまくいかなかった鬱屈を、心優しいオタクにぶつけることですっきりしようという「負け犬女のオニババ化」が始まろうとしているのだ。これを黙って見ていてはならない！と俺の心にほむらのごとく熱い使命感が湧いてきた。だから俺は、あえて断言しなければならない。

「オタクの勝ちだ！　俺たちこそが、勝利者なのだ！」と。

オタクは、「恋愛」という市場では敗北したかに見えるかもしれない。だが、オタクは実は「恋愛」にかわる「萌え」という市場を自ら生み出すことで、この愛のない腐った世界を革命しようとしているのだ。

かつて大英帝国において資本主義が勃興した際には、勝者と敗者の差が圧倒的に開いたにも関わらず社会福祉政策が一向に進まず、その結果、貧乏人のルサンチマンがマルクスという男を突き動かして『共産党宣言』『資本論』を書かせました。

鑑みるに、この21世紀の日本において、恋愛資本主義の無残な敗者として叩かれ差別されるオタクこそが正義であり最後の勝者であるという「脳内恋愛宣言」とも言うべき本書を著することになったのも、もしかしたらオタクのルサンチマンが俺をよりしろにして動かしているということになるのかもしれません。

だが、ルサンチマンに突き動かされているのは事実だとしても、単なるルサンチマンだけでは

ない…ということは、本書を読んでいただければお分かりいただけると思います。俺の煮えたぎるルサンチマンの奥には、愛を求める魂が隠れているのです。
誰か一人でも、世界にただ一人で構わないから、俺の心に埋もれてしまった愛を見つけ出してくれる人がいてくれたら……。
そう妄想しながら俺はこの本を書きなぐりました。

The boy with the thorn in his side
Behind the hatred there lies
A murderous desire for love

（The Smiths『The boy with the thorn in his side』）

まえがき——002

第1章——「恋愛資本主義」の構造と現実——009

1/1 モテない男の現状——010
俺の人生に恋愛などない！／バブルと恋愛至上主義の時代／この世界のコード体系が見えた！

1/2 恋愛の二極化——025
モテる男はますますモテ、モテない男はますますモテない／「年間セックス回数平均46回」の真実は、たぶんこうだ！／恋愛資本主義で不幸になった女たち／モテない男たち

1/3 なぜ「恋愛」が至上の価値を持つようになったのか？——039
信仰の対象が「神」から「恋愛」へ／「神」の代替は美しくなければならない／日本における「家」制度の崩壊と、「恋愛」の定着

1/4 恋愛資本主義の欠陥——052
「顔」をもたざる男は「金」や「地位」が必要／『non-no』で搾取された女がさらに『NIKITA』で搾取／セックスの商品化と愛の上位化／金はキモメンから女を通してイケメンに流れる／この世界の真実の姿、それが「あかほりシステム」だ！／モテない男には福祉もなく同情もなく、社会的支援もない。あるのは差別と嘲笑だけ／女は容姿で男の人間性を判断する～「モテるモテないは性格次第」のウソ

1/5 3種類に分かれる、モテない男と、女の関係——080
「池鶴関係」と「寅別関係」、そして「無関係」／漫画『ルサンチマン』にみる、池鶴から寅別への瞬時の切り替わりポイント／「池鶴関係」「寅別関係」を理解して女に立ち向かえ

第2章――合言葉は「萌え」～オタクの「脳内恋愛」宣言――091

2/1 萌え系オタクの登場――092
オタクの変遷～SFから「萌え」へ／社会変革活動とオタクの関係性／オタクの経済構造「ほんだシステム」とは／恋愛資本主義とオタクの対立／オタクを嫌う負け犬たち

2/2 考えるな、萌えるんだ！　ウェルカム・トゥ・萌えワールド！――114
「萌え」は由緒正しい思想活動である！／「萌え」は、顔・収入・性格に関わりなく平等に参加できる／三次元の恋愛で、本当にあった地獄絵図／二次元でも三次元でも「情報」としては「等価値」／仏像も十字架もフィギュアの一種。つまり萌えアイテムだ

2/3 デジタルのメリットとアナログのデメリット――142
アナログからデジタルへ移行するのは歴史の必然／デジタルならスペックは自由自在、しかも地球に優しい／キャバクラは宝くじ、彼女はリース、風俗はレンタル、結婚は長期ローン／アナログとデジタル、それぞれのクリスマスの過ごし方

2/4 オタクこそは国の宝！――162
「オタク産業」は資源なき日本が誇る、外貨獲得の最大の武器／世界に広まる「オタク文化」／「萌え」は、自由恋愛文化が普及している先進国に有効だ

2/5 「電車男」に騙されるな！――176
恋愛資本主義社会はオタクの価値を貶めることで体制を維持しようとしている／「フィギュア萌え族」は捏造されても「スーフリDQN族」は捏造されない／オタク界を叩き潰そうとする最大の攻撃、それは「脱オタ」という誘惑／「電車男神話」は「恋愛資本主義」の商品だった／善意を踏みにじられ、それでも微笑む毒男たちの美しさ／エルメスを捨てさせ、コミケでコスプレさせてこそ、真の勝利

第3章――「萌え」の力――217
3/1 萌えと鬼畜――218
愛が塞ぎ止められると鬼畜になる／オニババ化する負け犬たち／萌えと鬼畜の分岐点～『バッファロー'66』にみる典型的なルート分岐／萌えの巨星・宮澤賢治と鬼畜の王・都井睦雄／『タクシードライバー』は何故、モテない男のヒーローなのか？／鬼畜の現代的な形・ストーカー犯罪の誕生
3/2 萌えは進化する――280
三次元のリアリズムを取り入れた「劇萌え」と『下級生2』騒動／萌え対象の弁証法的発展／『ONE』から『CLANNAD』へ～「家族」をデジタルで構築する試み／『To Heart』のマルチにみる「萌えイマジン論」／『マトリックス』の変遷と『イノセンス』／「萌え力」を高めよ！
第4章――「萌えオタク」こそ、これからの勝ち組――329
4/1 起こせ！「萌えレボリューション」――330
キモメンは生きるために今すぐオタクになろう／イケメンならば、アナログ女を「萌え」プログラムに書き換えてリロードしろ／アナログ女と交際・結婚する際の注意点／萌えパワーを増強するための「アナログ恋愛＝超回復」論／妖精を目指すのもまた良し／エルメスを買い漁る人生より、萌えられる人生のほうが幸福だ／負け犬よ、目を覚ませ
4/2 オタクの未来予想図――378
オタクは社会に認知され、「モテ趣味」になる／恋愛関係から萌え関係へ／「自立した個人同士の恋愛」の失敗／オタクは自信を持って世界を変革せよ！
あとがき――394

第1章

★「恋愛資本主義」の構造と現実

1――モテない男の現状

俺の人生に恋愛などない！

俺の名前は本田透。35歳独身、中野の新井薬師寄りのアパートで独り暮らし。ムックやイベントの企画を仕事にしている、アキバ系フリーライター。だが、稼ぎを全部萌えグッズに投入してしまうので、貯金はゼロ。着ている服はいつもユニクロ。ファッションのことはまったく分からないので、とりあえず上から下まで黒い服で統一しているが、ゴス※とかそういう深い意味はない。履いてる靴はそのへんの商店街で買った千円のスニーカー。髪の毛は五分刈り。単に長髪は洗うのが面倒なので短くしているだけで、やはり深い意味はない。本当は猫を飼いたいんだけど、猫アレルギーなので飼えない。ねこっ、ねこっ、ねこっ！

毎日毎日、中野のオタク商店街「中野ブロードウェイ」※と秋葉原を総武線で往復して萌えゲームを買ったり同人誌をチェックしたり、そんな仕事だか趣味なんだか分からないオタク暮らしさ～！　転がり続ける、俺の生き様を～時には無様な格好で支えてる～！

しまった、また道を歩きながら、独りで歌ってしまった。彼女もいない、女友達もいない、メールアドレスを知っている女すらいない、っていうか最後に女と話したのは何年前だっけ？　中

※ゴス
アメリカの負け組ファッション。悪魔系の真っ黒な格好＋白塗りとかそういうゾンビみたいなスタイルを重んじるという時点でもうダメぽ。アメリカの学校の勝ち組である体育会・チアガール軍団への怨念に満ち満ちている。日本ではロリータ系と合体して、ゴスロリ（ゴシックロリータ）という女の子向けファッションに発展。

※中野ブロードウェイ
中央線中野駅北口にある商店街＋マンションの合体した建築物。大昔はおしゃれ系最先端だったらしいが、その後ゴーストタウンになりかけ、現在ではオタクの第二の聖地になっている。秋葉原がアニメ・ゲーム・PC系に強いのに対して、中野はフィギュアやおもちゃに強い。世界各地からやってきたオタクがうろうろ歩いている。新日本プロレスのジョシュ・バーネットもフィギュアを買いに現れるらしい。

野に引っ越してから、大家のおばあちゃん（80歳）以外の女と会話したこと、あったか？
文字通りの独り暮らしを長年続けていると、独り言や独りダンスが多くなってよくない。ときどき、すれちがうオバサンにヤバいものを見てしまったという目で睨まれる。びびったか？　たじろいだか？※　ビターン！
そんなユルいオタクライフを満喫していた俺がある日、一人で新宿コマ劇場向かいの映画館で映画を観ていると、『世界の中心で、愛をさけぶ』※の予告編が流れ始めた。その予告編を眺めながら俺は気づいた……。気づいてしまった……。

「恋愛などないっ……！」

漫画『最強伝説黒沢』※の主人公・黒沢先生44歳は、ワールドカップ観戦中に「しょせん他人の感動！　俺の人生には、感動などないっ！　俺は、ただ年齢を重ねただけの男…そうっ、歳男だっ！」という残酷な現実に気づいてしまうのだが、俺も『セカチュー』の予告編を観ながら気づいたよ。しょせん、他人の恋愛！　俺の人生に恋愛などない！　俺は、ただのモテない独身男…そう、2ちゃんねる※風にいえば、毒男（独身男）！　いや、喪男（モテない男）だ！と。
恋愛！　恋愛！　恋愛！　猫も杓子も恋愛！
テレビをつけても、ラジオを聴いても、書店に入っても、映画館に入っても、ありとあらゆるメディアが「恋愛の素晴らしさ」を語り続けている。

※びびったか？　たじろいだか？
プロレス興行「ハッスル」における高田モンスター軍総統の決め台詞。はっするはっする。

※『世界の中心で、愛をさけぶ』
片山恭一のベストセラー純愛小説。本人は『恋するソクラテス』という酷いタイトルでの出版を目論んでいたらしいが、エヴァオタの編集者（邪推）がこんなタイトルにしたら大ヒットした。もちろん映画も大ヒット。

※『最強伝説黒沢』
福本伸行著、小学館。『ビッグコミック・オリジナル』で連載中。

※2ちゃんねる
インターネット最大の掲示板。一見匿名だが実はＩＰが記録されているので、例えば「テレビ局に爆弾を仕掛けた！」などと書き込むと逮捕されてテレビで素顔と本名を晒されるという諸刃の剣。厨房にはお勧めできない。

しかし、よく考えたら、俺の人生に恋愛などなかった。もしかしてこれが恋？　恋なのねっ？　キター！と勘違いしたことはあったが、それらは全て俺の思い込み、**被愛妄想**※に過ぎなかった。

35年間、一度も恋愛できなかった。

ひとりで暮らした。

そんな俺が、今後生きていって、恋愛できるはずがあろうか。もう、そんな可能性は、はっきり言ってゼロっ……！　何が『世界の中心で、愛を叫ぶ』だ。愛のかけらもない俺は、世界の隅っこ、世界の最下層、地獄でいえばコキュートス※の住人かよ！

恋愛って何だ？　それって食えるのか？　現実の世界に、恋愛って実在するものなのか？　俺は見たことがない。今の日本では、あたかも恋愛がこの世で最高の価値を持った素晴らしく楽しいものであり、恋愛できない俺のような男は「モテない人間」というレッテルを貼られ、まるで人生の敗北者、社会からの落伍者のように扱われているのだ。

そんなこんなで悩んでいるうちに、俺にも敗者復活戦へのチケットを獲得する機会が訪れた。たまたま仕事絡みで30歳独身女性編集者と、なんとなく飯を食ったりメールのやりとりをするようになっていた。まさにこれは、暗黒のモテない男世界に垂らされた1本の**蜘蛛の糸**※ッ！　今こそこの糸を上っていき、ジワジワと「恋愛」が存在する別天地、人間の世界へと至ればよいのだ。

俺は細心に気を使いながらオロオロと右往左往した。慎重の上にも慎重……！　なぜなら、今まで何度もこの初動の段階で致命的な失敗を犯してきたからだ……！　そう、カンダタが大声で

※被愛妄想
被害妄想の逆。自分が相手に愛されていると思い込む妄想。あまりにモテないと、この妄想が湧いてくるようになる。

※コキュートス
ダンテの『神曲』地獄編において、地獄の最下層として紹介されている「地獄さいはての地」。吹雪、吹雪、氷の世界。

※蜘蛛の糸
芥川龍之介の小説。地獄に落ちていたカンダタという悪人は、昔、蜘蛛を助けたことがあった。お釈迦様は地獄に一本の蜘蛛の糸を垂らして、カンダタを助けてあげようとする。しかし、地獄の亡者たちがいっせいに蜘蛛の糸にぶらさがって切れそうになったため、カンダタが思わず「この糸は俺のだ！」と叫ぶと、糸がぷつっと切れてカンダタは地獄に逆戻り。お釈迦様は「自分ひとり地獄から抜け出そうとするとは、なんとあさましい…」とお嘆きになられました。終わり。後に大槻ケンヂは進研ゼミのテレビコマーシャルソング『蜘蛛の糸』で「蜘蛛の糸を上って、いつの日か、焼き尽くしてやる！」と叫んだのだった！

「この糸は俺のだ！」と叫んだとたんに蜘蛛の糸は切れてしまうのだ。
といっても、具体的にどんな失敗をやらかしたのか、よく分からない。たいてい、喫茶店で2時間ほど喋っているうちに、突然相手の顔色が変わり、「ドン引き」の表情になっていくのだ。
例えば相手の女の子が家族の話を始めたので、「君のお父さんってのは……」とかフレンドリーに話し出すと、急に真っ青になって、
「あなたには関係ないでしょう！」
と叫ばれるのだ。

■そびえたち、立ちはだかる壁

どうも、ちょっとでも馴れ馴れしい態度をとると、俺は女にドン引きされるようだ。突然、目の前に壁ができあがるような気分っ……。しかも、その壁は、突然せりあがってくる。まるで「黒ひげ危機一発」※で「大当たり」の穴に剣を刺してしまったかのような、突然の君子豹変……！
しかし、しつこいようだが俺ももう35歳、いい加減に過去の経験から学習は済ませている。喫茶店で馴れ馴れしい態度を取ったら終わりなのだ。喫茶店で座っている女には**「踏み込んではいけない制空圏」**みたいなオーラがあり、そこに俺が入るとドン引きされ、確実に叩き落されるのだ。
だからその日、俺は慎重を期して、ほぼ完璧に喫茶店の

※黒ひげ危機一発
樽の中に黒ひげという海賊の人形を入れて、一本ずつナイフを刺していく。一箇所だけ「当たり」の穴があって、その穴にナイフを刺すと黒ひげがスポーンと飛び出すという幼児の情操教育にとても役立つゲーム。今でも売ってるのかなあ。

トラップを潜り抜けた……ような気がした。だが、最後の最後に、虎の尾を踏んでしまったっ……。罠っ……罠っ……！

もう大丈夫だろうと油断した俺は、うっかり、

「お互い30過ぎて独身って寂しいですね～」

と愛想笑いを浮かべて口を滑らせてしまったのだ。

その瞬間、さっきまで笑っていた彼女は、まなじりを吊り上げ、怒髪天を突く勢いで叫んだ。

「あなたと一緒にしないで！」

それ以来、二度と連絡はなかった。俺の現実復帰計画は、はじめの一歩で終わった……。

俺が女の制空圏に入ろうとすると、女はなぜか激怒して叩き落す。そして、一瞬で壁を築き上げる。決して崩れないジェリコの壁※を。俺はその壁を越えることができない。だったら最初から喫茶店やレストランや野球場に俺を呼びつけないでほしいのだが、いったいなぜ、女たちは俺に馴れ馴れしくしておきながら、俺が馴れ馴れしくしようとすると烈火のごとく怒り出すのだろうか？　さっぱりわからない。なぜ、突如として俺のさらし上げ大会が開催されてしまうのか？

ああ、30歳独身女が分からない。俺と同じ「30歳独身の人間」だと思いきや、違うらしい。ああ、何が違うのだろう。

もしかして、

「俺、『妹ゲーム大全』※っていうアキバ系ゲームムックを作ったYO！」

※ジェリコの壁
聖書に出てくるジェリコという世界最古の都市は、絶対に崩れない壁で要塞化されていたという。

※『妹ゲーム大全』
PCゲームの妹キャラクタ一だけを集めた図鑑ムック。本田が企画して「恐るべきお兄ちゃん軍団」という困った人たちで共同執筆した。インフォレスト。

と、仕事の自慢をしたのが悪かったのだろうか。何か嫌そうな顔を一瞬されたような気がする。俺はただ、仕事に夢中になっている働き盛りの一人の男なのだが、「オタク仕事なんかねえ……」とか小言を言われたような気もする。

そうか。俺がオタクなのがいけないいんだ。いきなり「俺はオタク」だとバラしてしまったことが、「一緒にしないで！」という言葉の伏線になっているのだ。しかし、**オタクの何が悪い？ オタクの何が恥ずかしい？** 『君が望む永遠』※の涼宮茜たん※のようなツンデレ妹※に萌えて、何がいけないのだろう？

涼宮茜たんは主人公の彼女の妹なんだけど、主人公に惚れてしまって、でもそんな内心を悟られると姉に悪いから、主人公を罵る罵る！ ああ、茜たん、もっと俺を罵ってくれえっ！

……。

あ、すいません。頭が二次元にトリップしてしまいました。三次元に話を戻さないと……。だいたい、オタクって、仕事なんだよ、俺の。ライフワークだよ。命、かけてんだよ！ 言い方によっちゃあ、俺は「**夢を追いかけながら好きな世界で働く男**」だよ。なんだかカッコいいじゃないか。

でも、オタク業界ってのが、モテない業界らしいんだよね。ましてや「茜タン、萌え～」とか言うと、もうね。さすがにそこまでハードコアな言葉は口走らなかったけど、口走ったら絶対にドン引きされるね。「キモッ！」って言われるね。間違いない。

ああ、なぜなんだ。

※『君が望む永遠』
韓流ドラマのような「三角関係！ 交通事故！ 記憶喪失！ 不治の病！ 裏切り！ 嫉妬！」という怒涛の展開が楽しめる18禁の名作恋愛ゲーム。このゲームに出てくる茜タンが最高に萌えるのだ！

※たん
萌えキャラの名前を呼ぶときに、最後に「たん」（または「タン」）をつけると良いとされている。「ぴんちょうたん」「あふがにすタン」など。なお男の子に対しては「きゅん」を付ける。

※ツンデレ妹
ツンツン・デレデレ系の妹。日ごろはツンツンしているが、兄と二人きりになったり、攻略フラグが立ったりすると、急にデレデレしてくる妹のこと。

恋愛映画やトレンディ・ドラマを観るのはお洒落で、美少女ゲームで遊ぶのはキモイということの差は、いったい何なんだ。韓流ドラマ『天国の階段』※とパソコンゲーム『君が望む永遠』、どう違うんだ？　ドラマは俳優が演じていて、ゲームはＣＧ。その違いだけじゃないのか？　やってることは同じだろ！　**恋愛！　交通事故！　記憶喪失！　三角関係！　嫉妬！　妹！**ってね。

ああ、恋愛が分からない。女が何を考えているのか、分からない。誰しもが恋愛について語るが、俺は恋愛を見たことがない！　いったい、いつからこんな「**新興宗教恋愛教**」が支配する国になってしまったのだ、日本は？

バブルと恋愛至上主義の時代

思えば、俺がニーチェ※のごとき立派なモノ書きを志して早稲田大学第一文学部に入学したのが一九八八年。この時期、俺にとってあまりにも不幸なことに、日本経済は空前のバブル期を迎え、得意の絶頂にあった…らしい。俺は貧乏だったが。

共同トイレのボロ下宿に住む貧乏学生の俺には何の関係もなかったが、大学に出てみると、スーパーフリー※みたいなあやしいナンパサークルが学内に乱立し、ポロシャツの襟を立てた得体の知れないＤＱＮ※大学生どもが近くの短大から湧いてくる女を食虫植物のように捕らえてホテルに連れ込んでいた。

神戸からはるばる上京して大学に入ってみれば、青雲の志を持った漢などどこにもおらず、右も左も金とセックスと食い物のことで頭がいっぱいのＤＱＮと、やっぱり金とセックスと食い物

※『天国の階段』
二〇〇四年に韓国で放映されて大人気となった韓流ドラマ。一人の妹を、幼なじみのイケメンお兄ちゃんと義兄であるキモメンお兄ちゃんが奪い合う。交通事故や記憶喪失など、韓流ならではの大げさな展開が売り。

※ニーチェ
ドイツのモテない哲学者。代表作『ツァラトゥストラはこう言った』は四部作だったが、「神は死んだ」などの新しすぎる思想が当時の愚民や蒙昧な哲学界には理解されず、全然売れなかったので最後は同人誌になっちゃったとか。誰にもろくに評価されないまま発狂し、妹に看病されながら死んでしまった。ニーチェの妹の話をはじめると長いので割愛するが、この妹がモテない男軍団だったナチにニーチェ哲学を売り込んだ。

※スーパーフリー
早稲田大学にかつて存在したナンパサークル。和田サンという年齢不詳な人が仕切っていた。最後は女子学生への集団レイプ事件でサークルのメンバーが大量に逮捕されるという結末を迎えた。

に夢中のチャラチャラした女ばかり。いったい何のために大学までやってきているのかさっぱり分からない面々に囲まれて、俺はウッカリ、
「やっぱり、大学デビューというものをしておかないと、この輪の中には入れないのでは」
などと焦って大失敗したりしたのだが、ああ……、認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものは……。※
それはともかく。恋愛というものが、地上のすべてに勝る価値を持った魔法のアイテムとして人々の心に深く刷り込まれるようになったのは、ちょうどこのバブル期あたりだったのではないだろうか？
でも、なんであいつら、襟を立ててたんだろう？　**エリマキトカゲブーム**だったからか？
今となってはさっぱり分からない。
さらに、家に戻ってテレビをつければトレンディ・ドラマがバカウケしていた。
例えば、ちょっとエロゲーの主人公みたいな東京デビューの田舎モノ青年・永尾完治（織田裕二）が、小生意気な赤名リカ（鈴木保奈美）に「**カンチ、セックスしよう！**」といきなり誘われるフジテレビの『東京ラブストーリー』（一九九一年　原作・柴門ふみ）。まあ、俺の人生と何の関係もないドラマだったので、ストーリーはよく覚えていない。「カンチ、セックスしよう！」って、お前、アホか？　ポン引きか？と鈴木保奈美に呆れた記憶しかない。
まあ…俺は織田裕二の足元にも及ばない不細工なツラの男だからね。人間よりも、**トッポジージョ**※**に似ている**からな！　うふ、うふふふ。湯飲みを覗き込むと、私の醜い顔が、いくつもい

※DQN
『目撃ドキュン！』というテレビ番組が語源のネット用語で、元々はヤンキー系の人を意味するが、最近では体育会系を含む「知性よりも暴力」な人々全般を指す言葉になりつつある。ゆえにスーパーフリーで乱暴狼藉を働いて逮捕された連中もDQNと呼ばれる。

※認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものは……。
アニメ『機動戦士ガンダム』の真の主人公シャア・アズナブルの名台詞。今でも言葉の意味はよくわからないが、とにかく凄い自信だ！

※トッポジージョ
アメリカのキモネズミキャラ。ミッキーがイケメンネズミなら、トッポジージョはキモメンネズミだ。顔がキモいためか、最近ではすっかり見かけなくなった。ちゅうちゅう。

くつも浮かび上がるのさ。
下剤の名前が、ヘノモチン。※
顔面自体が、人間失格。
どうせ、こんなドラマの世界、俺には何の関係もない、とひねくれて空をにらんだ俺なのさ〜。
ああ〜こんな俺でも〜二次元の萌えキャラは、慕ってくれる〜。
それだから二次元のキャラに萌えるのさ〜、それだから二次元のキャラに萌えるのさ〜。
いかん、また歌ってしまった。

だがしかし！
現在の世の中は、すっかり様変わりしてしまった。バブルが崩壊し、失業者や自殺者が溢れかえり、中央線は毎日のように人身事故で停止している。
なにしろ、景気が悪いから豪華でお洒落なトレンディ・ドラマを制作することができなくなり、代わりに流行りだしたのが「昔はよかった……」と大昔の恋愛を回想する『世界の中心で、愛をさけぶ』とか、死んだ嫁が戻ってくる『いま、会いにゆきます』※のような後ろ向きな恋愛映画ばかり。いわば、「恋愛レトロ映画」。さらには、「もはや自前で作れないなら、隣の国から買い付けよう」とばかりに大量の韓流ドラマをせっせと輸入しはじめる始末。わざわざよその国から買うくらいなら『ドリフの大爆笑』※の再放送でもしろYO！
もう恋愛は死につつあるのだ。いや、俺はもう、ここに宣言してしまっても構わない。少なく

※ヘノモチン
太宰治『人間失格』で主人公が女中（メイドさん）に薬を買ってこさせるが、ドジメイドが間違えて下剤を買ってきてしまい、下痢ピーに。その下剤の名前がヘノモチン。

※『いま、会いにゆきます』
市川拓司の純愛小説。小学館。映画化されて大ヒット。

※『ドリフの大爆笑』
ドリフターズといえば『8時だヨ！全員集合』だが、それとは別に定期的な特番として『ドリフの大爆笑』という看板番組もあった。

とも、俺の人生にとっては……、

恋愛は死んだ！　恋愛は、死んでしまったのだッ！

なのにテレビ局や広告代理店は、いまでも必死になって恋愛至上主義を叫び続け、俺に「人生の敗北者」という烙印を押しつけてくる。

なぜそっとしておいてくれないのか……？

俺は考えた。考えに考えた。だが、考えるほど疑問は深まっていくばかりだった。

この世界のコード体系が見えた！

ある日曜日。さいたまスーパーアリーナにＰＲＩＤＥ※を見物しに行った時に、当時まだＫ－１※側に寝返っていなかったアントニオ猪木大先生※が登場し、

「馬鹿になれ！　もっともっと、馬鹿になれ！　ダーッ！」

とありがたい「猪木馬鹿教団」宣言を叫んでくださった。

そうだ。俺は変に考えすぎるから、悩んで何も見えなくなるのだ。心の目で見るのだ、この世界を。恋愛の実体を。心眼で見ることによって、恋愛の真の姿が浮かび上がってくるはずだ！

そういえば、**考えるな、感じるんだ！**とブルース・リー※師父も言っていた。その昔、Ｊのマッハパンチに苦しんだ剣桃太郎は、赤石先輩に日本刀で自分の瞼の皮を切らせて、心眼を開眼させ

※ＰＲＩＤＥ
ＤＳＥが主催する総合格闘技興行団体。高田延彦対ヒクソン・グレイシーという伝説の第一回興行からスタートして、現在では大晦日に「男祭」を開催するメジャー興行に。以前はアントニオ猪木が「ダーッ！」をやっていたが、今は引退した高田延彦が顔役になっている。

※Ｋ－１
立ち技最強を決める格闘技興行団体。元々は正道会館が母体。最近では猪木とつるんで総合格闘技にも手を出している。年末の大晦日特番で必ず曙が負けることで有名。

※アントニオ猪木
新日本プロレスを創設した人。元は力道山の弟子。日本人だけどブラジル帰り。北朝鮮でプロレスしたり、モハメド・アリと異種格闘技戦をやったり、アミン大統領と試合しようとしたり、永久エネルギーを開発しようとしたり、国会議員になったり、梶原一騎に監禁されたり、タバスコを日本に紹介したり、マテ茶を日本に紹介したり…まったくもって我々とは人間の器が違う。代表作は詩集『馬鹿になれ』。

たという。（民明書房『魁!男塾』※参照）

現象学者のフッサールは、従来の哲学はすべて間違っており、哲学を探求し、世界の実相を見極めるためには、一度世界を「」（かっこ）の中に入れてすべての価値判断を保留しなければならない、と説いた。これをフッサール語では「エポケー」と呼ぶのだが、つまり、日本語で簡単にいえば「馬鹿になれ」ということだ。**猪木イズム・イズ・現象学！**

すべての先入観や偏見を取り除き、赤子のごとき純真なマナコで世界を観察できるようになれば、この世界の構造が見えてくるはず。そして、その時こそ、恋愛とは何か？という俺の疑問も解決できるはずなのだ。

俺は馬鹿になるべく、いろいろ努力した。つまり、恋愛のことを一時完全に放り投げて、オタク趣味に怒涛のごとく突っ走った。半端なオタクもんから、現役バリバリのヘビーな萌えオタクへと、オタクロードを突き進んだのだ。オタク馬鹿一代として。ＤＶＤレコーダーを8台買い込んで、毎日30時間のアニメ録画を遂行した。それも全部萌えアニメ。『アニメ録画テクニック』※とか『魁!録画塾』※といったデジタル録画ムックを続々と企画した。これらのムックに出てくるレコーダー、全部自腹で買ってます。ついには、パソコンゲームを大画面に表示して、理想の妹キャラ・茜タンを巨大化させるために、全財産をはたいて45Ｖ型液晶テレビＡＱＵＯＳ※九十万円也を購入した。おおお、茜タンの顔が俺の顔よりでかいッ！　南無阿弥陀**茜**仏、南無阿弥陀**茜**仏！

そんなこんなで、一心不乱に恋愛から遠ざかり、萌えオタクの階段を駆け上がり続けた。オタ

※ブルース・リー
アジアの誇る映画スターであり格闘家。映画『燃えよドラゴン』で世界中のボンクラのカリスマになったが、本人は映画のヒットを知ることなく死去。多くのオタク・映画監督・漫画家・格闘家・プロレスラーなどに絶大な影響を与えた。格闘ゲームや格闘漫画には、たいてい猪木がモデルの悪人と、ブルース・リーがモデルの正義の味方が出てくる。

※民明書房『魁!男塾』
宮下あきらの漫画『魁!男塾』（集英社）には、民明書房という架空の出版社の書物がよく引用されていたのだった。当時の読者は必死で民明書房の本を探し回った。

※『アニメ録画テクニック』
本田が企画・執筆したムック。インフォレスト。アニメを録画するというテーマの本なのに、ゲームの画像しか出てこない。

※『魁!録画塾』
本田が企画したムック。執筆はしろはたＤＶＤ三銃士というユニット軍団。東芝のＤＶＤレコーダー開発者・片岡秀夫氏やオタキングこと岡田斗司夫先生といった豪華ゲストを迎えて気合満々で作られたが、いまいち売れなかった。

クロード第一章、オタクロード第二章、オタクロード第三章……!

そして……。

もはや目的と手段が転倒し、頭の中はオタク一色、萌え一色。すでに現実の恋愛のことなどどうでもよくなっていたころ、というかすっかり忘れていたころ、「悟り」の瞬間が、突然訪れた。

それは、酒井順子の『負け犬の遠吠え』という本を、菩提樹の下……ではなく、中野ブロードウエイ4階のメイド喫茶※でダラダラ読んでいたときだった。この本の内容は、

「30歳独身女は、男と結婚できなかった。従って、負け犬だ。しかし、30代の独身男は、まともな男じゃない。例えばオタクだったりする。男がダメだから私たちが結婚できないのだ!」

という衝撃的なものだった……。

な、なんだってー!(AA略※)

俺たちオタクのせいで、女が結婚できない、だって?

ちょっと待て! 逆だろ、逆! お前ら女が、オタクを見るとドン引きするから、オタクがモテないんじゃないかYO! いったいいつ、俺たちが女をソデにしたりフったりしたんだYO! そもそも女に近寄らせてもらうことすら許されないのに、ふざけるな!

そうか…わかったぞ。30歳独身女…負け犬にとって、**オタクは男じゃない**のだ!

実はあいつらは、俺を男だと思っていなかった! だから、俺が制空圏に踏み込んで恋愛を予

※AQUOS
現シャープの液晶テレビのブランド名。液晶テレビといえばシャープ、シャープといえばAQUOS。最近ではAQUOSブランドのデジタルレコーダーも登場。

※メイド喫茶
メイドさんのコスプレをしたウェイトレスさんが給仕してくれる喫茶店。秋葉原に10軒ほど乱立している他、中野ブロードウェイにも登場。似たようなコスプレ志向だが酒も飲める店としては「コスキャバ」(コスプレ・キャバクラ)もある。

※な、なんだってー!(AA略)

な　なんだって――!!

感させるようなそぶりを一瞬でも見せると、「関係ない！」と激怒されて壁を作られてしまうのだ。

「**俺は…男だと思われていない！**」ドーン！

「**オタクは…男じゃない！**」ドーン！

この大発見をついに成し遂げたとき、俺は『ファミ通のアレ（仮題）』※における竹熊健太郎※先生のごとく腕をグルグル回しながら、喜びのダンスを踊った。

「エウレカーーーー！　バカルン超特急ッ！」※

俺には、突然分かった。閃いた。この世界が巨大なコードの体系だということが、俺には分かってしまった。見える。コードが見える。世界は、コードでできていた。女は、男を実はこんなふうに見ているのだ。

※『ファミ通のアレ（仮題）』　竹熊健太郎原作・羽生生純作画の漫画。アスキー。伝説の超傑作漫画だが現在は絶版。連載内連載「桃太郎イン・ガンジス」とか素晴らしすぎ。

※竹熊健太郎　漫画評論家、漫画原作者、編集者。『ビッグコミックスピリッツ』にて永遠の名作『サルでも描けるまんが教室』（作画・相原コージ）を連載。その後、『クイック・ジャパン』などで活躍。

※エウレカー！　バカルン超特急ッ！　『ファミ通のアレ（仮題）』の決め台詞の一つ。なお、「バルカン超特急」とは別。

■女から見た、モテる男
「男は顔だよ」――上杉達也（あだち充『タッチ』）

■女から見た、モテない男
わしは…イケメンがにくい！　おそろしい！（　TДT）――本田透（Webサイト「しろはた」）

図のように、女はマスメディアに刷り込まれた価値観によって、男を24時間厳しくチェックしている。俺のようなオタクは、女にとって価値あるコードをまったく持っていない。「萌え」とか「アキバ」とか「ゲーム」とか「アニメ」といったまったく異質なオタク系コードで俺の身体はできている。だから、「一緒にするな！」と拒絶されるのだ。

そう、女は、基準に合格しない男を次々と振り落としていく。そして、その基準に合格できる男とは…イケメンか、あるいは、金持ちなのだ！

顔！　金！　顔！　金！　顔！　金！

恋愛至上主義にメディアが満ち満ちているのは、恋愛を商品化して、人々の欲望を喚起させ、大量消費行動に結びつけるためだった。イケメン俳優と美人女優をキャスティングして、人気アーティストにテーマソングを歌わせ、テレビと音楽の大々的なタイアップによりブームを生み出すという「トレンディ・ドラマ」。これは「**恋愛資本主義**」とでも呼ぶべき大量消費システムの燃料のようなものなのだ。

テレビ局や音楽業界だけではない。出版業界も、この「恋愛資本主義」の一角を担っている。数々の男性向けトレンディ雑誌、女性向けファッション雑誌が代理店によるブームの仕掛けを補完するべく編集され、それらの雑誌にはブームと連動する大量の商品広告が掲載される。

例えば、『私をスキーに連れてって』※のような「スキー場での恋愛」をテーマとした映画が製作されると、雑誌が大々的にスキー特集を組み、スキー関連の広告が大量に掲載される。消費者は、

※『私をスキーに連れてって』
ホイチョイ・プロダクションズの第一回映画作品。原田知世主演。オサレでファッショナボーでグッズにこだわった映画。

それらの商品を買いあさってスキー場へ「出会い」を求めて殺到する…という仕組みである。
まさしく、およそ20年近くにわたって、日本は「恋愛資本主義」というべきシステムによって突き動かされてきたのだ！

俺は、しかし、八〇年代から今に至るまで、このホイチョイ・プロダクションズ※の世界、恋愛資本主義市場というコードの体系に、入り込むことができなかったわけだ。理由はいくつか考えられるが、まずは顔がキモメン※であること。次にニート※だということ。最後に趣味がオタクということだ。

「キモメン・ニート・オタク」

この三つの属性を持っている人間を、俺は、「**第一級恋愛障害者**」に認定するね！　当然、俺自身が認定第一号だ！　給付金よこせ、おらぁっ！

なぜこの三つの属性が恋愛障害の原因になるかは、また後で語ることにしよう。

※ホイチョイ・プロダクションズ
バブル時代に一世を風靡した企画編集集団。代表著書『東京いい店やれる店』(小学館)。

※キモメン
女子高生が作った用語で、キモい男のこと。反対語が「イケメン」＝イケてる男。

※ニート
NEET（Not in Employment, Education or Training)。仕事もせず学校にも行かず職業訓練すらしていない人を指す。バイトしてないのでフリーターでもなく、求職活動しないので失業者でもない。近年どんどん増えていて社会問題化している。某テレビ番組にニートが登場して「働いたら負けかなと思っている」という名言を残した。

2——恋愛の二極化

モテる男はますますモテ、モテない男はますますモテない

俺はよく知らないのだが、イケメンは、モテてモテてモテまくっているというし、一部の女は、男をペットのように大量に飼っているそうだ。

ホントかよっ!?　**それって、エロゲーの世界の話じゃないの？**と疑いたくなるが、本当に本当らしいのだ。そう……、恋愛資本主義によって、人類は「ガンガン恋愛できる人間」と「まったく恋愛できない人間」に二極化し、モテと非モテの間に残酷なまでの格差が生まれてしまった。

俺だって、大学デビューするために上京するなり高須クリニック※に駆け込んで、ちゃんと包茎手術を受けたのに！

うら若き看護婦さんたちに取り囲まれて、

「真よ！」

「真だわ！」

と珍しそうに見物され、

「ああ、いよいよ看護婦さんのその白い指でしごかれて立たされるんだな」

※高須クリニック
東京の美容形成外科病院。整形手術や包茎手術で有名。

と生唾を飲み込んだとたん、オッサン（医者）に前立腺※をマッサージされて勃起させられた、あの屈辱！
手術終了後、半年のオナニー禁止の荒行も乗り越えた。実は我慢できなくなってうっかりちんちんに触ってしまい、傷口が破れたこともあった。血だるまになりながら地下鉄で病院に駆け込み、「あれほど言ったのに、触っちゃだめだYO！」と叱られたりした。
ああ、そこまでして、準備万端、恋愛に向けてレディゴーだったのに！　なのに、せっかく割礼※したちんちんをまったく使えないまま35歳になってしまうとは！
どうせモテないなら、**いっそ真性包茎のままでいればよかったぜ！**

※前立腺
男だけが持っている精子を作る臓器。性感帯。直腸に隣接してるので肛門から刺激できる。実際には包茎手術の際に先生に前立腺マッサージされるということはないので安心してください。

※割礼
包茎の皮を切ってしまう儀式。いろいろな民族がこの風習を持っている。

俺のちんちんの話はさておき。
そう、恋愛の二極化！　愛されるものはますます愛され、愛されないものはますます愛されない！　愛という平和と幸福と安らぎを人間にもたらすはずのものが、大勢の人間を苦しめる元凶となっているのだ。
モテる・モテないの二極化現象を、データで検証してみよう。
国立社会保障・人口問題研究所は少子化問題対策の一環として結婚に関する調査を行っているのだが、二〇〇二年の第12回出生動向基本調査で、恋愛資本主義の当然の帰結ともいうべき報告がなされている。

「異性との交際は二極化、同棲経験、女性の性経験は増加傾向を継続」
異性の交際相手を持たない未婚者の割合は男性5割強、女性4割と、1987年調査（第9回調査）以降ほとんど変化がない。しかし、恋人以上の親密な交際相手（恋人および婚約者）を持つ未婚者の割合は、女性では25歳以上の年齢層で継続的に増加しており、相手がいないか親密な相手を持つかの二極化の傾向が見られる。
（中略）
未婚男女の性経験率は男性では頭打ち傾向にあるのに対して、女性では全年齢とも継続して増加しており、過去に見られた男女の差は消失しつつある。
（国立社会保障・人口問題研究所『第12回出生動向基本調査　独身者調査の結果概要』）

ホラ、二極化してるでしょ？
さらに、東京都幼小中高心障性教育研究会が二〇〇二年に実施した「児童生徒の性意識・性行動調査」における、東京都の女子高生のセックス経験率、すなわち非処女率を見て欲しい（下の表）。
あ、あの…**こ、これ、どこの国の話ですか？**　え、日本？　と…東京の女子高生はおっかねえ…東京の女子高生は信用できねえ…！
高3女子の半数が、すでに、非処女！　ということは、女子高の制服を着て町を歩いている可愛い子は全員非処女と断定して間違いあるまい。な…な

	女子	男子
高1	25.5%	24.8%
高2	40.9%	33.2%
高3	45.6%	37.3%

■東京の高校生のセックス経験率
全ての学年で女子の経験率のほうが高い

んたることか、ムーミン君ッ！※ 俺は、女子高生なんてセックスどころか口すらきいた経験がねえ！ しかるに、この非処女率ッ！ **俺は、俺は本当に東京都民なのかっ!?**

しかも男子の童貞率が女子の非処女率より高いということは、つまり一部の男が多数の女と交際しているという「恋愛の寡占」が発生しているのだ！ やはり、「モテる人間」と「モテない人間」との二極化が起きている！ モテる人間だけが恋愛プログラムに乗り、モテない人間は恋愛プログラムから弾き出されているのだ。資本主義が貧富の差を拡大し、人間を勝ち組と負け組に二分したのと同様に、恋愛資本主義は恋愛強者と恋愛弱者、恋愛富豪と恋愛貧民、恋愛するものと恋愛できないものとに人間を二分しているのだ。

これは、恋愛が自由競争である以上、行き着かざるを得ない事態だ。ちなみに俺は、**処女というものを見たことがない！** 今後も一生見ることはないだろう！ 処女って、エロゲーにしか存在しない「ネコミミ」※みたいな空想の属性じゃないの？ 処女膜って、実在しないんでしょう？

「年間セックス回数平均46回」の真実は、たぶんこうだ！

かくしてモテるモテないの二極化がデータで立証されたのだが、モテない人間をさらに地獄に突き落とすようなデータを拾ってきた。ロンドンのコンドームメーカー大手「デュレックス」が二〇〇四年に世界41カ国のセックスに対する行動を調査した結果、1年間のセックス回数が最も多い国は言うまでもなくフランスであることが発覚したのだが（やっぱり！）、これまた案の定というか日本は最下位だった。世界平均が年１０３回であるのに対して、日本は平均46回。実に、

※ムーミン君
アニメ『ムーミン』（岸田今日子バージョン）で、ムーミンのガールフレンド・ノンノンのお兄さんスノークは、ムーミンを「ムーミン君」と呼んでいた。お上品なスノークは、しょっちゅう「なんたることだ、ムーミン君！」と天を仰いでいた。声をあてていたのは、広川太一郎大先生。

※ネコミミ
女の子の頭になぜか生えている猫の耳。アメリカのオタクの間でもメイドと人気を二分する萌え属性だが、アメリカでは「ネコミミメイド」こそ最萌え！と言い張るワガママなオタクも多いようだ。

週1回弱という低いペースなのだが……。

……い、いや、ちょっと待って！　ちょっと待って！　46回って、週に1回だYO！　でもさ、**俺なんか年間平均0回だYO！**　週に1回だなんて、絶対ありえないペースだよ！　一生かかっても無理だよ！　オナニーですら、そんなにやってないYO！

どうなっちゃってんだよ！　人生がんばってんだよ！

というか、この数字には裏があるに違いない。冷静になって考えてみると、ある可能性に気づいた。今の日本では、モテる男だけがひたすら大勢の女とセックスしまくる一方で、俺みたいなモテない男はまったくセックスできない。ということは、実は、平均的な「週1回ペース」を守っている人間はほとんど存在しておらず、**全然セックスできない奴と、やりまくりの奴を足して平均を出すとたまたま週1回という数字になっているだけ**なんだよ！　だから、実際には上の図のように、「年0回」の人間と「年100回」の人間が分布図の左右にピークを作っており、平均すると46回になってしまうのだろう。

いや、この図自体は俺の妄想なんだけどね。でも絶対これが真実だよ！　平均46回という結果だけみれば「日本人はみんな、あまりセックスをしていない」という結論が導

平均値
平均的なゾーンには男がいない
モテないゾーン
モテモテゾーン
0回
46回
100回
SEX回数（1年あたり）

■俺が考える「年46回」の内幕
年0回のモテない奴と年100回のモテる奴が左右に偏っているだけで、平均を取るとたまたま46回になるだけに違いない！

き出されるが、どう考えても現実には「やりまくっている人間と、まったくやれない人間の二極化が完成している」と考えたほうがいいだろう。

これは最早、セックスのアパルトヘイトだ！※

なぜ、こんな現象が起きたのか？　なぜ、俺は誰にも愛されないのか？

やはり、前世の悪行か？　ご先祖様が火の鳥に※、

「お前は来世でモテない男に生まれ変わるのです。次もまたモテない男に生まれ変わるのです。その次もまた、モテない男に生まれ変わるのです。お前は永遠にモテない男として宇宙をさまようのです！」

と呪われたのか？

かつて、イギリスで資本主義が勃興した時代にも似たようなことがあった。資本主義のシステムによって、富を持った人間と、貧乏な人間とに、人間が二分化されてしまったのだ。その結果、大勢の貧民層が生まれ、社会問題となった。あまりにも貧富の差が激しかったために、大量の売春婦が生まれたという。

経済学者のマルクスが共産主義という思想を思いついたそもそもの理由は、これら資本主義によって生み出された負け組…貧民層を救済しなければならないという正義感であった。ただし、イギリスの評論家コリン・ウィルソン※は、マルクスの正義感の正体を、自分が勝ち組になれなかった「**ルサンチマン**」だ、と喝破している。

※アパルトヘイト
かつて南アフリカ政府が行っていた人種隔離政策。

※『火の鳥』
手塚治虫大先生の代表作。猿田という男が宇宙を支配している永遠の生命体である火の鳥に「お前は自分がモテないからといってイケメンに嫉妬して殺そうとしました。ゆえにお前は呪われて、未来永劫鼻のでかいブサイクな顔の男に生まれ変わり、永遠にモテない男のまま宇宙をさまようのです！」と無茶苦茶な呪いをかけられるという素晴らしい物語です。ウソつけ！と思う人は『火の鳥・宇宙編』を読んでくだされ。『火の鳥』は鼻のでかい猿田という主人公が、過去・現在・未来に何度も生まれ変わるという話だが、なぜ猿田が毎回出てきて、しかも誰にも愛されずに毎回死んでいくのか、という理由が『宇宙編』で語られているのだ。それは、モテない猿田がイケメンを殺そうとしたので、火の鳥に呪われたからだったのだ！　これ本当です！なぜ手塚研究家たちは、この『火の鳥』のテーマ「俺はブサイクなので永遠にモテネー」を無視するのでありましょうか！　なぜ手塚先生の血の叫びを無視するのでありましょうか！

ルサンチマン…怨念。僻み。妬み。怨み。嫉み。そんな貧乏人の恨み・妬みが「いっそ全員、俺みたいに貧乏になれ！」という共産主義を生んだ…というのだ。

現代の日本でも、当時のイギリスとまったく同じ現象が進行している。モテる人間はますますモテ、モテない人間はどこまでもモテない。自由競争の原理によって、恋愛という商品をごく一部の人間が独占するようになってしまったのである。その結果、恋愛できない男女が大量に発生することになったのだ。

しかし、いったいなぜ、こんな事態が発生したのか？　愛とは、愛とは金とは無縁の純粋なものではなかったのか？　なぜ、恋愛が、経済活動とかくも強固に結びついたのか。それはこれから明らかにしていこう。

ちなみに俺は共産主義は「はずれ」だと思っている。だって、金を平等に配分したって、愛は平等には配分されないだろ！　貧富の差を解消したって、愛の不平等は解消されないだろ！　だから、モテない男は、共産主義の下では生きる気力を失ってしまう。**金で女を口説けない世界では、モテない男は何やったってモテない**んだから……。

それに対して、恋愛資本主義は、モテるために金を稼いで消費する、という人間の欲望に忠実なシステムだったから、ここまで巨大化したのだろう。なんか、金さえ稼げば愛されそうな気がするしね。

だが、このシステムを20年稼働させたことによって、不幸な人間を大量に生み出すことになったのだ。男だけではない。女も不幸になったのだ。

※コリン・ウィルソン　イギリスの評論家。高校中退後、肉体労働をしながら図書館に通って「怒れる若者」世代の文芸評論『アウトサイダー』を執筆し、一躍スターダムに。しかしその後、女性問題などを起こして田舎に引きこもり、オカルトや殺人の研究家になった。イギリスの荒俣宏というかオタク系著述者の元祖的存在。クトゥルー系SF小説『賢者の石』なども執筆。

恋愛資本主義で不幸になった女たち

まず、女では、恋愛からはじき出されかかっている存在の代表として「負け犬」があげられる。前述の『負け犬の遠吠え』が定義するところによると、「負け犬」とは、「30歳・独身・キャリアウーマン」という基本条件を満たす女のことだ。ただし、この本をよく読むと、「負け犬」は「恋愛できない」のではなく「結婚できない」女のことを意味しており、社会的には勝ち組に近い。会社でいいポジションまで出世しているので、金は持ってるのだ。金にものを言わせて男を何匹かペットとして飼っていそうな感じのおっかねえおねぃさんも、独身であれば「負け犬」ということになる。つまり、「負け犬」という言葉は、オサレな独身キャリアウーマンが、DQN男に捕まってショボい結婚生活を送っている女を「勝ち犬」と呼び、金を稼いで好き勝手に生きている自分を「負け犬」と呼ぶことで一種の黒いユーモアを発揮している…というわけ。

なんとも、いやな話だな……。

というのも、現実には「負け犬」よりも下に位置する女…「**恋愛すらできない女**」が存在する。扶桑社『週刊SPA!』二〇〇四年十二月七日号「リアル負け犬女」特集には、真の負け犬、負け犬以下の負け犬が登場するが、おおむねその実体は、「**年収三百万円以下、30歳オーバー、実家暮らし、彼氏いない、しばらくセックスしていない**」という実に悲惨なもので、彼女たちは酒井順子のような金を稼いでいる勝ち組独身女が「負け犬」という言葉を発明したことで、さらに苦境に立たされているらしい。そう、かつてオタクが

「オタク」という差別語の登場で、十把ひとからげに差別されるようになったのと同じに……。

まあ、負け犬女は若い頃、学校でオタクを馬鹿にしていた過去があるような奴が多いだろうから、因果応報、自業自得という感もないでもない。オタクにしてみれば、自分をかつて差別し虐めた同世代の女をどうこうしたくなるはずもない。こいつらこそ、トラウマの源泉なのだから。

オタクっていうか、俺のことなんだけどね！　そりゃあもう、休み時間にアニメ絵の漫画とか描いてるだけで、女に虐められる虐められる。「根暗」とか言われてな…当時はまだ「オタク」じゃなくて「根暗」って呼ばれていたんだよね。宮崎勤事件※以来、「オタク」にクラスアップして、さらに虐められるようになったんだけどね……。もう、犯罪者扱いだからね。オタク・イコール・変質者、みたいな。「お前が幼女をさらったんだろ！」とか、もう、滅茶苦茶だったYO！

俺の話はさておき。

「負け犬」という概念が独身女性をその年齢で区切った種族なら、独身女性をその態度（というか傲慢さ）で区切った種族が「だめんず」だ。これまた問題の雑誌『SPA！』で連載されている倉田真由美（愛称くらたま）の漫画『だめんず・うぉ～か～』から生まれた言葉である。

具体的には、男にはモテるし恋愛はできるのだが、いつもだめな男に引っかかってしまい、**恋愛すればするほど不幸になる**という女である。顔で男を選んだら、中身がDQNだった、というパターンが多い。

俺的に解釈すれば、「だめんず」とは、

※宮崎勤事件
一九八八年から一九八九年にかけて埼玉県・東京都の4人の幼女が連続して誘拐・殺害された事件。犯人が大量のVHSテープを所持していたことからマスコミに「オタク」とレッテル貼りされ、「オタク＝幼女殺人犯予備軍」という風潮が作り上げられた。

「一見、恋愛資本主義に乗っている勝ち組なのに、なぜかドラマのような幸福を掴めないと思っている女…つまり恋愛資本主義に騙されている女」

であり、これに対して「負け犬」とは、

「恋愛資本主義が実は自分を幸せにしてくれないことを薄々気づいていながら、かといって恋愛資本主義に変わる新しい生き方を見つけられずにズルズルと30歳になってしまった女」

である。いずれにしても、恋愛資本主義のシステムでは幸せになれなかったし、今後も幸せになれない女たちであることに変わりはない。

モテない男たち

男の場合は「恋愛すらできない」という真の負け組もメディアにホイホイと登場している。よく考えると、恋愛資本主義が巨大産業化する以前は、『男はつらいよ』※の寅さんのようなモテない男キャラは国民から愛される存在だった。寅さんは、いつも美人のマドンナと出逢っていい感じになるのだが、結局恋愛できないまま別れてしまう、というパターンを繰り返し続け、ついに最後まで童貞だった。シリーズの最初の頃は割と熱心にマドンナにアタックしていたのだが、後半になるともう「**俺ァ一生童貞なんだろうなあ**」という感じですっかり悟りを開き、若い童貞男に恋愛相談をしたりして、完全にヨーダ※状態だったことを思い出す。

……この本もそんな感じだよな……。

とにかく、そんな伝統（?）があるので、男は「俺はモテない」と叫ぶことへの抵抗感も女に

※『男はつらいよ』
渥美清主演・山田洋二監督の国民的映画。松竹。ストーリーは毎回ほとんど同じで、フーテンの寅さん（渥美清）がマドンナに失恋するという黄金パターン。36年間に48作品が作られ、ギネスブックにも載った。

※ヨーダ
映画『スター・ウォーズ』シリーズに登場する元ジェダイの騎士の偉い人。年齢不詳。はじめは小さな縫いぐるみだったが、最近ではCGで描かれている。

比べると少ないのだろうか。特にモテない男キャラが目立つのが漫画の世界だ。小学館の『ビッグコミックオリジナル』で連載中の『最強伝説黒沢』では、**44歳・素人童貞・彼女いない歴＝年齢**というツワモノ中のツワモノ・黒沢が主人公。黒沢は唯一の友達が交通人形の「太郎」で、歴代のオナペットは全員テレビの中のアイドル、自分の人生を振り返ったら素人女性は影も形もない、という究極の喪男（モテない男）だ。

また、同じ小学館の『ビッグコミックスピリッツ』では、30代・独身・彼女いない歴＝年齢の坂本という主人公が、パソコンの二次元萌えキャラに本気で恋をするという『ルサンチマン』※が連載されている。

さらに、新書の世界でも地味ながら「モテない男本」市場が成立しているようで、ちくま新書からは、

『もてない男』※（小谷野敦）
『童貞としての宮沢賢治』※（押野武志）
『女は男のどこを見ているか』※（岩月謙司）

など、いかにもモテない男が読みそうな新書が続々と出版されているのだった。**本なんか何百冊読んだって、モテない男は絶対にモテない**のだが、まだ「心根を入れ替えればモテるんじゃないのか」と思いたがっている純真な男が多いということなのだろう。女がそんな甘いものであるわけがないのだが……。

数年前、『モテる技術』※という翻訳書がベストセラーになったあたりから、モテない男に「恋愛

※『ルサンチマン』
花沢健吾著。『ビッグコミックスピリッツ』で連載されていたが、先日感動の最終回を迎えた。最終巻第4巻は小学館より二〇〇五年三月三十日発売予定。ちなみに本書のカバーイラストはアンリアルの英雄・ラインハルト卿であり、扉ページに描かれているのはその中の人・越後大作。どちらも花沢先生書下ろしである。

※『もてない男』
小谷野敦著。ちくま新書。古今東西の文学からモテない男が参戦する「非モテ系のバーリドゥード」。

※『童貞としての宮沢賢治』
押野武志著。ちくま新書。宮沢賢治を聖人ではなく性と愛の葛藤に引き裂かれた悲劇の人間として取り上げた評論。タイトルだけでブチ切れる奴は裸の王様。

※『女は男のどこを見ているか』
岩月謙司著。ちくま新書。岩月先生独自の女性論が炸裂するベストセラー。

※『モテる技術』
ディビッド・コープランド、ロン・ルイス著。小学館プロダクション。

資本主義への再挑戦」を促す書籍が増えたような気がする。ただし、この『モテる技術』という本は、アメリカらしいワイルドさに満ち溢れていて、

「お前は、諸星あたるになれ！※ 手当たり次第に口説け！ 朝も口説けッ昼も口説けッ夜も口説けッ！ そうすりゃ一人ぐらい、ひっかかるだろう」

という内容だった。そんな危ない奴、『うる星やつら』の世界にしか存在を許されないYO！

というわけで、「日本人にそった内容の、モテる技術本」というニーズが発生したのだと思う。ただ、日本人らしいのは、「技術論」ではなく「精神論」がウケているということだろう。アメリカはプラグマティズムの国だが、日本は「道」の国だもんね。

また、モテたくてもモテない俺とはまったく関係のない話だが、恋愛そのものに価値を感じられない男も増加している。「むらむらしたら、風俗も援助交際もあるし、**彼女なんか面倒くさい**よ…」みたいな。

俺の友人にもそういう奴がいて、いろんな女に言い寄られているのに、

「風俗の子のほうが美人で性格もいい」

と言い張って全員をソデにし、（お金を払って）オキニの風俗嬢と東京ディズニーランドに遊びに行ったりしているのだ。

か、カッコいい！

彼（独身男だがモテない男ではないので、やはり「毒男」と呼ぶのが正しいだろう）は、別に

※諸星あたる
『うる星やつら』（高橋留美子著、小学館）に登場する女好きの主人公。女をみれば即、ナンパしてフラれる。現実にいたら非常に困るタイプ。宇宙人の押し掛け女房・ラムちゃんにことあるごとに電撃を喰らわされていた。

女を金で好きにしたがるような男ではない。まったく逆で、とても心が純真で優しい男なのだ。決して、他人を傷つけるようなことをしない。これは長年の友人である俺が言うのだから間違いない。彼は**「好きになれない女の子とつきあっても、彼女を傷つけるだけだから、最初からつきあわない」**という男らしい立派な思いやりの心で、かたっぱしから近寄ってくる女を足蹴にしているのだ。

彼…毒男にとって、素人女性だろうと玄人女性だろうと、分け隔てすることはない。なぜなら、毒男は、現代の世の中では、恋愛と言われているものも、結局は売春と同じ経済活動であり消費行動に過ぎない、と本能的に気づいているからだ。ならば、純粋に愛せる人とだけ、一緒にいたい。たとえそれが風俗嬢であっても、パートタイムラバーであったとしても、それでも本当の愛を追求するべきだと……！

実際、「援助交際」という言葉の登場以来、素人と玄人の区別は、徐々になくなってきている。この妙な言葉は、恋愛の商品化によってにわかに金が舞い込むようになった女が、舞い上がって目先の小銭を稼ぐために売春に走る際に、「自分は売春婦ではない」という言い訳として発明した言葉だ。

愛は、容易に切り売りされるようになってしまった。

素人の彼女を作っても、ことあるごとに金をせびられ、モノを買うように要求される。愛とは

本来、金とは無関係な精神的なつながりだったはず。だが、女ときたら、金、金、金、金。これじゃあ、純粋で愛深き男ほど、恋愛に幻滅して当然。「金で女を釣れば素人とヤレる」程度のDQN男だけが残るという結果になってしまう。
彼のような純真で誠実な男は、それ故に、この世のどこかにあるという「永遠の愛」を捜し求めるパッセンジャーになってしまったのだ。

3――なぜ「恋愛」が至上の価値を持つようになったのか?

信仰の対象が「神」から「恋愛」へ

ここから、ちょっとだけ硬い話になるんだけど、恋愛、そしてオタクと萌えを説明する上でどうしても必要になる予備知識ウンチクなので、我慢して読み進めていただきたい。

そもそも、かくも人間を呪縛する恋愛とはいったい何なのか? この問題を真面目に考察すると、それだけで単行本一冊を費やしてしまうので、要点だけをかいつまんで説明しよう。

フロイド派精神分析学者・岸田秀※の『ものぐさ精神分析』によれば、人間の自我にとって最も恐ろしい問題は、自我が終わりを迎えて消滅すること…つまり「死」である。岸田秀によれば、「自分が消滅してしまう」という恐怖に、人間の自我は耐えられない。それゆえ、死の恐怖から逃れるべく、自我に「永遠性」を与えるための様々な概念・思想が「発明」されていったわけだが、「神」=「絶対者・造物主」という概念もまた、自我に永遠性を付与するための発明品なのであるという。

人間が死を恐れるのは、生物学的な意味での生命から多かれ少なかれ遊離したところに自

※岸田秀
精神分析学者。著書『ものぐさ精神分析』で「人間は本能が壊れた動物であり、本能の代替物としての幻想に従って行動しているにすぎない」とする「唯幻論」を唱えた。

己の存在を置いているからであると思う。われわれが恐れているのは自己の終焉である。
（中略）
人間のさまざまな営為は、この不安定な自己に安定した基盤を与え、死の恐怖から逃走しようとする企てであると考えられよう。

（岸田秀『ものぐさ精神分析』中央公論社）

もし人間が単に自然の気まぐれから偶然生まれてきた有機化合物に過ぎないのであれば自我は死を免れないが、人間が神という死を超越した絶対者によって作られたのであれば、人間の魂もまた永遠に存在できるかもしれない。まあ、そういう理屈になる。もちろん魂が存在する場所は現世ではなく、「天国」という彼方の世界である（現世では、どう見ても人間は死んだら終わりなので、死後の世界を発明しなければならない）。神と人間は、天国という仮想世界において結び付けられるのだ。こうして、死の恐怖から逃れるべく、「神を信じていれば、死後に神の元に召されて、天国に行ける」という信仰が生まれたのだ。

かつてのキリスト教の社会では、**人間と人間との関係はすべて神の愛によって保証されていた**。教会で結婚する際には、永遠の愛をわざわざ誓わなければならないが、あれは神＝キリストの前で愛を誓うことで、愛に永遠性を与えてもらっているのである。キリスト教世界では、恋愛も結婚も神なしでは成立しないのだ。

図説すると、左のようになる。

神
信仰心
信仰心
自我の保証
男
女

神を保証人として関係が成立する

■キリスト教のもともとの形
神が人間と人間の関係を保証してくれるので、神を信じればすべての人間が平等に自我の安定を保証される

岸田的に言えば、つまり、**神とは「自我を安定させる」ために必要な概念**なのだ。今は辛くても苦しくても、いつか天国に行って幸せになれる…という幻想なくして、人間は生きていられない、ということだ。そして、人間同士の愛もまた、神の存在によって保証されていたのだ。

しかしニーチェが宣言したように、近代に至って**「神は死んだ」**。

「いやはや、とんでもないことだ！　この老いた聖者は、森のなかにいて、まだ何も聞いていないのだ。神が死んだということを」

（ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』氷上英廣訳 岩波書店）

ニーチェが登場した19世紀ヨーロッパでは、すでに科学万能主義と資本主義の勃興によって、神や天国といった宗教上の概念は、そのリアリティを喪失しつつあった。このままでは、人間は自我の不安を支えきれなくなって、崩壊してしまう！　実際、「神は死んだ」と宣言し、神を必要としない自立した人間…「超人」の思想を説いたニーチェは、発狂してしまった。人間は、たった一人で孤独に耐えながら生きていける超人にはなれなかったのだ。やはり、人間には、自我を

支える何らかの他者が必要なのだ。そこで、すでに存在した「恋愛」というシステムがクローズアップされ、進化を果たすことになったのだ。

ルネサンス以後、近代西洋人は神よりも人間…つまり自らの自我を上位に置いた。故に、人間と人間との関係は、神を仲介せずに成立・維持させなければならなくなった。そう、神なき世界では、人間と人間が、直接「愛」という関係を構築しなければならないのだ。ここから「恋愛至上主義」が生まれ、「恋愛結婚」という概念が成立していったのだろう。

もちろんキリスト教圏の社会では、完全に神が消えたわけではなかったが、それでも次第に神よりも目の前の恋愛のほうに価値が置かれるようになっていった。つまり、キリスト教圏では恋愛はキリスト教に変わる新たな宗教システムとして進化していったのであり、それゆえに「一夫一妻制度」が重視されるのだ。一夫一妻制度とは、キリスト教が一神教であったことの名残であり、**男と女がお互いを神に代わるお互いの自我の支え…超越者として崇拝する**ということを意味するのだ。

ドニ・ド・ルージュモン※は『愛について』において、近代西洋における恋愛の起源を、中世の騎士道精神に見出している。それは、金や欲望、結婚すら無縁な、純粋な精神の愛だったらしい。どうやら、恋愛の出発点は、限りなく「萌え」(キャラクターやアイドルなどの抽象的存在への愛情)に近い「観念的な愛情」だったようなのだ。

つまり、中世に発生した「萌え」の魂が、神への愛に取って代わり、やがて結婚制度に組み込まれていった…それが、現在の恋愛結婚という制度へと続いているのだ。

※ドニ・ド・ルージュモン　『トリスタンとイゾルデ』を例にとり、西洋における恋愛の誕生とその発展を研究した著書『愛について・エロスとアガペ』で知られる。

「神」の代替は美しくなければならない

ところで、**恋愛が実は「神への信仰」の代替物だということが、俺がモテない最大の原因**なのだ！ それは、どういうことなのか？ つまり、こういうことだ。

キリスト教から発生した恋愛においては、一組の男女が、お互いを「神」の代替として、自らの自我に価値を与えてくれる超越者として崇拝しなければならない。

ゆえに、恋愛の強度が高まれば高まるほど、相手に求める条件も厳しくなっていく。すると、「肉体・外見の美」という条件が発生する。言うまでもなくイエス・キリストは信者にとっては「イケメン」として認識されており、宗教画に登場するキリストは、たいがいイケメンだ（というか、神の子であるキリストをふためと見られないような不細工なキモメンに描いたら火あぶりにされただろう）。

「健全な精神は、イケメンに宿る」＝「顔がイケてる人間は、心も美しい」

「キモメンの精神は、不健全である」＝「顔がキモイ人間は、心もキモイ」

という精神と肉体の一元論は、われわれの想像以上に人

■恋愛が神の代替となった形
個人と個人が、お互いを神として崇拝し、お互いの自我の安定を保証してもらう相互扶助システム

間の精神を縛っているのだ。大昔、近代哲学の父ともいえるデカルト※は精神と肉体の二元論を説いたが、いまだに誰も分かっちゃいないのだ。デカルトは「我思う、故に我あり」という名言を残したが、俺に言わせれば、真の哲学とは、こういうものだ！

「我キモい、故に我モテない」

また、恋愛対象は単なる人間ではなく「神」なのだから、必然的にすべてにおいて完璧であらねばならない。手鏡で女子高生のスカートの中を覗いたり、※「ミニにタコができた」というタイトルの自主制作ビデオを撮影※していてはいけないのだ。それこそ、中世の騎士たちのような「ナイト」でないと。もちろん、そんな完璧な人間は滅多にいない。その上、精神は目に見えないので分かりづらい。

だが、肉体の価値は？　肉体の美は、目が見える人であれば、一目で判断できる！　精神の美しさは交際しなければ見えてこないが、顔の美しさは交際していなくても分かる。「**一目惚れ**」って奴だ。そもそも、交際もしていないうちに、異性に惚れるというのが妙な話で、いかに人間が人間の外見に価値を置いているかを如実に示している。

このような理由で、「恋愛」においては「外見」「顔」「肉体」が大きな価値を持つことになっているわけだ。だから、俺みたいな外見の醜いキモメンはモテないのだ。この**生まれながらに顔が不自由というハンディを克服するために、ファッションという文化が発展した**のだと、俺は勝手に

※デカルト
フランスの哲学者・数学者・科学者。代表著書『方法叙説』。機械論的自然観を唱え、自然科学の発展に大きな影響を与えた。フランシーヌという名前の人形を持ち歩いていたという伝説もある。

※手鏡で女子高生のスカートの中を覗いたり
フジテレビ『とくダネ！』のコメンテーターとしてお馴染みだった早稲田大学の植草一秀教授が「手鏡でスカートを覗こうとした」との容疑で現在裁判中。

※「ミニにタコができた」というタイトルの自主制作ビデオを撮影
女性のスカートの中を盗撮しようとした容疑で逮捕された田代まさし被告の伝説の名言。

判断したね。服や髪型を、一定のルールに合わせてコーディネートすれば、顔が少々不細工でも「モテ系」に近づける、というわけだ。この「ファッションで顔を誤魔化す」という方法論は、生まれつきの顔で全てが決定されるという不平等を補うためのなかなか良い敗者復活ルールだとは思うが、同時に、恋愛を大量消費のための商品にしてしまう一つの原因ともなっている。

しかし、お洒落度ゼロの安い服を大量生産したユニクロが流行ったあたり、すでに「ファッションによる誤魔化し」すら放棄しはじめた人間が増えているのだろう。オタクはいわゆる「アキバ系ファッション」※に身を固めるが、あれは本当はファッションというわけじゃなくて、特に何も考えずにありものの服を着てるだけなんだよね。俺だってユニクロで黒い服を適当に買って着てるだけだし。かつて一世を風靡した独身男性向け恋愛マニュアル雑誌『ホットドッグ・プレス』※も潰れたしね……。

日本における「家」制度の崩壊と、「恋愛」の定着

さて、世界に冠たるわが日本では、江戸時代には一部の上流階級（武家とか）を除いて非常におおざっぱな男女関係（夜這いなど※）が繰り広げられており、西洋的な「恋愛至上主義」「恋愛結婚」は明治以後に輸入されたと考えられている。明治政府は哲学や心理学などのさまざまな学問をさかんに輸入したが、**恋愛もまた西洋から輸入された概念のひとつだった**のだ。

近代日本文学の世界において、時代に先駆けて「恋愛至上主義」を唱えた北村透谷※も、最初は恋愛という言葉がなかったのでそのまんま「ラブ」と呼んでいた。今の日本人は外国から輸入し

※アキバ系ファッション　秋葉原のオタクのファッションで、「バンダナ、ケミカルウォッシュ、リュックサック」とかそういうモサいイメージで語られているもの。実際の秋葉原では、こういう格好の人は少ない。というか我々、「ファッション」には興味ありませんから！　切腹！

※『ホットドッグ・プレス』　講談社の若者向け男性誌。一九七九年に創刊され、八〇年代には恋愛マニュアル雑誌として一世を風靡した。バブル崩壊とともに凋落し、二〇〇四年に休刊。

※夜這い　昔の日本の農村で行われていた、男が女の家に夜、潜入してセックスして帰っていくという素敵な風習。村中のみんなが穴兄弟だったそうな。当然、童貞などは存在しなかった。

※北村透谷　詩人・評論家。浪漫主義の先駆者でいちはやく「恋愛」の重大性に目覚め「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり」という名言を残した。時代に先駆けて恋愛結婚したものの、現実の女に絶望したらしく、若くして自殺した。

た文化を「ＯＳ」とか「インターネット」とかそのままカタカナで呼ぶので爺さんによく怒られるが、だって呼び方が他にないんだから。昔の爺さんは外来語に新語の日本語を当てるという作業を懸命に行っていたので、「ラブ」という外来語にも「恋愛」という言葉が当てられた、ということらしい。

そういえば、戦時中には「ストライク」「ボール」も、敵性言語だということで「よし」「だめ」に変更されたらしいね。スタルヒン※が一球投げるごとに審判が、

「ダメえええー！」

とか叫んでいたのかＹＯ！　それはそれで楽しそうだ。

ところが、文明開化以前にすでに独自の文化を発達させていた日本に恋愛を輸入するとなると、やはり少々話がややこしくなる。明治時代の日本では「家」制度というものが「恋愛」よりも上位に位置していた。「家」という永久不滅のシステムを守り続けることによって、個人の死は死を超越し、永久に「家」の一部として生き続けることができる、というのが家制度の効用だろう。

つまり、血統を絶やさなければ、個人としての死は死にはならない、という血統幻想である。これは

家＝永遠
祖父→父→子→孫
「家」を守ることで、自我が保証される

■日本の「家」制度
個人は「家」の一部とされ、「家」の血統を絶やさないことによって、永遠性が保証される。たとえ波平が倒れても、カツオが磯野家の血統を絶やさなければ、あの世の波平は先祖供養してもらえるのだ

※スタルヒン
ヴィクトル・スタルヒン。第二次世界大戦の前後に活躍したロシア人投手。戦時中は「須田博」を名乗らされていた。

■見合い結婚と恋愛結婚の推移　（国立社会保障・人口研究問題研究所「第12回出生動向基本調査」）

非常に日本らしいシステムであり、**血統を絶やさないためには「妾」を持つことも正義**とされた。したがって明治初期には、まだまだ恋愛結婚や一夫一妻制という思想は、一部のキリスト教信者や先進的な文学者だけのものだった。

だが、少しずつ「家」制度が崩壊していくとともに、日本にも恋愛至上主義が根付いていき、やがては「結婚」イコール「恋愛結婚」と考えられるようになったのだ。特に、戦後、すべての価値観がいちど崩壊してしまった後、日本人は二つの思想…「資本主義」と「恋愛至上主義」に飛びつくこととなる。

加藤秀一『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』（ちくま新書）によると、恋愛イコール結婚という完全な形での恋愛至上主義が根付いたのは、一九六〇年代後半という。戦前の社会では、たいていが見合い結婚であり、恋愛結婚は一部の人間と小説などの物語の世界だけのものだった。

戦後もしばらくの間は、「家」制度の名残が残っていて、終戦と同時に恋愛が大衆化したわけではないようだ。日本において恋愛が大衆化したのは、六〇年代から七〇年代にかけて、なのだ。
それまでは、恋愛というのは大多数の日本人にとっては「お話の世界」の出来事だったわけだ。「俺だって、石原裕次郎※になれるんだよう！」なんて本気で身の程知らずなことを考えていた無謀な男は、あまりいなかった。恋愛は映画スターのもので、それはそれとして俺は見合いして家を継がないと、という階級思想、恋愛不平等主義というか**恋愛身分制度**が一応生きていた。
それなのに、六〇年代以後、恋愛が突然大衆化したのだ。実は…六〇年代から七〇年代にかけて、学生運動を中心としたカウンターカルチャーが敗北し、日本の若者は恋愛という世界に「引きこもった」のである。まあそのあたりの話は、オタクの起源論と絡めてまた後述する。
いずれにしても、六〇年代から七〇年代に至る過程で、恋愛至上主義は深く日本に根付いた。ただ、吉田拓郎※のフォークソングとか、漫画『同棲時代』※なんかを見れば分かるが、当時は恋愛イコール貧乏という感じだったのだ。なにしろ、社会変革の敗北者が恋愛に逃げ込んだのだから。ところが、世代交代が進んだ八〇年代に至るにおよび、恋愛は資本主義市場と分かち難く融合し、恋愛資本主義というべき大量消費システムが成立したのだ。

つまり、**ほんの百年少しで、日本における男女関係のありかたは、まったく別の国のように様変わりしてしまった**のだ。そう考えると、恋愛至上主義に振り回され、モテない、モテない、と悩み苦しんでいる自分自身が、実に虚しくなる。だいたい、キムタク※みたいな顔に生まれてこな

※石原裕次郎
俳優・歌手。お父さん、お母さん世代にとってのキムタク。代表作『太陽の季節』『太陽にほえろ！』など。

※吉田拓郎
ミュージシャン。『結婚しようよ』など。映画『幕末青春グラフティ～RONIN』で、カーリーヘアーの高杉晋作を怪演したことは黒歴史となっている。

※『同棲時代』
一世を風靡した上村一夫の劇画。双葉社。売れないイラストレーターの次郎と小さな広告会社で働くOLの今日子の暗黒同棲生活の地獄を描く。

※キムタク
SMAP・木村拓哉の愛称。イケメン・モテ男の代名詞。

かった俺が、人並みに恋愛しようなどと考えること自体、昔の人が見たら笑止千万だよ。鏡を見てから考え直せ、と言われるよ。

誰だったか、昔の文学者だか落語家だかが**「恋愛ってのは美男美女がやるものだ！」**と言っていたが、あれはユーモアではなく、本気で言っていたのだろう。実際、少し前までは、恋愛とは一部のハイソな美男美女と、文学の世界だけで許される貴族趣味だったはずだ。資本主義のシステムに基づいて、冷蔵庫や車やテレビが一部の金持ちのぜいたく品から大衆へ降りていったのと同様に、恋愛もまた一部の美男美女から大衆へと降りてきたのだ。

結局、男女関係もまた、時代や地域によって刻一刻と変化していくシステムなのであり、いま現在メディアが高らかに謳いあげている恋愛なるものも、実は幻想に過ぎない。たまたま、現代の日本では、大量消費と恋愛とが結びついて、恋愛資本主義とでも言うべきシステムが稼動している、というだけなのである。そう、恋愛は唯一絶対の価値を持つわけではない。恋愛もまた、人間が自分の自我を安定させるために発明した数多くの物語の一つであり、人間に「こうこうこういうルールで行動すれば、あなたは幸せになれますよ」という行動規範を示すひとつのプログラムに過ぎないのだ。**幕府も潰れた、戦争にも負けた、社会革命も失敗した、でもまあ金を稼いで恋愛していれば俺だけでも幸せになれるかな？**というのが、七〇年代以後の日本における典型的なライフスタイルになっていた、というだけの話なのだ。

まあ、それはそれで良い。人間は自我を安定させないと…つまり「どこかに幸せの青い鳥がい

る」という幻想を信じないと生きていけない。**人間は、「生きている限り、地獄が続く」という現実と直面すると、死んでしまう**のだから。

しかし古びたシステムは、いずれは現状と合わなくなる。役に立たなくなり、害悪のほうが目立つようになれば、捨てられることになる。現代の日本では、今、この瞬間に恋愛資本主義は終わりつつあるのだ。恋愛は死んだのだから。

なのに、社会は、この壊れかけたシステムを必死で延命させようとしている。

俺は、詩を作りました。

ぼろぼろな俺※

何が面白くて俺を恋愛に誘うのだ。
アパートの四畳半の個室の中では
足が蟹股すぎるぢゃないか。
腹があんまり太鼓腹すぎるぢゃないか。
イケメンがモテる国にこれでは顔がぼろぼろすぎるぢゃないか。
性欲が溜まるから風俗にも行くだらうが、
俺の目は二次元ばかりを見てゐるぢゃないか。

※ぼろぼろな俺
高村光太郎の詩『ぼろぼろな駝鳥』より。

身も世もないように萌えてゐるぢゃないか。
パソコンゲームの妹キャラが今にもモニターから出てくるのを待ちかまへてゐるぢゃないか。
あの大きなキモい顔が無辺大の怨みで逆巻いてゐるぢゃないか。
これはもう人間ぢゃないぢゃないか。
俺よ、
もう止せ。こんな事は。

4――恋愛資本主義の欠陥

「顔」をもたざる男は「金」や「地位」が必要

ここまでで説明してきたように、恋愛において人間の「外見」「顔」が最上の価値を持つということは、**誰もがキムタクを目指さなければならない。**

ちょ、ちょっと待って！

俺がキムタクになるなんて、百万年ほど生きて隕石が落ちてきてDNAが全部書き換えられるのを待たなきゃ無理だYO！　DNAに逆らってキモメンをイケメンに変えるなどという無理難題を押し付けられても、十年二十年の鍛錬でどうにかなるものではない。女の場合は化粧やら何やらで誤魔化しも効くが（蛇っ……！　蛇っ……！　女は信用できねえ……！）、男はそうはいかない。だから恋愛至上主義社会では、男は生まれた瞬間に勝ち組と負け組に分かれてしまっているのだ。

もちろん、人間には知恵がある。腕力の弱さを克服するために武器を開発したように、顔の醜さを克服するための文化を生み出すことだって可能だ。さっきちょっと書いたけど、服や髪型で誤魔化すというのも一つの知恵だろう。しかし、ファッションだけでは限界がある。そこで、綺

麗な顔を持たずに生まれてきた**ナチュラルボーン負け組の男たちが、女の愛を得るために顔の代替として発明したものが金であり、さらには地位や権力といった社会的なヒエラルキー**だったのだ！　な、なんだってー？

歴史を振り返ってみても、権力を握った男が最初にやることは、たいていハーレムを作ることだ。中国大陸を歴史上初めて統一した秦の始皇帝は、中国全土から三千人の美女を集めて「阿房宮」というアホみたいにデカいハーレムを建造した（完成する前に死んじゃったけど）。三千人の美女って、本宮ひろし※の漫画かYO！

江戸時代の将軍様だって、中国の皇帝とは比べ物にならないほど質素な暮らしをしていたとはいえ、大奥というハーレムを持っていた。日本最高の文学『源氏物語』を読んでみると、やっぱり源氏も権力にあかせて自分のハーレムを建造している。最近の近代国家では監視の目が光ってるので、アメリカの大統領はせいぜい女のアソコに葉巻を入れるぐらい※のことしかしていないが、もし許されるなら、やっぱりホワイトハウスを酒池肉林のハーレムにしたいと思っているに違いないのである！

つまり…金（権力）と恋愛（というかモテ度）とは、もともと密接に繋がっているのだ。「英雄、色を好む」というが、むしろ稀代の女好きであるからこそ、わざわざ権力者になろうとするんだよ！　な、なんだってー!!

まあ一応、現代社会では、美男に生まれてこられなかった負け組男でも、わざわざ中国大陸の統一のようなデカいことをしなくても、それなりの金を手に入れることによって敗者復活するこ

※本宮ひろし
代表作は『俺の空』『サラリーマン金太郎』。伝説の作品『男一匹ガキ大将』で一人対十万人のケンカをはじめてしまって収集がつかなくなったことがあったが、御大の漫画は盛り上がるにつれて大風呂敷を広げまくって収集不能の事態に陥ることが多々あり、『俺の空・三四郎編』では確か中国大陸の真ん中で気功格闘技の試合中、上空にUFOが飛来するという川口浩探検隊のごとき有様となったことも。

※女のアソコに葉巻を入れる
クリントン大統領（当時）がホワイトハウスでやらかしたらしい。

■『銭豚』のセックスシーンは豚の交わりとして描かれた　（ジョージ秋山『銭豚』青林堂）

とが可能となっている。

だが、ここでも相変わらず心はないがしろにされている。**心は、目には見えない。だが、金は目に見える。**こうして、イケメンに生まれてこられなかった男は、ただ家族を食わせるためだけではなく、女の愛を得るために、一生涯あくせく働き続けなければならなくなったのだ。

しかし、金で女を釣っても、本当の愛なんか得られないのではないのか？　**金で女を買っているのと、結局は同じじゃないのか。**

ジョージ秋山※の漫画『銭豚』は、金貸しのキモメン・蒲郡風太郎が、女子高生と愛人契約を結んでエッチするという早すぎた話である（七〇年代の作品です）。女子高生は風太

※ジョージ秋山
漫画家。『銭ゲバ』『アシュラ』『浮浪雲』『恋子の毎日』『ピンクのカーテン』など名作多数。トラウマコミックと癒し系コミック、双方の元祖的存在。近頃は何を描いても毒薬仁が出てくる印象が。

郎に囲われてセックスするのだが、この漫画、セックスシーンは、すべて右の引用のような描き方で表現されている！

ぶきーっ、ぶきいーっ、ぶきいいいいーっ！

金で結びついたセックスなど、豚と豚の交尾にも等しい！

醜い！　そこには、愛などない！

愛だけが、ない！

ジョージ先生は七〇年代、恋愛至上主義が世の中を覆い尽くそうとしていた中で、敢然と、「恋愛は、商品になってしまった！　もはや、恋愛は、死んだ！　みんな豚だ！」

と、未来を予言してしまったのである。

実際、モテない男が金を稼いで女を口説くというのは、一言で言えば「**贅沢させてやるから、顔は我慢しろや**」ということである。俺が尊敬するライブドアのほりえもん社長※は、こんな偉大な発言をしてくださっている。実際に大金持ちになった人の言葉だから、信憑性抜群だ！

「女はお金についてきます」

「ビジネスで成功して大金を手に入れた瞬間、『とうてい口説けないだろうな』と思っていたネエちゃんを口説くことができたりする。その後は芋づる式です」

（堀江貴文『稼ぐが勝ち』光文社）

※ほりえもん
ライブドア代表取締役社長・堀江貴文のニックネーム。自分の馬に「ホリエモン」と名づけてるところから来たようだ。

これに対して、日本証券経済研究所の紺谷典子主任研究員は、こう言ってほりえもんを馬鹿にする。

「お金で人の心が買えるなんて、それは買ったつもりになっているだけ。お気の毒な方」

（ZAKZAK二〇〇四年九月一日）

%	青森 200万円以下 / こだわらない	青森 200-400万円 / 200万円以上	青森 400万-600万円 / 400万円以上	青森 600万円以上 / 600万円以上	東京 200万円以下 / こだわらない	東京 200-400万円 / 200万円以上	東京 400万-600万円 / 400万円以上	東京 600万円以上 / 600万円以上
■ 男性未婚者の年収	47.9	49.6	1.7	0.9	33.8	43.2		3.5
○ 未婚女性の期待年収	30.5	16.1	39.8	13.6	29.7	4.3	26.8	39.2

（注）25〜34歳の若者を対象とした2003年の厚生労働省の結果による。

■未婚男性の年収と未婚女性の年収期待のギャップ
（山田昌弘『パラサイト社会のゆくえ』ちくま新書）

つまり、女にしてみたら、ほりえもんに口説かれてセックスするというのは、『銭豚』における

「**ぶきいーっ、ぶきいーーーっ**」

に過ぎない、ということなのだろう！

要は、真の愛を得られるのは、やっぱりイケメンだけで、イケメンじゃない男が金で女をなんとかしても、女は内心「**ぶきいーっ、ぶきいいーーーっ**」「**豚！　豚よ！**」と思ってるわけだ。

とはいえ、あくなき欲望を叶えてくれる「金」の魔力が、女の「愛」をとらえて離さないのは間違いない。

山田昌弘の『パラサイト社会のゆくえ』（ちくま新書）によると、独身女は、**結婚相手にアホみたいに高い年**

収を望んでいるという。

右のグラフを見ればいかに女が男に無謀な年収を期待しているのが分かるだろう。東京の独身女の欲深さには、もはや言葉もない。六百万円以上て…？　そんな男、もうみんな美人を捕まえて結婚してるに決まってるYO！

『SPA！』二〇〇四年十二月七日号に掲載された調査によると、東京の30歳独身女（負け犬）の平均年収は三百万円だ。ということは、六百万円の年収を得るためには、三百万円稼いでいる男と結婚すれば良いわけで、これなら現実的な解決が可能となる。ところが、六百万円の男を求めるということは、つまり自分は専業主婦になって仕事をやめ、かつ、今まで同様の生活は続けたい、だから倍の六百万円を稼ぐ男と結婚したい、ということなのだろう！

そうは、いかんざき！※

厚かましい…厚かましすぎるっ！

これじゃ、結婚できるわけがない。あげく、「給料三ヶ月分の指輪をよこせ」※とか言われるのだ。そんな金があったら他のことに使うYO！

ああ…心は、愛は、どこへいったのだろう。男の収入をアテにして贅沢しようとする女。これでは、結婚なのか売春なのかわからない。これが、恋愛資本主義の姿なのだ。

本来、恋愛とはキリスト教の代替物として発展したものであるから、慎ましやかな生活のうち

※そうは、いかんざき！
公明党の神崎武法代表がテレビCMで流行らせようとした言葉。めでたく2ちゃんねるの一部で流行った。一時、政治家がテレビCMで寸劇するというのが流行しつつあったのだが「そうは、いかんざき！」とともに終わった。

※給料三カ月分の指輪をよこせ
宝石会社デビアスの宣伝コピー。郷ひろみが二谷のお嬢さん（リー）に渡した指輪がこれくらいの高額なものだった。しかしバブルが崩壊してからは「地味コン」が主流となり、あまり聞かれなくなった。

に真実の愛を見出すというものだったはずだ。しかし、金があり余るほどあるのに使い道がなかった八〇年代バブル期に、恋愛と消費とが、不幸にも融合してしまったのである。その結果、恋愛は、

「ぶきぃーっ、ぶきぃーーーーーーっ！」

という醜い豚のまぐわりに堕落してしまったのだ。

もしかしたらあなたはこう考えるかもしれない。

「それじゃあ、今までバブルに踊っていた人たちがみんな貧乏になって、やっと目が覚めたんでしょ？　愛は心だ！　金じゃない！ってことが見直されて、かえって良かったじゃない」

甘い！　甘い甘い、かすがやの甘納豆だ※！

一度、八〇年代のバブルを経験した30歳独身女は、「恋愛」イコール「大量消費」であり、「イイ男」イコール「金」（消費能力）であるという恋愛資本主義のプログラムを完全に身体で覚えてしまった。**人間、一度覚えた贅沢は忘れられない**。

子供の頃は九十円のレトルトカレーが最高のご馳走だった人も、大人になって銀座の『デリー』※でカシミールカレーを食べてしまうと、二度とレトルトには戻れなくなる。それが人間の性なのだ。もっとも、俺の好物はハウスのククレカレー中辛だけどね。あらゆるカレーを食い尽くした結果、生まれて初めて食べたカレーであるククレカレーが結局一番美味だった、ということに最

※かすがやの甘納豆
甘納豆は、豆を使った甘いお菓子。大昔、サンテレビで「納豆。納豆。かすがやの、甘納豆！」と連呼するCMが放映されていたと記憶していたが、本当は「春日井の甘納豆」という名称であるとの情報が読者から寄せられた。

※デリー
銀座・上野・赤坂に店舗を構えるインド・パキスタン料理店。辛口のカシミールカレーが絶品。

近気づきました。ちょっと脂肪分が多くてたんぱく質が少ないのが問題なんだけど……。
それはさておき、たとえバブルがはじけようが、大勢の男が貧乏になろうが、独身女の男に対する物質主義的な要求はとどまることがなく、むしろエスカレートしていった。みんなお金がなくて困っているのに「年収六百万円を要求」とか、そういう無体で非現実的な妄想を、女は絶対に捨てようとしなかった。
そう、一度はじまった「恋愛の商品化」は、もう誰にも止められなかったのだ。そして、そのような八〇年代バブルの夢からいまだに抜けられない30歳独身女の多くが、**思いきり余っていて365日ウェルカム状態の俺みたいなオタクを無視**しながら、ズルズルと「負け犬」になっていったのである。
俺のようなオタクは、何でもとことんまで追求するから、長年にわたるカレー巡りの旅の果てに「やっぱ、おせちもいいけど、ククレもね」という貧乏だけど幸せな結論に達したりするんだけど、負け犬女はオタク性というものを嫌悪しているので、何事をも極めつくすということがない。それ故に、いつまでも「イケメンやお金持ちもいいけど、やっぱり男は優しさだわ」という貧乏だけど幸せな結論に到達しないのだ。

『non-no』で搾取された女がさらに『NIKITA』で搾取

踊れ踊れ〜！　メディアに踊らされろ〜！　猿のように、GO!GO!GO!
恐ろしいことに、恋愛資本主義は、そんな負け犬をさらに搾取しようとしている。二〇〇四年

に入って、マガジンハウス『ＢＯＡＯ』、主婦と生活社『ＮＩＫＩＴＡ』、集英社『ＭＡＱＵＩＡ』、ぴあ『Ｃｏｌｏｒｆｕｌ』といった30代の女をターゲットとした女性雑誌が続々と創刊された。

30代負け犬独身女は社会でのステイタスが上がっており、可処分所得をたっぷりと持っている、ということになっている。故に、彼女たちに「30代から、本当の恋愛が始まる！　もっともっとお金を使ってイイ女になれば、素敵な恋が待っている！」と吹き込むことで、これから**まだまだ搾り取れる**というわけだ。

あまりにも血も涙もない恋愛資本主義の修羅地獄！　**負け犬やだめんずとは、結局、30を過ぎても「恋愛マニュアル」から抜け出せないマニュアル女**たちなのだ。

■『ＮＩＫＩＴＡ』創刊号（主婦と生活社）
負け犬雑誌『ＮＩＫＩＴＡ』の表紙にびびったか？　たじろいだか？　以下は俺が運営しているWebサイト「しろはた」に来た、ペンネーム「藤巻十三」さんからの投稿だ。
《最近『レオン』という変なオッサン雑誌が流行っているそうで、中身はジャン・レノみたいな金満絶倫イタリア親父になって女をコマせ！という素敵なものなのですが、ジャン・レノはフランス人だったのでは…そのレオンの女性版がこの『ニキータ』です。いきなり「あなたに必要なのは若さじゃなくテクニック！」「コムスメに勝つ！テクニック丸わかり」「30オンナに必要なのは、出し抜き時計！」「ミラノマダムのモテる極意」と、フィギュア萌え族（仮）が読んだら気が違いそうな見出しが表紙に怒涛のごとく登場。恐ろしくて中身を確認する度胸がありません》

実際には、この手の負け犬雑誌は、全盛期の『ｎｏｎ－ｎｏ』あたりと比べると、全然売れていないらしい。**負け犬の多くが、貧乏**だからだろう。しかし、衰退し続ける恋愛資本主義システムの延命策・打開策として市場が「負け犬」に目をつけているので、ガンガンと広告が入る。つまり売れなくても儲かるのだそうだ。負け犬を搾取するビジネスというよりむしろ、負け犬を搾取しようとする企業を搾取するビジネスなのかもしれない。恋愛資本主義もかなり末期的な状況になってきたといえるだろう。

セックスの商品化と愛の上位化

恋愛が商品化されたことにより、恋愛に付随して発生するはずのセックスもまた、商品化されていった。「豚！　豚よっ！」「ぶきいーっ、ぶきいいいーっ！」という光景が、一般的なものになってしまったのだ。

むろん、もともと性風俗産業というものは人類の歴史上最古の職業と言われているし、ずーっと昔から存在していた。だが、従来、風俗嬢さんは「玄人」として、いわゆる素人女とは厳密に区別され、素人女は玄人女を「金で身体を売っている女」と軽蔑していたものだった。

俺のおかんも、キャバレーを経営する水商売のママンだったんだけど、

「あたしゃ、客には一発もやらせたことはないよ！　風俗女と一緒にされちゃ困るよ！」

と、小学生の息子（俺）に向かってヘンな自慢をしていたものです。で、俺のナイーブな子供心は「そんな…おじさんたちがかわいそうだ。うちのおかんは、詐欺師だ！　女はおっかねえ、

女は信用できねえ！」なんて深く傷ついたりしたのだった。いや、おかんの話をしていたんじゃなかったな。

そうそう。八〇年代以後、恋愛もセックスも商品となったため、素人女が簡単にセックスを売り物にする時代が来た。というか、**全ての恋愛が、相手に何らかの見返りを要求する売春行為になってしまった**のだ。

この時に発明された概念が「**援助交際**」だ。援助交際とは本当は単に「素人売春」という程度の意味しか持たないのだが、「売春」ではなく「交際」である、という言葉のすり替えによって、素人女が持つ「売春」という言葉への後ろ暗いイメージを払拭することに成功したのだ。こうして、もう誰が素人で誰が玄人か判然としない「セックスのお安い大量消費時代」が現出した。もちろん、彼女たちの援助交際の目的は、「金」だ。ぶきぃーっ、ぶきぃいいいーっ！

これは、女にとって恋愛の目的が「心の愛、純愛」から「金を使った消費行動」へとすり替わってしまったことの当然の帰結だ。恋愛のゴールが単に「消費」なのであれば、過程をすっ飛ばして援助交際によって手っ取り早く金を手にしても構わない、というわけだ。バブル崩壊により、オーソドックスな恋愛による大量消費が困難になったことも、都市部における援助交際の流行に拍車をかけたのだろう。

そんなこんなで、もはや、セックスなら誰でも手に入る…手に入らないのは愛だ。「セックスの暴落」および「恋愛の高騰」という時代が訪れ、新たな差別概念が生まれることになった。愛のあるセックスは価値があり、愛のないセックスには価値がない、という「**セックスの二極分化**」

である。

かつて、独身男の悩みは「セックスしたい」というこの一点に集中していた。今はなき男性向け恋愛マニュアル雑誌『ホットドッグ・プレス』で、人生相談コーナーを受け持っていた北方謙三先生※は、何かというと「早くソープランド※へ行け！」を連呼した。先生にかかれば、この世のあらゆる苦悩は、ソープランドで癒されるかのごとくだ！

Q　北方さん、「報われる努力の仕方」というのがあれば教えてくれませんか。というのも私はこれまで恋人もできず、現在は職もないありさまなのです。
A　一日も早く、**女を知れ！**　商売女でもいいから、女を知れ！

（北方謙三『試みの地平線』講談社）

Q　初体験をスムーズにすませる方法は？
A　ソープランドへ行け。ソープランドのお姐さんに「俺は童貞だ。セックスというものを知りたいから教えて欲しい」と言ってみろ。
Q　ボクは自信が持てない浪人生です。
A　大学に入って、ソープでもなんでもいいから**遊びまくれ**。

（北方謙三『続・試みの地平線』講談社）

※北方謙三
ハードボイルド作家。男の中の男。『三国志』『水滸伝』などの時代小説でも知られる。

※ソープランド
昔、トルコ風呂と呼ばれていた場所。タテマエは、お姉さんと一緒にお風呂に入ることができるという大人の遊び場。

モテない男は、ソープで童貞を捨てれば万事解決だ！

北方先生ッ……お…男らしいいいっ！！

もう一事が万事この調子で、とにかく、**ソープランドに行けば人生が一変**してなんとかなると、当時の童貞読者たちは夢を与えられていたわけなのだ。いやまあ、普通の回答もいっぱいあるんだけど。ところが、21世紀に入ると、この北方イズムというかソープランド治療法が、まったく通用しない恐ろしい世の中になってしまった！

「**素人童貞**」という新たな差別概念が生まれたのだ。もう二重の意味で差別なのだが、ソープランドしか知らない男は、素人を知らないから、恋愛の一環としてのセックスをしたことがない。従って、本当は童貞と変わらない、ということになったのである。モテない男は、北方先生の言葉によっては救われなくなってしまったのだ。

ああ、モテない。

北方先生はソープへ行けって言ってたけど……。

…行ってみたけど……。

なんだか、愛がなくて、味気なかったなあ……。

しかも、まだ俺、素人童貞なんだよな……。

…一生、素人童貞なんだろうな……。

でも、好きでもない女の子とは、セックスしたくないし…第一、向こうに失礼だし……。

…でもソープにいっちゃったんだよな……。
こんなことなら、童貞は本当に愛している女の子に捧げるために取っておくべきだったな……。
ああ、俺は最低だ……。
もう、後戻りもできない……。
俺の童貞を返してくれっ…、返せ、戻せっ……!

ということになり、モテない男はもう三次元のどこにも逃げ場がなくなったのだ! 童貞は当然、恋愛資本主義で役立っていないので馬鹿にされる。風俗で搾取されると、今度は素人童貞と言われてまた馬鹿にされる。モテない男は、恋愛資本主義社会そのものから、永遠に虐められ続ける運命なのだ。**もう、生まれてきたことが、間違いだったとしか言いようがない。**

つまり、
「素人とセックス」=「恋愛のプログラムを守っている」
「風俗でセックス」=「本筋の恋愛コースから脱落して風俗というサブシステムに落ちている」
ということでヒエラルキー(身分階層)があるわけだ。また、
「素人=恋愛=愛がある」
「玄人=商売=愛がない」
とも言いたいようなのだが、すでに見てきたように、もはや素人とだって愛のないセックスしかできなくなりつつある。恋愛は死んだのだから。しかし素人童貞という言葉は、恋愛しない人

間は恥ずかしい負け犬男なのだ、とレッテルを貼ることによって、「もう恋愛なんかいいよ、風俗で充分だよ」と真剣に恋愛に命をかけることをせず、コンビニ感覚でダラダラ生きている男を道徳的に非難して追い込んでいるわけだ。「**真面目に、女に愛されるように努力しろ！　服を買え！ジョギングしろ！　流行を追いかけろ！　恋愛市場にもっと金を使え！**」ということなのだ。これは資本主義にまともに参加せず、全然仕事しない奴に「ニート」とかレッテルを貼って「社会問題だ！」と言い出すのと同じ理屈だろう。

しかし、こんな昔の劇画みたいな荒んだ世の中が、本当にやってくるとは……。

そう。恋愛ニートとも呼べる男たち…恋愛のような金がかかって面倒臭いことをやりたがらない男が、確実に増加している。恋愛至上主義という幻想から醒めてしまい、恋愛よりも自分の仕事や趣味に夢中という男たちだ。恋愛経験を積み重ねた結果、女に失望して「何が恋愛だ！　さんざん金を使って気を使って女の顔色を伺っても、どうせ最後はセックスするだけじゃないか！だったら、恋愛も風俗も一緒だろ！」という悟りを開いてしまった男もいる。俺の友達の毒男君なんかもそうだ。また、現実の世界から失われてしまった**偽りなき純愛**を求めるあまり、二次元に目覚めたオタクもたくさん生まれた。俺のことです。

一方では、バブルが崩壊しているにも関わらず引き続き「恋愛イコール顔そして消費」という条件に固執したために、恋愛に満たされることがなくなった負け犬やだめんずが発生した。むろん、これらの女たちに「顔」または「金」両方の理由からダメ出しされて相手にされないモテな

い男も大量発生した。俺のことです。「モテない男」として追放された俺は、荒野をさまよい歩き、ほうほうのていで「秋葉原」という安住の地を見つけ、オタクになったわけです。
このように、恋愛資本主義は様々な原因によって内外から崩れ、いまや瀕死の状態となった。そのため、大量の男女が市場からあぶれてしまっているのである。

金はキモメンから女を通してイケメンに流れる

これまで語ってきたことを、ここでズバッとまとめてしまおう。八〇年代に完成した恋愛資本主義のシステムは、左下の図のようになっているのだーーーっ！
恋愛資本主義が進化するとともに、女は男をいくつかのヒエラルキーに分類して区別するようになった。江戸時代の「士農工商」※やヒンズー教のカースト制度※のように、男を身分で差別するようになっていったのだ。
そして、八〇年代には男を機能的に使い分けるという発想が登場した。自動車運転係は「アッシー」、食事奢り係が「メッシー」、モノや金を貢がせる相手が「ミツグ君」といった具合だ。酷い女になると、複数の男からまったく同じモノを貢がせ、一個だけ残して他

女
アッシー
メッシー
ミツグ君
キープ君
役立たずの男
金の流れ

■恋愛資本主義システムのヒエラルキー構造

※士農工商
江戸時代の身分制度。武士がピラミッドの頂点にいて、その下に農民・職人・商人と続く。

※カースト制度
インドの身分制度。紀元前（！）13世紀に作られた。階層も複雑多岐にわたる。

を売り払っていたという。で、常に一個のアイテムを持ち歩いてデートすれば、複数の男と同時につきあっていることがバレない、という寸法だった。

あな、おそろしや！

つまり八〇年代においては、恋愛資本主義のピラミッドの頂点は女である、とされていたのだ。すべての金とモノが、アッシーやらメッシーやらに分類された男から女へと流れていく、というのが八〇年代における恋愛資本主義の構造であった。**八〇年代に恋愛は「男が女のために大量消費する、男から貢がせた女もやっぱり大量消費する」という消費システムとなった**のだ。

恋愛資本主義はこの体制を維持するかに思われた。しかしながら、バブルが崩壊すると、女の価値、ことにセックスの価値が暴落していった。「宮沢りえのヌードが二億円！」※と大騒ぎになった頃が女バブルの絶頂期だったろう。だが、宮沢りえが、相撲取りと婚約、しかも破棄されるという象徴的な事件※が起きたあたりから、女の価値は下落の一途を辿ることになった。その結果どうなったかというと、女がヒエラルキーの頂点から転がり落ち、次頁の図のような「二重搾取」の構造が出来上がったのだ。

男は、機能ではなく、その容姿によって二種類に区別されることとなった。

「**イケメン**」（いい男）と「**キモメン**」（気持ち悪い男）である。

※宮沢りえのヌードが二億円
一九九一年、人気アイドルの宮沢りえが篠山紀信撮影によるヌード写真集『Santa Fe』を出版したときのギャラが一説では二億円と言われている。

※象徴的な事件
宮沢りえは人気絶頂期の一九九二年に力士の貴乃花と婚約し大騒ぎとなったが、翌年、この婚約は破棄された。

厳密に言えば、この間にも階級がある。それがイケメンとキモメンの中間にあたる「フツメン」（普通の男）や、フツメンとキモメンの中間にある「ブサメン」（不細工な男）だ。こういう士農工商よりも厳しい「容姿によるヒエラルキー」が、女によって構築されている。

話を単純化すれば、フツメン・ブサメン・キモメンが女に金やモノを貢ぎ、女はその金やモノをイケメンに貢ぐ、という二段階の搾取が成立した。つまり、キモメンを最底辺とする「モテない男」軍団が、あくせくとイケメン…限られた一部の男前に金を貢ぎ続けるという、悪夢のような搾取構造が完成したのだ！

一番分かりやすい例として、キャバクラや風俗があげられるだろう。この手の店で客がキャバクラ嬢や風俗嬢に貢いだ金は、そのままホストクラブやヒモへと流れていくのである。酷いときには、キャバクラとホストクラブを同じオーナーが経営していたりする。つまりキャバ嬢が稼いだアガリをホストクラブで回収するというわけだ。**ああ、まさに弱肉強食の食物連鎖。**

恋愛資本主義はおっかねえ…恋愛資本主義は信用できねえ！

■不景気時代（現在）の二重搾取構造
気がつけば、イケメンが食物連鎖の頂点に。どっちにしても最底辺の「見えないキモメン」である俺には関係ないが

そして、構造が多少変化しようが、常にピラミッドの最底辺で搾取され続けるのは、モテない男なのである。

次の図は『だめんず・うぉ～か～』に掲載された「恋愛資本主義のヒエラルキー」だ。

くらたまも『だめんず・うぉ～か～』連載当初は「キモメン」をまったく無視していた（というか、見えていないので気がつかなかった）のだが、童貞連合とかいう童貞男サークル軍団と仕事で関わり合いになった頃から、「だめんず以下」の存在…絶対に**恋愛対象にならない論外の男**、キモメンの存在に気づいたようだ。男は心優しいロマンチストが多いので、「男はみな等しく男であり、イケメンもキモメンも同じ男であることには変わりない」と思い込みたがるが、女はそうではない。

女にとって、恋愛対象となる男と、そうでない男は、まったく別の生き物ですから！　残念！

女にとって前者は「男」であり、後者…つまり俺は「**どうでもいい路傍の石**」なのである。この、女から見て「恋愛対象にならない男」「どうでもいい路傍の石」を、つまり俺のことを、本書では改めて「キモメン」と呼びあらわすことにする。キモメンは、恋愛資本主義ピラミッドの地下に押し込められており、女からは見ることができない人

■くらたまのピラミッド
（『週刊ＳＰＡ！』2004年７月20日号）
だめんずの下に位置しており、女からはまったく見えない連中が「キモメン」、絶対にモテない男たち。彼女たちにとって、彼らは「男」ですらない、というか、存在しないことにされている

間以下の存在なのだ。恋愛資本主義にとって、恋愛プログラムに参加できないキモメンは、人間ではないのだ。

「ああ、はやく人間になりたい！」

ヒューマン妖怪アニメの傑作『妖怪人間ベム』※は、妖怪人間という**なんだかよくわからない暗いさだめ**を背負ったベム・ベラ・ベロの三人が、「良いことをすれば、きっと神様が俺たちを人間にしてくれる」と信じて人間のために命がけで善行をし続けるのだが、見た目がキモイので人間から差別され、結局死んでしまうという悲しい物語だ。俺は、このアニメを見るたびに思うんだ。きっと、俺のDNAには、妖怪人間のものが混じっているんだろうなぁ、ってな！

くらたま…というか女の残酷さは、次の言葉にも表れている。

童貞連合の人たちと会ったとき、いままでだと「童貞なんて気持ち悪い」と思っていたはずなのに、彼らを目の前にすると、ちょっと優しい気持ちになる自分がいたわけです。

（倉田真由美・斎藤孝『喫茶店で2時間もたない男とはつきあうな！』集英社）

と言って自分の優しさに自分で酔いながら、舌の根もかわかぬうちに、

※『妖怪人間ベム』
一九六八年に放映されたテレビアニメ。「早く人間になりたい！」の名台詞を残した。

女性は、恋愛経験値が高い男を好きになります。そういう意味で経験値が低い男性の代表とも言える、全日本童貞連合という童貞くんたちのグループを取材した例をあげてみましょう。（中略）彼らはこそこそせずに童貞連合に入ろうという、謙虚さがある童貞くんたちなので、じつを言うと好感が持てなくもなかったのです。そうであっても、「私が面倒をみてあげるわ」とまで思えませんでした。

（倉田真由美・斎藤孝『喫茶店で2時間もたない男とはつきあうな！』集英社）

と、目の前のモテない男を突き放すのだ。心優しい自分というセルフイメージと、モテない男に対してとことん冷淡な態度。なんという…**なんという自己欺瞞！** ああ、これが、これが俺が憧れてやまなかった女の正体か！ **地獄へ堕ちろ、女ども！**※ **ドーン！**

もちろん、たとえ年収六百万円という基準を満たしていても、モテない男、ことにくらたまのピラミッドで「見えない最底辺」に隠されてしまうようなキモメン、つまり俺みたいな男はなかなか相手にされないことは言うまでもない。

ところが逆に、年収ゼロでも、イケメンであれば女がほいほい貢いでくれる。もはや、「金」を媒介しない、本来の意味での純粋な恋愛を行える人間は、恋愛資本主義の世界には存在しないのだ。この恋愛と金がごっちゃになってしまった世界では、大多数の男は、あくせくと働いて金を稼ぎ、その金の魅力で女をひきつけるしかない。無論、恋愛を経て結婚したとしても同じことだ。同じどころか、ますます搾取される。そして、せっかく貢いだ金も結局は、ホストやジゴロやヒ

※これが俺が憧れてやまなかった女の正体か！ 地獄へ堕ちろ、女ども！
元ネタは『デビルマン』で不動明（デビルマン）が、魔女狩りに狂奔する人間に絶望して叫んだ台詞。「これが俺が身を捨てて守ろうとした人間の正体か！ 地獄へ堕ちろ人間ども！」

モヤヨン様※の追っかけに費やされてしまうのだ。**モテない男は、イケメンに金を貢ぐために働いているようなもの**なのである。

この世界の真実の姿、それが「あかほりシステム」だ！

このような恋愛資本主義における搾取の構造を、俺は「**あかほりシステム**」と名付けることにした。

※ヨン様
『冬のソナタ』で大ブレイクした韓国の俳優ペ・ヨンジュンの愛称。「ペ様」というと怒られる。

イケメン　ホスト　ジゴロ　DQN　ヨン様
↑金の流れ
素人女
嫁　恋人　援交
玄人女
ソープ　イメクラ　デリヘル　キャバクラ
非イケメン　夫　彼氏　客
労働賃金

■あかほりシステム
前述の図の繰り返しになるが、実はこのように恋愛だけでなくキャバクラや風俗も恋愛資本主義システムに組み込まれているのだ

あかほりシステムとか言われてもオタク以外には何のことか分からないと思うが、オタク業界には、あかほりさとる※という大御所がいる。昔で言えば、劇画界の梶原一騎※ぐらいビッグな人であり、オタク業界の頂点に君臨する天下一の大物だ。『サクラ大戦※』とか作ってる人ね。このあかほり先生は言うまでもなく、大金持ちである。後述するが、オタク業界はとてつもない巨大産業に成長しており、その頂点ともなれば使い切れないほどの金が入ってくるわけである。

そして、あかほり先生の趣味は、**キャバクラで豪遊すること**だ。まあ、梶原先生の趣味も銀座の

※あかほりさとる
小説家・シナリオライターなど、様々な顔を持つオタク業界の大御所。手がけた作品はゲーム『サクラ大戦』『らいむいろ戦奇譚』、アニメ『NG騎士ラムネ&40』『セイバーマリオネットJ』など。

※梶原一騎
劇画原作者。手がけた作品は『あしたのジョー』『巨人の星』『タイガーマスク』『空手バカ一代』『愛と誠』『柔道一直線』『侍ジャイアンツ』『夕やけ番長』『プロレススーパースター列伝』『四角いジャングル』『男の星座』とゴージャスにもほどがある。三協映画という映画会社を設立し、『地上最強のカラテ』などの映画も多数製作した。黒歴史として『ボディガード牙』『カラテ地獄変』『新カラテ地獄変』『人間兇器』などの人間不信漫画多数。

バーで豪遊することだったので、豪遊自体は別に問題ではない。いや、むしろ男のステイタスと言っても良いだろう。ここで問題にしたいのは、せっかく稼いだ金がキャバ嬢に流れ、その金はホストやヒモのものになってしまう、ということである。つまり、あかほり先生の稼ぎが、イケメンのものになってしまうのだ！

これこそまさに恋愛資本主義の恐ろしい現実なのであり、このように大部分の男が稼いだ金が女を経由して一部のイケメンに持っていかれてしまう構造が「あかほりシステム」なのだ。なぜオタクコンテンツを生産するクリエイター・あかほり先生が稼いだ金が、自分では何もしない、たまたま生まれ持った顔が男前というだけのイケメンに持っていかれなければならないのだろうか？　おかしいではないか！

そう、恋愛資本主義は、勤勉なアリが無産者であるキリギリスに貢がされ続けるという間違ったシステムなのだ！　恋愛資本主義は人間の才能や努力に報いない。**「顔面カースト制度」**とでも言うべきシステムなのだ。

九〇年代以後、日本が急激に衰退した原因の一つとして、俺はこの恋愛資本主義…あかほりシステムの弊害をあげておきたい。共産主義が行きすぎた平等主義によって人間の努力を無価値にしてしまい、人間のやる気を喪失させるのと同様、恋愛資本主義もまた行きすぎた顔面不平等主義によって人間の意思を萎えさせるシステムなのだ。い、いや、あかほり先生がモテない男だと言ってるわけではないんですよ！　ただ俺は、どうして先生の金がイケメンに流れなければいけないのだ！と憤っているんですよ！　才能よりも顔のほうが偉いなんて……。ブラック・ジャッ

※『サクラ大戦』
原作広井王子、脚本あかほりさとる、キャラクターデザイン藤島康介、音楽田中公平、製作はセガという超豪華スタッフによるコンシューマーゲーム。アニメや舞台などに展開され、現在も続編が製作され続けている。

※ブラック・ジャック
手塚治虫の後期を代表する作品『ブラック・ジャック』の主人公。天才的な腕を持つ無免許医。

ク先生が手術で稼いだ金が、医学と何の関係もない島耕作※に流れるようなものではないですか！
おかしいですよ！　おかしいですよ！
本来なら、モテるイケメンが、「モテモテ税」を支払って社会に還元するべきなのに、逆になってるんですよ！　俺のようなモテない男が、モテる男に「モテない税」を徴収されているんですよ！　こんな不公平が、あるかっ！

モテない男には福祉もなく同情もなく、社会的支援もない。あるのは差別と嘲笑だけ

イギリスで資本主義が勃興した当初は、まだ社会福祉という理念がなく、ひたすら弱肉強食の生存競争が繰り広げられた。
「このシステムは一見無茶苦茶だけど、神の見えざる手※が、適当に調整してくれるさ」なんていい加減なことを言っているうちに、神が死んでドツボにはまったのだ。その結果、一部の人間だけが富を手に入れ、多くの人間が貧民となってしまい、大変なことになってしまった。
そのためにマルクスは共産主義というアンチ資本主義思想を作り上げたのだし、マルクス以外にも多くの学者が社会主義的な学説・政策を考えるようになった。マルクス主義自体はどうにもアレげな感じだったのだが、結果として、現在では多くの資本主義国家で社会福祉政策が実施されるようになった。
恋愛資本主義もまた、本来はモテない人間、恋愛できない人間、つまり**俺を救済するための**社会福祉政策を併用する必要があるはずだ。キャバクラや風俗がそれにあたるという意見もあるだ

※島耕作
弘兼憲史の漫画『課長島耕作』『部長島耕作』『取締役島耕作』（講談社）など一連の「島耕作シリーズ」の主役。イケメンのため、仕事のミスも女がフォローしてくれる。

※神の見えざる手
経済学者のアダム・スミスが唱えた説で、資本主義経済では各人が自分の利益だけを追求していっても、自然に経済のバランスが取れるのだという話。

ろうが、前述の通り、それらの性産業は結局、モテない人間から金を搾取し、イケメンに集めるためのあかほりシステムの一部に過ぎないのであり、本来の意味での社会福祉とは相反するものだ。相反するどころか、風俗なんて俺から「モテない税」を踏んだくるための罠みたいなもんだよ！「**キモメンホイホイ**」だよ！

ああ、俺のようなモテない人間は、どこまでも搾取され続けるしかないのだろうか？　女から金を貢がせているイケメンが、俺の「モテない年金」を負担するべきだろ！　この世に、正義はないのだろうか？　やっぱり、誰かが暴れないと、世の中は良くならないのだろうか。

だから俺はあえてキモメンという十字架を背負って、ゴルゴダの丘※を登っているのだ。

第一級恋愛障害者の俺に、社会福祉制度を適用してくれぇ！「恋愛生活保護」を受けさせてくれよう！　彼女をくれとは言わない、せめてメイドさんを派遣してくれぇ！

そういう社会福祉制度を作らずに恋愛弱者を救済してくれない小泉政策が、ニートを生んでるんだYO！　だって、働いたってどうせイケメンに持っていかれるなら、働く意味ないじゃないかYO！　**日本経済を救うためにも、モテない男を救済するべきなのだ、日本政府は！**

そうなのだ…俺みたいなモテない人間は、恋愛という「価値ある」プログラムを実行する能力がない落伍者として、社会から差別され嘲笑されるのだ。女子高生が作ったといわれている差別用語「キモメン」は、まさにそんな残酷な恋愛資本主義の体質そのものを一言で言い表している。

※ゴルゴダの丘
イエス・キリストが十字架を背負って登った丘。ここでイエスは処刑された。

モテない人間は、キモメンというレッテルを貼られて、社会福祉も受けられずにひたすら差別され嘲笑されるしかない。それが恋愛資本主義社会なのだ。

女は容姿で男の人間性を判断する～「モテるモテないは性格次第」のウソ

2ちゃんねるが発祥のコピペ[※]で、ネットに広く出回っている「イケメンとキモメンの絶望的な差」というネタがある。内面がまったく同じ男でも、顔・容姿によって女の受け取り方が180度異なる、という悲惨な現実をユーモラスに表現しているのだが、キモメンの俺にとってはまったくもってシャレにならない！　あまりにも「あるある」と言いたくなる、記憶に封印してきたトラウマが蘇ってしまうものばかりだ。

※コピペ
コピー&ペースト。どこかでコピーしたテキストやアスキーアートを掲示板などに貼り付けること。または貼り付けたモノ。

〈イケメンとキモメンの絶望的な差〉

イケメンまじめ…知的
キモメンまじめ…がり勉

イケメンマッチョ…スポーツマン
キモメンマッチョ…ホモ!?

イケメン暗い…クール

キモメン暗い…根暗キモイ
イケメン面白い…人気者
キモメン面白い…笑われ者

イケメン高学歴高収入…エリート
キモメン高学歴高収入…金の亡者

イケメンリーダー…頼りがいがある
キモメンリーダー…調子に乗るな

イケメンやさしい…いい人
キモメンやさしい…ピエロ

イケメン低身長…カワイイ
キモメン低身長…キモイ

イケメン高身長…カコイイ

キモメン高身長…怖い

イケメンフリーター…夢に向かってがんばってね
キモメンフリーター…さっさと就職しろ

イケメンマニア…流行の発信源
キモメンマニア…おたくキモイ

イケメンが告白…嫁にしてクダサイ
キモメンが告白…きもっ、ストーカー！

イケメンがブスと付き合う…女性を顔で判断しない
キモメンがブスと付き合う…底辺同士でお似合い

そう、恋愛教信者の女にとって、男の性格はすべて外見に表れているものなのだ！ 女にとっては、「名は体を表す」ならぬ**「顔は心を表す」**なのだ。だから、ほとんどのトレンディ・ドラマの主役は美男であり、キモメンは笑われ役や悪役としてしか存在を許されない。これは韓流ドラマでも同じことで、『天国の階段』でも主人公はイケメンで、恋敵はキモメンなのだ。

5——3種類に分かれる、モテない男と、女の関係

「池鶴関係」と「寅別関係」、そして「無関係」

恋愛資本主義が、男を「イケメン」（モテる男）と「キモメン」（モテない男）というふたつの種族に二極化させたということを、これまで長々と説明してきた。それでは次に、恋愛資本主義が作り出した男女関係のパターンを明らかにしていこう。

女とモテる男との間には「恋愛関係」という関係が成立する。厳密に言えばイケメンの場合と、金や名声で女を釣ったフツメンの場合ではまったく違うのだが（金の流れが逆になる）、一応ふたつまとめて「恋愛関係」ということにここではしておく。

これに対して、女とモテない男とは、恋愛資本主義システムの下では、どういう関係を結ぶことができるのか？

まず「**無関係**」というのがある。文字通り、どうでもいい路傍の石として扱われるという関係だ。いや、関係してないいんだけどさ。

次に、「**池鶴関係**」という関係がある。これは、ＴＢＳが八〇年代にオンエアしていた人気ドラ

マ『男女七人夏物語』※に描かれた関係を類型としている。このドラマの主役はモテ男の良介（明石屋さんま）なのだが、脇役として登場する貞九郎（片岡鶴太郎）が、無謀にも美人の千明（池上季実子）に突撃しようとする。

無茶しやがって…！

とはいえ、貞九郎は自分がブ男（キモメン）であることを理解してしまっているので、
「千明さんみたいな美人に、自分が相手にされるわけがない……」
と悶々と悩み苦しむのだ。男泣きせずにはいられない！
これに対して、千明のほうは、貞九郎を「貞ちゃん、貞ちゃん」と呼んで、ベタベタとなついてくる。しょっちゅう貞九郎を呼び出しては恋愛相談や人生相談を持ちかけ、貞九郎を心の支えにして生きていく千明。
それでも貞九郎は頭が良いのか挫折経験が多すぎるのか、
「いや、千明さんは僕を男だとは思っていないから……」
と消極的。かなり護身※が完成している様子だ。
まあ、本来の「護身完成」は、自分より強い相手に近寄れなくなることを言うのだが、モテない男の場合は、**女に決して近寄れなくなる**ことを「護身完成」と呼ぶ。つまり貞九朗は、「どうせ無理だ……」「彼女は僕を男だと思ってはいない……」と、何かにつけて千明に突撃しないように

※『男女七人夏物語』
一九八六年にTBSで放映されたドラマ。脚本は鎌田敏夫。主演は明石家さんまと大竹しのぶ。脇を固める面々が奥田瑛二、池上季実子、片岡鶴太郎、賀来千香子、小川みどり。トレンディ・ドラマの原点となった。

※護身
「女の残酷な態度から、自我を防衛する能力」というモテない男独特の危機回避能力だ。元々は武道の概念で、具体的な「護身」の完成形については、板垣恵介の格闘漫画『グラップラー刃牙』（秋田書店）で描かれている。この漫画に登場する合気柔術の達人・渋川剛気先生は、ある試合に臨む段になって、目の前に巨大な扉（の幻）が現れて前へ進めなくなってしまうのだ。先生は「これが、師匠が言っていた『決して危険に辿り着けぬ』境地…つまり、護身完成ということか」と気づくのだった。

自分を戒める。女に惚れた瞬間、その女に逃げられる、ということを経験則で悟っているのだ。
俺もねえ、俺も、何度これで失敗したことか。この本田、護身を完成させて諦めてしまうには若すぎるっ！という感じで突撃しては叩きのめされ……。まあいいや。
だが最終回近くになって、とうとう貞九郎は我慢できなくなって大爆発してしまう。貞九郎の気持ちも顧みずにひたすら彼を便利な友達として身勝手に利用し続ける千明に対して、

「あなたにとって僕は男じゃないかもしれないけど、僕にとってあなたは女なんだ！」

という名セリフを叫ぶのだ。

俺は男だ！

この貞九郎の男宣言で目が覚めた千明は、その後、貞九郎を男として見るようになり、二人は恋愛関係に……。
……移行することなく、あっさり続編の『男女七人秋物語』※の第一話で別れてしまうのである。別れたというか、貞九郎がマンションを買ったとたんに千明が逃亡したのだった。
良介（さんま）は、こう言い放つ。

「最初から、無理やったんや！」

このセリフ、超重要なので、皆さんも何度も繰り返してください！　はいっ！

「最初から、無理やったんや！」

※『男女七人秋物語』
一九八七年にTBSで『男女七人夏物語』の続編としてオンエアされた。前作でさんまと永遠の愛を誓ったはずの大竹しのぶが、いきなり柳葉敏郎とデキてしまっていたり、池上季実子があっさり逃亡して片岡鶴太郎が独り者に戻っていたりと、第一話のトラウマ度は『Zガンダム』に匹敵するものがあった。

「最初から、無理やったんや！」
「最初から、無理やったんや！」
……そう、千明が貞九郎と一緒にいられたのは、貞九郎をペットの犬猫やオカマと同じように見ていたからなのだ。貞九郎を男だと意識した瞬間に、千明は気持ち悪くなって逃げてしまったのだ。キモメンは、男であることを放棄しなければ、女とつきあえないのだ……。
この二人の前半の関係が「池上季実子―片岡鶴太郎関係」、略して「**池鶴関係**」である。すなわち、「キモメンが男であることを放棄することで、女のペットとして生きていく、そんな関係」である。悲しい、あまりにも悲しすぎる。キモメンは女の奴隷け！　鶴太郎師匠がその後、ボクシングや芸術といったモテ趣味※に走って、脱・キモメンをはかったことは言うまでもない。
キモメンが「俺は男だ」と宣言して池鶴関係を乗り越えようとすると、その瞬間に女がドン引きして逃げていく。つまり、関係を断ち切られる。このドン引き状態を俺は「トラヴィス―ベッツィー関係」、略して「**寅別関係**」と呼んでいる。
七〇年代の名作映画『タクシードライバー』※のモテない主人公トラヴィス（ロバート・デ・ニーロ）は、孤独に耐えかねて選挙ボランティアのインテリ女ベッツィーをナンパする。最初は無学だけど珍獣的な魅力のあるトラヴィスをそれなりに歓迎していたベッツィーだったが、トラヴィスがデート先にポルノ映画館を選んだ瞬間にドン引きして、以後二度とトラヴィスと関わり合いになろうとしない。この「**ドン引きされて、逃亡される**」という状態こそが寅別関係なのだ。

※モテ趣味
モテ系の趣味。バンドとかスポーツとか。逆が「非モテ趣味」で、ゲーム、アニメなどのオタク系全般が該当する。

※『タクシードライバー』
一九七六年。アメリカ映画。監督マーティン・スコセッシ、主演はロバート・デ・ニーロ。ジョディ・フォスターが少女売春婦役で登場。

ちなみに、トラヴィスがデート先をポルノ映画館にしてしまったのは、単にそこしか遊び場所を知らなかったからだ。トラヴィスはつまり恋愛マニュアルの知識がゼロだったわけだ。これに対してベッツィーは恋愛マニュアルに精通しているキャリアウーマン（負け犬寸前だけど）だったので、「こんな非常識な男と恋愛なんて絶対イヤ！」とキレてしまった。だが、トラヴィスは別に悪気がないので、なぜベッツィーが豹変して自分を罵るのか、さっぱり理解できないのだった。

モテない男であれば、ある日ある瞬間になぜか突然ドン引きされて逃げられた痛い経験があるだろう。この本の冒頭で俺が突然喫茶店で切れられてしまったような、そんな理不尽な経験が。そう、それは、「池鶴関係」が壊れて「寅別関係」に移行してしまったということなのだ。

すでにお分かりのように、多くの場合、池鶴関係下では、この関係をお互いに対等な「男女関係」だと思っているのは男だけで、女は「ペットと一緒にいる」くらいにしか思っていない。そこで突然、ペットの犬がペニスを勃起させて迫ってきたら、ドン引きして当然、というわけである。キモメンに女が親しげに近寄ってきたとしても、彼は男だと思われていない。「俺は男だ」と言った瞬間にドン引きされて、逃げられるのだ。それが嫌なら、一生「鶴ちゃんでーす」とお道化を演じ続けるか、いっそ護身を完成させて無関係を通すしかない。

「決して現実の女性に辿り着けないのじゃよ」

この境地こそが、護身完成だ。自慢じゃないが…俺は、護身を完成したよ。俺はもはや、一生涯、現実の女には辿り着けなくなったよ。

そう…この本を出版したことによってな！

漫画『ルサンチマン』にみる、池鶴から寅別への瞬時の切り替わりポイント

漫画『ルサンチマン』には、池鶴関係が寅別関係に移行する瞬間が、残酷なまでのリアルさで描かれている。

■タクローに癒してもらう長尾さん
（花沢健吾『ルサンチマン』第２巻 小学館）

主人公の坂本タクローは**禿・デブ・眼鏡というキモメン三冠王**（元の顔は悪くないのだが）。30歳過ぎて独身、趣味はパソコンの二次元キャラに萌えることという半オタク系。そんなタクローがたまたま、会社の同僚の長尾さん（男まさりで勝気な30歳過ぎ独身女という絵に描いたような負け犬）と親しくなる。長尾さんは失恋の痛手をタクローに癒してもらったりする。

ところがどっこい！　これで「その気」になったタクローが風邪で寝込んでいる長尾さんを看病しようとお見舞いに訪れるや否や（って、別に口説いたりしてないんですよ。護身完成寸前のタクローにそんな蛮勇ありませんよ！　お見舞いに行っただけだよ）、真っ青になってドン引き。

「きっ、気持ち悪いことやめてよ!!」

「あたし、坂本君みたいの生理的にダメなのよ。」

■豹変する長尾さん
（花沢健吾『ルサンチマン』第２巻 小学館）

これこそが、「池鶴関係」が「寅別関係」にすり替わった瞬間なのである。

長尾さんはタクローを犬か猫ぐらいにみており、タクローに慰めてもらっている間も、ペットにでも癒してもらっている程度の気分なのだった。だから、タクローが「俺は男だ！」と色気を見せた瞬間に、キモがって絶対的な拒絶を宣言するのである。

キモメンと女の間には越えられない壁があり、この壁をすり抜けるには、**犬猫と同じレベルまで己を落さなければならない**のだ。

岡田斗司夫先生※は著書『30独身女、どうよ!?』※で、「僕は女が苦手だったんですが、おすぎさん※に女と会話するコツを教えてもらいました。男であることを捨てて、オカマになればいいんですよ。すると女と喋れます」という具合に開眼なされておられましたが、これはつまり、そういうことなのだ。「**わたしは男ではありません**」と全面降伏することで、犬猫やオカマといった「絶対に安全な都合の良い相手」としてやっと壁のあっち側へ入れてもらえるのだ。いや岡田先生はモテ男なのですが。

「池鶴関係」「寅別関係」を理解して女に立ち向かえ

この「今まで仲良くしてくれていた女が、ある瞬間に突然豹変する」という恐怖を経験してきたモテない男の中には、

「オリは彼女がオリに惚れていると思い込んでいたが、オリの妄想だったようだ。ああーっ、オリはよう、オリは被愛妄想に取り付かれている電波なんだよーう！　オリはもう二度とふたたび女の子に迷惑をかけたくないので、この部屋に閉じこもります。この部屋に閉じこもって、サウンド&ビジョンに身をゆだねます。ブルーブルー、エレクトリックブルー。※女と会話したら負けかなと思っている（35歳・ニート）」

と、**あまりにも大げさに反省しすぎて**、自分を責めるあまり引きこもってしまうピュアな人も

※岡田斗司夫　オタク評論家。元ガイナックス社長。NHKの『BSマンガ夜話』『BSアニメ夜話』レギュラー。主な著書に『オタク学入門』『ぼくたちの洗脳社会』『フロン』など。

※『30独身女、どうよ!?』　岡田斗司夫著。現代書林。『負け犬の遠吠え』に先駆けて出版された予言の書。

※おすぎ　映画評論家。杉浦孝明。双子の兄がいる。

※サウンド&ビジョンに身をゆだねます。ブルーブルー、エレクトリックブルー　デビッド・ボウイの引きこもりアルバム『ロウ』に収録されている引きこもりナンバー『Sound and Vision』の歌詞が元ネタ。

多いと思う。というか今の叫びは俺自身の心の悲鳴なわけだが。
そう、俺はずっと、この「ドン引きの瞬間」、「突然目の前に見えない壁が現れる瞬間」について悩み苦しみ、
「自分は被愛妄想という病気を持っているのだ、女とまともに関係できないのだ、関わった瞬間にストーカーになってしまうのだ。俺は…女を傷つけることしかできない、最低の男なんだ！」
と思い込んで女から逃げ回る人生を選んでしまい、**ドツボにはまった**。
しかし、関係の構造が見えてしまえば、何のことはない。自分は別に間違っていなかった、ということがよく分かった。悪いのは、大の男を犬猫と同等以下の存在として扱って平然としている女のほうなのだ。いざこちらが「俺は男だ！」と言い出したからといってドン引きして逃げ出す女こそが、人の心を平然と踏みにじれる悪党なのだ、と理解したのだ。
だからモテない男のみんな、女に怯えることはない。恐ろしい「ドン引き」の瞬間がやってきたら、
「ああ、この女も俺を犬か猫程度にしかみてなかったんだな」
と落胆して、こちらから立ち去れば良いのだ。いや、そもそも最初から「鶴ちゃんでーす！」とお道化ダンスを踊るのをやめればいいのだ。
モテなくてもキモくても構うもんか。

「俺は男だ！」

と全身全霊で主張し続ければいいのだ。そうすれば、勝手にこっちを犬猫としか思わないような女のほうから逃げ散ってくれる。池鶴関係のような、女にだけ一方的に都合のいい主従関係など、結ばなくても済むようになるのだ。

まあその結果、俺のように「無関係」だけが残るのであれば、引きこもっていても同じことなのだが……。

ひきこもっていても
いいぢゃないか
キモメンだもの　　とをる

第2章

★合言葉は「萌え」

オタクの「脳内恋愛」宣言

1——萌え系オタクの登場

オタクの変遷～SFから「萌え」へ

第1章で概観したように、恋愛資本主義が肥大したことで、ごく一部の「恋愛強者」以外の人間はどんどん不幸に追いやられてしまった。しかし、恋愛資本主義にあらがい、人間が幸福を求めるための戦いがすでに始まっている！

そう、**恋愛資本主義へのカウンターこそが「オタク」文化**なのだ！　な、なんだってー？

そのことを説明する前に、まずはオタクの歴史を振り返っておこう。

オタクとは元々、何らかのマイナーなサブカルチャー※に関して豊富な知識を所有する人間を指していた。つまり平たく言えばマニアのことなのだが、恋愛資本主義市場が巨大に成長しつつあった八〇年代に「オタク」（本来は「おたく」と書くのが正しいとされるが、最近はあまり厳密に区別されない）という概念が発明された。

オタクというキーワードがメディアに露出したのは、『ＳＰＡ！』などでお馴染みのコラムニス

※サブカルチャー
社会一般に広まっている支配な文化に対して、特定の人々が作り上げている独特の文化を指す。若者文化・大衆文化など。たいてい一般人からはバカにされる。サブカルと略すことが多い。

ト・中森明夫※が、雑誌『漫画ブリッコ』※で一九八三年に連載を開始した「おたくの研究」が最初とされる。この時点では、「オタク」は一部の濃ゆい二次元マニアに対する一種の差別語だった。その当時、インドア系の男…つまり俺みたいな男は「根暗」と呼ばれて侮蔑の対象とされていたが、これを押し進めたキーワードが「オタク」であったのだ。

今でこそオタクといえば漫画・アニメ・ゲームのマニアというイメージが定着しているが、八〇年代当時には、実はオタク内部でも世代間闘争があった。七〇年代までオタク（マニア）の主流を占めていたのは、SFマニアだった。ところが、八〇年代初頭にロボットアニメ『機動戦士ガンダム』※が大ブレイクすると、アニメを一ランク下のジャンルと見下していたのだろうか、旧世代のSFマニアが「『ガンダム』はSFではない！」とガンダムバッシングを開始し、アニメファンとの内ゲバ…世代間闘争を開始したのだ。

えー、**オタク以外の人には実にどうでもいい話が続いて恐縮です**。一応「萌え」の誕生を歴史的に振り返るという大切なお話なので、もうちょっとだけ続くぞい。

ちなみに、『機動戦士ガンダム』の大ヒット以後も盛り上がり続けたアニメの台頭に危機感を強めたSF陣営は、超大作SF映画『さよならジュピター』（一九八四年）を製作したが、**彼らはこの映画によってSFの黄金期に自らさよならしてしまった**のだった……。この映画がどんな内容だったかと言うと、ヒッピーのオッサンがイルカの歌を歌いながら環境保護団体（というか宗教

※中森明夫
編集者・作家。九〇年代に『SPA!』で「中森文化新聞」を連載していた。

※『漫画ブリッコ』
八〇年代前半のサブカル界を席巻した美少女マンガ雑誌。白夜書房。大塚英志が編集者として参加。「おたく」という言葉を商業誌に登場させたのみならず、「おたく＝ロリコン」というイメージがここからスタートした。

※『機動戦士ガンダム』
日本サンライズのアニメ。テレビ放映時には不人気で打ち切られたが八〇年代に映画化されて大ヒットし、ガンプラブームを巻き起こした。その後、途絶えることなく続編が製作され続け、現在に至る。

団体）を指揮し、宇宙ステーションに押しかけて三浦友和相手にプラカードを掲げて「木星を守れ！」と抗議のデモを……、しまいにはテロを決行…とかそんな素敵な話だったような気がするのだが、何度観てもストーリーがよく分からない。

こんな状況下で、岡田斗司夫先生が「オタクのオタクによるオタクのための会社」株式会社ガイナックス※を設立した。このアマチュアオタク集団ガイナックスがハイクオリティな劇場アニメ『王立宇宙軍　オネアミスの翼』※（一九八七年）を製作したことによって、アニメはオタク文化の頂点へと駆け上った。『ガンダム』以来長々と対立してきたSFとアニメの立場は完全に逆転し、以後、「オタクといえばアニメ」という時代が到来したのである。

その後、岡田斗司夫先生はガイナックスを離脱したのだが、九〇年代にガイナックスの手によるテレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』※がブレイクしたことにより、アニメを中心としたオタク市場は一躍巨大産業へと成長した。アニメを中心に、フィギュアやDVD、コミック、ノベルズ、ゲームといった複数のメディアをトータルで売りさばく「**メディアミックス**」**戦略**も確立し、『電撃大王』※『少年エース』※などのオタク向け漫画雑誌も多数創刊された。

さて、『ガンダム』時代には、アニメといえばメカ＝「ガンプラ」（『ガンダム』のプラモデル）が主流であり、キャラ萌えの流れはあくまでも傍流だった。ところが、八二年にオンエアされたテレビアニメ『超時空要塞マクロス』※が、「アニメ・イコール・キャラ萌え」という新しい潮流を

※株式会社ガイナックス
アニメ・ゲーム製作会社。元々は『王立宇宙軍　オネアミスの翼』を製作するためだけに設立されたが、そのとき背負った借金を返すために存続することとなった。

※『王立宇宙軍　オネアミスの翼』
ガイナックスが手がけた長編劇場アニメ。企画は岡田斗司夫・渡辺繁、監督・原案・脚本を山賀博之が手がけた。音楽は坂本龍一。主人公の声はなぜか森本レオ。オタク世代に絶大な影響を与えたが興行的には振るわなかった。

※『新世紀エヴァンゲリオン』
ガイナックスの手がけたSFロボットアニメ。一九九五年に放送開始するや否や、爆発的なブームとなった。監督は庵野秀明。

※『電撃大王』
メディアワークスが発行する月刊漫画雑誌。アニメやゲームとのメディアミックスが得意。正式には『月刊コミック電撃大王』。

生み出す革命的な転換点となった。

この『マクロス』は一応『ガンダム』系列のＳＦロボットアニメなのだが、人類と宇宙人の戦争というメインストーリーそっちのけで、主人公と二人のヒロインによる泥沼のようなラブストーリーがひたすら描かれる。しかも、メインヒロインのミンメイは大人気のアイドルタレント！　しまいには地球統合軍が**「宇宙人の精神を惑わせよう」**と、このアイドル・ミンメイに歌を歌わせる。宇宙空間の戦場に、**「きゅーんきゅーん、きゅーんきゅーん、私の彼はーパイロットー」**とかそんな萌えな歌声がこだまするのだ。

で、その萌えな歌声を聴かされた宇宙人の兵隊さんたちは、

「で、**デカルチャーーーーッ！**」

「胸が苦しいよう！」

「もう戦争なんかイヤになった！」

と戦意喪失。

一人の萌えアイドルが、地球を救ったのだ！

あまりにも時代を先走りすぎた『マクロス』は『ガンダム』ほどにはメジャーにならなかったが、後世のオタクに絶大な影響を与えたことは間違いない。ミンメイの歌を聴かされたゼントラーディ軍（宇宙人）が「デカルチャー」と叫んだ瞬間、カルチャー…**ＳＦは解体されてしまった**

※「少年エース」
角川書店の月刊漫画雑誌。『電撃大王』と読者層はほぼ同じ。『新世紀エヴァンゲリオン』漫画版の連載が10年続いている。

※『超時空要塞マクロス』
一九八二〜一九八三年にかけてオンエアされたＳＦロボットアニメ。映画版や続編も多数製作。歌と三角関係がキーワード。

のである。ちなみにゼントラーディ軍のオッサンたちは、血眼になってミンメイのフィギュアを集めていました。魁だよ…「**萌え**」**の魁一番乗りは、なんと、宇宙人のオッサンだったん**だよ！

そして、決定版ともいうべき『新世紀エヴァンゲリオン』はさらにキャラ萌え要素を押し進めた上にSF的なギミックや特撮の魅力も満載、満漢全席の究極のオタクアニメともいえる作品だったが、最終的にはエヴァンゲリオンというロボット（実はロボットじゃないけど）はどうでもよくなってしまい、キャラ萌え（アニメの登場人物に「萌える」）がオタク系アニメファンのメインストリームになったのだ。

当時普及しつつあったインターネットでは、『エヴァ』のキャラクターである綾波レイ、惣流・アスカ・ラングレーに萌え狂う「キャラ萌えサイト」が大増殖。本編そっちのけで「アスカ様の下僕になりたい！」とファンが勝手に盛り上がり続けたのである。特に、「日刊アスカ」※というアスカファンのサイトが絶大な電波力を誇り、『エヴァ』と「萌え」の橋渡し的な役割を担っていた。って、**俺が管理してたサイト**なんだけどね。オレオレ。

当時は、少女マンガのヒロインに勝手に俺の名前が使われるぐらい、ごく一部のエヴァマニアの間だけで有名だったYO！　何もいいことなかったけどな！　いまだに、初対面の人に「『フルーツバスケット』※のヒロインの名前を名乗っている電波さんですか？」って白い目で見られて大迷惑だYO！　あれ、**作者が日刊アスカの読者で、勝手に俺の名前を使ってるだけだから！**と、何度言っても**誰にも信じてもらえないいんだ**YO！

※「日刊アスカ」
本田のWebサイト「しろはた」の一コーナー。『新世紀エヴァンゲリオン』のキャラクター、惣流・アスカ・ラングレーが運営している（という設定）のファンサイトで、一九九六年から一九九八年頃までインターネットで更新していた。滝本竜彦きゅんも読者だった。

※『フルーツバスケット』
高屋奈月著。白泉社の『花とゆめ』で連載されている。アニメにもなった。ヒロインの女子高生の名前がなぜか本田透。俺の「しろはた」のほうが先だったのに誰も信じてくれません。

ちなみに『エヴァ』本編は、風呂敷を畳めなくなって途中で崩壊してしまいました。崩壊していなければ、『ガンダム』に取って代わっていたはずなのだが……。

「萌え」という言葉が一般化するのはさらに21世紀を待たねばならないのだが、『エヴァ』はすでに「キャラ萌えアニメ」だったわけだ。というか、ファンが勝手に萌え踊っていたのだ（キャラ萌えの源流は「ラブコメ」という名前で八〇年代にアニメ化された『うる星やつら』あたりにあるが、キャラクターを中心とした多角的なメディアミックス型のビジネスモデルが本格的に立ち上がったのは『エヴァ』からだろう）。

このエヴァブームと前後して、コンシューマーゲーム『ときめきメモリアル』※や、PCゲーム『同級生2』※といった「恋愛ゲーム」が登場することにより、キャラ萌えは完全に一般化（オタク界の中で、だけど）したのである。『エヴァ』においてはストーリーの隅っこにちらっと見え隠れした程度だった「恋愛」というテーマが、これらのゲームでは思う存分全面展開され、オタクの萌え心をスパークさせたのだ。何しろロボットもSFも戦争も宇宙もなく、ただひたすら学園世界で恋愛だけが展開されるのだから、萌えに目覚めつつあったオタクたちは狂喜乱舞した。ああ、『同級生2』の鳴沢唯たんのポスターをゲットするべく、どれだけガチャポン※を回したことか。

つまり、簡単にまとめると、**オタク世界は七〇年代から九〇年代にかけて、「SF→ロボットアニメ→キャラ萌え」というふうに進化発展していった**のだ。以上、「萌え」が生まれるまでの歴史、終わり。

※『ときめきメモリアル』
一九九四年にコナミから発売された美少女ゲーム。『ときメモ』。PCゲーム界で流行のきざしをみせつつあった「キャラ萌え」「バーチャル恋愛」などの要素をコンシューマーの世界に持ち込み、一世を風靡した。ヒロインの藤崎詩織はCDデビューも果たした。続編も作られている。実写映画版もあるが、黒歴史となっている。

※『同級生2』
一九九五年にエルフが発売したPC用美少女ゲーム。『ときメモ』と人気を二分。

※ガチャポン
お金を入れてレバーをまわすとアイテム入りのカプセルが出てくる自動販売機。関西では「ガチャガチャ」。

社会変革活動とオタクの関係性

ところで、オタク世界が「SF→ロボットアニメ→キャラ萌え」へと変質していった背景には、どのような原因があるのだろうか？　あ、いや、「そんなことどうでもいいYO！」って言わないでくださいよう。

これは俺の自説なのだが、実はオタク界の変遷は、**日本社会そのものの変遷と密接にリンクしている**。な、なんだってー？

一見、世間と隔絶しているかに見えるオタク界だが、実は世相を如実に反映しているのだ。

六〇年代までのサブカルチャー界は「**共産主義**（なんちゃって共産主義も含む）による集団的な**社会革命**を実現して、**資本主義体制を打破**しよう」というものだった。つまり、サブカルチャーとは、元々、現実社会（メインカルチャー）に対抗するための武器だったのだ。従ってかつてのサブカルチャーは「カウンターカルチャー（対抗文化）」とも呼ばれていた。五〇年代から六〇年代にかけて湧き起こった劇画ブームは、従来子供のためのお話だと考えられていた漫画に「現実」を持ち込むことにより、漫画をサブカルチャーというポジションに持ち上げた。

白土三平※の『忍者武芸帳』※は忍者という生身の人間が体術を駆使して現実社会の権力者と戦い民衆を解放しようとする階級闘争の物語だったし、『カムイ伝』※に至っては江戸幕府に逆らって共産主義的ユートピアを作ろうとする農民集団の姿が描かれる。

※白土三平
漫画家。『忍者武芸帳』『カムイ伝』『サスケ』『ワタリ』など忍者漫画が多い。『カムイ伝』は三部作の予定だったが、第二部の途中で中断されたままになっている。

※『忍者武芸帳』
正式には『忍者武芸帳　影丸伝』。カムイ伝に先駆け、五〇年代から六〇年代初頭にかけて出版された。戦国末期における忍者や剣豪の活躍を描くが、マルクス主義の影響が濃い『カムイ伝』よりも荒々しいダイナミズムに溢れる『忍者武芸帳』を白土の代表作にあげるファンも多い。

※『カムイ伝』
第一部は青林堂の『ガロ』で一九六四年～一九七一年にかけて連載された。第二部は小学館の『ビッグコミック』で一九八八年から連載されたが、二〇〇〇年に中断。第一部と第二部をつなぐ時代を描いた『カムイ外伝』もある。大体において『カムイ伝』と言うと日置藩における農民一揆を主題として描く第一部のみを指すことが多い。

だが、七〇年代になると、学生運動は完全に敗北し、サブカルチャーはメインカルチャーに対抗できる政治的パワーを喪失した。『カムイ伝』もまた、農民一揆の指導者・正助が農民たちに虐殺されて一揆が頓挫するという悲劇的な結末を迎え、白土三平は『カムイ伝』を「第一部・完」という形で休止せざるを得なくなる。反戦を掲げていたフォークソングの世界も様変わりした。井上陽水※は『傘がない』と歌った。**社会問題よりも、傘がないということのほうが問題だ、**と言い張ったのだ。

こうして、集団による社会変革を目指したサブカルチャーは解体されてしまった。七〇年代のオタク（マニア）がSFに走ったのも、実はあらがいがたい「現実」からの一種の逃避だったのではないだろうか。

この頃、忍者漫画は急激に廃れていき、代わって登場したのがSF漫画…とりわけ超能力漫画だった。忍者の現実的な体術ではしょせん権力にあらがいようもないが、超能力なら…ということだろう（大友克洋※が漫画・映画を手がけた超能力SF『AKIRA』は、この七〇年代超能力系SFの集大成となった。この作品では、超能力を持った少年たちが廃墟と化した東京に新たな独立国家を建設し、日本軍やアメリカ軍と戦うのだ！）。

このあたりの話は、竹熊健太郎&相原コージ※によるメタ漫画作品『サルでも描けるマンガ教室』※で詳しく説明されている。竹熊氏によれば、忍者漫画は超人的な努力と精神力と体力を要求される忍術しか使えないが、超能力漫画では、ある日突然主人公が悪い奴に襲われ、「イヤーッ！」と悲鳴をあげたとたんに超能力が覚醒して悪人が「ボーン」と吹き飛ぶ、という努力不要の展開が

※井上陽水
ミュージシャン。『氷の世界』など名曲多数。サングラスが目印。

※大友克洋
漫画家・アニメ監督。八〇年代に『AKIRA』という戦後日本漫画の集大成ともいうべき作品を手がけた。その他の作品としては『ハイウェイスター』『気分はもう戦争』『童夢』など。

※相原コージ
漫画家。作品に『コージ苑』『勝手にシロクマ』『サルでも描ける漫画教室』『ムジナ』など。

※『サルでも描けるマンガ教室』
竹熊健太郎と相原コージが手がけた漫画。俺が今まで読んだ漫画の中で、一番笑えた作品。横隔膜が破れそうになった。しかも笑えるだけでなく、とてつもなく深い！　当時のオタクに与えた影響は甚大。

お決まりになっているという。これを竹熊氏は「**イヤボーンの法則**」と名づけているのだが、つまり、身体を鍛えたりしなくても超能力は使えるし、しかも忍術よりずっと強力なのだ。
多少厳しく言えば、SFブームとは、目の前の現実からの逃避であり、「超能力」という妄想によって問題を解決できると空想することであり、問題の解決を現代ではなく「未来」へと先延ばしにすることであった。それでもまだ、**SFにおいては、社会変革という理想は捨て去られていなかった。**

だが、八〇年代以後、バブルとともにオタク界も大量消費の時代に突入する。その先鞭が『ガンダム』だった。『ガンダム』史上もっとも有名なモビルスーツは「**量産型**」ザクだ。『ガンダム』は、ロボットアニメに「量産」という概念を持ち込んだのだ。また『ガンダム』は主人公アムロにロボット＝「モビルスーツ」というSF兵器と、「ニュータイプ」という超能力を授け、最強の戦士という属性を与えたが、アムロは『カムイ伝』の忍者カムイ同様、単なる戦場の駒の一つでしかなく、ただ戦場で人を殺すこと以外の何事をも成しえない。つまり『ガンダム』という作品は、空想的な社会変革というSFマニアの夢を否定して打ち砕いてしまったのだ。それ故、『ガンダム』はピュアなSFファンから徹底的に罵倒されることとなったのだろう。そして、『ガンダム』はモビルスーツのプラモデルの大量販売・大量消費というオタクの産業化に先鞭をつけた。
さらにオタクの最終形態である「萌え」に至ると、ロボットや超能力というSF的な属性によって主人公の能力を拡張し、社会や現実と対立して闘争を行うというサブカルチャーのお約束的

前提そのものが完全に放棄された。『新世紀エヴァンゲリオン』の主人公シンジは、世界を自由にできるエヴァンゲリオン初号機という超兵器を手に入れながら、最後まで戦おうとせずに逃げ回る。シンジにとっては世界の運命などどうでもよく、ただ「女の子に愛されたい」という恋愛願望だけが重要だったのだ。『エヴァ』は従来のSFやロボットアニメが妄想してきた「対社会」という関係性そのものを放棄し、「対異性」という一対一の関係、**つまり恋愛関係という問題こそがオタクにとっては真に重要なのだ**、という座標を示した。

かくして、『エヴァ』に呼応するかのように『ときめきメモリアル』『同級生2』そして『ＴｏＨｅａｒｔ』※という一連の恋愛ゲームが登場し、「オタク＝萌え」という時代が到来することになったのだ。

こうして書くと「単に社会から逃げて脳内世界に引きこもっただけじゃないか」と言われそうだが、後述するように、この戦略はこれはこれで正しいのだ。いや、戦略などという計画的なものではない。オタクは本能的に、萌えを求めざるを得なかったのである。かつて忍者劇画やSFの敵は単なる「資本主義」であったが、**八〇年代以後、オタクの敵は「恋愛資本主義」になった**からである。すなわち、恋愛そのものが人間を消費する歯車に落とし込むための装置になってしまったことに、オタクは本能的に嫌悪感を抱いているのだ。

※『ＴｏＨｅａｒｔ』Ｌｅａｆ／アクアプラスの美少女ゲーム。最近、続編がプレステ2に登場して話題となった。

オタクの経済構造「ほんだシステム」とは

いよいよ、恋愛資本主義とオタクの関係について語るときが来たーっ！　長州ーーーっ！※

※ときが来たーっ！　長州ーーっ！　プロレスラー橋本慎也の名台詞。しかし、いまだに意味不明。

第1章で書いたように、本来、恋愛というものはキリスト教に代わって人間の自我を安定させるためのものだった。分かりやすく言えば、人々を幸福にするために恋愛というものが発明されたはずだ。しかしながら、資本主義のシステムに恋愛が商品として取り込まれた結果、恋愛市場は二極分化され、独身男女は恋愛できる人間と恋愛できない人間の二種類に分別されることになった。そして、恋愛できない人間は恋愛資本主義市場においては役に立たない無価値な存在とされ、排除されるようになった……。

恋愛資本主義は、すでに図説したとおり、恋愛そのものを商品化することにより、恋愛行動によって大量の消費を行わせるシステムである。そして、そこでは「モテない男↓女↓イケメン」というふうに金が流れていく。この「あかほりシステム」は、多くの女性ファッション誌や男性ファッション誌、テレビのトレンディ・ドラマ、スポットCMなどの多くのメディアによって成立しているが、俺は虎の尾を踏む覚悟で、これをあえてマスメディア&大手広告代理店（電通※）の支配するシステムだと宣言してしまおう。人々は八〇年代からこのかた、このシステムに踊らされ続けてきた。

※電通
日本一巨大な広告代理店。メディア界を支配している。

ところがオタクは、この恋愛資本主義とまったく異なる経済構造を作り上げた。

そう、恋愛資本主義が「あかほりシステム」とすれば、オタク市場は「**ほんだシステム**」なのである。ほんだシステムとは、何か？　左頁の図を見ていただきたい。

図のように、オタクは金をほんだシステムの内部で永久循環させることができる。永久に湧い

■あかほりシステムと、ほんだシステム
あかほりシステムはピラミッド型の搾取構造だが、ほんだシステムは自己発電型の永久循環システムだ！

てくる動力の源となっているのは、「萌え」心だ。オタクは、**萌え心によって自家発電する**能力を持っている。

萌えキャラでオナニーできるという意味も含めて「自家発電」だ！

もちろんそれだけではなく、創作衝動のような創造力＝妄想力を自家発電によって発生させ、同人誌やＷｅｂサイトといったオタクコンテンツを生産することができるのだ。かくして、オタク世界は、「作り手」と「受け手」、「生産者」と「消費者」という資本主義的な階層が固まることなく、ユルく金を永久循環させ続けることが可能なのだ。

「そうは言うけど、俺、エロゲーにずいぶん金突っ込んでるＹＯ！」と言われそうだが、エロゲーで稼いだ側もオタクなので、その金

でエロゲーやアニメのＤＶＤをまた買い漁るわけだ！　こうして、オタク市場は自己完結してぐるぐると回り続ける。

この「ほんだシステム」が本格稼動し始めたのは、現在30代のオタク世代があれこれ動きはじめた頃からだ。つまり同人誌市場が巨大化するとともに、オタクは「ほんだシステム」を形成して発展させていったのだと考えればよい。同人誌市場では資本家と労働者、イケメンとモテない男という搾取の構造はなく、ほぼ全ての参加者が自らの稼いだ金をまた別のオタクグッズを購入する資金として消費する。これをグルグルと繰り返すことによって、「ほぼ搾取なき、平等に近い永久循環経済」が成立するのだ。

もちろんなかには富を消費しきれずに蓄積するオタクもいるわけだが、「あかほりシステム」に比べればその量は微々たるものだ。また、オタク界を良くしようという善意がない連中が単に金儲けのために外側から参入してきた場合でも、作品にクオリティがあればＯＫだ。たとえ誰が作ったものであろうが関係なく、作品そのものが良作であれば、その作品をエサにして同人作品などがタケノコのように生まれ、システムが回転し続けるわけだ。この構造のフレキシブルさ、ユルさ、何でもかんでも飲み込んでしまうグレイシー柔術[※]の寝技のごときアリ地獄ぶりこそがオタク界の強みなのである。

そして、このほんだシステムがもう一つ特徴的な点は、

「異性不在」

※グレイシー柔術
ブラジルのグレイシー一族が、前田光世から伝授された柔術を数十年かけて進化発展させてきたブラジリアン柔術の流派。九〇年代に突如アメリカに上陸して総合格闘技ブームを巻き起こした。基本は寝技で、自分から寝転がる展開が多い。中野でも習える。

という点である。ここ重要ですからー！　赤丸でチェックしてくださいＹＯ！
ほんだシステム…オタク界では、男は男だけで経済を循環させるし、女は女だけで循環し続ける。そう、恋愛資本主義に真っ向から反する「恋愛関係の不在」というシステムなのだ。もし、恋愛関係が成立したとしても、その恋愛はオタク市場そのものとは無関係ということだ。もちろん、恋愛資本主義のフォーマットに縛られることもない。つまり恋愛は脇役であり、主役はオタク自身なのだ。恋愛の相手のために消費するのではなく、自分自身のために消費する。それがオタク市場なのだ。

恋愛資本主義とオタクの対立

ここまで書けばお分かりのように、オタクはその存在そのものが恋愛資本主義のシステムから逸脱している。なかには、意に反してオタクにならざるを得なかった者もあれば、自らの意思でオタクになった者もあるだろう。だが、そのような経歴のいかんに関わらず、「オタクである」という時点で、オタクはすべからく電通とマスメディアが支配する恋愛資本主義世界から「異分子」扱いされる運命にあるわけだ。
そのオタク市場は**野村総研によれば二千九百億円もの巨大市場に成長**しており、海外市場すら形成しつつある。つまり、大量の外貨を稼げる有望産業になってきた。そして、**今後もオタク市場は巨大化する。**
なぜなら、恋愛資本主義は決して人間を幸せにしない、ということが、すでに明らかになりつ

つあるからだ。恋愛と金が結びついた時点で、すべての女は売春婦にされてしまう。すべての男はホストにされてしまうか、あるいは客にされてしまう。モテない男の場合は恋愛という名前の風俗に通わされ続けるのであり、女はイケメンという名前のホストに貢ぎ続けなければならなくなる。誰も彼もが、金による恋愛関係・夫婦関係を結ばなければならないわけだ。これが本来の意味での「恋愛」とは程遠い姿であることは言うまでもないだろう。恋愛とセックスと大量消費が結び付けられた恋愛資本主義社会では、**真実の愛は生まれない**のだ！

オタク市場の成長は、その恋愛資本主義とは異なる世界を現実に築き上げた。引きこもっているだけと思われていたオタクたちは、いつの間にか自分たちの王国を建設していたのだ。電通も近年になってジェネオン※という会社を設立し、萌えアニメを量産してオタク市場を制覇しようと躍起になっているが、時すでに遅し。いや、根本的にシステムが異なるのだから、恋愛資本主義の方法論は通用しない。オタク界はひたすら「ユルい」のだ。「誰が作っているか」ではなく「作品の質はどうか」という観点のみでオタクコンテンツは評価される。だからオタク市場においては、電通は数ある代理店の一つに過ぎず、しかも**オタク市場で力を持つものは作品およびキャラクターであってメディアや代理店ではない**のだ。

このところ、しつこく繰り返されるテレビメディアによるオタクバッシングは、そんな電通の焦りから来ている、と俺は勝手に断言するね。テレビメディアからは、オタクのイメージを落してオタク市場の成長をストップさせようという悪意があからさまに見受けられるが、結局そのテレビもアニメに頼らなければならなくなるのだ。バブルがはじけた今、テレビ局にホイホイと大

※ジェネオン
ジェネオン エンタテインメント。元はパイオニアＬＤＣ。様々なジャンルのＣＤ、ＤＶＤを販売している。

金を出すスポンサーなど、そうはいないのだから。
また、女が頭ごなしにオタクを「気持ち悪い」と忌み嫌う理由も、もうお分かりだろう。そう、**オタク界は、女を必要としていない**のだ（女は女で「腐女子」※としてオタク男とは別の市場を形成しているのだが、ここでいう女とは恋愛資本主義側の女を指す）。
恋愛資本主義社会では、女はモテない男にちやほやされる存在だ。女自体が「商品」なのだから。いかにモテない男から金品を収奪し、自分のために大量の消費をさせるかが、女の「商品価値」をはかるバロメーターなのだ。恋愛資本主義においては女は（若くて綺麗なうちは）「強者」かつ「勝者」であり続けられるのだ。だが、オタク界は、男だけで成立しており、女は脳内の萌えキャラで代替されている。オタクにとっては、三次元の面倒臭い女よりも、二次元キャラのほうが「萌える」のだ。故に、たいていのオタクは三次元の女に対し、恋愛資本主義のお約束となっている奉仕活動を行わないし、彼女たちの機嫌も取らない。男だけ、自分だけで自足している。
マスメディアによって、恋愛資本主義ではオタクは最底辺の存在ということにされている。だから、女に媚びへつらって当然だと、女は考える。しかし、レベルの高いオタクにとっては、

二次元＞＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞＞三次元

なので、三次元女にへつらわない。故に激怒される。
さらに言えば、オタクが現実の女を排除して脳内のキャラと恋愛しているという事実は、オタ

※腐女子
漫画やアニメなどの男性キャラクター同士の同性愛関係をネタに同人誌を作ったりして盛り上がるオタク女。オタク男世界が脳内女性で盛り上がり現実の女を必要としていないのと同様、腐女子世界も現実の男を必要としていない点では共通している。

ク界が恋愛資本主義に取って代わった場合、**現実の女はほとんど無価値となり、逆に「二次元キャラの代替物」という立場に陥る**ことを意味する。実際、すでに「コスプレ風俗※」や「メイド喫茶」など、「二次元の代替としての三次元」を売りにした産業…「二・五次元産業」も生まれてきている。これは恋愛資本主義に首まで漬かっている女にとっては不気味で、首肯しがたい現実といえるだろう。

※コスプレ風俗
女の子がアニメやゲームのキャラクターのコスチュームを着てくれるイメクラ。池袋の『聖コスプレ学園』が有名。以前は歌舞伎町にも別系統の店があったが、オタクが歌舞伎町に寄り付かないので潰れたらしい。最近は生身の女の子のかわりにドールがお相手してくれるドール風俗に押されているかもしれない。

オタクを嫌う負け犬たち

本書で何度も槍玉にあげる酒井順子の大ヒットエッセイ『負け犬の遠吠え』によると、負け犬女とは「30歳を過ぎてキャリアウーマンをやっていてイケているはずなのに、結婚できない女」を指す。つまり、恋愛資本主義の教科書どおりの人生を送ってきたのに、何故か幸せになれなかったよ、と嘆いている女たちである。

彼女たちは結局恋愛資本主義市場において「男に自分をより高く売りつける」という競争に敗れ、歳をとって商品価値を失ってしまった敗北者である。なかには、今は金を稼いでいて、金で男を「飼える」勝ち組の負け犬もいるが、いずれ時間が経てば…40歳を過ぎれば男を維持するためのコストが急騰し、敗北者側にまわる運命にある。ある意味で恋愛資本主義に騙された同情すべき人たちなのだが、酒井順子は自分たちが恋愛資本主義というシステムに搾取された被害者だとは考えない。すべての責任は男にある、と考える。

第1章でも紹介した、次のような文章が飛び出すのだ。

「今、日本で余っているのはつまり、（中略）私みたいな女と、おたく君みたいな男なのだ！」

（酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社）

つまり、酒井順子によると、オタクが二次元キャラとの恋愛にしか興味を持たず、自分のような現実の三十女に興味を持たないのが悪いのだ、という訳。この文章を読んで、俺はあまりのショックに悟りを開いてしまったわけだ。

この女は、なぜオタクが現実の三十女に興味を持たないのか、なぜ二次元を愛するのか、一度でも真剣に考えたことがあるのだろうか。

すでに明らかなように、オタクは本能的に恋愛資本主義社会のシステム（あかほりシステム）に嫌悪感を持っている。あるいは腹の底で信用していない。どうせ搾取されるだけだ、と気づいている。搾取されるぐらいなら、自分のために消費したほうが幸福ではないか、と。なかにはモテない男から出発したオタクではなく、イケメンなのにオタクというケースもある。イケメンオタクの場合、自分に媚を売ってくる現実の女に嫌気がさしてオタク化した場合が多い。

いずれにしても、このような酒井順子の文章を読んで、そこに「真実の愛」の可能性を見出せるオタクはほとんどいないだろう。酒井順子はオタクは相手にしたくないとオタクを切り捨てるが、こっちこそ、こんな**金にまみれたバブルの遺物のようなオバサンは願い下げ**である。

アニメの美少女に「萌え～」としているおたく君は、まかりまちがっても三十女とデート

などしたくないだろうし、三十女としてもおたく君と一緒にイタリア料理屋に行って、生のポルチーニと乾燥ポルチーニの味わいの違いについて話す気には絶対になれない。

（酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社）

ポルチーニが生だろうが乾燥だろうが、お前の人生には何の関係もないだろう。っていうか、ポルチーニって何？　犬の名前？　それがあなたの言う「恋愛」なの？　**それって、女性ファッション雑誌を読んで刷り込まれただけのお仕着せの幻想なんじゃないの？**　もっとはっきり言えば、負け犬女とは「恋愛資本主義」に30年以上洗脳されて騙され続け、消費させられ続けてきたあげく、愛を得ることができず、それでもなお目を覚まさずに騙され続けていく哀れな人たちなのだ。イタリア料理のウンチクを垂れるのが負け犬女との「恋愛」なら、俺は負け犬女とは一生口もききたくないね。恋愛を馬鹿にしているよ。というか、馬鹿だろ。

そもそも、これは対話になっていない。イタリア料理オタクなら「ポルチーニの意義とは何か」を必死で説明するところだが（まあ、オタクには相手が嫌がっていても語ってしまう悪癖もありますが）、負け犬女は、自分で語るわけでもないし、相手に教えるわけでもない。女ターミネーター※のように醒め切った目で男を観察し、「この男は、どれだけイタ飯のウンチクを知っているのだろうか」とチェックを入れ続けるのだ。まるで『減点パパ』※に出てくる嫁のように、男を値踏みし、引き算の査定を続けるのだ。そこには、対話も意思の疎通も実は存在しない。負け犬は、ただ、男を恋愛マニュアルにそって判定しているだけなのだ。愛って、そんなものなんですか？

※女ターミネーター
映画『ターミネーター3』に登場した女性型ターミネーターロボット。シュワちゃんよりも強い。

※『減点パパ』
かつてNHKで放映されていたバラエティ番組『お笑いオンステージ』の人気コーナー。有名人の子供が出てきて、パパの似顔絵に○や×を貼り付けてパパを減点していくという趣向。司会担当は確か三波伸介だった。

ああ、偏差値教育の弊害が、こんなところに!?

オタクは脳内で恋愛という夢を妄想している。しかし、負け犬女は、現実社会で恋愛という妄想を垂れ流しているのだ。どっちがより救われないかは、言うまでもない。オタクは、二次元と三次元を区別している。だが、**彼女たちは、現実と妄想の区別がついていないのだ**。いわば『マトリックス』※の住人が、自分は現実世界を生きている、と思い込まされているのと同じに。

それに対して、オタクは、恋愛資本主義システムの構造がコードの体系として見えてしまっている。見えるが故に、システム内部で洗脳されながら生きることができない。見えてしまうが故に、「どうせ恋愛が幻想なら、自分自身でその幻想を作り上げたほうが楽しい」と結論しているのだ。そこには想像力を駆使した創造の楽しさがある。だが負け犬の人生には、消費しかない。彼女たちは自立しているかのように錯覚させられているが、実は主体性のかけらもないのだ。

資本主義にションベンをかけて罵倒するボンクラ映画『ファイトクラブ』※は、ヤッピー資本主義に組み込まれて北欧家具の収集に有り金をはたいていたアメリカのサラリーマン（エドワード・ノートン）が、「ファイトクラブ」というケンカサークルに加入することで見失っていた自分自身を取り戻すという話だが、「オタク」も「ファイトクラブ」と同様に、システムからのドロップアウトであり、自分自身のための世界を築き上げようとする運動なのだ。

人間は自らのアイデンティティを保証してくれる何らかの幻想なくしては生きられず、宗教を排除すれば恋愛が最重要の幻想として浮かび上がってくることはすでに述べた。恋愛が結局は幻

※『マトリックス』一九九九年、アメリカ映画。監督・脚本をウォシャウスキー兄弟が手がけた。主演はキアヌ・リーブス。続編の『マトリックス　リローデッド』『マトリックス　レボリューションズ』はともに二〇〇三年公開。

※『ファイトクラブ』一九九九年、アメリカ映画。デビッド・フィンチャー監督、ブラッド・ピット主演。『マトリックス』とまったく同じで、ボンクラ主人公が「俺がモテないこの世界は幻想だ！」と言い出してブルース・リーに変身して暴れる話だった。

想なのであれば、システムによるお仕着せの恋愛よりも、自分自身で作り上げる恋愛のほうがより強力だ。オタクは想像力を過度に発達させているので、二次元であろうが三次元であろうが、脳内で起こせる反応は同じなのだ。

さて酒井順子は一見反省しているようで、**結局は自分の失敗の原因を男に押し付け**、こんな分類をしている。

「オスの負け犬」
・あまり生身の女性に興味のない人…オタ夫
・女性に興味はあるけど、責任を負うのは嫌な人…ダレ夫
・女性に興味はあるけど、負け犬には興味のない人…ジョヒ夫
・女性に興味はあるけど、全くモテない人…ブス夫
・女性に興味はあるけど、単にダメな人…ダメ夫

（酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社）

なんという愛のない、残酷な身分差別なのだろうか、この分類は！　倉田真由美もそうだが、この手の三十女は、こうやって「自分にとって無価値な男、媚を売るに値しない男」を勝手に分類して嘲笑する。

オタクは、たいてい、心が純真な優しい男だ。まあ数が多いから中にはそうでないのもいるが、DQNの誇る高い鬼畜率に比べれば、かわいいものだろう。そんな心の純真なオタクである俺は、この愛のかけらもない分類表をみると、あまりの醜さに反吐が出ます。人間は、かくも同じ人間に対して、ここまで残酷になれるものなのでしょうか。

そして、酒井順子にこれだけは言いたいのです。

オタクは負け犬ではない。オタクは、恋愛資本主義という古くてダメになったシステムからいちはやく脱出した、勝ち組なのだ！と。

勝ったのは我々オタクであり、負けたのはあなたたち負け犬女なのです。ちなみに『負け犬の遠吠え』で酒井順子の出した結論は「反省せずにこのまま生きろ！」です。まあ…せいぜいガンバッてください。恋愛資本主義システムから**産業廃棄物**として捨てられるその日まで……。

ところで、酒井順子は「自分の崇拝者をキープしておけ」とも教えてくれます。純粋で心優しいオタクなんて、ちょうどぴったりじゃないですか。そう…**オタクは、負け犬に狙われ始めている。**崇拝者として、『男女七人夏物語』の鶴太郎として、ペットとして……！　酒井順子はオタクを否定するが、これは彼女が高収入を稼いでいて男を金でどうにかできるからで、それすらできない低収入の負け犬は、なんとオタク男を自分のペット＝崇拝者＝鶴太郎にしようとしはじめているのだ！　この「オタク・ペット化計画」については、この章の最後で詳しく説明する。

「萌え」は由緒正しい思想活動である！

というわけで、どうでしょうか。そろそろ、目は覚めましたか？　恋愛資本主義システムのコードの体系が、あなたにも見えるようになったでしょうか？

ウェルカム・トゥ・萌えワールド！

あなたはもう、「こっち側」の住人です！　おめでとう、おめでとう。

「勝手に無理やり目を覚まさせやがって！　こんな秋葉原の荒涼としたオタク街に俺を拉致しやがって！　俺は元の世界でぬくぬくと暮らしていたかったんだよ、ゴルァ！」

と怒り出す人もいるかもしれません。しかし、まあ、ここまで辿り着いたあなたは、きっともともと恋愛資本主義の世の中に納得できていなかったはずですから、心置きなく萌えの戦士として生まれ変わることができるでしょう。

…って、なんだか怪しげな団体のセミナーみたいになってきたな。というか、俺が「です」とか「ます」とか言うと、凄く胡散臭くなるね……。で、そもそも「萌え」とは何か？　という話をはじめると非常に長くなってしまうので、ここでは手短に言い切ってしまいましょう！　あえ

て蛮勇を奮いましょう！

「萌え」とは「脳内恋愛」である、と！

最近は人間とは関係ないものにも萌える人が増えているのだが（モビルスーツのカトキ立ち※とか）、人外萌えも含めて、それらはすべて「脳内恋愛」なのだ。

もともと、デカルトが「我思う故に我あり」と言い放ったことからも分かるように、人間の暮らす世界とは、肉体（現実世界）と心（空想世界）の二種類があると考えられてきた。

※カトキ立ち
意味が分からなくても多分、困りません。

■心身二元論
人間の住む世界は、三次元と二次元からなる

ソクラテス・プラトン以来の伝統として大昔の西洋人哲学者の多くは、現実世界よりも空想世界を、つまり三次元よりも二次元を価値のある世界だと考えていた。いわゆるイデア論※というやつだ。

古代ギリシア哲学からして二次元主義だったのだが、キリスト教ではさらにこれが（ちょっと行きすぎな感じで）極端になり、三次元世界における肉欲は悪徳とされるにいたった。この二次元至上主義が、ロマンティック・ラヴを生み出し、恋愛という概念を発展させていったのだ。

※イデア論
ギリシア哲学者のプラトンは、現象は常に変転するものに過ぎず、現象の背後にこそ永遠不滅の真実であり実在的存在である「イデア界」が存在する、と説いた。イデア論によれば、真実はイデア界にのみ存在し、三次元の現実世界にはイデア界の陰が投影されているに過ぎない。しかも人間は五感でイデア界を認識することはできず、ただ理性によって把握できるとした。イデア論は以後、観念論として発展した。

つまり、元々恋愛は、二次元のものだった！

デカルトだって、「我思う故に我あり」と主張したのは、要は**「精神があるからこそ、二次元世界に生きているからこそ、私は人間なのだ」**ということなのだ。な、なんだってー。

二次元あってこその人間。二次元なくして人間は存在しえず、二次元なくしては人間は動物と同じレベルになってしまう！　だからこそ人間は、物語や絵画・彫刻といった空想の産物を求め、作り続けたのだ。二次元の妄想を小説や絵画、音楽といった形にすることができる人間は、「芸術家」として尊敬されたのだ。妄想する力こそが、人間を人間たらしめ、幸福に導く……！　このような「オタクの主張」は、**かつてはごく常識的な主張に過ぎなかった**のだ。

しかし、資本主義の発展とキリスト教の衰退により、二次元よりも三次元、精神よりも金が重要となったために、しつこいようだが恋愛は三次元の物質欲・金銭欲と結びついて「恋愛資本主義」に組み込まれ、変質していったのだ。

これに対して、オタク界は、根っからの二次元至上主義だ。つまり、オタクはプラトン派の末裔だといえる。よくプラトニック・ラブっていうでしょ。あれって「精神的な愛」って意味だから、**日本語に訳したら「萌え」**だよね。

さて、このオタク界…「萌え」の元祖というか開祖は、言わずと知れた手塚治虫先生だが、先生はすでにディズニーアニメのネズミやアヒルに萌えていたというのだから、つくづく…つくづく達人だぜ！　というのも、二次元とは観念なのだから、人間の女性の形をしたキャラクターに

限らず、動物だろうが植物だろうがメカだろうが自在に萌えられる！ということであり、それをいち早く実行した手塚先生は、**「森羅万象に萌える」**というオタク界に一〇八存在するといわれている萌え属性の全ての流派の開祖でもあったわけだ。

　精神分析学の創始者フロイドは、性欲は最初から性器に結びついているわけではなく、最初は多型倒錯的であり、次第に口唇期・肛門期を経て性器期にいたる、と主張した。性欲は成長するのだ。萌えの開祖である手塚治虫先生もまた、アヒルとかネズミとかショタ※型ロボットとかヒョウタンツギとか、そんなヘンなものに萌える多型倒錯の人だった。しかも、セックスなんか存在しない世界だから、どうぶつが焼かれたり食われたり…と、**幼児的なサディズムの世界が大展開**されたのである。それも、初期手塚先生独特のまるっこい「ぷに絵」※で……。

■ミッチィ
50年代初期手塚作品の傑作『メトロポリス』のヒロイン・ミッチィは、なんと「ふたなり（両性具有）ロボット」。現代のエロゲーですら出てこない属性を、手塚先生は50年前にすでに実現していたのだから恐ろしい。ミッチィは人類を滅ぼすとか言い出して、無残に焼け焦げて死んでしまいます。ひ、酷い……。
（手塚治虫『メトロポリス』講談社）

■しょくぶつ
しょくぶつも手塚先生の萌え対象！　これ、完全に萌えキャラです。「しょくぶつたん」と名前をつけても、まったく違和感ありません。このしょくぶつたんですが、お腹をすかせたオッサンに食べられてしまいます（おい）！
（手塚治虫『ロストワールド』講談社）

※ショタ
二次元作品の少年キャラ、および少年キャラに萌えること。由来は、「ショタコン」＝「正太郎君コンプレックス」。正太郎君とは『鉄人28号』の金田少年のことで、つまりショタの源流は横山光輝先生なのだ。手塚先生はアトムというロボそのものに「萌え」を発見したのに対し、横山先生は「ロボはロボ」「動かしてる少年こそが！」という態度を貫いた。横山先生は以後、『伊賀の影丸』『バビル二世』『マーズ』と美少年戦闘モノを描き続けた。

※ぷに絵
ぷにぷにしてる丸っこい絵で、キャラクターが年齢不詳なくらいに幼く見えるのが特徴。現在の萌え絵市場で人気。

そんな萌えの世界も、五〇年代から六〇年代にかけての梶原一騎・白土三平に代表される劇画勢力の台頭によって、一時はリアリズム一色となる。萌えも性欲と結びついている以上、やはり、成長するものなのだ。牧歌的で幼児的な多型妄想に溢れていた二次元の世界に、三次元の肉体という要素が入り込んできた。特に、梶原先生は浣腸・強姦、白土先生はうんこが大好きという困った人たちで、つまりこれは**「萌え」**が**「肛門期」に発展成長した**と言っていいんだよ！　な、なんだってー？

■浣腸地獄
馬用浣腸器で注入後、ゴム栓をされた女。梶原劇画では、何かというと浣腸・アナル強姦が繰り広げられた
（梶原一騎＆中城健『新カラテ地獄変』第9集 講談社）

■うんこ地獄
牛のうんこを食わせる主人公バッコス。白土劇画では、何かというとスカトロプレイ・アナル拡張が繰り広げられた
（白土三平『バッコス』第3巻 小学館）

この**劇画勢力による執拗なアナルスカトロ攻撃によって手塚先生は一時スランプに陥る**が、フロイドによると、幼児が肛門期に自分の糞尿に対して興味を持つのは、それが自己の身体から出てくる異物だからだそうだ。幼児はこの異物を自らの意思でコントロールすることにサディスティックな悦びを覚えるのだという。

まあどこまで本当か実に眉唾な話だが、そう言われてみれば、梶原一騎の浣腸およびＳＭ拷問への執拗なこだわりは、**それまでは自他の境界がなく、渾然一体としていた萌え世界における自我の芽生え**だったのかもしれない。

その後、手塚先生は、火の鳥のごとく復活を果たした。引退作になるはずだった『ブラック・ジャック』というキモメン医者が主人公のグロ漫画を『少年週刊チャンピオン』（秋田書店）で連載開始した先生は、何を思ったのか畸形嚢腫に詰まったグチャグチャの臓器を可愛い女の子の人形の中に詰め込んで、「ピノコ」という永遠の幼女妻を作り出してしまったのだ！

ドーン！

ピノコは、手塚先生の理想である「**永遠に無垢なる、ようじょ**」という二次元の萌えキャラを、臓器を詰め込まれた人形という三次元の位相に医学の力によって無理やり引き込

■ピノコの製作現場
キモいです。キモすぎます。手塚先生は「究極の萌えとは、生きたフィギュアなり！」と悟りを開いたのだ
（手塚治虫『ブラック・ジャック』第2巻 秋田書店）

んだ結果、誕生した。つまり、二次元と三次元の合体作なのだ。

ピノコを作った（というか妄想した）ことによって、手塚先生は自分の中の二次元と三次元の対立、漫画と劇画の対立を収束させ、二次元と三次元を併せ呑む巨大な萌え漫画家に成長したのだ！　かくして手塚先生はスランプから解放され、「漫画の神様」という栄光を不朽のものとしたのだ。**苦悩を越えて、萌えへ至れ！**

手塚先生による萌え世界への劇画要素の吸収以後、萌えの本質は、大きく変わってはいない。変わった点といえば、九〇年代以後、萌えキャラとの「恋愛」が堂々と正直に表現されるようになったことぐらいだろう。

「なんとなく胸がきゅーんとするぞー」

というほのぼのとした萌えから、セックスつきの恋愛へと、**萌えオタクは大人の脳内階段を登っていった**のである。

もちろん、現在の萌えキャラには、劇画的なリアルキャラだけでなく、どうぶつやショタ、ロボット、宇宙人といった、初期手塚マンガ直系ともいえる人間外の萌えキャラも大量に含まれている。**手塚系と梶原系、いずれの系譜のキャラも、絶滅せずに残って進化していた**わけだ。

ゲーム『ＴｏＨｅａｒｔ』に登場する女の子ロボット・マルチは、ロボットでありながら人間と同じ心を持っている。その心があるが故に、人間との恋愛感情に目覚めて泣き、苦しむことになるのだが、この展開は言うまでもなく中期手塚マンガの代表作『鉄腕アトム』※におけるロボッ

※『鉄腕アトム』
手塚治虫の前期の代表作。日本初の連続テレビアニメも製作された。ロボ萌えの元祖。最終回ではアトムが太陽に特攻して自爆。

ト・アトムの自意識の苦悩を源流としている。ただ、違う点は、アトムは恋愛しなかったのに対して、マルチは人間の男と恋愛するのだ。つまり、マルチは、アトム（ロボ萌え）という手塚先生が生み出した原型に、「女の子」「恋愛」という最新の萌え要素を組み合わせた「平成版アトム」といえる。

マルチだけでなく、**秋葉原を見渡してみると、ありとあらゆるキャラクターに、手塚先生のキャラクターの痕跡がみられる。**自分のことを「ボク」と呼ぶボーイッシュな少女…「ボク少女」だって、『三つ目が通る』※の和登さんが原型だよ！　っていうか、もっと昔に『リボンの騎士』※ってのがあったね。あれはボク少女どころか**ふたなり少女**だったし……。

とにかく、すげえや、手塚先生ッ！　俺のようなオタクは、だから、手塚先生に足を向けて寝られないのだ。手塚先生がいなければ、日本のオタク界は存在すらしなかったのかもしれない。今頃、アメリカから輸入されたアニメを観ながら「チャーリー・ブラウン、※萌え～！」とか言ってたかもしれないのだ。まあ、それはそれでアリですが。

ちなみに手塚先生の遺作は『ネオ・ファウスト』。年老いた教授が悪魔に魂を売って若返り、三次元の女の子と恋愛してみるが挫折し、金と科学力にあかせて理想の萌えキャラを自らの手で作り出そうとするという、「そのまんま**手塚先生の人生**やんけ！」と激しく突っ込みを入れたくなる不朽の名作だった。だが、手塚先生は仕事のしすぎ（萌えすぎ）で、『ネオ・ファウスト』の完結を見ることなく、三次元世界から旅立ってしまったのだ……。

しかし、手塚先生は今頃、二次元世界から秋葉原を見下ろして、

※『三つ目がとおる』
手塚治虫の後期の代表作。「ボク娘」の和登サンが毎週のように裸になって写楽君とお風呂に入るという展開が度肝を抜いた。

※『リボンの騎士』
手塚治虫の前期の代表作。宝塚テイストを取り入れた、少女マンガの元祖的存在。ヒロインのサファイアは女の子だけど王子様として育てられた。

※チャーリー・ブラウン
チャールズ・シュルツのコミック『ピーナッツ』の主人公。日本でいえば、のび太のポジションに相当する。飼い犬のスヌーピーのほうが有名かもしれない。

「ロボもいる、どうぶつもいる、ショタもいるっ！
萌えるっ！　萌えすぎるっ！」
と、お喜びになっているに違いないのである。

「萌え」は、顔・収入・性格に関わりなく平等に参加できる

萌えの進化の歴史はここまでにして、「萌え」と「恋愛」の構造と機能の違いについて、また共通点について、オタク的ウンチクを垂れたいと思う。「萌え」の実像について、具体的に重要なポイントをピックアップして語っていこうというわけだ。

「萌え」の一番素晴らしいところは、二次元だから、顔・金・趣味・性格、いっさいが関係ない、というところだ。つまり、**萌えの世界では、万人が平等に恋愛できる**んだYO！　恋愛脳内共産主義とも言うべき、真の平等な世界。恋愛資本主義社会で打ちひしがれ、嘲笑されて、平家の落ち武者のごときザンバラ髪で逃げ延びてきた敗残者でも、あるいは生まれながらの大金持ちのボンのイケメンでも、誰もが平等に恋愛できる世界。それが萌えクオリティ。

まあ、厳密に考えれば、金があったほうが同人誌やフィギュアをたくさん買えるので、完全に平等というわけでもない。しかし萌えの本質は、アイテムを集めることでなく、あくまでも「脳内恋愛」。アイテムを買う金がなくても、脳内で萌えキャラを愛することさえできれば、それで良いわけだ。

むしろ、最近の若いモンは、アイテムに頼るからいけねえ……。俺の若い頃は、月収八万円し

かなくて、単行本すら買う金がなかった。それでも、毎日毎晩、脳内で萌え力を自家発電して、萌えサイト「日刊アスカ」を更新し続けていたものだよ……。

萌えに必要とされるものは、金やアイテムではなく、あくまでも「**妄想力**」なのだ。だから、妄想するために、頭の筋トレを絶やしてはならない。具体的には、一日一時間、**好きなアニメキャラと俺との学園恋愛ドラマをじっくり妄想**するとか。好きなアニメの来週以降の展開を勝手に考えるとか。あのキャラの胸があと４センチほどデカかったら、いったいどんな感じになるのかイラストを描いてみるとか。

俺は「日刊アスカ」を更新している間、実は『エヴァ』の本編を全然観ていなかった。サイトを開くずっと前、大昔に本放送で全話を一回ずつ観て、それきり二度と観ていないのだ。つまり、あのサイトに書いている文章は、全部うろおぼえの記憶を基にした妄想だったのだ！　それでも別に読者に文句は言われなかったので、つまり、萌えられれば本編とかどうでもいいんだＹＯ！

それに、顔がブサイクでも、二次元では関係ない。漫画『ルサンチマン』では、オタクの越後君というサブキャラが地味にいい活躍をするのだが、三次元では武田鉄矢が萎んだようなハイクオリティ・キモメンの越後も、二次元では「ラインハルト」を名乗るウルトライケメンなのだ。

越後…いや、ラインハルトは涙を流しながら、こう叫ぶのだ。

「**現実を直視しろ。おれ達にはもう仮想現実しかないんだ。**」

ああ、ああ、越後先生、一生ついていきます!!

もちろん、金も要らない、ルックス不問、必要なものは妄想力のみ、ということは、実はオタク界は出入りが自由ということでもある。

まあ俺や越後のように、どうせ恋愛資本主義社会ではウンコ扱いされるキモメンは、**出て行きたくても出て行けない**わけだが、ブサメンよりましなルックスの持ち主…つまり大多数のオタクは、別にいつでも脱オタしても構わないし、あっち側の世界とこっち側の世界を二股かけても構わない。三次元でほどほどに彼女を作っておいて、二次元に本命の萌えキャラを据える、というハイブリッド恋愛なんてのもいいかもしれないね。まあ、俺には何の関係もない話だけどな……。

「いつでも辞めていいんですよ」なんて、あやしい宗教の勧誘みたいだな……。

もちろん、本当に脱オタした人間には、「抜け忍」「裏切り者」のレッテルが貼られ、全国各地に抜け忍追討の指令を飛ばされることは言うまでもない。その追求は苛烈を極める。**いまだかつて、秋葉原から抜けたオタクはいないといわれている**。

とはいえ、恋愛資本主義がある程度のルックスまたは金を姿婆代として要求する、日本プロ野球機構※みたいな腐った集団なのに対して、オタク界はハルウララ※がもてはやされる高松競馬場なみにユルい集まりなのだ。それもこれも、三次元ではなく二次元…妄想力によって成り立っている世界だからだ。

※日本プロ野球機構
アマチュア球界と対立したり、ほりえもんをシメたりするのが仕事。どうせナベツネに頭があがらない。

※ハルウララ
高知競馬場のスター馬。連敗につぐ連敗を繰り返し、あまりの弱さに人気者になった。しまいには武豊に乗らせてみたが、やっぱり勝てなかった。なぜ今までニューコンビーフにされなかったのか謎。

三次元の恋愛で、本当にあった地獄絵図

二次元における萌えの素晴らしさ、伝わりましたでしょうか？
しかしながら、「恋愛はそもそも二次元のイデア界から湧いてきたものなのだっ！　三次元における恋愛など、二次元恋愛の模倣に過ぎんっ！」と俺が口をすっぱくして主張しても、それでもなお「三次元での恋愛は本物の恋愛だけど、二次元の恋愛なんてウソっぱちじゃないか」というのが、わからんちんの大方の常識だろう。

かーつ！

世の無知蒙昧な衆生に、喝だこりゃあ！
もう何度か説明したとおり、三次元の恋愛だって、幼い頃からメディアによって教え込まされてきた恋愛マニュアルを自ら演じているだけなんだYO！
かつて俺は目の当たりにしてしまったのだ！　この世の地獄のような恋愛ごっこを！　（ここからしばらく、過去回想編『シークレット・ラヴウォーズ・イン・コウベ』がスタートします。）
俺は頭が良かったにもかかわらず、16歳で高校を中退したんだけど（理由は聞かないでくれ…うわあああ、うわあああ！　そうだよ、女に馬鹿にされ、虐められ、うわあああ！　女なんかみんな豚だあっ！　心ない女が、こうやって男の将来をスポイルしてるんだよ！　**男女共学**

教育なんて、ゲームの中だけにしてくれぇ！）、たかが高校を中退した程度のことで、みんなに阿呆扱いされるようになり、さっぱり仕事もないし、腹が立って「人間を学歴などでしか判断できないオロカモノが多すぎる！　こんなオロカモノどもをギャフンといわせ、かつ、学歴などが人間にとって何の価値もないことを証明するため、大学に進学して、それから日本一阿呆な人間になることにする」と言い出して大検塾に入ったんですよ。

そうしたら、そこの男子生徒が、まるっきり見事に、ＤＱＮと非モテ（半ばオタク）という2種類の部族に分かれていたんですよ。かたや、女物のサンダルをはいて、庭でウンコ座りしてガン飛ばしながら煙草スパスパやってるＤＱＮ軍団。当然、バイクで塾までやってきていますよ。怖い人たちですよ。もう、齢16ぐらいで、極道に片足突っ込んでるんですＹＯ！

こなた、真っ青な顔で、阪神電車でフラフラと塾にやってくるオタク軍団。高校に行くのも辛かったのに、さらにこんな訳のわからない塾に通わなければいけないなんて、この世は地獄だ！うわーしかも、前の学校にはいなかったＤＱＮヤンキーがいっぱいいるＹＯ！　**頭の中はＤＱＮにカツアゲされたときにどう言い訳するかで一杯**です。そのオタク軍団の中にもちろん俺もいたわけですよ。

で、女の子もたくさんいるんですよ。これがまあ、かたやどうして高校を辞めて、こんなウンコの溜まり場みたいな大検塾に来てしまったのかという美少女軍団。こなた、えーと、まあ、その、あんまり書くと怖いんで一言で表現すれば、左門豊作子※軍団です。同じ人間かＹＯ！って疑いたくなるぐらい、**神の不在を確信できるぐらい、はっきりと2種類に分かれている**のだ、女の

※左門豊作子
漫画『巨人の星』に登場する肥後もっこす系の色男・左門豊作に良く似た妙齢の女性のこと。

子も。

で、何が起こるかというと、俺たちオタクが女の子と一言も会話をかわさないうちに、ＤＱＮが美少女たちを一匹残らず半ば拉致するように持ち去ってしまい、その日のうちにセックス漬けにして、二人して塾からトンズラしてしまったわけですＹＯ！　あ、あいつら、いったい何しに塾に入ったんだ？　まるで、イナゴの集団が塾の上空を通りかかって、一瞬ですべてを食い尽くしてしまったかのようだった……。

気づいたときには、時すでに遅し。俺たちオタクは、取り残された左門豊作子たちを、**腐肉に群がるハイエナのように**奪い合うことになったわけだ……。いや、外見が左門豊作子だからって、俺はとやかく言いません。愛があれば顔なんて関係ない！　……たぶん。

しかし、おぞましいことに、オタクと左門豊作子の間には、愛のかけらもなかったんだＹＯ！それはもう、動物と動物が、悶々とした本能だけに突き動かされて、人が人を互いに信じず、妬み、恨み、嫉み、足を引っ張り合い、流言飛語を飛ばし、ああ……。俺はあの頃のおぞましい体験を、いつか一冊の小説にまとめたいね！　あまりにも無茶苦茶で、書き切れないＹＯ！　**に…人間はおっかねえ！　人間は信用できねえ！**

結局、あのオタク対左門豊作子の乱交地獄は、「何かしらんが、とにかく生きているからには、恋愛しなければならない。目の前に異性がいる。まったくもって愛情のかけらも感じないが、異性であるからには、口説いてセックスしなければならないのだろう」という**強迫観念**によって発生したとしか思えないＹＯ！

「俺たちモテない人間だって、恋愛できるんだ！　見ろ、見ろ見ろ！」
という全然楽しくない義務感と見栄が原因で、この世の終わりのような光景が塾の内外で日夜繰り広げられていたのだ。

最大のトラウマは、髭と眼鏡で素顔を隠してキリストぶっていた教師が、裏では教え子の女と同棲していたことを知ってしまったことだったが……。その、ヒゲメガネ教師と同棲していた女に惚れていた純真なオタクがいて、Wさんって言うんだけど、いわゆる「眼鏡君」で今だったらモテそうな人でしたよ。本当に良い人だったんだけど、他人を疑うということを知らなかったばかりに、その教師のことを、

「先生は救世主です！」

なんて崇めて、弟子になっちゃったんだよね。ところが、ある日、塾を訪ねてみたら、教室で先生とその女が……、

ぶきいいーっ、ぶきいいいいーっ！
ぶきいいーっ、ぶきいいいーっ！

ああーっああああああーっ！

絶望したWさんは、そのまま東京まで逃げ出して、カルト宗教に入信して行方不明になってしまいました。どこの宗教か知らんけど、仏教系っていうか、密教系だってことまでは本人から聞きました。**なんか辛い修行をしているとか何とか**。…まさか…ねえ……。

俺は後に上京したときに、心配になってWさんを探し回ったんだけど、とうとう見つけることができなかったYO！　だが、そのヒゲメガネ先生はそれでもまだマシなほうで、**塾長に至っては強姦魔**って噂が立ってたしね。ほんとかどうか知らんけど。

とにかく、俺は、そういうこの世の終わりみたいな修羅場の群像劇をあれこれ同時進行で無理やり見せられてきて、すっかり恋愛というものに醒めてしまったのだ。だって恋愛ってお互い好き同士で初めて成立するものじゃないのか。嬉し恥ずかしの少女マンガ『ハツカレ』※みたいなドキドキな恋愛こそが、本当の恋愛ではないのか。しかし、誰も彼もが、単に性欲と見栄と「恋愛しているふりをしなきゃ、だめだ」という強迫観念だけで、他人を傷つけ、自分を傷つけ、人間関係を壊し……。

また、大検塾にはフルハム※って友達もいて、ＤＱＮ系に行かずに何故かオタク軍団にいたんだけど、まあ京本政樹系の文系イケメンで、女教師の処女を「結婚してやるから、やらせろ」と迫って奪ったあげく、終わったとたんに「二度と来るな！」とアパートから追い出したり、16歳の女生徒と結婚したと思ったら三ヶ月で離婚して、女の家から慰謝料をせしめ取ってその金を元手に妙な商売を始めたり、と**大人物全開な奴**だったんですよ。なんであんな無茶苦茶な詐欺師みたいな男があんなにモテてたのかというと、やっぱ、イケメンだったからなんだよなあ。

顔だけ。顔だけ。男なんて、顔だけです。**顔さえよければ、女は芋づる式です。**

他にも。ストーカーと化して、つきあっているわけでもなんでもない女に「貴様、勝手に男を作って浮気したな！」と殴りかかったあげく、その女の彼氏と**大晦日の夜に除夜の鐘を聞きなが**

※『ハツカレ』
桃森ミヨシ著　集英社。初めて異性とお付き合いする男女のウブな恋愛を描いた名作。

※フルハム
かつて三浦和義さんというワイドショーで一世風靡した有名人が奥さんと経営していた輸入品ショップ「フルハムロード」が元ネタ。フルハム君が商店経営を画策していたことからこのあだ名がついた。三浦さんの店は現在もあるらしい。

ら対決して敗北して倒れた男とか。もう、話し出すとキリがないですな。
ＤＱＮが美少女とセックスしている時に、俺たちモテない男たちは奈良の大仏みたいな女や、砂かけばばあみたいな女や、猿みたいなのや、狐や、狸や、訳わかんないのを奪い合い、いや、俺たち男のほうも一部を除いてキモメン大集合だったんだけど……。その結果、除夜の鐘対決に敗れたり、詐欺結婚で金を稼いだり、新興宗教に入ったり……。
とにかく誰一人、恋愛で幸せになれなかったんだＹＯ！　それどころか、誰も彼もが不幸になった！　一人残らず、生き地獄に落ちたんだＹＯ！　男も、女も！

「**男女30匹・シベリア物語**」だったよ！

せっかくの社会復帰の芽を、目先の恋愛のために、潰してしまったんだ、みんなみんな。それを言えば、**俺だって訳わからん女さえ高校にいなければ**、そもそもちゃんと高校を卒業してもっといい大学に行って、そんな違う人生があったかもしれないんだＹＯ！　ああ、わが青春の痛恨のトラウマ。妖怪百鬼夜行のごときエグい集団が『男女七人夏物語』の真似事「男女30匹・シベリア物語」を現実世界で演じる、その悲喜劇。**俺は夜空に誓った**。**俺はこんな「恋愛しているふりをするための恋愛」はしない**。**俺は、真に愛した人とだけ、本当の恋愛をするのだ、と**。
その結果……真実の恋愛を求めれば求めるほど、俺は、二次元へと入り込まなければならなくなったのだった。

三次元には、真実の愛は、なかった。

そう、**三次元の恋愛なんて、一部の美男美女がやるもの**なんだよ！　俺みたいなキモメンにできることは、恋愛ごっこに過ぎないんだ。使いたくもない金を、無駄なファッション、無駄な服、無駄な靴、無駄な髪型、無駄なプレゼント、無駄なデートに使わされて、へとへとになったあげく、心の安寧も得られないんだ。

で、お互い、

「なんか、つまらんなあ…萌えないなあ……」

「こんな貧乏男と、一緒にいてもしょうがない……」

とかお寒いことを考えながら、無言でスタスタと歩くんだよ。その間、耳元では、ずーっと、

「トカトントン、トカトントン」※

って鳴り響いてるんだよ。

だから本当は、三次元の恋愛も、二次元の恋愛も、どっちも空想上の恋愛なんだよね。ただ、三次元では、相手がこっちの妄想に合わせようとせず、あっちの妄想を押し付けてくるというだけでね。それを「これこそ他者とのリアルな交流だ」と感じるか、**「お互いの妄想の押し付け合い」**と感じるかは、人それぞれだけど、俺にとっては後者なんだよね。男も女も本当の意味での「現実」なんか見えてないんだから。どっちも自分の恋愛世界というマトリックスにこもってるわけでね。

※トカトントン
太宰治の短編小説『トカトントン』に出てくる擬音。主人公が何かに夢中になりかけると、頭の中にトカトントンという音が聞こえてきてしらけてしまうという話。現代でもトカトントンに悩まされている人間は多い。

二次元でも三次元でも「情報」としては「等価値」

というわけで、三次元の恋愛はしょせん、人間同士がお互いの「恋愛とはかくあるべし」という妄想を相手に押し付ける洗脳合戦に過ぎない。ミスチル風に言えば『シーソーゲーム』※であり、俺に言わせれば『**妄想ゲーム**』だ！　すなわち、三次元恋愛は「ネット対応ゲーム」、二次元恋愛は「ひとりプレイゲーム」であり、恋愛によって発生する脳内の反応というのは、結局は変わらない。恋愛によって「萌える」とか「愛したい」とか「愛されたい」といった欲求が満たされると、脳内麻薬がジュワーッと出て、幸福感を味わえるわけだ。

※「シーソーゲーム」ミスチル（ミスターチルドレン）は「恋なんて言わばエゴとエゴのシーソーゲーム」と歌っている。

二次元だろうが三次元だろうが、最終的には、人間にとっての現実とは「脳の反応」、これに尽きる。人間の感情も認識も、すべては脳が処理しているわけだから。「真実とは三次元の現実にではなく、二次元…脳内の空想世界にある」という観念論は唯物主義によって一度否定されたが、脳科学の発展によって再びその正しさが証明されたんだよ！　人間にとっての現実とは脳そのものであり、脳に入力される情報である。認識されないものは、現実ではない。逆に言えば、認識されるものだけが、現実である。特に、文明化が極限の状態にまで進んでいる現代の都会では、そうなのだ。

現代とは、要するに脳の時代である。情報化社会とはすなわち、社会がほとんど脳そのものになったことを意味している。脳は、典型的な情報器官だからである。

都会とは、要するに脳の産物である。あらゆる人工物は、脳機能の表出、つまり脳の産物に他ならない。都会では、人工物以外のものを見かけることは困難である。そこでは自然、すなわち植物や地面ですら、人為的に、すなわち脳によって、配置される。われわれの遠い祖先は、自然の洞窟に住んでいた。まさしく「自然の中に」住んでいたわけだが、現代人はいわば脳の中に住む。

伝統や文化、社会制度、言語もまた、脳の産物である。したがって、われわれはハード面でもソフト面でも、もはや脳の中にほとんど閉じ込められたと言ってよい。ヒトの歴史は、「自然の世界」に対する、「脳の世界」の浸潤の歴史だった。それをわれわれは進歩と呼んだのである。

（養老孟司『唯脳論』青土社）

だから結局、二次元と三次元の価値は等しいのだ。ただし「二次元だから……」と引いてしまうと、心が萎えてしまい、萌えられない。これは「三次元のみが現実」という古い価値観が邪魔をしているためだ。

それを乗り越えるために必要になるのが妄想力である！

二次元の弱点は、感覚的な刺激が少ないということに尽きる。視覚や聴覚はなんとかなるが、触覚だけは苦手だ。早い話が、**二次元ではおっぱいを揉めない**ということだ！

おっぱい！　おっぱい！※

もちろん触覚だけが恋愛の全てではないから、二次元が三次元より強烈な刺激を得られるというケースもあるのだけど、おっぱいだけはなぁ……。最近はシリコン技術の発達で、だいぶ近づいては来てるけど、なかなかねぇ。

だが、妄想力さえ鍛えれば、二次元の萌えは、三次元を超えるのだ！　好きでもない三次元の女となんとなく付き合っているよりも、二次元で自分の理想の萌えキャラと波乱の学園生活を過ごすほうが、萌えられるのだ！

もちろん、一朝一夕で妄想力が備わるわけではない。**考えるな、萌えるんだ！**

「これって、絵じゃないの」とか、そういう**賢しらな知恵が**、**萌えの邪魔をする**のだ。そんな要らない知恵は窓から投げ捨てろ！　馬鹿になれ！　オープン・ユア・マインド！

心を広く持って、目の前のアニメやゲームを、受け入れるのだ…！　すると、やがては、

「おっ？　おっおっおっ？

……、

キターーーーー！」

と、萌えパワーが大爆発して脳内でジュワーと快楽物質が分泌される瞬間が来るはずだ。人によって萌えるツボが違うので、ある人は頭の触角に萌え、ある人は眼鏡に萌え、ある人は不治の病に冒された妹に萌え、ある人は親友の男の子に萌えるかもしれない。これは本当に人それぞれ

※おっぱい！　おっぱい！

なので、いろいろな萌えキャラを当たってみるしかないのだが、人間として生まれてきたからには、誰しも必ず自分だけの**「萌え属性」**を持っている。だから、「これだ！」という属性を見つけるまでオタクを続け、妄想力を日夜鍛えるのだ！

そして、己の属性を見出した瞬間に、あなたは「エウレカーーー！」と叫び、自分がこの世に人間として生まれてきたことを、はじめて感謝感激することになるはずだ！

もう30歳になってしまって、しかもオタク経験ゼロだ、という人でも大丈夫！　必ず、青春時代の何らかのトラウマ記憶が、あなたに萌え属性を与えているはず！　例えば、女子高生の制服なんかは人気の定番属性だが、これはやっぱり、高校時代に女の子にモテなかった記憶が、制服への執着をもたらしているんだろうなあと……。萌え属性は、過去の満たされなかった願望が、心に残って沈着することによって生まれるのだ。つまり、意外と封印されたトラウマの記憶の近くに、自分の萌え属性が隠されている。それ故に、なかなか見つけにくいかもしれない。

逆に、そんなトラウマに近寄りたくないばかりに、オタクを否定したくなる人もいるだろう。

「俺は過去のトラウマを封印して、我慢してたいして萌えられない女と結婚したのに、あのオタクどもは好き放題に萌えやがって……」

とかね。……あんまりいないか。でも、**数年後には、そんな感じで嫉妬されるようになるから。**うっかり結婚してドツボにハマった面々にね。

そう、俺たちこそが勝ち組だよ！　だから、俺を信じて、一度オタク巡りの旅に出てみてほしい。もし、真の萌え属性に突き当たったなら、人生は一変する。灰色の現実は終わり、薔薇色の

二次元世界が目の前に広がるのだ！　この萌え体験を一度覚えてしまうと、なかなか三次元には戻れなくなるだろう。そりゃ三次元でも「エウレカーーーーー！」と叫ぶ機会があれば、別なんだろうけど。

ほとんどの人間は、生まれつき心に愛を持っている。その愛を適宜発散することで、人は安定を得る。だが、愛が塞き止められると、人は狂気に陥り、鬼畜になってしまう。この点については第3章で詳しく述べる。

三次元で愛を得られない人、なんとなく恋愛っぽいことはしているけどまったく幸福感を得られない人、そもそも恋愛に興味がない人、そのような人たちは、一度「萌え」に挑戦してみてください。「萌え」の境地に辿り付いた瞬間に、塞き止められてきた愛が、怒涛のごとく脳内のニューロンを駆け巡るのだ！　仏陀が菩提樹の下で悟りを開いた時のごとく、我々はその時こそ、己の生の意味を見出すことができるだろう！

人は誰かを愛するために生まれてきた。
しかし、三次元には愛がない！　恋愛は死んだ！
だから二次元で萌えるのだ！
我々は、生きるために萌えるのだ！
愛のない人生など、地獄だ！
萌えオタクは、異常者でも何でもない。ただ、愛に溢れているだけなのだ。まともな、正常な、

誠実な人間なのだ。その愛を、三次元の女が受け入れないだけなのだ。

女を殴って犯すようなＤＱＮこそが、本当に異常なのだ。彼らには、愛がない！　愛のない人間は、ただの性欲の塊に過ぎない！

■三次元のＤＱＮの恋愛

■二次元のオタクの萌え

どうだろう。どっちが人間らしいだろうか。　愛のかけらもなくても、乳を揉める三次元を選ぶか？　乳は触れなくても、真実の愛がある二次元を選ぶか？　**肉欲と純愛、どちらが人間にとって大切なことなのだろうか？**

いや、まあ、三次元でも、愛があればいいんだけどさ。ないじゃない。無理して金で釣ったって、どうせ「ぶきいーぶきいいー」なんだからさ。

三次元における恋愛が滅び去った今、人間の魂を救えるものは、萌えだけなのかもしれない。っていうか、**俺の魂を救えるのは萌えだけだ！**　萌えが、俺を生かしてくれた！　三次元の女に痛め付けられて何度も死を覚悟した俺をそのたびに救ったのは、萌えなんだ！

これだけは断言できる！

萌えがなければ、俺はとっくに**アイキャンフライ**※だ！

萌えだけが、俺を拾ってくれた！　萌えだけが、俺を救ってくれた！　たとえすべてのオタクが脱オタしても、俺がいる限り、萌えは終わらない、終わらせない！

…って、オダギリジョー※が言えばカッコいいんだけどなあ…俺が言ってもなあ。トホホ。

仏像も十字架もフィギュアの一種。つまり萌えアイテムだ

実は、萌えは人間にとって自然な行為だという話をちょっとだけ。恋愛がキリスト教から派生

※アイキャンフライ
俳優・窪塚洋介きゅんが映画『ピンポン』で橋から飛び降りるときに叫んだ台詞。マンションから飛び降りるときに叫んだかは謎。

※オダギリジョー
『仮面ライダークウガ』でブレイクした俳優。ＮＨＫの大河ドラマ『新選組！』では無口でニヒルな斉藤一役を演じたが、最終回間際になって熱い男に変貌。「この旗が俺を拾ってくれた！　俺がいる限り新選組は終わらない！　終わらせない！　局長ーっ！」の名台詞を遺した。

したという話はすでに述べたが、そもそも、キリスト教や仏教そのものが、本質的に萌えを含んでいるのだ。

ウソつけ！と叱られそうだが、宗教が何度偶像崇拝を否定して教義の大衆化を防ごうとしても、必ず信者は偶像を崇拝する。仏像とか…十字架のキリスト像とか…聖母マリアを描いた宗教画とか……。つまり**人間の宗教感情の根底には、キャラクターに萌えたい、という萌え衝動のようなものがある**のだ。

たとえば、キリスト教では、イエス・キリストは**真性童貞**で、母親のマリアは**処女**だった、ということになっている。これは、イエスやマリアが「萌えキャラ」だからだ。

「実はマリアは男性経験豊富な好きモノで、イエスも浮気の男に中出しされてできちゃったので、父親がわからないんですわ。そのイエスも、そんなマリアを怨みに思って、若い頃はそりゃもうDQNな女遊びを。しまいにはマリアと…うわ何をするqあwせdrfgtyふじこlp；」

などと聖書に書かれていたら、**キリスト教は絶対に普及しなかった**はずだ。イエスとマリアが恋愛ゲームのキャラクターなみに清純で美しい人たちだったという萌え設定があるからこそ、キリスト教は普及したのであり、信者たちはイエスのフィギュア、つまり十字架を拝んでは萌え、マリアのポスター、つまり肖像画を拝んでは萌え、イエスの活躍を描いたライトノベル、つまり聖書を読んでは萌え、しまいにはイエスが十字架にかかったあと復活したという人気作にありがちな**最終回の改変**まで行わせてしまったのである。

「イエスたんが死ぬなんて、そんなの、やだやだやだ！　じたばたじたばたじたばた！」

という信者が多かったのだろう。宗教とはつまり、あるカリスマを持った人物が萌えキャラ化されることによって普及する、**巨大な萌えシステム**なのだ！　そう考えれば、ほとんどあらゆる民族が宗教を持っていることも、納得がいくというものだ。人は、何かに萌えずには生きられないのだから。

山岸涼子の『日出処の天子』※は、この「仏像＝萌えフィギュア説」をいちはやく取り入れた漫画だ。左に引用したコマの仏像は、実体があるわけではなく、王子自身の脳が生み出した幻覚である。王子は頭が良いのでその事実に気づいており、

「自分でも自分を救えぬ者の前に現れるというわけか？」

■日出処の天子
三次元で失恋した王子の周囲に、仏像の幻が…
（山岸涼子『日出処の天子』白泉社）

などと冷静に分析してしまったために仏像に癒されず、結局ようじょを誘拐してしまう（おい）のだが……。頭の良すぎる人間は大変だね。俺は馬鹿でよかったよう。

それはさておき、

「二次元の妄想世界に理想のキャラクターを見出して、萌えることで癒される」

というシステムは、キリスト教も仏教も、そしてオタクも変わらないのだ。た

※『日出処の天子』山岸涼子の少女漫画。白泉社『LaLa』で連載された。厩戸王子（聖徳太子）がマザコンでゲイで超能力者でペドで幻覚持ちだったという衝撃的にもほどがある設定だが、少女漫画史上最高峰の名作。「私は女が大嫌いなのだ！」という王子の血の叫びは必聴！

だ、宗教では、これらの萌えキャラが一応実在のモデルを持っているのに対して、オタク界にはモデルが存在しない。といっても、仏陀はともかく、なんとか菩薩とか、あのへんってもう完全に架空のキャラクターなんだけどね……。菩薩像なんか、どんどん女みたいになっていくしね。腰のくねり方とか、指先の曲がり方とか、凄いエロいよね。本当は男のはずなんだが……。あれって、絶対、みんなで仏像を見ながらハァハァしてたんだよ！　**みうらじゅん先生**※**みたいに**な！

こう考えてみると、人類の歴史を振り返れば、二次元に愛を求める萌えこそが普遍的な行為であり、**三次元における恋愛は二次元への愛の模倣でしかない**と言い切れる！

思うに共産主義と同様、恋愛資本主義も、人類史の上では「**人間は二次元の萌えを捨てても生きられるのかという壮大な実験だったが、失敗した**」というふうに記されるのではないだろうか。結局、共産主義だって、宗教を否定したはずが、巨大な肖像画や銅像をガンガンと建立して個人崇拝に走らなければ、国民を統治できなかったのだ。この事実を見れば、人間にとって、いかに萌えという行為が重要で欠かせないものなのかが分かるだろう。

関係ないけど手塚先生って『ブッダ』※って漫画を描いて、仏陀を萌えキャラにしてたんだよね。最初はショタキャラで、中盤は美青年でね。いろんな女の子に誘惑されちゃって、そりゃもう大変だよ！　最後は太らせてデブ専萌えの世界に突入するし。新しすぎるよ！　凄いぞ手塚先生。何でもありだよ！　萌えのバーリ・トゥード※だよ！

※みうらじゅん
サブカル界の頂点に君臨する海王神。「マイブーム」や「ゆるキャラ」など、次々と新ジャンルを提唱して流行語を作る。昔は「ゲロゲロのゲー！　幸いにして腸はまだ少ししか出ていない」とかそんなカエル漫画で人気だった。

※『ブッダ』
手塚治虫中期の傑作。釈迦の生涯を描いた歴史大河ロマンなのだが、ダイバダッタやアナンダのキャラ造形や仏伝に出てこないオリジナルキャラのタッタとミゲーラなどが印象的。また、ブッダは悟るどころか、ひたすら悩んで悩んで悩み続ける。ちなみにブッダの最期は、ヒョウタンツギを食ったことによる食中毒だった。そんなんでいいんですか手塚先生！

※バーリ・トゥード
ブラジルで発展した総合格闘技。立ち技も寝技もありで、グラウンドでの顔面打撃もOKという過激なルール。日本では後から発明された「総合格闘技」のほうがメジャーな言葉になったが、それまでは総合格闘技を「バーリ・トゥード」と呼んでいた。

3――デジタルのメリットとアナログのデメリット

アナログからデジタルへ移行するのは歴史の必然

まあ、恋愛＝三次元という「常識」の中で生きてきた人にとって、いきなり俺の主張を受け入れろというのは無茶な話かもしれない。いわば、**三次元恋愛とは、江戸幕府のようなものだ**。ずーっと、誰もが、なんとなく江戸幕府というのが永遠に続くんだろうなあ…幕府以外の政権なんか考えられないよ…とボンヤリ考えていたところに、突然黒船が来て、

「太平の眠りを覚ますじょうきせん」

という具合にパニックが起こり、幕藩体制の崩壊を予感した面々が「尊皇攘夷！」と騒いで、黒船でやってきた外国人を日本から追い出そうと大暴れ。異国人を見たら、斬る！という超過激な「外国人狩り」まで勃発し、やりすぎて外国と戦争する藩まで出てくる始末。

いま、日本に起こりつつある恋愛革命は、この明治維新になぞらえると理解しやすい。長年にわたり、誰もが永遠に続くと信じていた「恋愛＝三次元」という常識が、「萌え」の出現によって突如として崩壊しはじめているのだ。最近目立つようになってきたオタク狩り、アキバ系への差別・攻撃は、すべてこの尊皇攘夷運動にあてはまる。三次元恋愛は永遠に続く、と思い込みたが

っている面々が、オタクを恐れて「斬ってしまえ！」とばかりに排除したがっているわけ。
でもまあ、結局ね。明治維新でも、負けたのは佐幕派であってね。一度まわり始めた歴史の歯車は、もう逆戻りさせることはできないんだよね。倒幕派を何人斬ったところで、**次から次へと湧いてくる**んだから。これ、歴史の定説です。結局、幕府は滅ぼされ、明治政府は諸外国との外交を継続し、鎖国政策をやめてしまった。一時は尊皇攘夷運動に荒れ狂ったはずが、気がつけばみんな外国と結んで佐幕派と倒幕派に分かれて戦い始め、攘夷という理想はいつのまにか消えうせたわけで。

ちなみに俺は、三次元恋愛を「**アナログ恋愛**」、二次元恋愛（萌え）を「**デジタル恋愛**」と勝手に呼んでいる。何事も、アナログからデジタルに移り変わっていく。ビバ・ＩＴ！　すべてのアナログ製品をデジタル製品に買い換えさせることで需要を爆発的に喚起させる、それがＩＴ革命。ＩＴ景気で消費拡大！　そう、アナログからデジタルへ、これが今の資本主義市場の掟なのだ。
例えばカメラ。少し昔まではカメラといえば銀塩カメラだった。ところが、いつの間にか、デジタルカメラが市場を席巻してしまった。
最初の頃は画質も悪く、機能もしょぼかったので、プロのカメラマンとかは「デジカメなんて使い物にならない、プロは銀塩※！」なんて言ってたのに、今じゃ一眼レフも総デジタル化。プロのカメラマンも、デジタル一眼レフを手にする時代がやってきたのだ。それも、あっという間に。
登場した当初は「こんなもの、アナログ製品に比べると機能的に劣りすぎて、使い物にならな

※銀塩
フィルムで撮影するカメラ。アナログカメラ。

い」と権威筋に否定されるが、恐ろしいスピードで技術革新がなされて、またたく間にアナログを追い抜いてしまう。それがデジタルの特徴だ。アナログはゆるやかなカーブを描いて進化していき、ある程度のレベルで進化を終えるが、**デジタルは狂おしいまでの上昇カーブを描いて、しかも止まることがない**。

ビデオレコーダーもそうだった。長々と続いたＶＨＳデッキ全盛時代。デジタルレコーダーである「ＤＶＤレコーダー」が登場した時には、やっぱり誰もが否定的な見解を示した。ＤＶＤは記憶容量が少ないため、ＶＨＳ程度の画質での長時間録画ができなかったのである。メディアも高額だった。一般のＤＶＤプレイヤーで再生できないという問題も抱えていた。ゆえに、ＤＶＤレコーダーは普及しないだろう、という声が大勢を占めていたはずなのだが、東芝がハードディスクを内蔵したＤＶＤレコーダー「ハイブリッドレコーダー」を投入したとたん、爆発的な市場を形成し、１、２年足らずでＶＨＳの時代を終わらせてしまった。記憶容量が大きいハードディスクを足したことで、何百時間もの長時間録画が可能となり、ＤＶＤの容量不足を解消してしまったのだ。それどころか、メディアを挿入せずに膨大な時間の録画が可能なので、ＶＨＳよりも便利になった。プレステ２で再生できるＤＶＤを作ることも可能になったし、ＤＶＤメディアの単価は大量生産効果によって一気に下落した。

アナログからデジタルへの切り替わりは、ある時期、瞬間的に、劇的に起こる。切り替わるスピードは衝撃的に速い。

で、「デジタル三種の神器」は「デジカメ」「ＤＶＤレコーダー」「フラットテレビ」だ。フラット

テレビの代表格が液晶テレビだが、液晶テレビもまた、登場した頃には、
「高い」
「画質が悪い」
「ブラウン管の画質には、遠く及ばない」
と糞みそに言われていた。というか俺もボロクソ言ってました、すいません。
「ソニーのFDトリニトロン※、最高ッ！　ブラウン管の時代は終わらないッ！」
と叫んでいました、ええ。
実際、初期の液晶の画質は酷いものだったが、そこはデジタル。あっという間に高画質化・低価格化を果たしたのだ。で、ブラウン管テレビの王者・ソニーがデジタルへの切り替えを断行できずにいる間に、シャープが国内の液晶テレビ市場を制覇してしまった。いわば**ソニーはアナログに固執した江戸幕府で、シャープは薩長軍**というところか。ソニーは安価で高画質なブラウン管の市場はまだまだ続くと予想していたのだろうが、そうはならず、多くの欠点を指摘されながらも液晶が突っ走る形になってしまったのだ。
結局、困ったソニーはサムスン※と合弁で液晶パネルを作ることになった。これは、薩長に押された形となった江戸幕府が、フランスと手を結んで延命を図ったようなものだ。
ことほどさように、アナログとデジタルでは、圧倒的にデジタルのほうが市場競争力があり、進歩のスピードが速い。市場そのものも、買い替え需要を喚起するためにデジタルを推す傾向が強い。

※FDトリニトロン
ソニーのブラウン管。トリニトロンはソニー独自の方式で、通常のブラウン管と異なりガラス面の歪みが少ないという特徴があった。FDトリニトロンは、このトリニトロン管をさらに改良して、画面を完全にフラットにしたもの。

※サムスン
韓国の電子企業。DRAMや液晶パネル、PDPなどで知られる。

ということはね……。

恋愛でも、アナログからデジタルへの移行が、ある時期に突然爆発的に進行するんだよ！

デジタルモノが登場するときに必ず批判として使われる紋切り型の言いまわしがある。それは、「デジタルには、アナログの温かみがない」って言葉だ。デジカメの絵作りはアナログの温かみがない、とか、液晶の絵作りはブラウン管の温かみがない、とか。

なんかこう、「温かみ」とか「手触り」とか、そういうものがアナログの魅力なのだ。恋愛でも同じで、萌えを批判する場合、必ず出てくるのが、

「二次元には、生身の女性の温かみ・肌触りがない」

みたいな言葉だよね。これって、**アナログ家電を使ってきた人が、デジタルモノを見せられたときに最初に示す拒絶反応と、実はまったく同じ**なんだよね！　だから恋愛をアナログ／デジタルという区分で語るのも、あながち俺の誇大妄想だけじゃないんだYO！

しかし、例えば俺なんかは、すでにブラウン管より液晶の絵のほうがシャープでスマートでクールだ、というふうに**知覚の構造そのものがデジタルに適応してしまった**。写真だってそうだ。銀塩よりCCD※のほうがクールでシャープでスマートだ。知ってる「カッコよさそうな」単語を並べてるだけなんだけど……。

※CCD
Charge Coupled Devices。
デジタルカメラやデジタルビデオカメラの撮影素子に使用される。

つまりデジタルにはデジタルの良さがある、ということ。さらに、デジタルの良さに慣れてしまうと、アナログの魅力が色褪せてみえてくる、ということだ。

分かりやすく言えば、

「職場のあの子、どうも肌が荒れてて、口も臭いかも…それに引きかえ、オイラの脳内の茜たんは、**いつもお肌テカテカで匂いも全然ない**よ、最高ッッッ！」

ということなのだ。

肌触りや温かみというアナログ的な良さはデジタルにはないけれど、そのかわり「お肌テカテカ、ぷにぷに」とか「匂いがまったくしない」とか、そういうデジタル的な良さがあるわけですよ。「そんなの、全然良くないよ！」という人もいるだろうが、それはアナログ的な価値観で見るからだＹＯ！

人間の価値観は、時代とともに移り変わるものなのです。マルクスは資本主義から共産主義への移行は歴史の必然、と言っていたが、俺は**アナログ恋愛からデジタル恋愛への移行こそが真に歴史の必然であろう**と、そう宣言したいです。

デジタルならスペックは自由自在、しかも地球に優しい

また、萌えの世界はデジタルなので、どのような設定も脳内で自在に調整可能だ。三次元のアナログ恋愛は、設定を変更することが難しい。年々、歳は食っていくし、卒業してしまったらもう学園ドラマは演じられない。不景気なので、収入もそうは思ったように増えないだろう。ちん

ちんのサイズも変えられないし、顔を作り変えようとしたら多額の手術費用がかかる上にリスクも大きい。昨日までフリーターという設定だったものを、明日から病院の医者という設定に変更することも、まず無理だろう。両親の家族計画に妹が含まれていなければ、もう一生妹には萌えられないし、姉もしかり。いや、**仮に妹がいたとしても、ジャイ子※のような妹だったらッ……！**

俺にも妹がいたんだけど、

「お兄ちゃん、私が友達といるときに、出てこないで！　キモがられるから！」

と、兄を恥さらしのように扱う、それは実に……**いい妹じゃないか！**　はぁはぁはぁ。いやまあ、俺の妹のことは置いといて。

ことほどさように、アナログの世界は、生まれつきランダムに作成された設定を変更することができず、しかもたいてい初期設定値が低くて不自由極まりなく、実につまらないのだ。俺の顔がキムタクみたいだったら、楽しかったかもしれないけどな！

アナログ恋愛は、あらかじめ与えられた自機のステイタスによって、まるっきり難易度が異なってしまうのだ！

イケメンの恋愛↓ＥＡＳＹモード

キモメンの恋愛↓ＶＥＲＹ ＨＡＲＤモード

イケメンの恋愛は実に簡単だが、キモメンは自機を飛ばすや否や鬼のようにタマが飛んでくる。

※ジャイ子
『ドラえもん』のガキ大将・ジャイアンの妹。漫画家志望。本来はのび太と結婚するはずだったが、ドラえもんが過去に干渉したためにのび太をしずかちゃんに奪われる運命に。

どうにか撃墜しても、**お返しのタマ**が飛んでくる。難しすぎるんだよ、アナログ恋愛は！　いくら努力したって、絶対にクリアできねえよ！

これに対して、デジタルなら、パラメーターの調整は自由自在だ。俺の意思の通りに、俺自身をコーディネートできるし（しかも一瞬で）、周囲の環境や登場キャラクターだって、どうにでも設定できる。

三次元世界では…

〈本田透〉	
職業	ニート
趣味	オナニー
知力	５２
武力	３４
魅力	2
金	－8000
兵糧	５１５
ちんちんのサイズ	12センチ

こんな最悪の俺でも、デジタルなら、いろいろパラメーターを改造できる

萌え世界なら…

〈ビョルン本田〉	
職業	医者
趣味	スキューバダイビング
知力	１００（ＭＡＸ）
武力	１００（ＭＡＸ）
魅力	１００（ＭＡＸ）
金	200000（ＭＡＸ）
兵糧	10000000（ＭＡＸ）
ちんちんのサイズ	18センチ

もちろん、デジタル入門期にはこうして嬉々として「俺、キムタク！」と自機を改造する面々も、次第に「**やっぱり、真の俺自身が愛されないと意味ないよな**」と気づいて徐々に自機のパラメーターを下げてアナログの自分自身に近づけていくわけだが、それはつまりＥＡＳＹモードに飽きたプレイヤーが自らの意思であえて難易度を少しずつ上げていくという主体的な難易度調整であって、アナログ恋愛の「**ヨーイドンで超ハードモード・絶対にクリア不可能**」という残酷な実情とは異なるのだ。

さらに、恋人キャラだって、

「姉」
「妹」
「母」
「幼馴染」
「弟」
「兄貴」

と、自在な関係性を設定可能だ。アナログで母とか妹に萌えはじめたら大変なことになるが、デジタルなら何でもありです。最近、自分の娘に手を出す鬼畜な父親とかが増えてるけど、デジタルなら娘でも全然ＯＫです。アナログの世界で、デジタルでしか許されないような鬼畜な行為に及んでしまう人間は、**妄想力が欠如している**のだと思います。デジタル世界で妄想する力がないから、簡単にリアリティを感じやすいアナログ世界で悪事を働くんだよね。ＤＱＮの性犯罪な

んてのは、だいたいそういう理由で実行されてしまうわけですよ。

「オタクって妄想まみれのキモイ連中だろ？」

とか言ってるから、妄想力を鍛える努力を怠って、目の前のアナログ女性を自分の妄想の餌食にしてしまうわけなんですよ！

三次元…アナログの世界には、一度壊してしまうと、もう回復できないという欠点がある。それなのに、ＤＱＮは三次元で暴れて、取り返しのつかない行為に及ぶわけです。この点、妄想力を鍛えて「アイ・ノウ・萌え！」と宣言し、「萌えマスター」になったオタクは、二次元世界では人に言えないあんなことやこんなことをしているかもしれないが、二次元はデジタルだからリセットも修復も自由自在。で、**二次元で妄想力を発揮しまくれるから、そのかわり三次元では羊のように大人しく生きていられる**というわけだ。

さらに言えば、デジタル恋愛にはアナログ恋愛と比べて、これだけのメリットがある。

アナログ恋愛…有機体なので、**経年劣化**する。いつか必ず、おばあちゃんになる
デジタル恋愛…デジタルなので、**永久に無劣化**。いつまでも若くて美しい

アナログ恋愛…大型なので**スペースを取る**。百人の愛人を囲おうとすると、阿房宮のような巨大建築物が必要
デジタル恋愛…**省スペース**で軽量小型。一台のＨＤＤ※に百人の萌えキャラをアーカイブできる

※ＨＤＤ
「ハードディスクドライブ」の略。数年前まではパソコン用語だったが、現在ではＤＶＤレコーダーやｉＰｏｄなどのデジタルＡＶ家電分野でも欠かせないデバイスに成長。

アナログ恋愛…新品の購入が極度に困難（一部の顧客が独占している）なので、**中古市場を巡らされる**

デジタル恋愛…**常に新品が手に入る。**仮に中古品でもデジタルだから中身は新品と同等

アナログ恋愛…購入するまでに**長い交渉と多額の資金**が必要となり、忙しい人には負担大。しかも交渉の末に売ってもらえないケースも多い

デジタル恋愛…ソフマップのレジに製品を持っていけば、即購入可能。しかも安い。**ポイントも貯まる**

アナログ恋愛…恋愛・結婚関係を続けるためには莫大な維持費がかかり、契約を解除する際にはベラボーな違約金を取られる。ドンファン※みたいな暮らしをするには、美貌または巨額の資金が必須。無駄な消費が多く、**地球環境の破壊**につながる

デジタル恋愛…結婚する際に婚姻届を役所に提出する必要がない。契約ではないので違約金も発生しない。次々とキャラを乗り換えられる。複数同時恋愛も自在。維持費はパソコンやテレビを動かす電気代ぐらいという**エコロジー仕様**

どうだろう。

※ドンファン
カサノバと並び称されるスペインのプレイボーイ。ドンファンは理想の女を追求するべく次々と古い女を捨てていくが、カサノバは女と別れた後も慕われるという点が異なるそうだ。

「安い！」
「小さい！」
「軽い！」
「地球に優しい！」
デジタル恋愛…萌えの素晴らしさ、お分かりいただけましたでしょうか。テレビだってエコな液晶、自動車だってエコカーの時代、**恋愛だって、エコな萌えがトレンドなんですよおおお！**

あ、石を投げないでください……。

いいんだよ、女が先に、年収がどうした、自動車がなんだと、男を商品として値踏みしはじめたんだから！　俺たち男は、**せいぜい顔と胸ぐらいしか見てなかった**じゃないか！
もちろん萌えの本質はこのようなところにはなく、精神に、愛にあることは、忘れないでいただきたい。これはあくまでも、恋愛資本主義の価値観で萌えを見てみるとこうなる、というシャレです。まあ、半分本気なんだけど。

キャバクラは宝くじ、彼女はリース、風俗はレンタル、結婚は長期ローン

俺の見るところ、アナログ恋愛の世界＝恋愛資本主義社会における恋愛というのはおおむね次頁の図に示したような四つのプログラムから成り立っている。

キャバクラ＝宝くじ
女
ハズレ
ハズレ
ハズレ
くじ購入
非イケメン
女
当たり
くじ購入
払い戻し有
イケメン

風俗＝レンタル
イケメン
DQN
女衒（ゼゲン）
ホスト
上納
貢ぐ
女
レンタル料金
レンタル120分
非イケメン

恋愛＝リース
ブランド
グルメ
旅行
散財
彼女
リース料金
長期リース
彼氏

結婚＝ローン
家
自動車
ヨン様
大散財
嫁
解約時に莫大な違約金が発生！
ローン支払
永久所有
夫

■アナログ恋愛の四つの購入方法
買取ローン契約を解約すると悲惨なことに…

どうですか！

まず『SPA!』が一時期やたらプッシュしていたキャバクラ。女の子とお話ができて、もしかしたらヤレるかも…と期待させる宝くじという触れ込みだが、これはまあ、限りなく**信用詐欺**みたいなものだ。どうせモテない男が通っても、「ハズレ」しか入っていない箱からくじを引かされているだけなのだから。

俺のおかんは、まだキャバクラがなかった時代だったんでキャバレーというのを経営していたんだけど、ずらーっと美人のオネーチャンを店に並べて、『お水の花道』※みたいな感じで打ち合わせするわけだよ。で、おかんが、

※『お水の花道』フジテレビで九〇年代末期にオンエアされていたドラマ。水商売で働く女性たちを描いた。ヒロインはすでに30歳なのに独身、人生がけっぷちという設定で、負け犬問題を先取りしていたのだろうか。原作は漫画で、城戸口静が原作、理花が作画を担当。

「客に簡単にやらせたら、商売あがったりでしょう！　客にはほいほいやらせちゃだめ！　やらせてやるという期待を持たせて、なるべく引っ張ること！」

という立派な経営方針を女の子たちに指示するんだ。いい経営者じゃないか……。子供心に、**俺は大人になったら絶対に女を信用できない男に育ってるんだろうなあ**、って思ったぜえ！

まあ、キャバクラってのはそういうもんで、宝くじが外れても別に構わないと余裕かまして遊びにくるモテ系の男だけだろう、楽しめるのは。で、そういう奴は、「当たり」を引くわけだ。ああ、モテる奴はますますモテ、モテない奴はますますモテない！

俺はもうトラウマがあるから、今でもキャバクラとか連れて行かれたら一言も口が利けなくなるよう。また中野の横ちょの商店街の場末キャバクラの女とか、たいていがブサイクで馬鹿で、萌えるところがないの！　何かあるだろう、何か！と思っても、何もないの！　DQNの世界の女なんだよ！　そんな陰惨な酒の席で、遠くを眺めながら、ああーはやく家に帰って、子猫たん※に足で踏まれてえー、と**頭の中では二次元が駆け巡る**わけだよ。

で、キャバクラと違って、とりあえず支払った分だけ貸してもらえるのが、レンタル。つまり風俗だ。リースや買取ローンより無論割高になるけど、そのかわり、後腐れはない。即日返却なので、**メンテナンスフリー**だし。でもまあ、やっぱり高いよね。しかも、風俗で使った金は、DQNイケメンに流れる可能性が一番高い。だいたい経営してる奴がDQNだしね。それを思うと、やっぱり極力避けたいところ。まあ丸まる持っていかれるだけのキャバクラよりはマシだけど。

あと、俺みたいなモテない男がヘンに風俗に詳しくなってフィギュア体型の超美人の子とか知

※子猫たん
ういんどみるのエロゲーム『魔法とHのカンケイ。』に登場するロリサド娘。

っちゃうと、もうね、通常の恋愛ができなくなるからね。阿呆らしくなっちゃって。ずっとひもじい食生活を送ってきた人間が、ある日突然奮発して一万円の極上カルビなんか食べちゃったら、もう一皿三百八十円のオーストラリア産カルビモドキとか食えなくなるやん？　それと同じッス。だから、お勧めできねえ。やっぱ、ここも、モテる男が遊びで行くところだよね……。

次がリース。長期レンタルとも言うけど、まあ、いわゆる恋愛のことだ。でも、恋愛といっても、モテるための趣味（スノボだのダーツだの）やプレゼントやデートや何やかんやで無駄に消費させられるという点では、結局、風俗とかと本質は変わらない。最近はリサイクル・セックス※だの何だので、もう恋愛なんだか何なんだか分からなくなってるらしいし。ただ、豚のようにまぐわってるだけと違うんかと。**ぶきいいーっ、ぶきいいいいーっ！**

まあ、俺には縁のない話なので、よく分からないんだけどね……。リースは、メンテナンスが大変そうだよね。知らんけど。でも、このポジションが一番男には都合がいいような気もする。レンタルより小回りがきくし、飽きたら逃げられるし。だからこそ、**このシステムには、モテる男しか入れない**。ゆえに、俺には関係ないと。

最後が買取ローン契約。つまり結婚だが、これはもう…悪夢としか……。なにしろ、離婚したら慰謝料が発生する恐れがあるわけだＹＯ！　**嫁に全財産を巻き上げられたなんていう笑えない話も、出版業界ではよく耳にする**。だいたい、仕事の世界では天才なんだけど恋愛資本主義社会ではモテない系という心の純真な金持ち男が、ひっかかるわけだ。

さりとて、違約金を払うのがイヤでずっと一緒にいれば、その間、ずーーっと大量の維持費を

※リサイクル・セックス　安藤房子著『リサイクル・セックス』（WAVE出版）によると、なんとまあ最近の女は、元彼や男友達ともセックスするのだという！　この恋愛抜き・かつ・商売抜きのセックスを、リサイクル・セックスと呼ぶらしい。つまり、女を囲むDQNは、真面目に交際しなくても、恋愛しなくてもセックスにありつける、ということなのだ。で、女から距離を置いているオタクには、まったく声がかからない、と。

支払い続けねばならないわけで。もちろん、真に愛のある家族であれば、そんな経済上の話など問題にならないのだが、最近の家庭崩壊状態を見ているとね……。愛のない家庭を作ると、子供まで巻き込んで、またその子供が愛のない家庭を作って…という悪循環になるから罪深いよ。子供を愛さない親が、自分のやってることを罪だと思ってるかどうか知らんが。

いずれにしても、一生を共にしたくなるほど愛せる相手が三次元にいて、しかも相手も俺を同じように愛してくれる、なんて事態が起こらない限り、三次元における恋愛は金を消費するためのシステムでしかないわけだ。で、女のチェックの目を気にしながら、恋愛プログラムどおりの行動と発言をすることによって、その関係を維持しなければならない。俺なんか顔がキモメンだから、ちょっとでもミスると、一発でゲームオーバーだよ。なんせ自機が一台しか与えられてないしな！　そもそも、スタート画面まで到達できないしね。**何度コインを入れても、エントリーされずに返却口に戻ってくるんだよ！**　なんというか…ソ連の監視体制みたいだよ、まるで。ずっと女から、恋愛マニュアルにそっているかどうかを、チェックされ続けるんだよ……！

アナログとデジタル、それぞれのクリスマスの過ごし方

このように、モテない男にとってのアナログ恋愛は、ウンザリするほど金がかかり、神経も磨り減り、時間も失われる。それなのに、愛を得られるかどうかは分からない。

全てを犠牲にしてやっと結婚したと思ったら、嫁が、

「夫といる時の自分は、本当の自分じゃない」

とか言い出して、**ヨン様の追っかけを始めないとも限らない**。子供そっちのけでテレクラにハマった嫁が、ＤＱＮと不倫を始めないとも限らない。愛もないのに子供を作ってしまったら、さらなる不幸と悲劇の種を世に残すことになってしまう。

しかし、「萌え」なら？

萌えなら、愛が得られる。赦しが得られる。全部脳内妄想だろ！と言われるかもしれないが、そんなことをしたり顔で抜かす奴だって、脳内に刷り込まれている恋愛幻想を演じているに過ぎない。ただ、自覚がないだけで。

オタクは、日夜果てしなく妄想を繰り返すことによって、ついにはイメージした通りの二次元世界を体感できるようになる。一日30時間の妄想が生み出す奇跡！　オタクは今、三次元に勝った！　オタクは、自分がイメージした赦しの言葉によって、癒されるのだ。しかも、そこに到達するまでに、ほとんど金は使わない。

例えば、俺が、クリスマスイブの夜を、せめて女の子と過ごしたいと考えたとします。ところが、恋人はおろか、ガールフレンドすらいないと。そこで、行きつけの**ＳＭクラブで**、**一晩女の子をレンタル**したいんですが、と髭の店長に頼むわけですよ。

「クリスマス期間中は、８時間コースが特別割引で、たったの十二万円ですよ！」と店長。

高くね？と思いつつも、まあ、こんな俺みたいなブサイクなキモメンと、イブの夜を過ごさせようっていうんだから、それなりの**慰謝料**…もといお礼は支払うべきだよな…と諦めて、なけな

しの十二万円を払う。で、月末に家賃が払えなくなる、と。しかも、そこまでお金を払わせておきながら、女の子はいつもと態度が違っていて、

「ええー8時間もいるのー？　何するのー？　あたし、お腹すいたー。あ、煙草吸っていい？」

とダラダラモード。

ホテルの最上階のレストランで着飾ってワインを飲みたかっただけなんだけどなあ……とか思いながら、そんな予算はもうない。それに、せっかく十二万円も払ったんだからエッチなこともしないともったいないよな！と貧乏性がうずき、さっそく乳を揉んだりしているうちに強引に手コキで発射させられ、あれまだあと7時間も残っている。ああ、もう、疲れちまった。女の子も眠そうだし……。もう、寝るか……。

翌朝、女の子が勝手に帰ってしまった後で、一人寂しくホテルをチェックアウトして、その際にフロントのオバハンに、

「夕べの飲み食い代、支払ってくださいよ！」

と叱られる、と。

その頃、その女の子は、俺が支払った札束を握ってDQNなホストの彼氏にさっそく貢いでいる、**ギシギシアンアン**[※]、と。

まあ、三次元世界だと、そんな感じですよ。ああ。十二万円も支払って、愛のかけらもなかったな、と。DVDレコーダー買えばよかったよ、と。

……。

※ギシギシアンアン
2ちゃんねる語。セックスのこと。「ギシギシ」はベッドがきしむ音で、「アンアン」は女の喘ぎ声ではないかと言われている。自分がやってるわけではなく、隣の部屋から「ギシギシアンアン」と聞こえてくることが多い。

脳内シミュレーション、終了ッ！

やべえ、妄想しただけなのに、涙が止まらなくなってしまったあっ！　うわあああん！　俺の妄想力は強烈すぎて、身体に悪いな……。人間が妄想したことは、実現する！

ところが、二次元なら、アキバで、

『魔法とHのカンケイ。』　定価五千八百円也。

を買ってきて、8時間たっぷりと萌えでエロなラブラブ生活を楽しめるわけだYO！

「うわ…キモッ！」

「子猫様って言いなさい！」

「男って、ほんとに、どうしようもないわね～」

■『魔法とHのカンケイ。』（ういんどみる）

と、ろりぷにキャラ※に言葉嬲りしてもらえるわけだYO！

三次元の女に「キモッ！」なんて言われたら、その場で正中線四連突き（カラテの必殺技。俺が繰り出せるわけありません）を敢行して撲殺するところですが、二次元のろりぷにキャラに「キモッ！」って罵られると……、はぁはぁはぁはぁ。

※ろりぷにキャラ
丸っこくて、ぷにぷにしたロリータキャラ。

あぁっ、あああぁ〜っ！

……うっ！

……。

…ふう……。

これで五千八百円だよ、五千八百円！　**二十分の一のお金で、一万倍ぐらい幸せ**になれるんだよ！

というわけで、二次元恋愛は、経済的な観点からも実に効率的で素晴らしいのだ！　森永卓郎※先生じゃないけど、年収三百万円時代を生き抜くには、オタク化するしかないのだ！

※森永卓郎
経済学者。ミニカーコレクター。代表著書『年収300万円時代を生き抜く経済学』。メイド喫茶に入り浸っているらしい。

4——オタクこそは国の宝！

「オタク産業」は資源なき日本が誇る、外貨獲得の最大の武器

かつて、メディアが黙殺し、あるいは叩き続けたオタク市場。しかし、オタクは次々と増殖し続け、ついにはもはや無視できないほどの巨大産業となってしまった。バブル崩壊以後、なかなか次の一手を見出せなかった日本だったが、この巨大なオタク市場に、ついに**野村総研**も目をつけ、二〇〇四年にはオタク市場調査を敢行した。日経も『日経キャラクターズ』というオタク市場のキャラクタービジネスにスポットライトを当てた「オタクビジネス雑誌」を創刊した。ちょっと遅いんじゃないのという気もするが、テレビメディアなどよりもはるかにトレンドに敏感で実利主義的な野村総研や日経は、すでに頭打ちとなった恋愛資本主義市場に見切りをつけつつあるのだろう。そもそも、バブルが崩壊したと同時に、実際には恋愛資本主義市場も縮小の一途を辿っているのであって、メディアがそんなものにずっと拘泥していたために日本の不景気が長引いてるんだYO！

野村総研が昨年に発表したオタク市場調査によると、思い切り条件を絞り込んだと思しきオタク市場の規模は、すでに**二千九百億円**になるという。ドーン！

これはＤＶＤレコーダー市場やデジタルカメラ市場を上回る巨大市場で、「もはやニッチとは言えなくなっている」というのが野村総研の結論だ。ニッチどころか、巨大メジャー化しているのだ。

ちなみに、野村総研の定義するオタクは左の表に示すとおり。漫画オタクを「コミケに参加する人」と限定するのは実に厳しい条件で、現実にはコミケには行けないけれども漫画オタクという人も多いだろう（っていうか、日本全体を見渡せば、そういう人のほうが多い）。また、生活時間のほとんどをゲームに費やすゲームマニアというのも、そうそういないはずだ。ならば、野村総研の想定している「オタク市場」というのは、もう少しライトな層を含めた実際のオタク市場よりも、ずっと狭いエリアに限定されているということで、俺は勝手に、ライトなオタクまで含めた「実際のオタク市場」の規模を、約三倍の**八千億円程度**と試算してみました。

え、根拠がない、だって？　そ、そんなことないＹＯ！　ＤＶＤレコーダーだって、濃ゆいオタク御用達のフラグシップモデルみたいなコアな製品の出荷台数・売り上げ金額は、全体の１／３にも満たないんだけど、ライトオタクが手を出すミドルレンジあたりはわり

アニメ	TVアニメ・OVA・アニメ映画の視聴を日課とし、TVアニメは週2けた以上録画する人も多く、PCやHDDレコーダーを活用するなどITリテラシーは高い。年齢層は15歳から40代、コミック、ゲームと重なる度合いや、PCマニアとの相関が強い。
アイドル	アイドルに強い憧れや共感を持ち、生活における情報収集や応援活動の優先順位が高い。男女別に分かれる。年齢層は、アイドルの応援によく行く「現場系」が10—20代、「コレクター系」が20—30代。
コミック	同人誌即売会に一般参加する人、あるいは描く人。10—40代まで幅広く分布。ジャンルは細分化し、コスプレや字書きといった派生系も存在。
ゲーム	生活時間のほとんどをゲームに費やすヘビーユーザー層。13—24歳の若年層と30代に分布。家庭用ゲームは沈滞気味のため、PCゲームに流れつつある。メーカーと盛んに情報交換し、ゲームの拡張や改造にも参加する。
自作PC	文書作成などPC本来の使用目的を忘れ、組み立てる行為が目的化している層。大別すると（1）「リッチマニア」——都市部の18歳から30代。アキバで新パーツをゲットしたら速攻ベンチ、翌週には売り払って新パーツをまた物色する（2）「ジャンクマニア」——主に40代、少数の15—18歳。アキバの裏通りで激安品や中古品をあさる。都市民が多い。

■野村総研によるオタク分野の定義
（IT Mediaニュース 二〇〇四年八月二十四日）

と数が出てるんだＹＯ！　もちろん一番売れるのはエントリーモデルで、これを購入している人はオタクではないだろう。つまりＤＶＤレコーダーでいえば、

・東芝のフラグシップモデルＲＤ‐Ｘ５（約十五万円）を買う層
　↓野村総研がカウントしている濃いオタク
・東芝のミドルレンジモデルＲＤ‐ＸＳ36／46（約八〜十二万円）を買う層
　↓野村総研がカウントしていないライトなオタク
・東芝のエントリーモデルＲＤ‐ＸＳ24／34（約四〜六万円）を買う層
　↓非オタク

なんだＹＯ！　あ、つまり、マニア度が高くなると、高いレコーダーを買う、ということね。しかも、複数台買うんだよね。**俺なんかＲＤ‐ＸＳ53が出たとき、まとめて2台買った**もんね！で、オタクのレベルが下がっていくと人数は増えるが、出費金額・購入台数は減っていくので、まあだいたい、濃いオタクとライトオタク、合わせて八千億円なの！

ま、まだ文句あるんですか？

お、俺はよう、俺はそろばん一級なんだよう！　足し算引き算は大の得意なんだよう！　だから、間違いないよう！

そして野村総研の結論は……、

この層は
「独自の価値観に基づいて金と時間を優先的に配分する消費行動」
「自己流の解釈に基づく世界観の再構築と二次的創作活動」
を繰り返して
「理想像を追求している」。

（ＩＴ　Ｍｅｄｉａニュース二〇〇四年八月二十四日）

というわけで、つまりこれはあれだ、「萌え」だＹＯ！
「恋愛資本主義市場から飛び出して、独自の価値観に基づき、自分自身のために消費する」
ほら、萌えの定義と同じじゃないですか。しかも、
「世界観の再構築による理想の追求」
ほら、やっぱり、萌えですよ。「俺の俺による俺だけのための恋愛」を、一生を費やして作ってるんだＹＯ、俺たちは。**レオナルド・ダ・ヴィンチが生涯『モナリザ』に手を加え続けて、理想の萌えキャラ・モナリザを追求し続けたのと同様、**オタクは自分だけの萌えキャラを目指して走り続け、妄想し続けるのだ。
パソコンのパーツを組み立てるのは萌えなのか、と言われるとちょっと自信ないんですが、でも俺も自作パソコンに「エヴァ弐号機」とか「初号機」とか名づけて、デスクトップも起動音も全部アニメのキャラものにカスタマイズして可愛がっているから、やっぱ、これも萌えだね！

つまり！　萌え市場は、国内だけですでに八千億円市場ッ！　まもなく、一兆円を突破する超巨大インディーズ産業ッ！　これをニートだの引きこもりだのと笑う奴こそ、無知蒙昧！　日本経済の変遷から取り残された…負け組ッ！　俺たちオタクが、勝ち組なのだ！

しかも、「オタク経済学者」として世直しのために立ち上がった森永卓郎先生は、俺よりも強気だ！　森永先生は、夕刊フジのＷｅｂコンテンツ『森永卓郎サラリーマン塾』において、野村総研の二千九百億円という数字を「**けた違いの過小推計**」と断定。

まず、取り上げる分野が問題だ。アイドル市場とアニメ・コミック・ゲームの市場は、完全に異なっている。

アイドルマニアというのは、美空ひばりや石原裕次郎といった昭和の大スターや、それ以前の歌舞伎役者の時代から存在した、どちらかと言えば古典的なマーケットだ。

最近急成長しているオタク市場はそうではない。人ではなく、まるで恋をするように、キャラクターをこよなく愛する人々が増えているのだ。

（夕刊フジＢＬＯＧ二〇〇四年九月八日号『森永卓郎サラリーマン塾』）

そう、森永先生は、

「萌え市場をカウントしていないじゃないか、ゴルァ！」

とお怒りなのだ！　なのだ！　なのだ！　ドーンドーンドーン！

野村総研のリポートでも、アニメとコミックとゲームマニアの重なり度合いが高いと指摘しているが、その指摘のとおり、これらの市場を支えているのは同じ人、つまり「萌え」の人たちなのだ。キャラクターをこよなく愛することを「萌える」というのだが、野村総研のリポートにはこのコンセプトがない。もし、このコンセプトが分かっていれば、市場推計のやり方自体が異なっていたはずだ。萌え市場には3つの融合化が存在しているからだ。

第一は**メディアの融合化**だ。いまのキャラクターはテレビアニメ放送だけでなく、最初から関連グッズからイベント開催までのビジネス展開を考えて作られている。それが分かっていれば、市場推計の範囲をフィギュアや食玩、トレーディングカードといったモノ系からメイド喫茶などのサービス系まで広げられたはずだ。

第二は**消費者と供給者の融合化**だ。萌えの人たちは、しばしば自ら供給者となる。例えばワンダーフェスティバルで売られるガレージキットは、もはや模型産業と同じ地位を得ているのだ。

第三は、**新品と中古の融合化**だ。野村総研の市場規模推計は新品だけに限っているが、萌え系の人々は、新品と中古の差別をしない。中古品を取り扱うショップは多いし、マニア系の出品が多いと言われるヤフーオークションの年間取扱高は、昨年度5000億円にも達している。

これらのことを踏まえれば、おそらく**オタク市場は現時点ですでに数兆円の規模に達して**

いるだろう。

（夕刊フジＢＬＯＧ二〇〇四年九月八日号『森永卓郎サラリーマン塾』、太字は筆者）

「萌えキャラを中心としたメディアミックス展開」
「消費者が生産者でもある、オタク市場独自の構造（永久循環）」
「中古もまた、新品（永久循環）」

すでに本書でも説明したこれらの萌えオタク市場の特徴を踏まえれば、森永先生によるとすでに国内のオタク市場は数兆円ッ!!! ドーンドーンドーン！

俺の百億倍ぐらい経済に詳しい専門家の森永先生の試算なのだから、そろばん一級レベルの俺よりもずっと信用できる数字だよ。それが、ええ、数兆円だよ！ 凄いよ、凄いよ！

しかし、本当にオタク文化が偉大なのは、海外への輸出力を持ち、外貨を大量に獲得できる一大文化産業である、ということだ。そう、「ＯＴＡＫＵ」は日本からやってきた恐るべき外来文化として、世界各国を侵食しはじめている。すでに「ＯＴＡＫＵ」という言葉は各国に普及した。いずれは「ＭＯＥ」が国際語になる日も近いだろう。日本には石油などの資源がないので、中東諸国のように石油で荒稼ぎというわけにはいかない。そこで戦後は自動車などの輸出に力を入れたが、これとて原料となる資源を輸入してナンボの商売。あまり貿易黒字を出しすぎると「世界のジャイアン」ことアメリカに叩かれるし。そこで、**オタクの脳髄以外のなにものをも必要とし**

ない妄想産業による外貨獲得こそが、まことにもって国益に叶う救世立国の大事業なのである。

オタク文化は、オタキング岡田斗司夫先生をはじめとする多くのオタク有志の手で、徐々に全世界へと電波もとい伝播しはじめている。

世界に広まる「オタク文化」

本書で手塚治虫先生と並びオタクの祖として取り上げられているオタキング・岡田斗司夫先生はガイナックス退社後、文筆活動を中心にオタク伝道の長いオタクロードに出発した。一九九五年に東京大学で「オタク文化論」の講義を行っている。**昌平坂学問所の開設以来**、富国強兵のためのパワーエリートを養成する場であった東京大学で、ついにオタク文化が講義されるときが来たのだった。

もし時代を先読みして、社会を包括的な視点から捉える目を持ったオタキング先生がいなければ、オタク界はおそらく宮崎勤事件の後、ずっと内ゲバを繰り返して衰退していたかもしれない。オタキング先生は、とにかく時代を魁続けている。「魁先生」※と呼んでしまいたいぐらいだ。あまり縁起が良くないが……。

東大でオタク学の講義を行った一九九五年は、まさしく「オタキング、地上に降りる！」という記念すべき年になったのだが、この年に先生が朝日新聞社から出版した処女単行本『ぼくたちの洗脳社会』は、**金がすべてを支配する旧来の資本主義社会が終わったことを宣言**し、これからは個人が自分自身の価値観を持ち、お互いがお互いを洗脳・支配しあう「自由洗脳競争社会」に

※魁先生
この呼び名は、常に斬り合いのときに一番槍をつけていた新選組隊士・藤堂兵助のあだ名で…またウンチクが長くなるから、まあいいや。

なるのだ、という時代の預言書だった。
早いよ。早すぎますよ！　先生！
まあ、新しすぎる天才の常として、この本は一部の人間しかピンと来なかった。だから『バカの壁』※に比べると全然売れなかったと思うのだが、**その事実こそが俺に、「越えがたいバカの壁の実在」を確信させるのだ！**
さらに21世紀に入るや否や、先生は結婚制度の崩壊を予期して『フロン』という本を出版。「家庭から夫をリストラせよ！」と唱えた。さらにさらに、恋愛・結婚の崩壊によって30代独身女が社会問題化することを見越して『30独身女、どうよ？』という負け犬本を先んじて出版！
「21世紀、心ある女性はみんな30独身女になる！」
と唱えた（30独身女に「心ある」と褒め言葉を付け足したのは、先生の**武士の情け**であろう）。**後追いで出てきた酒井順子の本に比べると全然売れなかったと思うのだが、その事実こそが俺に、「越えがたいバカの壁の実在」を確信させるのだ！**

かくして、日本にオタク市場は根付いた。次は、海外だ！
二〇〇四年、イタリアのヴェネチア・ビエンナーレ第九回国際建築展において、日本館が行った「おたく　人格＝空間＝都市」という企画展示には、岡田先生も参加されている。アキバ＝萌え都市論の大著『趣都の誕生　萌える都市アキハバラ』※の著者・森川嘉一郎氏をコーディネーターとして、**イタリアの芸術祭の一部をコミケに改造**してしまったのだ！　そして、言ったもの勝

※『バカの壁』
著者は『唯脳論』の養老孟司。新潮社。二〇〇三年の大ベストセラー。

※『趣都の誕生　萌える都市アキハバラ』
著者は早稲田大学理工学総合研究センター客員研究員・森川嘉一郎。幻冬舎。オタク化が進む秋葉原を「趣味が都市を変える力を持ち始めた」と分析する。故に秋葉原は首都ならぬ「趣都」と呼ばれるのだ。

ちとばかりに、
「これが日本の誇るオタク文化です！」
と宣言！　ドーン！

本展示では、おたくの個室、数十万人が集うコミックマーケット、秋葉原の都市空間、さらにはネット空間などが、連続した箱庭として再現される。そこは情報化時代の建築空間としてしばしば思い描かれてきたような、無色透明な浮遊空間などではない。各々が物語のオーラをまとったアニメ絵の無数の聖像（イコン）が、内外の壁、床、そして画面を、汎神的に構成している。

近代様式の移植にともなって「いかもの」として抑圧され続けてきた偶像や聖像が、八百万の神々のように立ち現れ、流通し、コミックマーケットや秋葉原が〈聖地〉として巡礼される。喪われて久しいとされる都市的な祝祭空間と壮大なポトラッチが、そこには脈々と生きている。

おたく趣味は漫画、アニメ、ゲームなど、メディア横断的な特徴を持っており、また日本の現代文化としては例外的に海外に越境し得ている。

（「おたく　人格＝空間＝都市」開催主旨）

例えば**浮世絵の芸術性を最初に発見したのは外国人だった**。日本人には、自国の文化を軽く見るという悪癖があるらしく、海外で浮世絵を持ち上げられてから「あ、これ、芸術だったのか」なんて気づく始末。舶来輸入文化ばかりを持ち上げたがるのが、日本人の癖なんだよね……。恋愛資本主義にハマってる女が集めるブランドも、ほとんど海外じゃないですか、ねえ。俺たちオタクは、国内アーティストの作品ばかり集めるから、モテないんだよな！

日本館のメンバーはこの日本人の習性を逆手にとって、いまだ残存するオタク差別主義者を黙らせるべく、海外でオタクを芸術として認めさせる運動を開始したのだ。

なにしろ、

「わび」

「さび」

「もえ」

なんて書いて飾ったんだもんね。……すげえ！　萌えって、そんな偉大な文化だったのか！

ちなみに、すでにニューヨークでは、村上隆の製作するロリ巨乳フィギュアがウン千万円の値段がつくアート作品として認められている。「**犯人はフィギュア萌え族（仮）**」**なんて言ってる日本の某テレビ局は、時代遅れの国賊、日本の夜明けを邪魔する維新の敵**なのだ！

実は俺は仕事で岡田先生ご本人にお会いしたことがあるのですが、その時、先生はこう仰られたのです。

「もう僕も、さすがに萌えは分からないんで、（誰か萌えを語れるオタクが必要だね）※」

※（誰か萌えを語れるオタクが必要だね）この部分は幻聴だったかもしれません。

ドーン　ドーン　ドーン

そ、そうだ、ここは一丁、オイラが「**萌え・イズ・ビューティフル！　萌え・イズ・ストロング！**」と叫ばなければならないんだあああっ！と勝手に使命感に萌えた俺は、萌えの素晴らしさを熱く訴えるべく、この本を出版することにしたのでした。「全然違うッ！」とダメ出しされそうでガクブルですが。

「萌え」は、自由恋愛文化が普及している先進国に有効だ

萌えは、本当に海外でも通用するものなのだろうか？　前述のベネチアビエンナーレ「おたく　人格＝空間＝都市」では、

これはおたく趣味が、特有の自意識とセクシュアリティをベースにしていることと関係している。これまで、国家や民族、宗教やイデオロギーなどをベースにした文化圏は多々あったが、人格をベースにしたものはなかった。この、都市をも変える新たなる構造としての「人格」の浮上は、環境の情報化と密接に絡んでおり、資本とはまた違ったパターンで、容易に旧来の境界を越境し、場を形成する。

（「おたく　人格＝空間＝都市」開催主旨）

と説明されている。ここでいう人格とは「特有の自意識とセクシュアリティをベースにしてい

る」オタクのことであろう。すなわち、オタクの萌えは、従来の資本主義とも、宗教とも、国家ともまったく異なる「キャラ萌え」を中心とした新しい形の文化なのである。
すでに説明したように、宗教もまた、元々はキャラ萌えの魂を信仰の原点に持っている。旧来の宗教では、中心に据えられるキャラが「仏陀」や「キリスト」などの特定のキャラに固定されているのに対し、萌えにおいては、中心に据えられる萌えキャラを各自が自由に選択することができる。また宗教では特定の教団が権威を持つが、萌えではキャラこそが重要視され、コンテンツホルダそのものが権威を振りかざすことは困難となっている。つまり、基本的な構造としては宗教と萌えは同じなのだが、**萌えでは教会のような永続的な組織による支配・教典による永続的な教義体系が確立しない、すなわち各個人に自由がある（ユルい）という点が異なるのだ。**
したがって何らかの宗教を持つ文化であれば、萌えもまた受け入れられる素地はある。さらに言えば！　恋愛資本主義に代表される、現代の「自由恋愛文化」が普及している国は、より萌えとの親和性が高い。というか、萌えのニーズが絶対に存在する！　なぜなら、自由主義は、勝者と敗者を生み、必ず、恋愛できない人間を生み出すからだ。萌えは、そんな人間の魂を救うことができるのだ！

民族・国家・宗教・文化にいっさいの区別・差別なく、萌えは、人の魂を救う！

萌えとは「新興宗教オレ教」なのだ。信者はオレ一人、神様はオレが選ぶ、教義もオレが決め

る。どこまでも自由で平等で、求められるものは妄想力のみ。それが萌えという新しい信仰なのだ。いずれ、各国の恋愛自由主義も、日本同様に崩壊していくはずだ。理由は繰り返すまでもないだろう。

ということは、萌えは、いずれ歴史の必然として世界に伝播していくということになる。オタキング先生が**オタ法皇**にクラスアップして、秋葉原が全世界から巡礼者を集める聖地となる日は、近いのである。

5――「電車男」に騙されるな！

恋愛資本主義社会はオタクの価値を貶めることで体制を維持しようとしている

かつて、世界を「物質」(三次元)と「霊魂」(二次元)の二元論で捉え、かつ、三次元世界は悪であり二次元こそが真実の善の世界であると説いたグノーシス主義は、三次元世界こそが正義と信じる正統キリスト教によって徹底的に異端として弾圧され、滅び去っていった。同じように、現代においても、恋愛資本主義はオタクを異端として弾圧し、滅ぼそうとしているのである。

例えば、女性と話すときにキョドったりする気持ち悪い男・外見が醜い男を差別する「キモメン」という言葉が流行っているが、実は、**趣味・生き方である「オタク」と、見た目の話に過ぎない「キモメン」が、一緒くたにされているのだ。**この本を読んでくれている人も、もしかしたら混同しているのではないだろうか？　オタクといえば「キモッ！」と言われることが多いし、「キモオタ」＝キモメン＋オタクなんていう複合語もある。キモメンとオタクを兼ねると、モテない男の二冠王だ。さらに、仕事しないでいると、「ニート」というタイトルも転がり込む。

キモメン・オタク・ニートは、モテない男の三冠王です！

ニートが資本主義社会で非難されるのはまあ当然だろう。誰も仕事しなくなったら、すなわち労働者がいなくなったら、資本主義なんて終わりだよ終わり！　資本家が自分で工場動かすわけにはいかないもんね……。

同様に、オタクは、すでに述べたように恋愛資本主義に参加しようとしないので非難される。つまり、恋愛資本主義は、恋愛する人間がいなくなったら、システムが崩壊してしまう。資本主義から労働者が抜けたら終わりなのと同様、**男が恋愛しなくなったら終わり**なのだ。それ故、ことあるごとに社会は、

「オタクは犯罪者予備軍」
「オタクはロリコン変質者」
「オタクはストーカー」

というフィルターをかけた偏向報道を繰り返して、オタクを非難する。

ジャーナリストの大谷昭宏は、奈良の小学生誘拐殺人事件の報道に乗じて、

「犯人は**フィギュア萌え族（仮）**なのではないか」

と言い出した。それも、テレビ朝日という大メディアで堂々と。この時点（二〇〇四年十一月）で、奈良事件の犯人はまだ逮捕されておらず、どのような人物なのかまったく分かっていなかったわけだが、そんなことよりもとにかく「幼女を殺す人間は、オタクだろう」という先入観で騒いだわけだ。しかも、社会から非難されることもない。みんな薄々そう思っているのだ。宮崎勤事件の偏向報道以来、「オタクはロリコン犯罪者予備軍」というコモンセンスが出来上がっている

のだから。

その後、犯人が逮捕され、フィギュア萌え族（仮）ではなく、中学生時代から幼児に対する性犯罪を繰り返していたペドフィル※だったことが判明したが、大谷昭宏はそれでも自説を撤回しようとしなかった。

しかし、幼児殺害事件にかこつけて萌えオタク全般を性犯罪者予備軍呼ばわりした大谷昭宏は、「オタク＝キモメン＝犯罪者予備軍」というマスコミによるイメージ操作運動の**氷山の一角**に過ぎない。恋愛資本主義陣営は「オタク趣味の男は、潜在的な性犯罪者であり、気持ちの悪い存在＝キモイ男だ」という「常識」を、必死になって喧伝し続けているのだ。

この「常識」を喧伝することによって、オタク（恋愛資本主義の敵）と、キモメン（恋愛資本主義において差別される存在）を同じ種族にまとめ、恋愛資本主義の差別構造（キモメンが人間扱いされず、愛されず、搾取され続ける）を「合理化」しているわけだ。さらに、「オタクになると社会から犯罪者予備軍として差別するぞ！」というオタク文化への脅しにもなっている。**恋愛資本主義に逆らいそうなオタクとキモメンを一緒くたにしておけば、一石二鳥**というわけ。

つまり、恋愛資本主義においては、「オタク…内面的な問題で恋愛不能」と「キモメン…外見上の問題で恋愛不能」とは、**恋愛に参加できないという観点において、まったく同じもの**なのだ。いずれも、恋愛資本主義においては脱落者であり、差別されるべき異邦人なのである。実際には、オタクとキモメンとは別に関係がない。オタクでもイケメンはいるし、キモメンでもオタクじゃない人もいる。しかし、この恋愛資本主義社会では「健全な精神はイケメンに宿る」という「心

※ペドフィル
ペドフィリア（小児性愛）という性的倒錯を持っている人のこと。ペドフィルは子供に性欲を覚える人間のことで、ローティーンの少女を対象としたロリコンとは違う。また、二次元のキャラクターにしか愛情や性欲を抱けない人は「二次コン」（二次元コンプレックス）と呼び、ロリコンとも違う。

身一元論」が無意識のうちに刷り込まれているので、

イケメンのオタク…心の純真な人すてき。ギシアン
キモメンのオタク…ロリコン変質者、キモッ

というふうに外見によって区別されてしまい、イケメンのオタクはオタクと認定してもらえず（マニアとか言われたりして）、キモメンはオタクであろうがなかろうがオタクっぽいというレッテルを貼られるのだ。

オタクのやることはすべてキモイ。
オタクのなすことはすべてキモイ。
子供のオタク化は、人生の終焉。
オタクやめますか、人間やめますか。

恋愛資本主義社会は、このようなイメージを大衆に植えつけておくことで、男のオタク化を防止しようとしている。

野村総研がオタク市場の巨大化を認めた二〇〇四年になって、マスメディアは突如、オタク人種への大がかりな攻撃・侮蔑を開始した。ぐずぐずしていると、恋愛資本主義と結びつくことで

巨額の利益を得ていたマスメディアそのものが転落してしまう。それゆえ、体制維持のためになりふり構わないオタク攻撃が開始され、その中で問題の「フィギュア萌え族（仮）」という新しい差別用語まで飛び出したのだ。**「赤狩り」の次は、「オタク狩り」なのだ！**

すでに秋葉原では、行政によるオタク狩りが始まっているようで、路上看板の摘発・撤去に続いて、オタクの持ち物検査までも行われているという。ほとんど893[※]扱い。行政は秋葉原から萌えオタクを追い出し、元の電気街に戻そうとしているようなのだ。世界の聖地となりつつある秋葉原を解体し、歴史の歯車を逆に回して、資本主義の象徴たるべき電化製品街に戻そう、ということらしい。

しかし、たとえ秋葉原が陥落しても、萌えオタクはヘジュラ[※]を敢行し、新たなる約束の地に割拠し続けることは間違いない。そもそも、たとえ街を破壊しても、オタクの主戦場であるネットを封鎖することはできないのに。まあ、テレビ局は2ちゃんねるも潰そうとしてるようだが……。

「オタク＝キモメン＝性犯罪者予備軍」というオタクのマイナスイメージを決定付けたのは一九八九年の「宮崎勤事件」だが、「オタク芸能人」としての宅八郎の登場もまた、現在に及ぶ「キモメン」としてのオタクのイメージの形成に大きな影響を与えた。宅八郎先生は、**「ロンゲ・眼鏡・マジックハンド・フィギュア持参」**という男らしい姿でテレビにドーンと現れ、オタクという言葉を聞いたこともなかったお茶の間のおばちゃんたちを震撼せしめたのだ。

しかし宅八郎氏本人は実はイケメンのサブカルライターで、メディアの前では仕事として「気

※893
ヤクザのこと。

※ヘジュラ
イスラム教の開祖ムハンマドは当初メッカで布教活動を行ったが、迫害を受け、メッカからメディナへと活動の拠点を移した。これがヘジュラ（聖遷）。ヒジュラとも呼ぶ。

持ち悪いオタク」という「キャラクター」を役作りさせられていたのではないか?という説が、当時からオタクの間では流れていたようだ。それ故、「**その後、宅八郎はホストに転進した**」という「**宅八郎イケメン伝説**」は、「源義経ジンギスカン説※」および「イエス・キリスト青森で死んだ説※」とともに、今なおオタクの間で英雄伝説のひとつとして語り継がれているのである!

ともあれ、彼があえて演じていたキャラクターが世間にオタクのビジュアルイメージを植え付けた存在であることは間違いない。その宅先生をメジャーシーンに引っ張り出してきたのはまたまた出てきた『SPA!』である。

時代は下り、俺も『SPA!』のオタク特集に去年出たのだが、俺の持論である、

「人間の性、悪なり!
人間は、暴力に弱い!
そして、弱い人間を見ると、暴力を振るう!
それが人間だ!
オタクが虐められるのは、
オタクが無抵抗だからだ!
正義は、我らオタクにあり!
だが、力なき正義は無力なり!
21世紀のオタクは、
文武両オタクとなり、

※源義経ジンギスカン説
源義経は奥州で死んだとされているが、実は生き延びて海を渡り、大陸でジンギスカン(チンギス・ハーン)になったのだという説。フビライが日本に攻めて来たのは祖国を追われた祖父義経の復讐のためだったという。

※イエス・キリスト青森で死んだ説
十字架に架けられたのは実はイエスの弟で、イエスは青森に亡命してそこで死んだという説。青森にはイエスの墓もあるという。

身体を鍛えて暴力のオーラで
連中を黙らせねばならない！」
という「**オタク文武両道論**」と天下に問うつもりで熱く語ったところ、驚くことに**その全部が、全部が、全部がカット**されて、従来の『ＳＰＡ！』が広めてきたまんまの「オタク＝キモイ＝ニートでモテなくて童貞」というイメージに合致するように適当に編集されて記事にされてしまったのである。

もうさ、『ＳＰＡ！』全体がさ、そういう価値観に刷り込まれて支配されているわけよ。「**太陽は東から昇る」というのと同じレベル**でさ、「オタクはキモくてモテなくて童貞」という思い込みを現実だと思い込んでるわけですよ。

『ＳＰＡ！』がオタクを「気持ち悪い連中」として取り上げはじめた八〇年代後期から九〇年代初頭にかけては、恐らく、分かっていて意図的にキモいオタク像の捏造をやっていたはずなのだが、今の世代の『ＳＰＡ！』編集部は、昔の価値観をそのまま刷り込まれて信じている面々だから、悪気もないままにナチュラルに「オタク＝キモイ＝童貞」だと信じて記事を作り続けるわけですよ。で、呼びつけたオタクの面々の中にほとんど童貞がいないもんだから「意外ですねえ」なんて言い出して、怒り出すわけよ。**ウソつけこの野郎、記事が書きづらいだろうが！**みたいな。

まあ、童貞のほうがオタクとしては立派なんだけどね！　だって、二次元一筋ってことじゃないか！　男らしいよ！　男だよ！

「**30歳まで真性童貞を貫くと、魔法を使えるようになれる！**」という「童貞、魔法使いに進化説」

もまた、オタク界の英雄伝説のひとつして広く信じられているわけだが、どっちにしてもこんなセックスの価値が暴落した世の中で、童貞も糞もないだろ。そんなものは北方謙三先生が仰るとおり、ソープに行けばいつでも捨てられるものなわけで、童貞は恥どころか、むしろ今の乱れきった世の中では尊いものなのだ！　二次元に操を立てる童貞オタクこそ、オタクの中のオタク、**オタク界のニュータイプ**だろう。

俺はなかなかこう、おっぱいへの妄執が断ち切れなくて、ダメだ！　ダメだ！　おっぱいだけは三次元のほうが上だと思ってしまってるんだあああ！　おっ俺はオールドタイプなのか！　クワトロ・バジーナ※のように、圧殺されていく運命なのかあああ！

でも俺だって、まだアナルの処女は守ってるもんね！　まだまだ魔法使いへの道は閉ざされていないYO！　エネマグラ※にだけは手を出さないぞ、と。

「フィギュア萌え族」は捏造されても「スーフリDQN族」は捏造されない

いや、エネマグラの話はいいんですよ。マスメディアの話ですよ。

マスメディアは、宮崎勤事件以来、オタクを過剰に攻撃し、オタク＝悪と断罪し続けてきた。いや、もともとオタクを攻撃したかったから、宮崎勤事件を無理やり「オタクのオタク性によるオタク犯罪の発露」という話にしてしまったのだ。しかし宮崎勤事件の本質は「オタク」ということにはない。オタクはすべて、幼女を誘拐して殺害したいと潜在的に考えているのだろうか。

否！　否！　断じて、否！　むしろ萌えを極めれば極めるほど、妄想力を高めれば高めるほど、

※クワトロ・バジーナ
アニメ『機動戦士Zガンダム』に登場するエゥーゴのパイロット。その正体は、前作『機動戦士ガンダム』で活躍していたシャア・アズナブル。シャアはジオン軍の残党とともに逃亡していたのだが、逃亡先でハマーン・カーンという少女と交際（ロリコン）し、何かイヤなことがあってハマーンからも逃亡。サングラスで顔を隠して名前を変え、引きこもり軍隊生活を送っていたのだった。こんなダメ人間のクワトロは主人公の少年カミーユには殴られるし、愛人のレコアはイケメンのシロッコに寝取られるし、昔の愛人のハマーンには鼻で笑われてバカにされまくるし、もう踏んだり蹴ったり。クワトロは最終回でまたまた逃亡してしまう。その後、映画『逆襲のシャア』で逆ギレしてネオジオン総帥となり、地球の人類を粛清すると言い出すのだった。

※エネマグラ
男性用の大人の玩具。アナルに挿入して前立腺を刺激する。素晴らしい効果があるらしいが、どうもA感覚を開発してしまいそうなので使用に踏み切れない。

二次元に没入していき、**三次元はどうでもよくなる**のだ。

宮崎勤事件の報道以来、定着した偏見のひとつに、「オタクは現実と空想の区別がつかない危険人物」というものがあるが、そんなはずはない。もしそうなら、秋葉原のオタク軍団はスーパーフリーのメンバーのごとき悪行三昧を開始するだろう。そもそも現実と空想の区別がつかない状態とは、想像力がないということを意味する。二次元と三次元の境界がなく、世界がひとつに繋がっていると思い込んでしまうのは、想像力が乏しいから起こる現象なのだ。

そう…**DQN強姦魔軍団こそ、三次元と二次元の区別がついていない**のだ！

三次元の女性をレイプすれば彼女がどれほどのトラウマを植え付けられて苦しめられるのか、少しでも感じられる人間なら、あんな残虐な真似はしないだろう。現実と空想の区別がついていない人間とは、オタクではない。DQNだ。

俺的に説明すれば、DQNとは、恋愛資本主義の中にいるのだが、完全に愛が消えうせて（というか、愛という感情について未発達なままで）セックスへの欲望だけで生きている、実に羨ましい人々のことだ。オタクが感受性が強くて他人に対して暴力を振るったりすることを極度に嫌うのに対して、DQNの人々はどうも感受性がいまいち低くて、他人の痛みを思いやれない人が多い。ジャイアン的な俺様妄想の世界に住んでいるので、良心の呵責が薄いというか。

ゆえにDQNからは、梶原一騎漫画でしか許されないような暴力や強姦といったバイオレンス

な行動を、三次元世界で平然と実行してしまえる人が輩出されるのだ。しかも群れて行動することが多いんでヤバイよね。伝説のサークル・スーパーフリーとかね。女子高生コンクリート詰め事件※とか。こうやって群れてDQN行動を取れるのも、なんというか狩猟時代の動物的本能で動けるってことなんだろうなと……。

オタクは自意識と妄想力を発達させているから、あまり群れられないんだYO！「強姦」と「集団行動」という二大苦手イベントが合体した「輪姦」なんてとーんでもない！　とーんでもない！　だからオタクが性犯罪を犯す場合、まず、**地下室に監禁して「僕と友達になってください」とか世迷いごとを言い出す**「**監禁型**」となるのだ。

前述したように、俺が大検塾に通っていた頃は、行きがかり上DQNの友達もいっぱいいた。で、DQNの人々と出会って衝撃的だったのは、**彼らはセックスのことしか頭にないんだYO！**　24時間、セックスのことを考えている！　そしてチャンスとあれば、必ず、セックスする！　相手がブスだろうが電波だろうが関係なしっ！

オタクはナイーブでロマンティストだから、「まずはお友達からはじめて…」なんて悶々と妄想しているだけなのに、DQNは何も考えずに脊髄反射で女をさらっていくのだ！　考えていないというか、体が勝手にセックスする方向に動いているというか、**大脳の働きが不活発で小脳が精神を支配している**というか！

そういう、俺とはまったく異なる人種、それがDQN。結構、男同士では友情に篤かったりして、いい奴が多いんだけど、女に対してはまさに貪欲！　雄ッ！　女が泣こうが切れようが、関

※女子高生コンクリート詰め事件　一九八九年に東京都足立区で起きた凶悪な少年犯罪。集団で通りすがりの女子高生を拉致して監禁し、長期間に渡って集団レイプ＆拷問を加えたあげく、殺害してコンクリートに詰めて捨てたという。

係なし！
でね、これがね、ＤＱＮのほうがモテてね、オタクはモテなくてね……。女ってのはどうしてこう、強引な男に弱いのかなあと。
だってねえ……。オタクは、あまり恋愛しないんだけど、なぜかというと頭の中が「恋愛至上主義」なわけですよ。萌えという愛に満ち満ちているんだよ。安易な交際とか、心にもないセリフで口説くとか、そんなことできないんだよ。しかしＤＱＮってのは愛とかないのよ。セックス至上主義だから。**オタクが恋愛資本主義から外れていくグレイトフル・デッド**※**だとしたら、恋愛資本主義社会を荒れ狂う文字通りのセックスピストルズ**※なんだよ！
恋愛しないオタクと恋愛をすっとばしてセックスしたがるＤＱＮ、どっちも恋愛資本主義にとっては体制を乱す不穏分子なわけで、昔の日本はＤＱＮ狩りみたいなこともしていたけど（渋谷のチーマーを社会問題として扱って叩いたり。夜の渋谷センター街なんか、ＤＱＮしか歩かないんだからどうでもいいやん！）、最近ではすっかり立場が違ってしまった。
オタクは「犯人は、フィギュア萌え族に違いない」なんて言われて、何もしていないのにメディアに犯罪者扱いされる。それも、一人残らず、全員まとめて。メディアは、オタクがなぜオタクになったのか、という根源的な問題は無視し、オタクをニートと一緒くたにして扱い、「妄想だけに生きる非生産者」として叩き続ける。現実には、オタク市場は巨大産業に成長しているというのに……。
しかしＤＱＮは、語源である『目撃！ドキュン』がオンエアされた前後から、「乱暴だけど、実

※グレイトフル・デッド
アメリカのロックバンド。六〇年代のヒッピー・ムーブメント全盛期から野外コンサートを頻繁に行い、サイケデリックな演奏でカルト的人気を誇った。

※セックスピストルズ
イギリスのパンクバンド。一九七六年に『アナーキー・イン・ＵＫ』でデビュー。過激な言動と歌詞でマスコミを釣りまくって大ブレイクし、一九七八年解散。メンバーのジョニー・ロットンは「ロックは死んだ」という捨て台詞を残した。同じくメンバーのシド・ヴィシャスは恋人のナンシーを殺して自分も麻薬中毒で死んだ。

は心優しい普通の少年少女。親や環境によってDQNになっただけ」という暖かい扱いを受けることが増えた。オタクは恋愛資本主義そのものから逃亡したので脱北者※のごとき裏切り者扱いだが、DQNは恋愛資本主義の内部で駄々をこねているだけなので、まだマシ。しかも、今時珍しいことにセックスを非常に重視している。恋愛資本主義はすでに末期的で、恋愛どころかそれ以前にセックスの価値すら落ちているのだから、DQNのような雄ホルモンに溢れた面々は今となっては貴重な戦力なのだ。なにしろ『anan』『non-no』『vivi』といった女性ファッション誌が、こぞって「**どうすればセックスしたがらない男をその気にさせられるか**」なんて特集を組むご時勢なのだから。

だから、スーパーフリーや国士舘大学のサッカー部が集団による性犯罪事件を起こしても、マスコミは決してDQNを叩かない。集団レイプ事件が起きても、「**犯人は、スーフリDQN族**」と言い出すジャーナリストはいない。そんなことをメディアで言ったら、差別的だと叩かれまくるだろう。だがそれなのに「犯人は、フィギュア萌え族」と言うジャーナリストを見ても、怒る人間はいないのだ。一部のオタク…俺みたいな血の気の多い、DQN魂がちびっとだけ混じってしまってるオタクが切れるだけだ。ほとんどのオタクは心が優しくて争いを好まないので、言われるがままに耐えているのである。まあ、すでに、

「マスメディアなんてのは、**マスゴミ**に過ぎない。僕には関係ないね」

と、マスメディアそのものを捨て去っているツワモノもいっぱいいるわけだが。

そうそう、TBS『ニュース23』の筑紫哲也とかが代表例なんだけど、マスメディアはオタク

※脱北者
北朝鮮から亡命した人のこと。

とインターネット（特に2ちゃんねるを中心とした匿名BBS）をわざと混同して一緒にして叩くけど、なぜかというと、

・ネット＝マスメディアの支配から外れた人間＝テレビ局そのものの敵
・オタク＝恋愛資本主義の支配から外れた人間＝スポンサー・広告代理店（電通とか）の敵

ということなんだよね！　まあDQNはオタクに比べるとあまりネットやらなさそうだから、そういう意味でもメディアにとっては無害だよね。「君たちは本当はいい人なんだよ！」ってちょっと持ち上げておけばね。扱いやすいからね。
オタクは、少々メディアに持ち上げられても、へんに知性が高くて懐疑的だから「**けっ電通の犬が何か言ってるぜ！**」で終わりだから。
あと、DQNはやっぱり、**女にモテる**からね。だから、恋愛資本主義の中に組み込んでおくと、恋愛の活性化に役立つよね。たとえ、恋愛とは名ばかりの、愛のかけらもないセックスだけの関係だとしても……。以前、自民党の誰かがスーフリ事件を、
「元気があってよろしい！」
と言って怒られてたけど、あれはつまり、**DQNは恋愛資本主義のために日夜セックスしまくってがんばってくれてるんだから、少々の行きすぎは目をつぶろう**、ということだよね。
人の心に無神経で、空想と現実の区別をつける想像力がないDQN強姦魔が政治家に褒め称え

られ、人の心に敏感で、空想と現実の区別をつける知性を持ち、現実の人間を傷つけぬよう気を使いながら二次元の世界で生きている萌えオタクが、メディアによって犯罪者扱いされる。それが今の日本の末期的な状況なのだ！

ドーン！

また、女も女でさ。オタクとＤＱＮが並んでると、ＤＱＮのほうにどんどんなびくんだよね。少女マンガとかで「**乱暴で口の悪いＤＱＮっぽい男の子は、実は心が優しい素敵な人**」という刷り込みをされちゃってるから、ＤＱＮに手荒に扱われると、コロッと参ったりするんですよ、女というものは！

普段ＤＱＮな男が、空き地で捨て猫にミルクを飲ませてるのを偶然見かけて、胸がきゅん…ってなるわけだよ、この手のＤＱＮ推奨少女マンガでは。

■ＤＱＮが猫にミルクを…

■ちゃぶ台がえし

馬鹿ものおおおお！　ちゃぶ台、がーーーえし！

そんなわけないだろ！　乱暴で暴力的な奴は、ＤＱＮなんだＹＯ！
心の優しい男が、みだりに女を殴ったりするわけないだろ！　いいかげん、気づけ！　お前は馬鹿か？　反省能力がないのか？　猿か？　猿でも反省だけならできるぞ！
いつも乱暴な奴が、ちょっとだけ優しさを見せると、すごく優しいような気になるんだよ。俺たちオタクなんか、普段からずっと優しいのに、たまに怒ると「本当はそんな酷い人だったのね」だもん。でも、女が悪いんじゃないんだよ。メディアが悪いんだよ、メディアが。まあ、そんなメディアを鵜呑みにするのも愚かなことなんだけど。

なお、この「女はＤＱＮに弱い」という定理は、決して、少女だけのものではない。ええ歳こいても、女は「少女マンガや恋愛ドラマによるＤＱＮ＝優しい男説」をまだ信じているのだ。

岡田斗司夫先生の『30独身女、どうよ!?』の中で30独身女、つまり負け犬女は「いい男の条件」として「余裕のある男」と言い出すんだよね！

それに対して岡田先生は、

「余裕ある態度って、相手の女の子をなめ倒すところから生まれるんだ」

「本気で好意を持つと、相手の女の子に説教しちゃったりする男って、圧倒的に多いんだ」

と真実を教えてあげるのだ。愛だ、これは深い愛だ！

俺がこれっぽっちもモテないのは、すべての女性に対して真剣に接しているからだＹＯ！　だから地球上の全女性が、俺を「余裕のないダメ男」だと思っているわけだＹＯ！

ＤＱＮってのはセックスできればそれで満足なんで、つまり、「セックス〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜愛」という動物的な野生の本能で生きており、女の子をナメてるわけですよ。さらに女の子にちんちんしゃぶらせるから、**ナメてナメられているわけですよ**。すると、こういう適当な態度が、女から見ると余裕があってクールで素敵、ということになるらしいのだ。やっぱ阿呆かも……。

少女マンガにやたらクールな男が出てくるのも、ホストがクールなキャラを演じるのも、すべ

てはこの、女の**「自分に媚びないクールな男こそ、いい男」という錯覚**から生まれているのだと思います。真面目に考えると、彼女たちがこうなってしまう根源には、**「自分は無価値」**であり、**「いい男をゲットすることによって、価値を得られる」**という思い込みがあるのだろう。そしてこれは、恋愛資本主義社会が女性を恋愛というシステムに商品として組み込むために行った洗脳の結果なのだ。だから彼女たちも被害者と言える。

で、その結果が、負け犬だよ！　幻のいい男を求めていつのまにやら30歳、若い女に男を奪われ、気づいたら相手をしてくれる男はいない……。いったいどうするんだ、ということだYO！

オタク界を叩き潰そうとする最大の攻撃、それは「脱オタ」という誘惑

マスメディアはしつこくオタクを叩いてきたのだが、オタクはしぶとく生き延びてきた。それどころかネズミ並みの増殖力をもって、増殖し続けている。その結果、とうとう負け犬をはじめとした女たちがあぶれはじめた！

追い詰められた負け犬にとって、もう男といえばオタクしか残っていない。そこで考え出した「生き残り作戦」が、オタクを自分に都合の良い男としてキープしてしまうという戦術だ。人間の女…三次元の女、とりわけ追い詰められた負け犬は、これからもどんどんオタクに対して高圧的かつ積極的になっていくわけだよ。

なんせもう、土俵際ですから！　**徳俵に指がかかってますから！**

みんなも注意しないと、三次元は危ないZO！

「一寸先は負け犬」だよ！

恋愛が商品になっているという構造上、**男と女は「支配＝被支配」という不平等な関係しか結べない**ので、女が「オタク＝価値が低い＝自分より下の身分＝支配しよう」と考えるのは、これはもう仕方のないことなのですYO！　何しろ、恋愛資本主義では、女はひたすら男をチェックして採点し続けている。恋愛という巨大な価値の体系に照らし合わせて、この男はどのあたりの順位にいるのか、常に探っている。で、オタクなんてのは順位をつければ最低ランクなので、女にとっては「こっちが支配してナンボ」という奴隷・ペット程度の存在でしかないのだ。だからオタクがうかうか負け犬についていったら、ペット・下僕・奴隷・キープ君・鶴太郎という立場に甘んじるしかないのだ。もちろん負け犬女だって内心では「最低ランクの男」を掴まされた気になってるから、ますます惨めになるわけだ。

哀れなものだ。ふっ……（ぶりぶりざえもん※の声で）。

負け犬にとって「オタクとくっつくしかない」という結論は出ているものの、オタクはやっぱりキモくて耐えられない、という女も多いことだろう。特に30歳過ぎは、ちょうど「オタク＝変態＝敗北者」という刷り込みが一番強烈だった世代なので。そこで、さらにさらに巧妙な罠が考案されたのだ。

※ぶりぶりざえもん
臼井儀人の漫画『クレヨンしんちゃん』に登場するブタ侍。アニメ版ではなぜかクールな美形キャラの仕事が多かった故・塩沢兼人が声を当てて人気に。

それが…それが「**秋葉原 恋の脱オタストーリー**」だッ!!

二〇〇四年後半、負け犬が社会問題化するとともに突如流行しはじめた新しい恋愛のトレンド「秋葉原 恋の脱オタストーリー」とはどういうものかというと、

・秋葉原系のオタククくん（童貞）が
・知的な年上の美女と出会い
・悩みながらも恋愛をはじめて
・脱オタ（オタクを抜けること）して恋愛を成就させる
・めでたし、めでたし

というちょっとイイお話なのだ、が…よくよく考えると、これ、オタクにとってはめでたくもなんともない。つまり、「オタクが（オタク女以外の）彼女と、ファッション雑誌やドラマで描かれている『恋愛』をするには、オタクをやめなければならない」という「脱オタによる恋愛資本主義への参加の勧め」なのだ。

「**オタクやめますか**。

恋愛あきらめますか」

という、ぷっろろっぱがーんだ！なんだYO！　オタクを『オズの魔法使い』における「かかし」扱いしてるんだよ。差別的にもほどがある！

この脱オタ恋愛ストーリーの流行は、2ちゃんねるの毒男板（独身男板。その名の通り、独身男が集まる空間）において「電車男」という伝説のコテハン※が登場したことに端を発する。電車男という一人のアキバ系オタクが、電車内で女性を酔っ払いのオッサンから救ったことによって、偶然、恋がはじまる……ララ……らーぶそーんぐをうたおおおおっ！　あああーっ！　エルメス、キター！　大人のキス、キター！　脱オタ、キター！という、そんな感じの話。

まあ、昔のトレンディ・ドラマが劣化したみたいな話というか、**韓国の恋愛映画『猟奇的な彼女※』**を腐らせたみたいな話なんですが、これがBBS上で「実話」としてリアルタイムに進行したんですYO！

こちらはオタク、恋愛経験なんかほとんどない。あっちはエルメスのティーカップを助けてくれたお礼としてプレゼントしてくる、恋愛資本主義バリバリの女。

文字通りの…異種格闘技戦！　しかも、あっちルール！　絶対的な不利ッ！

で、電車男は、どうしていいのかわからなくなり、毒男（2ちゃんねるの独身男板にいる独身男）たちに助けを求め、アドバイスを貰いながら恋愛資本主義デビューを果たす…という話なのですが、もうね。ここまで書いてきただけで、ちゃぶ台を引っくり返すに値する話なんですが、これがね、新潮社から出版されて何十万部も売れた。しかも、女性が買っているという。さらに、『ヤングサンデー』や『ヤングチャンピオン』など、四つの漫画雑誌で同時に漫画化して一大キャンペーンを展開っていうんだから。驚きというか、**れ、恋愛資本主義は、おっかねえ！　恋愛資本主義は、信用できねえ！**とガクガクブルブルですYO！

※コテハン
「固定ハンドル」の略。ネットで自分の名前（ハンドルネーム）を固定して使うこと。毎回違う名前を使うのが「捨てハン」。

※『猟奇的な彼女』
韓国の恋愛映画。インターネット上の小説から人気が出て出版され、映画化された。内容は、電車の中でちょっとおかしな女の子と知り合いになって振り回される男の子の話。つまり「電車男」は『猟奇的な彼女』の…。

この電車男、結局エルメスと恋人になるかわりに、脱オタを迫られるのだ。
「私がいれば、もう同人誌いらないでしょ？」
と圧力を加えられる一方で、
「大人のキスできる？」
と恋愛ドラマの観すぎのようなセリフで迫ってくるエルメス。結局、電車男は、脱オタ↓エルメスとの恋愛という道を選ぶわけだが、毒男たちのほとんどは、
「頑張れ！」
「脱オタだ！」
「大人のキス、キター！」
と無邪気に電車男を応援するのだった……。みんな、人が良すぎるよ、優しい、なんて心の優しい人たちなんだ！　俺は「ケッ、こんなの捏造に決まってんだろ！」の一言で片付けていたのだが、それに比べて毒男板のみんなの温かい友情、優しい心……。電車男スレは、まるで、楳図かずお※の名作『漂流教室』※の最終回のような大団円を迎えたのだ。
「俺たちはもうオタクをやめられない、秋葉原から抜け出して恋愛の世界へ帰ることはできない。しかし電車男よ、お前だけはあっち側の世界へ戻ってくれ！　お前は、俺たちの希望なんだ！」
と、輪になって電車男に友情の念を送り、電車男を恋愛世界へと帰還させていく毒男たち。ああ、なんて、いい話なんだ。しかもこれは、ネットでリアルタイムに進行している、「真実」の物語なのだ。

※楳図かずお
漫画家。『まことちゃん』『漂流教室』『おろち』『怪』『わたしは真吾』『14歳』など多数の名作がある。恐怖漫画が多いが、ギャグ漫画やＳＦも手がけている。

※『漂流教室』
楳図かずおの最高傑作。ある日突然、小学校が丸ごと異世界に漂流してしまい、子供たちは恐ろしいサバイバル生活に否応なく投げ込まれる。映画やドラマにもなっているが、原作とは大幅に異なる。原作は展開がハードすぎて、映像化困難なのだろう。

俺はつくづく、自分の心が薄汚れていることを反省したのだった。

しかし、何か、どうも腑に落ちない。そんなある日、ＡＶライターの安田理央さんのブログ※を読んで、俺のモヤモヤが何だったのかが分かったのだ。安田兄さんは若い頃はオタク趣味バリバリだったのだが、ある日**「これじゃ女の子にモテないから、脱オタしよう」**と単身脱オタを決意して、モテ系に。そのままバンド！　ＡＶ！と女だらけのモテモテ人生を送ることになったのだが、そんな安田兄さんが電車男を応援している毒男たちに、ちょっとがっかりしていたのだ。

「オタクをやめろって…**みんな、モテないから仕方なく、いやいやオタクをやってただけだったの…？**　オタクって、その程度のものだったのか…？」

かつて、モテるために心ならずもオタクを捨てて以来、オタクという存在にずっと憧れを持ち続けてきたであろう安田兄さんの「ショボーン」は、現役オタクを続けてきた俺の「どうなってんだよ？」というモヤモヤとまったく同じ気持ちだったのだ！　ドーン！

ただ単にモテないからオタクやってるのか？

彼女ができて「脱オタしろ」と言われたら大喜びで脱オタするのか？

みんな、オタク趣味は無価値なものだと自分で思っているのか？

かーーーーっ!!!

オタク毒男に喝だ、こりゃあ!!!

そうじゃないだろ！　俺は、俺はオタクに誇りを持って生きてきたッ!!　自分自身の意思で、

※ブログ
ウェブログ。インターネット上の日記サイト。コメントやトラックバックをつけられる。またサイトへのリンクが手軽に行えるので、他のサイトのコンテンツをウォッチするページとして最適。ブログが読者に受ければ、そのまま出版ということも。ちなみにこの本はブログやＷｅｂサイトのコピペではなく書き下ろしである。

俺は、二次元に萌えられる人間…オタクになったのだ!! 三次元の世の汚さに絶望したからこそだ！ こんな醜い世界、俺はとても生きていられねえ！ 俺はオタクだから、萌えを学んだからこそ、ここまで生きてこられたのだ！ オタクをやめるぐらいだったら、俺は、彼女なんかいらんっ！ 散れッ 去れッ！

……俺が苦しみ迷い、もう生きられない、もうダメだ、もう死のう、と落ち込んでいたときに、誰が俺の心を癒し、俺の命を救ってくれたのか。**萌えキャラじゃないか。二次元だよ！** 二次元がなければ、俺はとっくにあぼーんだよ！[※] それか、大量殺人鬼だよ。俺を追い出した学校を襲撃して、ちゅどーん、ちゅどーんってやってたYO！ では、俺をそこまで追い詰めたのは、誰だ。**女じゃないか。三次元の女だよ！** 三次元の女がいなければ、俺は今ごろもっと立派な人間になっていたよ！

大学時代、オタキング先生がオタクの世界を制覇するべく立ち上がるという立志伝アニメ『**おたくのビデオ**[※]』に感動した俺は、これからの日本はオタクだ、オタクが日本を支えるのだ、と閃いた。ぴーんときた。で、大学の食堂に友達を集めて、

「今までバンドやってきたけど、やめる！ 今日から俺は、オタクになる！ 今までもオタクだったけど、これからはオタク専業になる！ オタクの中のオタクになる！」

と宣言して、それから**恐ろしいくらいにモテない男になってしまった**のだが、すなわち俺は俺の意思でオタクを選んだのだ。そりゃ三次元に人間の彼女がいれば部屋も掃除してくれるし朝にゴミも出してくれるかもしれないし、便利っちゃー便利だよ。でも、オタクってのは、女とトレ

※あぼーん
2ちゃんねる用語。最初は自分の書き込みなどを削除されることを意味していたが、そのうち死ぬこともあぼーんと呼ぶようになった。

※『おたくのビデオ』
ガイナックスのOVA。岡田斗司夫が脚本を担当。八〇年代のオタク青春群像を描く。主人公・久保は大学のオタクサークルで「おたくの中のおたく・おたキング」を目指すことを決意する！ つまりは岡田先生の自伝、オタク人間革命とも言うべき作品であった。

ードオフで捨ててしまえるような、そんなものなのだろうか。

俺は大真面目に本気の話、三次元の女より二次元の萌えキャラのほうが大切だと思っている。二次元は裏切らねえ。三次元は、俺を裏切る！　それに阿呆で欲深だ！　エルメスのバッグが欲しいとか、かっこいい自動車でドライブしたいとか、**訳のわからないことを言い出す**。

若い頃…もう大昔の話になるけど、まあ、まだヌルめのオタクだった頃に、**何かの間違いで彼女ができそうになったん**だYO。っていうか、彼女もオタク趣味の持ち主だったので、オタカップル誕生か？って感じでした。オタカップルはいいよね…エルメスみたいな女と違って…オタク趣味を共有できるしね……。で、俺はライトノベル作家志望だった。そして彼女はライトノベルオタク。俺は当時、地震のために仕事も家も金も何もない状態。だから、さっさと自作のライトノベル…『SFF』というタイトルのね、女の子野球部の話を出版社に持ち込んでデビューする気まんまんだったんだけど、「**私がチェックしてあげる**」と彼女が言い出したんだよ。やめとけばいいのに、何か良いアドバイスを受けられるんじゃないかと思って、読ませてしまったんだよ。

するとね…彼女が何を言ったかというと……、

俺の最萌ヒロインのね、沢村優羽ちゃんのことをね……、

この沢村優羽ちゃんってのは俺の脳内ではピッチャーで、父親がロシア人か何かなのでハーフで背が170センチぐらいあって、手足は小林繁※みたく細いんだけど、耳がでかくて、デコがでかくて、かわいいんだYO！　母子家庭で育って幼い頃に母も亡くして、以来ずっと学園の寮で

※小林繁
元阪神投手。巨人のエースだったが、江川との三角トレードで阪神に追いやられた。引退後、川上哲治率いるさわやか新党から国会議員に立候補したが当選は叶わなかった。明石家さんまは若手芸人の頃、小林の物真似が持ちネタだった。

一人ぼっちで生きてきた…性格は弱気でオドオドしてるんだけど、実は大ボケをかますタイプで、意外とシニカルで、とか。俺の脳内では『ＳＦＦ』四部作で10年食える！　沢村優羽ちゃんの人生を描き切るっ！　よわよわな少女が、一人の強い女性へと成長していく姿を描き切るッ！　これは、俺の**オタク版『巨人の星』**※だ！　という遠大な構想が完全にできあがっていたんだＹＯ！

その沢村優羽ちゃんをね……、

「**こんな女、現実にいるわけないじゃない。いたら、見てみたいわね**」

と冷笑したんだＹＯ!!!

俺は泣いた、泣いた、悲しい、悲しい、オタク女になら理解されると思ったのに、この扱い。

■沢村優羽ちゃん
俺の脳内小説『SFF』のヒロイン。最大球速は140km/h

※『巨人の星』
梶原一騎原作・川崎のぼる作画のスポ根漫画。時代錯誤のスパルタ父ちゃん・星一徹という名キャラクターを生んだ。他にもイケメンライバルの花形満やキモメンライバルの左門豊作など、得がたいキャラクターのオンパレード。王や川上、長嶋が実名で登場するアニメも大ヒット。

俺にとっては、彼女よりも、沢村優羽ちゃんのほうが大事だったんだYO!
沢村優羽ちゃんは俺自身の自己投影だったんだYO!
父を知らず、母とも死に別れ、孤独にしょぼしょぼと地を這うように生きてきた俺にとって、沢村優羽ちゃんを脳内でいぢめていぢめて、それでも耐え忍ばせて、誰にも傷つけられることのない強い人間に成長させていくという妄想がさ、その妄想が、当時の「家も潰れた、親も死んだ、金もない、仕事もない、もう何もない」という、いつ死んでもおかしくない絶望的な状況だった俺を生かしていたんだYO!

沢村優羽ちゃんは俺の夢であり生きる希望だったんだYO!

それを…それを……。

結局、オタクだろうが、女は女だ。俺のような萌えオタクとは、相容れない。そして俺には、女より、脳内の萌えキャラのほうが大事だ！　そうはっきりと自覚した俺は、そのまま彼女の元からトンズラして、以後二度と会わなかったのだった。

目の前のセックスより、脳内の純愛だよ!!　セックスなんか吉原※に行けばいつでもできる。そんなものに俺は屈しない！　人間にとってもっとも重要なもの、それは愛だ！　愛なしに俺は生きられない、一日たりとも。俺の脳内妄想を嗤うような女と、一分でも一緒にいられるかYO!

ひるがえって、エルメスという女だよ！　ブランド物のティーカップをアキバ系オタクにいきなりプレゼントしてくる、うさんくせー、うさんくせー女。実にこれみよがしな女。**オタクを自分たちより一段下の人間だと信じて疑わない**、恋愛資本主義を戯画化したようなキャラクターだ。

※吉原
東京のソープランド街。元は遊郭があった。

■エルメスのカップを叩き割れ！

俺はエルメスなど、いらん！何が「大人のキス」だ！
今こそ、エルメスのティーカップを叩き割れ！
ガッチャーーン！

それでね。恋愛資本主義がオタクより上位の文化だと信じている負け犬や負け犬予備軍の女が、『電車男』を買って泣いて感動するわけだよ。「**オタク君に大人の恋愛を教えてあげられる私たちって、素敵やん？**」とか思ってるんだＹＯ！
ぺーっ、ぺっぺえっ！
ガッチャーーン！

「オタクだって、若ければ、脱オタさせてそれなりの男に改造できるかも…それにウブな童貞君だから、私好みに仕立て上げられるし、浮気するような度胸はないし」ってな感じで、負け犬女たちは、とうとう食い詰めたあげくにオタクに目をつけはじめたのだ。
「何がいけないのよ？　オタク君だって、脱オタできて彼女とセックスできるんだから、喜んでるじゃないの！」
だまらっしゃい!!

さがれ、さがれ、さがれおろうっ！
おんな、汝には、三つの罪がある。謹んで聴くがよい。
第一に、オタクは世界最先端の偉大な文化活動！　それをやめさせて、すでに死に体となっている恋愛資本主義に男を引きこもうとは、なんたる無知、なんたる**さげまん！**
第二に、自分をオタクより数段高いレベルに置いて、オタク男を支配しようとするその態度が恋愛資本主義に染まったバブル女そのもの！　本当に彼を愛しているのなら、彼のオタク趣味も受け入れるはずだ！　それを許さぬのは、愛がないからだ！　自分に都合のいいペットが欲しいだけなのだ！　同人誌を買う金を奪い、自分に貢がせるつもりなのだ！　**犬猫がほしければ、AIBO**※**でも飼っとれ！**
第三に、十数年もの間、**DQNと乳繰り合い**、さんざん恋愛の飽食を楽しんできたにも関わらず、いざ年を食って商品価値が暴落しはじめたとたん、何も知らぬ純真なオタクを狩って洗脳しようとは、厚かましいにも程がある！　この十数年、汝は同級生のオタクたちに、どんな態度を取ってきたのか！　無視と軽蔑と嘲笑！　そうだろう。それを今さら、掌を返して…おお、おお、おぞましや、あさましや！　女はばけものでござる。ばけものでござるぞ～。

※AIBO　ソニーの犬型ロボット。ひところブームになっていたが、最近では見かけなくなった。壊れやすくて、すぐに手足がもげたとか、いろいろ恐ろしい都市伝説がある。

俺は、「電車男」ムーブメントを作り出し、オタクをオルグして解体しようとする恋愛資本主義に、逆らわずにはいられない。そうでなければ、俺のこの35年の人生は、いったい何だったのだ。すべて、無駄ごとだったというのか？

否！　否、否！　間違っているのは、エルメスのほうだ。

正義はオタクにあり！

俺は、いかに『電車男』が売れ続けようとも、エルメスに向かって、

「やーだよー！　ハヒフヘホー！」※

と叫んでお尻ペンペンせずにはいられないのだ。

――「電車男神話」は「恋愛資本主義」の商品だった

「電車男」が真実の話なのか、捏造なのかはどうでもいい。俺が問題にしたいのは、「脱オタ＝恋愛＝幸福」という反オタクムーブメントがメディアで展開されていることそのものなのだ。

朝日新聞の書評で、作家の高橋源一郎は『電車男』をこうレビューしている。

『電車男』は、正確には、3月14日から5月17日にかけての「物語」だ。しかし、この本は、**掲示板に掲載された最後の日を素知らぬ顔で削除**し、その前日までで完結させている。

なぜなら、ネット上の「電車男」は「大団円」の後になってもなお登場し、「エルメス」と

※ハヒフヘホー
漫画『アンパンマン』に登場するライバルキャラ・ばいきんまんの口癖。ばいきんまんは毎回、特に意味もなく世間に逆らう。

の**性交寸前の行為**を書きこむ。それまで応援していた住人たちは、戸惑いを隠せず、そんなことは止めろと忠告する。だが、暴走しはじめた「電車男」は、それを無視するのである。

なぜだ？　住人たちを騙し果せたことで、凱歌をあげたくなったのか？　それとも、いつの間にか、掲示板上で拍手を浴びることが、彼の目的となっていたからか？　不可解なミステリーになるはずの「5月17日」を消し去ることで、この作品は、見事に「純愛」の顔つきをすることに成功している。

（朝日新聞二〇〇四年十一月二十八日、太字は筆者）

この「その後の電車男」をカットした理由は、言うまでもないだろう。エルメスと電車男が単なる露出狂カップルになってしまったら、「純愛物語」という商品として成立しないからである。そう、書籍『電車男』は、電車男スレから恋愛資本主義の商品としてふさわしい、都合の良い部分だけを抜き出されて、巧妙に編集されたものなのだ。

「何を大げさなこと言ってるのよ？　蛇足な最後を削っただけでしょ？」

ああ、おんなよ、汝は何も分かっておらぬ！　おろかな…おろかな…！　森田芳光の映画『家族ゲーム』から、最後の松田優作大暴れシーンをカットしたら、**映画全体の意味がまったく違ってしまう**ではないか。

『家族ゲーム』は、家庭教師の松田優作が、成績の悪い中学生に勉強を教えて名門高校に合格さ

せるという話。だがラストにどんでん返しがあって、松田優作が大暴れをはじめ、家族全員を半殺しにして終わってしまうのだ。つまり、**最後の土壇場になって実はこの映画が受験戦争批判のための映画だったことが明かされる**のだ。

昔、民放でこの映画がオンエアされたとき、監督の森田はわざと最後の乱闘シーンをばっさりカットして、受験勉強バンザイという内容の映画に作り変えてしまった。これは、映画をカットして上映するというテレビ局の不遜な態度に対するアイロニーだったといわれているが、いずれにせよカット編集によって物語はどうにでも作り変えることができるのだ。

書籍版がやったことは、それと同じことだ。**最後のどんでん返し、「実は純愛とかウソでした！露出セックス最高!!」という電車男の出したベロをなかったことにしてしまった。**

しかし、五月十七日の記述は絶対に必要なのだ！

「なんでよ？　いらないわよ、そんなエッチシーンなんか蛇足よ。誰も見たくないわよ」

そうだろう、お前は見たがらないだろう。**女という生き物は、真実から目をそらすために生きているのだから！**

恋愛資本主義では、恋愛はセックスによって完結する。セックスしたいがために恋愛をする。セックスしたいがために金を使い続ける。そんなふうにメディアが人々を煽り続けてきたのだ。ゆえに、**恋愛資本主義では、純愛は成立しない**。だからこそ、恋愛資本主義は、人の心を傷つけ、踏みにじり、一握りの人間を除いた大勢の人々を不幸にした。それ故に崩壊しかかっているので

はないのか。それ故に、たとえ脳内であろうと、神なき時代の人間が失ってはならない理想…純愛を追求する新人類、萌えオタクが発生したのではないのか。

『セカチュー』あたりから始まり、『冬ソナ』※で爆発した「純愛ブーム」は、「セックスばかりが氾濫して、純愛がなくなってしまった」という恋愛市場の惨状をなんとか復興させるための、恋愛資本主義の最後のあがきなのだ。その総決算ともいえるのが負け犬にオタクを与えて市場の崩壊を食い止めようとする「電車男」ムーブメントだったのだ。さんざん「セックスこそが愛だ」と刷り込んできた女たちに、今度は「お前たちのゴールはセックスではない、愛だ」と再度刷り込みを行わなければならない。恋愛資本主義の肥大化によって完全にバラバラになってしまった恋愛とセックスを、「純愛」というキレイゴトでもう一度つなげようとするプロパガンダ。カモネギたちがこれ以上オタク市場に流れてしまわないよう、「こっちにも純愛はありますよ」と呼び込みの黒服たちが言って回っている、それが「純愛ブーム」の実体だ。故に、電車男とエルメスのネット上でのセックス中継は描かれてはならないのだ。

純愛は、愛は、オタクにあり!!　恋愛資本主義に、真の愛はない！

だが『電車男』は五月十七日の「恋愛資本主義のゴールとしてのセックス」を消し去ることで、恋愛資本主義こそが真の愛を得られる唯一の道であり、オタクには愛はない、という逆の結論を導き出しているのだ！

蛇っ…！　蛇っ…！　恋愛資本主義は、狡猾な蛇だ。「オタクの犯罪性」を報道し続け、オタクを「一種の人格障害」であると印象付ける操作を片手で行いながら、もう一方の手では「脱オタ

※『冬ソナ』
韓国ドラマ『冬のソナタ』。主演はペ・ヨンジュン。二〇〇三年から二〇〇四年にかけて、日本のおば様の間にヨン様ブームを巻き起こした。

すれば、美人と恋愛できる」と囁きかける。だが、**俺は騙されない**。
負け犬は30年もの間、オタクを軽蔑してきた。今、食料難に陥ってセックスに不自由しはじめている負け犬女は、純真で心優しく、どうにでも御しやすいオタクに目をつけた。オタクでもなんでも、ちんちんがあれば男、とかそんな感じだよ。DQNが、穴があればなんでも女、とか考えてるのと、たいして変わらないのだ。内心では、今でも相変わらずオタクを軽蔑し続けているのだ。そうでなければ「同人誌をやめろ」などと言えるだろうか。オタクの誇りを捨てさせるような「踏み絵」をやらせるだろうか。
内心では軽蔑している男と付き合う……。**純愛主義者のオタクには考えもつかない世界**だが、それが実際にあるのが恋愛資本主義の恐ろしさよ。恋愛資本主義では、恋愛はすべて、セックスと金の交換によって成立するので、「支配＝服従」という関係になってしまう。対等の関係、平等の関係はない。これは、エルメスだけに限った話ではない。恋愛資本主義の下では、すべての女が、すべての男が、そういうふうに異性を「**恋愛マニュアルで高偏差値を取れる人間**」に改造しようとする。もちろん最初から高偏差値なら文句なし。ダメそうでも、なんとかしてマシにしようとする。しかもそれを「**教育**」などと呼んだりする。これはもう、人間同士の対等な恋愛ではないぢゃないか。
だから電車男がオタクに舞い戻ったら、エルメスに捨てられるだろう。そしてエルメスは、次のオタクを漁りに行くのである。結局は脳内妄想を三次元で演じているだけなので、相手は誰でもいいのだ。

善意を踏みにじられ、それでも微笑む毒男たちの美しさ

この「電車男商売」で一番かわいそうだったのが、そう、電車男を心の底から応援し、励まし続けてきた、毒男たちだ。電車男本人には「うさんくせえ!」と懐疑的だった俺も、毒男たちには、この世に、心の清らかな人間がまだこんなにもいたなんて…と感動した。ああ、なんと、自分は心が曲がってしまっているのか。なぜ俺は電車男を応援できないんだろう。

でも、『電車男』が出版され、50万部の大ヒットを飛ばしても、彼らにはビタ一文入ってこない。彼ら毒男の無償の善意は、恋愛資本主義にとっては、単なる搾取対象でしかなかったのだ。

「はい、付き合ってくれてご苦労様。もう帰っていいよ」

と、まあ、そんな扱い。ほとんど、**ザーメンぶっかけAVにおける汁男優**※たちのような人権のなさっぷりだ! なのに、まだ「いや、別にいいんだよ、これで」とにこやかに笑う毒男たちも大勢いるのだ。ああ、どこまで善良な魂の持ち主なのか……。**俺なんてスレに何も書き込んでないくせに怒ってるのにね。**

はっきり言って、電車男のログだけ読めば、よくあるB級小説なんだYO! ではなぜ「電車男」が感動的かというと、**純真で心優しい毒男たちのピュアなリアクション**が、今の恋愛資本主義社会では滅び去ってしまったものだったからなんだYO! つまり、**本当に感動的なのは、毒男たちなのであって、彼らこそが「電車男」の印税を受け取るべき**なのだ。だが、結局、彼らはただ利用されただけであって、儲けているのは恋愛資本主義側の人間だけだ。しかも、追い討ち

※汁男優
ザーメンAVに大量に登場する男優で、女優さんにザーメンをぶっかけるだけの役目。何十人も雇うので、当然低賃金。

をかけるように、アスキーがそのものずばり『毒男』※という単行本まで出すという。毒男板の書き込みをそのまま刷って売るらしいのだが、言うまでもなく書き込んだ毒男たちにはビタ一文も入らないわけだ……。あんまりだ…あんまりすぎる！

「電車男」は、最後には映画化※されるだろう。『セカチュー』『今、会いにゆきます』に続く、恋愛資本主義の崩壊を食い止めるための純愛映画として……。言うまでもなく、電車男は、「アキバ系だけど、ファッションに目覚めたらイケメンになる」そんな男になるだろう。決して、**坊ちゃんカットで牛乳瓶眼鏡でケミカルジーンズのデブ**としては登場しない。そんな人種は、そもそも恋愛資本主義市場に参入させるつもりがないのだから！

そうなのだ。電車男が真実か捏造か、という問題は、本質的にはどうでもいいのだ。問題は、「純愛」のネタを見つけるや否や、それを商品にしてしまう恋愛資本主義そのものの構造なのだ。そして、いよいよオタクが、恋愛資本主義の搾取対象として狙われるようになったのだ。だってもう、**オタク界にしか、純愛は存在しない**んだから……。

俺は許しがたい。善意を踏みつけにされても、それでも電車男の幸福を願って微笑み続ける毒男たちが、なぜ正しく報われないのか。自分の恋愛を、他人の善意を平然と売り物にできる人間が、なぜ金持ちになれるのか。

社会とは、人間とは、いったい何だ？　やはり、梶原一騎先生が言ったように、

「人間の性、悪なり！」

※『毒男』
アスキーの単行本。2ちゃんねるの「毒男板」（独身男板）の書き込みをコピペして集大成した内容になるという。テレビで面白おかしく紹介されたことにより、毒男達の反感を買った。そのせいか、現在のところ出版時期は未定となっている。

※映画化
とか言ってる間に、本当に『電車男』の映画化が決まってしまったようだ。二〇〇五年六月公開、製作・配給は『セカチュー』『いま、会いにゆきます』の東宝。これを…これを恋愛資本主義の陰謀と言わずして何とする！

なのだろうか？　悲しい。俺は悲しい。電車男よりはるかに感動的な純愛物語が、オタク世界には星の数ほど存在する。だが、それらは「オタクだから」という理由で恋愛資本主義から差別され、無視される。だが、オタクがオタクをやめて恋愛資本主義に屈服する物語は、パッケージ商品化されて大々的に展開されるのだ。

オタクを売った男が、勝ち組になれる。それが恋愛資本主義なのだ。

いや男だけじゃない。女も今、「オタクと交際して、そのレポートを金にしよう」と考え出している。実際、会員制の出会いサイトで、自分とオタクとの恋愛をリアルタイムに報告したり、いろんな人から情報を聞きまわっている女ライターがいるのだ。**俺、見たもん**。名前とかバラすと絶対に訴えるタイプだから書かないけどさ、反吐が出そうだよ！

電車男のあからさまな二番煎じ。今度は「イイ女」のほうから、オタク君の様子をレポートすれば、二匹目のどぜうが釣れるかな、という実に恋愛資本主義的な発想だYO！　寝とぼけてるというか、オタクを何だと思ってるんだろうか。**オタクはお前の立身出世のための踏み台かよ。**

エルメスを捨てさせ、コミケでコスプレさせてこそ、真の勝利

オタクと恋愛資本主義とは、絶対に相容れない。いわば、水と油、陰と陽、北斗と南斗。両者はまったく別の世界であり、同じ空間での共存共栄は不可能だ。だから心優しいオタクは秋葉原という聖地を作り、大人しく平和に生きていく道を選んだのだ。

にも関わらず、恋愛資本主義は、その秋葉原までをも奪い取ろうとしているのだ。「電車男」と

いうオルグ文書によって。
どうしてもエルメスとの恋愛という誘惑に勝てないオタクも多いだろう。しかし、冷静に考えてほしい。オタクがオタクをやめたら、何が残るというのだろう。多くの場合、たぶん、ほとんど何も残らない。オタクとしてのレベルが高ければ高いほど、そうなってしまうはずだ。そうなると、負け犬女に好き放題に洗脳されるしかない。内面に何もないままでは生きていけないのだから。もちろん、それはそれで一つの人生であり、「やめろー！　やめるんだー！」とは言えない。一応オタク界には出入り自由という建前がある。

だが、エルメスをオタクの世界に引きずり込んでこそ、オタクとしての勝利なのであり、今までのオタクとしての人生を肯定することができるのだ。エルメスのティーカップなど叩き割り、『月詠』※のマグカップでお茶会を開催してこそ、オタクのアベック、オタク同士のカップル！

なぜ電車男は、エルメスをオタクにしようとしないのか？　俺だったら、絶対にコスプレさせるYO！　まずはメイドさんのコスをさせて、部屋をお掃除してもらうYO！　オタクたるもの、みんな本当はそうしたいはずだ！　それでこそ、**二次元の妄想を三次元に逆輸入してこそ**、二次元の勝利であり、**オタクとしての幸福**なのではないのか。

エルメスが「オタクの良さ」を理解し、オタクとしての電車男を受け入れる。ああ、私は今まで、目を開けて寝ていたようなものでございます！　エルメスのティーカップなど、恋愛には不必要でございました、ヨヨヨ。泣き崩れるエルメスを抱きしめながら電車男が微笑む。

「大丈夫だよ、これからゆっくり、**僕と一緒にオタクを学んでいけばいいんだよ**」

※『月詠』
テレビ東京の萌えアニメ。フランスのイケメンオタク野郎ディミトリ・フロム・パリによる電波テーマソング「Ｎｅｋｏ　Ｍｉｍｉ　Ｍｏｄｅ」で話題に。

「ああ、電車男様、素敵！　愛よっこれが愛なのねーっ！」

で、最後は電車男がエルメスと一緒にコミケに参加してコスプレ三昧のラブラブ生活を送って大団円…というのが、本来、「純愛物語」としての「電車男」のあるべき姿だったのだ（そうか？）。

まあ、オタク市場の作品なら、まちがいなくそうなる。Ｌｅａｆの名作ゲーム『こみっくパーティー』※は、実際、そういう話だったし。最初は主人公のオタク趣味を嫌がっていたガールフレンドが、だんだんオタクの素晴らしさに目覚めて、最後はオタカップルになってめでたしめでたし。みたいな。彼女が、

「私、オタクのこと分からないし、自信ないよ……」

なんて言い出して己のオタクレベルの低さにめげたりするところが、萌えポイントッ！

「大丈夫、お前なら立派なオタクになれるＹＯ！」

と励ます、みたいな。

■『こみっくパーティ』（leaf）

あ、今、「脳が沸いてるんか」って思いましたね、そこの非オタクの読者の人ッ！　本当にあるんだよ、そんなゲームが！　大ヒットしてアニメにもなってるんだにょ！

もちろん、マスメディアは、決してそういう作品を大々的に展開しない。深夜にこっそ

※『こみっくパーティー』ＬｅａｆのＰＣゲーム。後にコンシューマーにも移植され、アニメにもなった。オタクの主人公が同人誌を製作してこみパ（コミケのこと）制覇の野望に燃えながらオタクの女の子との恋愛を…という八〇年代では考えられなかったポジティブシンキングなゲーム。

りと放映して、オタク以外の目には触れさせないのだ。むろん、恋愛資本主義に都合が悪いからだ。そもそも、このゲーム、**オタクが勝手に巨大な市場を築いていることや、オタク市場では消費者とクリエイターに区別がなく全員が平等な立場にいることや、オタクが単なるひきこもりではなく、夢と情熱を抱いて熱く生きている偉大な人間たちだということをすべて描き切っている**ので、恋愛資本主義にとっては封印してしまいたい作品なのだ！

だが、勝利するのはオタクのほうだ。恋愛資本主義はもう終焉に近づいている。オタクを無理やり恋愛資本主義市場に引っ張り込んで「恋愛資本主義が勝った！」なんて騒いでいる「電車男」は、もう末期症状だよ。**K－1のリングに曙を上がらせる**ようなものだよ。オタクを食い尽くしたら、恋愛幻想を抱かせるような商品は、何も残っていない。あとはＤＱＮのセックス三昧という荒涼とした現実だけが残る。もうダメだね。

そう、恋愛資本主義市場がオタクに大政奉還しなければならないＸディが、そこまで来ているのだ！　何しろ、オタクがこれ以上増殖し続け、彼らが三次元女を完全に放棄してしまえば、恋愛資本主義どころか日本がもたなくなるのだから。

「男は女とセックスしなければならない」という過去数千年にわたる定理を、オタクは覆した。

これはスゴイことだ。

「別にセックスしなくても妄想で生きていける」という発想は、常にセックスに支配されてきた

人類の歴史上、初めての**根源的な革命**なのだ。萌えオタクとは、『マトリックス・レボリューションズ』[※]の真の姿なんだよ！　な、なんだってー？
「電車男」は、恋愛資本主義の最後っ屁みたいなもの。アキバでのオタク弾圧は、新選組の起こした池田屋事件のようなもの。オタクの「**尊萌攘女**」**運動**は、社会のデジタル化という武器を得て、「大人のキス」などというアナログ技術に頼る女たちに勝利する。そりゃもう、圧倒的な戦力差で。大人のキスなんか風俗でいくらでも買えるだろうが、馬鹿にするな！　こっちには、**ネコミミという錦の御旗**があるのだ！

「愛」の大政奉還は、日本の第二の維新は、もうすぐ実現する。オタクは萌え続けることによって、二次元だけでなく、三次元世界の愛をも、取り戻すだろう。だから、秋葉原に踏みとどまって、オルグをはね除けて萌え続けるのだ！　今、オタクを抜けて負け犬女に飼われる道を選ぶという選択は、中・長期的に見れば決して得ではない。得どころか、**滅びの道**なのだ！　ドーン！
ちょっと悲しい話だが、たいていの人間は勝ち馬に乗りたがるもの。それが三次元の世の常だ。故に、そのうち、負け犬女のほうから勝手にオタク化しはじめる。というか、よく考えていただきたい。**何も負け犬を掴まなくても、若い女の子はすでにどんどんオタク化してますやん！**
これからの若年層では「オタク化」と「ＤＱＮ化」の二極が進行し、中間の「フツーの恋愛資本主義の住人」は絶滅する。もちろん、勝つのは巨大市場を握ったオタク軍団のほうだ。ＤＱＮには縮小する一方の恋愛資本主義市場しか残されない。しかも、そこは崩壊が進み、『Ｄｅｅｐ

※『マトリックス・レボリューションズ』
二〇〇三年に公開されたアメリカ映画。監督はウォシャウスキー兄弟。『マトリックス』三部作の完結編だが、結末は肩透かし気味。

Ｌｏｖｅ』※のようなヴァリやばい世界だ。まあ、だから、負け犬女のことはあまり考えなくても良いのだ。

それでもなお、くらたまや酒井順子を信奉し、オタク化をあくまでも拒絶する強硬派の負け犬女は、五稜郭まで追い込んでしまえ！　それはそれで天晴れな武士道！

オタクの夜明けは、近いぜよ！

さあ、今こそみんなで、エルメスのティーカップを叩き割れっ！

■エルメスのカップを叩き割る

注…本物のティーカップを割るのはもったいないので、やめましょう。

※『ＤｅｅｐＬｏｖｅ』スターツ出版。著者はＹｏｓｈｉ。携帯電話小説からスタートして出版され、映画やドラマにもなった。映像化された『アユの物語』の後、『ホスト』『レイナの運命』『パオの物語』と続く。一冊目だけをちょっと読んで陳腐だと馬鹿にするインテリ読者が多いが、全部読むとこの作品が『火の鳥』に匹敵する壮大なスケールの物語であり、Ｙｏｓｈｉ先生が手塚治虫の系譜を継ぐ天才であることが明らかになる。いや本当に。

第3章

★「萌え」の力

1——萌えと鬼畜

愛が塞ぎ止められると鬼畜になる

さて、我々人類が萌えることによって、具体的にはどのような素晴らしいことがあるのだろうか？　萌えは霊験あらたか！という体験談を交えながら、萌えの機能について解説していきたい。

サブカル系によくある、記号論で萌えを語るという方法は、実はまったく何も語っていないのと同じだ。「萌え」の表層を分析して「ネコミミ」「姉」「妹」「ナース」「しっぽ」…と属性を分類していったところで、根源的な疑問は解決できない。むしろ、分析を続けることによって、どんどん萌えの本質から遠ざかってしまう。ネコミミだろうが巫女さんだろうが、萌えの本質は一つ！

萌えとは、魂だッ！

熱いパッションッ！

愛っ！　愛なのだ！

ジョージ秋山の漫画『デロリンマン』※に登場した正義の味方オロカメンは、こう言った。

「**人は誰しも愛について語るが、愛を見たものはいない！**」ドーン！

そうだ、恋愛資本主義の世界には、愛を名乗る商品が腐るほど流通している。だが、現実には

※『デロリンマン』
救世主デロリンマンがせっかく地上に降臨したのに、顔がキモメンなので誰にも相手にされず迫害され続けるという、実に痛々しい人間世界の暗部をさらけ出した漫画。オロカメンは、そんなデロリンマンに「力無き正義は無力なり！」と大山倍達みたいな説教をする、救世主の師匠ともいうべき存在なのだ。

どうなのだ、愛はどこだ？ 日本は経済を復興させ、あらゆるものを手に入れた。だが、**愛だけがない！**

第1章でも説明したとおり、神のいない現代において、人間は愛なしには生きられない。かつては「家」こそが「永遠」を保証してくれた。しかし見合い制度と家制度が崩壊した現代日本では、恋愛こそが唯一の「永遠」であり「愛」なのだ。

この世は、愛のない世界。だが、人が生きる上で、愛は必要だ。人間は、この内面から湧いてくる愛の衝動、愛されたい・愛したいというエネルギーを、適時発散しなければならない。愛が満たされていると感じるときに、人間は、自我の安定を得られる。愛とは自我に存在価値を与えてくれるものなのだから。もし愛を塞き止められると、自我が不安定となる。彼にはもはや、心安らげる時がない。生きる限り、孤独な世界にひとり取り残され、自我を安定させられない苦悩が続く。こうして長年塞き止められた愛は、怒り・妬み・怨み・嫉み・憤り・僻みに変質していく。故に、愛を得られない人は鬼畜化する。愛は、容易に、ダークサイドに落ちるのだ。

俺はこの、愛が塞き止められて非常に危険な状態になっている姿を、「**喪闘気**」と名づけた。

映画『スター・ウォーズ』※のダース・ベイダーはフォースの暗黒面に落ちて宇宙一のDQN親父になってしまったが、実はベイダーは例のお面を外すと死んでしまうという設定だった。ベイダーのパワーは、全身にこもった喪闘気…暗黒フォースによってまかなわれていたので、うっかり喪闘気を開放してしまうと生きていけないのだ。えっ、ベイダーはオビ＝ワン・ケノービに火

※『スター・ウォーズ』
アメリカ映画。ジョージ・ルーカスが監督・製作。SFと黒澤明のチャンバラ映画が奇跡的に融合された、ルーカスのイマジネーション溢れる世界観の親子二代に渡るサーガ。第一作の大ヒットが、スティーブン・スピルバーグとともに、長らく停滞していたハリウッドを蘇らせた。全9部作のはずだったが、今のところ6作目で完結するようだ。

■喪闘気
愛情が外部の世界に受け入れられず、体内に蓄積すると、恨み・妬み・嫉み・僻みといったマイナスのエネルギーに変質していき、最終的には喪闘気となる

山口へ突き落とされて大火傷したので、マスクを外すと死んでしまうという設定だったんじゃないのかって？　そ、そうだったっけ？　き、きっとそれは**後付けの設定**ですYO！　そもそも正義のジェダイ騎士だったアナキン・スカイウォーカーがなぜダース・ベイダーに変身してしまったかというと、まあ今年公開される『スター・ウォーズ　エピソードⅢ』で明らかにされるわけだが、どうやら嫁が師匠のオビ＝ワンと浮気しているのではないかと**嫉妬**したためなのでは…と噂されている。

そう、ダース・ベイダーは、嫁の浮気（妄想らしいが）が原因で、フォースの暗黒面に落ちてしまったらしいのだ！　ほら、やっぱり、ベイダーが封印しているのはモテない男が溜め込んだ喪闘気なんですよ。

さすがはジョージ・ルーカス。

「そんな理由でベイダーにするなよ！」という声もあるだろうが、この世の鬼畜の多くは、愛が塞き止められて「喪闘気」を身にまとってしまったために鬼畜になった人間なのだ。多くの鬼畜は、元々は普通の…いや、普通の人以上に感受性が高い優しい人間だったのだ！

もちろん『悪魔のいけにえ』※のレザーフェイスのような、生まれた瞬間からヨーイドンで鬼畜

※『悪魔のいけにえ』アメリカ映画。監督はトビー・フーパー。テキサスの片田舎に住む殺人一家の狂気を描く。スプラッタームービーの元祖。

だったとしか思えない「ナチュラルボーン鬼畜」もいることはいるが、たいていの鬼畜は愛されないが故に曲がってしまった**「トラウマ型鬼畜」**なのだ。

愛されたい愛したいと願いながら、幼児期に親に愛されず、成長しては女に愛されず、悶々としているうちに青春を終えてしまった…どうせ愛されないなら、いっそ、悪に身を染めてしまおうか…**愛のない人間になれば、この苦しみから逃れることができるのではないのか？**　そんなふうに追い詰められて鬼畜になっていく人間の、なんと多いことか！

例えば、永井豪の『バイオレンスジャック』※に登場する極悪人・スラムキング（地震で壊滅した関東平野を勝手に占領して、「魔王城」というＤＱＮ丸出しなお城を建てた人。趣味は、イケメンや女の子の手足をちょん切って「人犬」にすること！）も、愛されなかったトラウマから喪闘気を身にまとった男だ。何しろ、スラムキングもまた、全身を甲冑で覆い、素顔を隠している。このお面が外れただけで、キングは死んでしまうという設定なのだ。って、ベイダーと一緒なんだけど。

ダース・ベイダーやスラムキングは真っ黒な鎧に身を包み、しかもこれを脱ぐと死んでしまうわけだ。つまり、彼らの鎧は、彼らの心そのものと一体化している。彼らの心とは、「妬み・恨み・嫉み」であり、塞き止められて腐ってしまった愛のエネルギーなのだ（実際はスラムキングの場合、お面が外れても死なない。お面を取ると死ぬというのはウソで、本当は自分の醜い顔が耐えられないので隠していただけだったのだ！って、永井豪先生っ！　そんな…そのまんまな！）。

※『バイオレンスジャック』
永井豪の代表作。関東地獄地震で荒廃した関東平野でのバトルを描く。講談社の『少年マガジン』系列で連載されていたが、後に『漫画ゴラク』（日本文芸社）で再開。ここから、永井豪漫画のキャラクターが続々と登場するオールスター祭り的な展開となり、徐々に作品世界の謎が明らかになっていく。

人は、自分が愛されない、愛されるに値しない、という確信を得てしまうと、人生と世界そのものに絶望する。その結果、間違っているのは世界のほうであり、自分には世界に復讐する権利があるのだ、と結論づける。このような嫉妬による世界観の転倒を、ニーチェは「ルサンチマン(怨念)」と名づけたのだが、ルサンチマンは二次元の世界においては、決して取り外せない黒い鎧として表現されることが多いわけだ。

スラムキングが鬼畜になった原因は、言うまでもなく**女にモテなかった**ことにある。彼にはもともと「銅磨高虎」と言う名前があった。生まれつきとてつもない腕力の持ち主で、あまりにも危険なので、幼い頃から土蔵の奥に鎖で繋がれて育てられたのだ。で、自分らで監禁しておきながら「このままでは人間らしい心を持てずに大人になってしまう」と今さら心配した家族が、女子大生を高虎の家庭教師として雇うのだ。「あの子に人間らしい心を教えてあげてくれ」と。

ところが、この女、何を考えたのか高虎の前で全裸ストリップを開催。

「女の身体はやわらかいのよ～」

と鎖に繋がれた高虎を挑発。これにより、**凄まじいエロ・ショックを受けた**高虎は、生まれて初めて人間の言葉を発する！ ヘレン・ケラーの「ウォーター」※と同じくらい重い意味を持つその言葉とは……、

「**サッワッリタイッ!!**」

だった！

※ヘレン・ケラーの「ウォーター」
本田率いる「恐るべきお兄ちゃん軍団」軍団員のみやも氏がイベント『妹祭り』で披露したネタ。

「おっぱいに触りたい！」

これが、高虎が生まれてはじめて示した、人間としての意思だったのである。**おっぱい、恐るべし！**

しかしながら、この女先生は高虎の弟にレイプされたあげく、どういうわけかその弟とくっついてしまう！　やっぱりＤＱＮが好きだったんですか？　オンドゥルルラギッタンディスカー！※

先生の裏切りを知った高虎は絶望し、怒り狂う。

「センセイはオレをウラギッタアアア〜ッ！」

「オレはっオレはっ愛されていると思っていたっ！

■サッワッリタイッ!!
（永井豪『バイオレンスジャック』第2巻 日本文芸社）

※オンドゥルルラギッタンディスカー！
ネットで誕生したオンドゥル語。『仮面ライダー剣』の登場人物が使用する（ということになっている）。『仮面ライダー剣』の第一話で、主人公の剣崎が「本当に裏切ったんですかーっ？」と叫んだのだが、視聴者の耳には「オンドゥルルラギッタンディスカー！」としか聴こえなかった。本当は半角カタカナで表記するのが正しい。他にも「ウソダ…ウソダドンドコドーン！」とか「オレァクサマヲムッコロス！」などのオンドゥル語がある。

こんな化け物のオレを愛してくれているとっ！」
高虎のディープすぎる愛が、裏返ったあっ!!　理性を失って弟の首を引っこ抜き、最愛の先生を八つ裂きにしてしまう高虎……。かくして高虎は愛を捨てた鬼畜となり、関東の魔王・スラムキングへと変身したのである。

そういえば、黒い鎧こそ着用しなかったものの、かの名作漫画『北斗の拳』※に登場した南斗最強の男（自称）・聖帝サウザーもまた、愛深き故に歪んだ男だった。サウザーの場合は、南斗鳳凰拳の掟によって、孤児だった自分を慈しみ育ててくれた師匠を彼と知らずに殺してしまう。その、愛を失った悲しみが、怒りとなり、絶望となって、サウザーは叫ぶのだった。

「こんなに悲しいのなら
苦しいのなら……
愛などいらぬ!!」

ドーン！

まあサウザーは女にモテなかったわけではないが、愛を否定した瞬間に鬼畜道に落ちたという点では、スラムキングやダース・ベイダーと同種の人間だろう。ただ、サウザーはイケメンなので、顔を隠す必要がなかったのだと思います！

※『北斗の拳』　武論尊原作、原哲夫作画の近未来格闘漫画。集英社。八〇年代にアニメ化もされて大ヒットした。核戦争後の荒廃した世界を舞台に、一子相伝の暗殺拳法「北斗神拳」の伝承者ケンシロウの戦いを描く。「ひでぶ」「あべし」などの流行語（？）を生んだ。

■愛などいらぬ!!
（武論尊・原 哲夫『北斗の拳』愛蔵版第6巻 集英社）

ちなみにサウザーは師匠をミイラにして、ずっと大事に隠し持っていた。師匠の実物フィギュアだけが、サウザーの魂を癒してくれたのだ。これまたトラウマ型鬼畜の代表である映画『サイコ』※のノーマン・ベイツとまるきり一緒だ。**ミイラ萌え族（鬼）**だったのだ。

ああ、愛のない世界に、必然的に立ち現れてきた問題「モテない男の鬼畜化」。

これは、21世紀の日本、いや、**全世界の人類に課せられた実に重い課題**なのだ。恋愛の二極化が進めば進むほど、モテない男はますますモテなくなる。もちろん、モテない女もますますモテなくなる。

オニババ化する負け犬たち

三砂ちづるの『オニババ化する女たち〜女性の身体性を取り戻す』という本が、今、負け犬たちの怒りを買っている。この本によると、女は結婚してセックスして子供を生んで育てるという生物としての女性の役割を果たさないと、生命エネルギーが塞き止められ、行き場を失ったエネルギーが変質して「オニババ」になってしまうというのだ！

日本の昔話には、よくオニババや山姥（やまんば）が出てきます。たとえば、山にひとりで住む山姥が、ときおり道に迷った小僧さんを夜中に襲う話があります。私の子どもたちが小さかったころ、夜寝る前に、昔話をよく読んであげていましたが、「ざらんざらん、べろんべろんと小僧さんの尻をなめた」などという表現が、子ども向けの絵本に出てきて、ぎょっ

※『サイコ』
主人公ノーマン・ベイツは、自分を愛さずに虐待していた母親を毒殺する。しかし、母親に愛されたかったという執着が捨てられず、母親をミイラにして部屋に保管し続けるのだ！ そして、サウザーが師匠殺しのトラウマによって「愛など要らぬ」とばかりに子供たちを虐待したのと同様、ノーマンもまた母殺しのトラウマから「愛など要らぬ」と言い出して自分に近寄る女を片っ端から殺してしまうのだ。

としたのを覚えています。
あれは、社会の中で適切な役割を与えられない独身の更年期女性が、山に篭もるしかなくなり、オニババとなり、ときおり「エネルギー」の行き場を求めて、若い男を襲うしかない、という話だった、と私はとらえています。
この「エネルギー」は、性と生殖に関わるエネルギーでしょう。女性のからだには、次の世代を準備する仕組みがあります。ですから、それを抑えつけて使わないようにしていると、その弊害があちこちに出てくるのではないでしょうか。
（三砂ちづる『オニババ化する女たち〜女性の身体性を取り戻す』光文社）

アレエー!?
今、俺が書いた文章と、まるきり同じじゃないか？　そうなのだ、「**オニババ化する負け犬女**」**と**「**鬼畜化するモテない男**」**は、同じコインの裏表**なのだ！　人は、愛のエネルギーを、何らかの形で消費しなければならない。さもなくば、エネルギーが変質してしまい、邪悪なダークサイドに落ちてしまうのだ！　なお、この『オニババ化する女たち』は、負け犬たちから袋叩きにあっている。そりゃそうだろう。負け犬は、恋愛もセックスも子育ても、なにもかも、恋愛資本主義の商品としてしか見ていないのだから。
「人間の魂を、愛を、取り戻せ」
という、**ごく当たり前の話をされただけで、**負け犬は暴れ始める。すでに負け犬はオニババ化

しつつあるのだ。

　読売新聞のWebサイト「読売オンライン」において、『オニババ化する女たち』を読んだ負け犬記者の鈴木美潮※は、二〇〇四年十月十九日の日記で「断固許せん『オニババ』論」と、突如オニババ化して叫びはじめた。新書本を読んだだけで「憤死しそうになった」というのだから、よほど見たくない現実を突きつけられてショックを受けたのだろう。

　そこまでは別にどうでもいい話なのだが、なんとこの人、読売記者という権力を使って、オニババ論叩きの一大（？）キャンペーンを開始してしまったのである。スカパー！やCATVで放送されている専門チャンネル『G＋』で、「許せん、オニババ論」という番組まで作ったのだ！　こんな特定の個人を叩くのが目的の誹謗中傷番組、オンエアしていいの？と鈴木先生のオニババぶりには首をひねりたくなるのだが、**俺まで叩かれたらかなわん**のでコメントは差し控えたいと思いますYO！　あな、おそろしや。オニババでござる、オニババでござるぞ！

　鈴木先生が目を三角にして叫べば叫ぶほど、世の中の男は、

「やっぱり負け犬女って、オニババになるんだな」

　と、オニババ論の正しさに納得するだけなのだが……。

「女は結婚して子供を産んだほうが幸せですし、次世代の命に希望をつなぐというのは社会のためにもなりますよ」

　という誠に正論としか言いようのない説教に対して、

「誰が子供なんか産むか！　わたしらは、自分のために生きていくんだ！　いつまでも、いい男

※鈴木美潮
読売新聞記者。現在はYomiuri Weekly編集部所属。オニババ論に激怒して、読売のCS放送局『G＋』で反オニババ番組「許せん、オニババ論」まで製作しておきながら、今年に入って突然結婚。

と恋愛していい飯を食っていい思いをしてやる！」
と、欲にまみれた独身オバサンたちが逆ギレしているようにも受け取られかねないということを、もう少しよく考えたほうがよいのでは……。
いや、やっぱり考えなくていいや。負け犬のイメージダウンのために、**もっと暴れてください**。
恋愛資本主義に幼い頃から洗脳され、美しくて若かった時代には男の性欲と征服欲を満たすための「商品」としてＤＱＮに弄ばれ、年を食って商品価値がなくなったとたんにＤＱＮに捨てられ、フェミニズムとかに目覚めてますます嫌がられ、もはや一生涯、誰にも愛されないと気づいてしまった負け犬。できることといえば、稼いだ金で若い男を「飼う」ことぐらい。もちろん、そんな犬猫ペットとの関係に、人間同士の愛などあるわけもない。金の切れ目がちんぽの切れ目だ。そうこうしているうちに、ますます年を取り、後戻りができなくなって……。ああ、ああ、そんな悲惨な運命に陥った彼女たちが怒りにのたうちまわってオニババになり、若い男を襲うばけものと化したとしても、誰が批判できるでありましょうか！
くわばら、くわばら。剣呑、剣呑！

ネットでも、負け犬女どもがオニババ論を罵倒しまくっており、その有様を見ているだけで、
「おお、おお、おぞましや、おぞましや！」
と**アナログ女の怨念の空恐ろしさ**にびびってたじろぐしかない。オニババと呼ばれて激昂して暴れている負け犬たちの意見をざっと総合してみると、

1　自分たち負け犬女が悪いわけではない！　男に責任がある！（八〇年代フェミニズムの悪い影響で、**都合が悪いことは全て男の責任**だと思い込んでいる）

2　男が自分を口説かないのが悪い！（恋愛資本主義の悪い影響で、**男が自分を口説きにやってくることを**、さも自分に生まれつき与えられた当然の権利だと思い込んでいる）

3　アナログ女を無視しているオタクが悪い！（恋愛資本主義の悪い影響で、**男が自分の身体で興奮して勃つことを**、さも自分に生まれつき与えられた当然の権利だと思い込んでいる）

ということらしいのだ。

もちろん、ここでいう「男」というのは、「**年収六百万円以上ある金持ちイケメン**」のことであって、俺のような貧乏なキモオタは論外である。いざキモオタの俺が迫ったら「セクハラ」だの「ストーカー」だの「気持ち悪い」だのと拒絶するくせに、イケメンに相手にされないからといって、責任は俺たちオタクに押し付けるわけだ。

なんで？　どうして？

あなたたちね、オタク男がキモイんでしょ。相手にしてないんでしょ。あなたたちは金持ってるイケメンDQNとドライブしてイタ飯食ってセックスしたいだけなんでしょ。なのに、なぜ、俺たちオタクを罵倒するのですか？　俺たちは、あなたたちの人生に、何の関係もないでしょ？自分たちで俺たちを拒絶して馬鹿にしていながら、売れ残って負け犬になった今になって、「お前が悪い」と言われても……。で、

「すいません。反省しました。今からあなたを口説きます。あなたの身体にハァハァします」って言ったら、今度は「キモッ!」って言い出して、また罵倒するわけでしょう。

何がしたいんだよ、おめーらは? 頭沸いてるのか!? ドーン!!

だいたい、なんで、俺がお前の身体で勃たなきゃいけないんだ? ああー? **何か、勘違いしていないか?**

これがオニババの真実だ!

1 恋愛資本主義を鵜呑みにして、男に「顔」と「収入」を求める女の高望みが悪い! **鏡を見ろ、鏡を!**

2 イケメンで金持ちの男から口説かれる日を妄想し続けている女が悪い! 鏡を見ろ、鏡を! **てめえの乳は、何カップだーっ!?**

3 オタクとセックスする気もないくせにオタクを攻撃して現実から逃げている女が悪い! っていうか、愛とはお前らにとっては「**セックスと金と食い物**」でしかないのかよ! いい気になるな! お前の身体なんぞで興奮するかよ!

負け犬オニババは、単に欲求不満の鬱憤を、オタクにぶつけているだけなのだ。本当は自分を

相手にしないイケメンを罵倒するべきなのに、イケメンは罵倒せず（**罵倒したら、セックスしてもらえなくなる**と思ってるから。どうせしてもらえないのにな…）、無関係な弱いオタクを罵倒するのだ。弱いものいじめだ。

ああ、卑怯だ。醜い。心が醜い。愛のかけらもない。

つまりね。アナログ女はオタクに向かって、こう言っているわけなんですＹＯ！

「このフニャチン！　役立たず！　悔しかったら、ちんこを勃ててみろよ！　でもなぁ、**勃てても絶対やらせてやらねえ！**」

彼女たちはずっと恋愛資本主義の商品としてチヤホヤされてきたためにプライドが山よりも高いので、俺たちキモオタに自分がまったく相手にされていないという現実が受け入れがたいのだ。で、勃たせたらそれで満足なので、またまた罵倒するのだ。結局、自分のプライドを満足させられれば、もうオタクは不要なのだ。「電車男」系のオタク狙い女も、オタクをゲットしたら脱オタさせてペットに改造しようとする。もちろんこの場合捕まるオタクは、若くイケメンの可能性があるオタクだけであって、**俺のようなキモオタは捕獲対象にはならない**。俺は**駆除対象**だよ。ゴキブリだよ。

繰り返しになるが、アナログ女は、男が自分の身体で興奮して勃つことを、自分に生まれつき与えられた当然の権利だと思い込んでいるのだ!!

それは恋愛資本主義がそう決めているだけだろ？　俺たちオタクには、関係ないね！　嫌なこった！　誰がお前なんかで勃つかよ！　一生ＤＱＮとやってろ！　そして不幸な家庭を築け！

自分の子供を虐めろ、俺の母親みたいに！　ＤＱＮにも相手にされないなら、ホストでも買ってろ！

悲しいことに、「愛の不在」を怒るオニババはいない。オニババは、「男がセックスしてくれないこと」だけを怒り続ける。愛など、はじめからないのだ。恋愛資本主義に洗脳されている三次元のアナログ女にとって、愛とは、セックスと金と食い物のことだ！

アナログ女にとって愛とはセックスと金と食い物のことだ！

アナログ女にとって愛とはセックスと金と食い物のことだ！

アナログ女にとって愛とはセックスと金と食い物のことだ！

アナログ女は愛なんか求めていない！

アナログ女は金持ちイケメンのちんちんを求めているだけだ！

こんなオニババに怯えおののきながら、我々心優しきモテない男たちは…いや、モテる男でも、オニババのあさましさに辟易して三次元に絶望した男は…続々と、次の進化のステージへと昇っていく。**21世紀、男は、オタクに進化する！**

抑圧し続けると鬼畜化してしまう、そんな危険な愛の衝動を自らの脳内で昇華させる活動として「萌え」ているのだ。

そう……。「愛のない世界」「愛が消えた三次元」という悲惨な現実を前にした人間には、二つのルートが用意されている。

一つが、愛を怒り・憎しみに変質させ、**妖怪的な方向へと進化**していく「鬼畜＝オニババへの道」。もう一つが、**新しい現実である二次元世界**を築き上げ、その二次元世界で萌えることによって愛を昇華しようとする「オタクへの道」だ。

■愛なき現代における、人生のルート分岐
「二次元＞＞＞＞三次元」「妄想＞＞＞＞現実」これがオタクの価値観なのであり、オタクとは生まれながらに愛されない人間でありながらも鬼畜にならずに生きていくための正しいルートなのだ。三次元の子供に手をかけた宮崎勤や小林薫は、二次元の価値が分からず、「オタクになりそこなったキモメン」であり、鬼畜ルートを選んだオタク失格人間なのだ。顔がキモメンなので「キモメン＝キモオタ＝オタク」というふうに決め付けられているが、とんでもない話です

いずれの道が「ジェダイの騎士」へつながる光の道であり、いずれの道がフォースの暗黒面に支配される闇の道であるかは、説明するまでもないと思いますYO！　なんかダース・ベイダーとか見てると鬼畜の道のほうが楽しそうな気もしますが、あれは映画ですから！　三次元であんなDQN親父になってしまったら、大変だYO！　ルークも、あんなDQNな奴がお父さんだなんて、知った時は凄くショックだったろうな……。それでもダークサイドに落ちなかったルーク

は本当に偉いＹＯ！

実はルークには妹がいたから鬼畜にならずに済んだんだよね。アナキン（ベイダー）は一人っ子だったが、ルークにはレイア姫という双子の妹（姉にしか見えないが…）がいたのだ。

ベイダーは、ルークを何度もオルグする。

「父と子、二人で力を合わせて銀河皇帝をやっつけよう！」

とＤＱＮ丸出しな発言を繰り返すのだが、ルークは当然その誘いを断わり続ける。何が銀河皇帝をやっつけよう、だＹＯ！　今時そんなセリフ、小学生でも言わんぞ！　いい歳して、目ぇ覚ませ、親父ぃ〜っ！とでも言いたかったろう。しかし、しつこいベイダーは、

「お前が仲間にならないなら、お前の妹をダークサイドに引き込んでやる！」

と言い出すのだ。すると、このベイダーのセリフが終わらないうちに、ルークが、

「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！」

と絶叫し、感動的なＢＧＭをバックに、**妹への愛の力**でベイダーを倒すのである。

ルークが怒りのパワーでベイダーを倒してしまうと、今度はルークがフォースの暗黒面に落ちて、二代目ベイダーになってしまう。それが『スター・ウォーズ』の設定だったはずなのだが、ルークはベイダーを倒しても鬼畜にはならなかった。なぜかといえば、ルークは、怒り・憎しみではなく、妹への純粋な愛…**「妹萌え」の魂で戦ったから**なのだ！　姉も妹も知らなかったベイダーは嫁の裏切り（という妄想）によって鬼畜になったが、息子のルークは、妹萌えの力で救われたのだ！

そして、ベイダーもまた、そんな妹に萌えるルークの姿に心を打たれて、自らもまた「**息子萌え**」の魂に目覚める。かくして、ベイダーはルークの命を救うために我が身を犠牲にし、自分の命と引き換えに銀河皇帝をやっつけたのだった。

『スター・ウォーズ』6部作は、

・前半3部作…萌えを知らぬアナキンが現実の女の邪悪さに絶望し、鬼畜になる話
・後半3部作…妹に萌えるルークが鬼畜ルートを退け、その愛で父を改心させる話

そういう構成になっているのだ。実によくできた映画ではないか！

「萌え」は、宇宙を救う！　これが「萌え」の世界であり、「萌え」の威力なのだ！

萌えと鬼畜の分岐点～『バッファロー'66』にみる典型的なルート分岐

この「萌えと鬼畜の分岐点」というのは、誰の人生にもあるはずだ。もちろん三次元の人生では選択肢ウィンドウが表示されたりはしない。だが、後から振り返ってみれば、「あの時は、やばかったなあ…もし選択を間違っていたら……」なんて場面が、必ずあるだろう。

アメリカを代表するダメ男、ビンセント・ギャロ※の俺様映画『バッファロー'66』は、そんな、誰の人生にも訪れる、

「**萌えるべきか、キレるべきか、それが問題だ**」

※ビンセント・ギャロ　アメリカのアーティスト、俳優、映画監督。『バッファロー'66』『ブラウン・バニー』を監督した。稲川淳二似のイケメンだが、自分ほどのキモメンはいないと思い込んでいるらしい。

という二択の瞬間を描ききった傑作だ。理由は知らないがギャロの「俺はキモメンだあ」という絶望はどこまでも深く、最新作『ブラウン・バニー』でも「三次元における恋愛の不可能性」と「脳内にのみ残されている二次元恋愛の可能性」を高らかに謳いあげている。つまり、

「萌えキャラばんざい！」

これがギャロ映画のテーマなのだ。

『バッファロー'66』では、クリスティーナ・リッチが、ギャロのアニマ※として登場する。刑務所を出所したばかりのギャロ演じる主人公は、「モテない・金がない・仕事がない」の三重苦を背負った喪男。映画開始1分、ヨーイドンでいきなりニッチもサッチもいかなくなった彼は、通りすがりのリッチを誘拐して、レイプする…わけがなく、

「俺の彼女のふりをしてくれえ！」

と**最高に情けないお願い**をするのだ！

ギャロが求めているものはセックスではなく、**愛！**　キターー！

まあ、単なる変態誘拐魔なのだが、なぜかリッチは、そんなギャロに愛情を抱いてしまう。

「そんな都合の良い女、現実にいるわけないだろ！」

と突っ込みを入れた人は、「萌えキャラ」の何たるかを理解していない。

そう。ギャロが『バッファロー'66』で描いているリッチとは、実はギャロの「脳内彼女」なの

※アニマ
心理学者ユングの用語で、男性の中にある女性的元型のこと。女性の場合は男性的元型「アニムス」を持っているという。

だ！　たぶん、ホントは**等身大フィギュアを置き引きして持ち歩き、脳内で彼女と会話しているのだ。**フィギュアの役をリッチに演じさせているだけなのだ。その証拠に、風呂に入ろうとするリッチをギャロは「入るな！」と押し止める。**人形なので、濡れると困る**からだ。まあ、結局は入れちゃうんだけど。あれ、絶対後が大変だYO！　また、せっかくベッドインしても、ギャロはリッチとセックスせず、ただ手をつなぐだけだ。これは、等身大フィギュアとはいえダッチワイフタイプではないので、**ホールが装備されていない**からだろう。

あ、今、「ウソつけ！　リッチは生きてるじゃないか！」と言いましたね？

あなたは、アニメの女の子を見ながら、

「ウソっぱちだ！　こんなの、ただの絵じゃないか！」

と言うタイプでしょう！　ドーン！

ええ、ええ。目に見えた現象を、そのまま現実だと考えてしまう、**テレビメディアの洗脳にあっさり引っかかるタイプの人間**ですよ、**あなたは！**

日本の萌えアニメは、「絵」を「女の子」だと言い張ることによって、独自の二次元世界を成立させている。本来は生きていなさそうな二次元を、三次元同様の命のある世界にする、それが日本アニメ。これに対して『バッファロー'66』は、「生身の女」に「フィギュア」を演じさせることによって、妄想の二次元フィギュアを三次元の世界で生かしているのだ。ほとんどの人間は、そのこと――リッチがギャロの脳内彼女だということ――に気がつかず、「素敵な恋愛映画でした」などと言うのだ。

そんな連中が、ギャロが「実は俺の彼女は脳内彼女！　三次元女なんか相手にしねえ！」と自分のネタをバラした新作『ブラウン・バニー』を見せられて激怒したわけだ。何しろ『ブラウン・バニー』のあらすじは、ギャロがいろんな女と出会うんだけど、何もせずに全員を次々と捨て去って、最後に脳内彼女との妄想エッチで興奮してオナニーして終わりだもん！　アナログ女を完全否定！　そりゃギャロをオサレ監督だと勘違いしていた連中は怒るYO！

バーカバーカ！　ザマミロ、ザマミロ！

『バッファロー'66』のリッチが徹頭徹尾無表情で瞬きもせず、じーっとギャロを見つめているのは、彼女がフィギュアだからに他ならない。なぜリッチが、キング・クリムゾン※の『ムーンチャイルド』に合わせてダンスするのか？　あのダンスは『クリムゾン・キングの宮殿』に収録されている一節、『あやつり人形の踊り』なのだ。そもそも、『ムーンチャイルド』は2部構成になっていて、1部のサブタイトルは『幻想』、2部のサブタイトルは『ドリーム』だ。つまり、リッチは、ギャロの妄想キャラなんだYO！

アントニオ猪木も、「**人間は全てを失った時に、最大の妄想力を発揮する**」って言ってるし。

……えッ、言ってない？

さて、ヤケクソの妄想力を爆発させて「脳内彼女」を手に入れたギャロは、映画の終盤に、重大なルート分岐地点へと到達する。

一方には、

※キング・クリムゾン　プログレッシブ・バンド。一九六九年に『クリムゾン・キングの宮殿』で衝撃的なデビューを飾る。七〇年代には『太陽と戦慄』『レッド』という名盤をリリースした。その後もメンバーを入れ替えながら解散・休止と活動再開を繰り返している。

「このまま脳内彼女に萌えてオタクとして幸せに暮らす」

という萌えルートがあり、もう一方には、

「自分をダメ人間にした相手（逆恨みですが）に復讐し、自殺するという破滅の道を辿る」

という鬼畜ルートがある。

ギャロは、「俺も『タクシー・ドライバー』のデ・ニーロみたいに最後にぱっと銃撃戦をやって死ぬか…どうせ生きててもしょうがないし…もう生きられない……」と悩み苦しみ、

「**鬼畜になりますか？　はい**」

という選択肢を思わずマウスでクリックしそうになる。何しろ、復讐の鬼になるかどうか迷っていたら、学生時代に片思いしていた女とファミレスで鉢合わせしてしまうのだ。言うまでもなく、この女は「三次元のＤＱＮ女」「恋愛資本主義に洗脳された女」の典型像として描かれている。ギャロが今まで出会ってきた、薄汚くて自分を絶対に愛さない「三次元の女」がキャラクター化されているのだ。このＤＱＮ女は、やっぱりＤＱＮ男とアベックになっていて、ギャロを鼻で笑いながら店内で乳繰り合うのだ。

ギャロは便所へ逃げ込み、

「**生きられない…だめだ、生きられない……**」

と絶望の淵に沈み、殺人鬼となって自殺する道を決意する。だが、脳内彼女のリッチが、

「あんなあばずれ女、あなたにふさわしくないわ！　**あなたは、世界一心の優しい人よ！**　ハンサムよ！　愛してるわ！」

と、ギャロを励ますのだ。って、こんなセリフ、きょうび、**エロゲーのシナリオにもないぞ！**

これはちょっとなあ…というセリフですが、とりあえず、生まれて初めて女の子から、

「**生キロ**」

と言われたギャロ。それでも「いや、でも、脳内だし……」と逡巡するのだが、結局、鬼畜ルートのシミュレーションを**脳内で妄想**しただけで復讐心をあっさり昇華してしまい、リッチとの萌え生活を選ぶ。さんざん妄想ばかり膨らませたあげく、何事も起こらないまま、へたれたオチで映画終了！　ギャロは妄想力が異常に発達しているので、脳内彼女ともリアルな会話ができるし、復讐の銃撃戦も妄想するだけで終わりにしてしまうわけだ。

そう、妄想力こそが、ドツボにハマって鬼畜化しかけている人間の魂を救うのである！　もしギャロが妄想力のないただのＤＱＮなら、さっさと銃撃戦をおっ始めていたに違いない。

ここで言う「ただのＤＱＮ」とは、「アニメの女なんて、ただの絵だろ！」とか「実際に復讐しないと意味ねえだろ！」とか言い出す人のことだ。つまり、妄想力がなく、三次元だけが世界のすべてだと思っている人、二次元で妄想することをまったくの無価値だと思い込んでいる人のことだ。こういう人間こそ、いざ追い詰められたときに「妄想しますか」という選択肢が出てこないから、あっけなく犯罪に走るのだ！

すなわち！　人生の分岐ルートに立たされた時、人を救うのは**妄想する力**なのだ！　最近、メ

ディアは、部屋に引きこもっている人々を「ニート」と名づけ、「働かない人間」つまり「恋愛資本主義を放棄した役立たず」として叩いているが、なんという愛のない！　愛のかけらもない！
　俺も基本的に引きこもりなのだが、特に阪神大震災で実家も仕事もすべて失ってしまった時には、生きる気力がゼロになってしまい、しばらくの間、アパートに文字通り引きこもっていた。貯金がゼロになったら餓死しよう、とかそんな感じ。友達は、インターネットだけ。
「…生きられない……」
　と、毎日、トイレでうめいていた。他人、特にメディアから見たら、「ニート」であり、唾棄すべき存在であり、社会からの落伍者であったろう。だが、その間も、オレの頭の中では妄想がガンガンと渦巻いていた。二次元の萌えキャラとの脳内会話を続けることだけが、俺の鬼畜ルート行きを防いでくれたのだ。絶望し、精神的に死にかけている人間の脳は、それでも生き続けるために、眠っていた妄想力を目覚めさせるのだろう。
　そんな人間の生きようとする意志を、引きこもって萌えることで自殺や鬼畜化から自分を守ろうとする姿を、なぜ恋愛資本主義の人々は、鼻で笑い、差別できるのだろうか？
　だいたい俺が引きこもる時というのはパターンが決まっている。とても悪い人間に会ってしまい、被害を受けて絶望し、怒りが溜まってきて、「このままじゃ死ぬしかない。それはいやだ。じゃあ…あいつを殺すか」という妄想を実行しそうになった瞬間に引きこもるのだ。今まで二度も「社長をブッ殺す」と言い出して暴れてるからね、俺は……。って、DQNじゃないかYO！

DQNというか、ADHD※らしいんだよね。俺が子供の頃はこんな便利な言葉なかったから、「発狂」とか「基地外※」とか言われて教師からも虐められてたYO！　全然授業聞かないでずっと暴れてるのにテストはいつも満点なので、女教師にめちゃくちゃ呪われて、

「お前は30歳で死ぬ！」

と**日野日出志※の漫画みたいな脅し文句**で毎日虐待されてたYO！

「お前は日本に住む資格がない、アメリカに出て行け！」

とかさ。今だに信じられん。人間じゃないよ。本当に女教師ってのはくだらない連中だYO！

男の先生は「こいつ、変だけど、もしかしたら天才かも」ってけっこう可愛がってくれたのに、女は全員「お前は私の型にはまらないから、さっさと死ぬべきだ」みたいなことばかり言うんだYO！　日本の未来のために、学校から女教師を追い出すべきだと思いますYO！　もし学校にエジソンやアインシュタインみたいな一見バカ・実は天才というタイプがいても、みんな女教師にいびられて精神的に殺されちゃうよ！

それで、話を戻すと、俺がいったんキレて「奴を殺す」ってなってしまうと、もう収まらない。だから部屋の中で妄想して萌える。萌えているうちに、萌えキャラに癒されて、収まる。俺の人生は、何度も、このルート分岐を繰り返してきた。俺はその度に、必ず萌えルートを選んだ。

俺が『バッファロー'66』を観たのは、地震でボロボロに荒れ果てた三宮の薄汚い映画館の中だった。仕事もほとんどなく、女はもちろん男の友達もいない。未来どころか今日この瞬間にすら

※ADHD
注意欠陥多動性障害。衝動的で落ち着きがなく、授業に集中できなかったり、不注意でボーっとして、呼びかけられても気がつかなかったりするなどの症状があり、脳の神経学的な機能不全が原因と考えられている。

※基地外
キ○ガイの当て字。

※日野日出志
ホラー漫画家。一度見たら忘れられない独特のタッチ。ストーリーもトラウマになるものが多い。

何の希望もなかった。『人間失格』のエピローグみたいな人生だった。年齢も、もう30。あの地震さえなければ、と毎日ブツブツ言うだけの、そんな生活。ただ、いっさいは流れていきます。うふふふ。下剤の名前がヘノモチン。

そんなどん底状態で、暇つぶしにウッカリ『バッファロー'66』を**観てしまった**俺は、ほとんど誰もいない映画館でひとり椅子の上にうずくまって、頭を抱えた。

ああ。だめだ。生きられない。

俺も、どこかで学生時代の同級生のあの子に会ったらどうしよう。どうせＤＱＮと結婚してギシギシアンアン、セックスしてるんだろうなあ。俺はオナニーする気力すらないというのに。ああ、生きられない。誰にも会わせる顔がない。俺を虐めてきた連中はのうのうと生きているのに、パンパンとセックスしているのに、なぜ俺は。何も悪いことをした覚えがないのに、なぜ俺はこんな惨めな人生を過ごさなければいけないのか。しかも、一生。死ぬまで。死ぬまで誰にも愛されない。誰にも必要とされない。誰とも出会わない。何かの間違いで生きているだけだ。生きていても人を傷つけることしかできない。死ぬ度胸もない。もうどうしようもない。ああーーっ、あああーーーっ**(以下八千文字ぐらい続く)**。

とか何とか、思いきり鬱になってしまったのだが、しかしいざアパートに帰ると、そこには俺の脳内萌えキャラ、**惣流・アスカ・ラングレー様**が待っていたのだ！

「なに落ち込んでるのよ、あんた。バカじゃないの？

死にたければ、死ねばいいじゃん！

この、イカ！　この、イカ！」

ああーっアスカさまーっ！　もっと〜！　はぁはぁはぁ。

こうしてアスカ様との脳内会話がスタートした瞬間に、俺は三次元の悲惨な設定をすべて忘れて、萌え萌えな桃源郷の住人に戻ることができたのだ。暇だけは腐るほどあった引きこもり時代の俺は、二次元で萌える妄想力を鬼のように鍛え抜いたのだった。そしてついには、**三次元は単なる「現実」に過ぎないが、二次元はより価値のある「真実」の世界なのだ！**という悟りを開くに至った。かくして、俺は、厳しい引きこもり修行を終え、人々に萌えの魂を訴えるオタク行脚の旅に出たのである。

萌えの巨星・宮澤賢治と鬼畜の王・都井睦雄

さて、俺個人が「わたくしは萌えによって、殺人鬼の道を免れました」と萌えのご利益を唱えても、

「いや、あんた、そんな度胸ないへたれやし」

と一蹴されそうなので、現実の具体例を紹介しよう。

「萌え」の巨人・童話作家として有名な**宮澤賢治**と、映画『八つ墓村』※の連続殺人鬼のモデルとなった「津山三十人殺し」の犯人・**都井睦雄**。実はこの二人には、妙に共通点が多い。

宮澤賢治は、一八九六年、岩手県花巻の裕福な農家に五人兄弟の長男として生まれた。子供の

※『八つ墓村』横溝正史が津山30人殺し事件をモチーフに描いた推理小説。かつて角川が仕掛けた金田一耕助映画ブームのさなかに、松竹が野村芳太郎監督・萩原健一主演で映画化し、「祟りじゃ〜」の流行語を生んだ。この松竹版映画では犯人役の山崎努が狂気に満ちた迫真の演技で村人を殺しまくった。

頃から虫や石が好きだったというから、オタクの走りみたいな人だ。父親と宗教問題で揉めた後、東京へ出るが、妹・としが倒れたと聞いて慌ててUターン。賢治は、妹のとしに萌え萌えだったらしい。一部では「他の女はいっさい拒否してるのに、なぜ妹とは仲がいいの？　近親相姦…？」なんて噂もあるが、もちろん賢治の人となりを鑑みれば、妄想世界でハァハァするプラトニックな妹萌えの人だったことが分かる。つまり、賢治は妹をベースとした萌えキャラを脳内に創造し、童話や詩という形の萌え作品を作ることを生きる糧としていたわけだ。

賢治は帰郷後、学校教師の仕事をしながら密かに詩人や童話作家として地味〜に創作活動に打ち込むが、としの看病のために東京を捨てて以後は中央の文壇とはほとんど無縁を貫く。しかし、賢治の看病の甲斐もなく、としは死んでしまった。賢治は錯乱し、**「俺の妹はカエルになった云々」**というヘンなポエムを学校の生徒たちの下駄箱に放り込んだという噂もある。

病弱だった賢治は従軍を希望したにも関わらず徴兵検査に落ちてしまうという挫折も味わい、作家としても成功できなかった。ついには最愛というかこの世で唯一萌えた妹も失った。失意のうちに30歳で高校教師を辞職した後は、今でいうフリースクールみたいな引きこもり系（？）サークルを作って若者を集め、一瞬だけ田舎のカリスマになりかけたりする。が、病気には勝てず、すぐに挫折。なにもできぬまま一九三三年に37歳で死去。

かくして、賢治が自らの妄想を書き綴った詩と童話だけが、死後、残された。賢治は、終生、**童貞を貫いた**という。恋愛は全部片思い。見合いは断わり、ストーカー女が押しかけてきたときには逃げ回った。でも、実はエロい浮世絵を大量に集めていた。童貞神・賢治は、エロオタクの

魁でもあったのだ。**賢治は性欲も恋愛衝動も、すべてを二次元で昇華しきっていた**のだ。だから、一見、何もしていなかったように見えるだけなのだ。

ハードコアなオタク人生を貫き通した賢治はあまりにも新しすぎたために本人が生きている間には認められなかったが、死後、時代が賢治に追いついた。『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』などの名作を遺した童話作家・詩人として大ブレイクしたのである。

都井睦雄は、一九一七年、岡山県津山の北にある農村に生まれた。都井は祖母に溺愛されて育てられた。賢治は妹萌えだったが、都井は姉萌えだった。都井は小学校時代に早くも引きこもりとなり、いつも姉とばかり遊んだので、近所では、

「おんなとおとこは遊ばんもんじゃ
ちんちんマメに疵がつく
あしたの晩にゃ児ができる」

とからかわれた。

高等科に進んだ都井は、初恋の女の子に、彼女の似顔絵を描いたラブレターをこっそり渡して逃げ出すような、そんなシャイなオタクに育っていた（ところがその似顔絵が**姉の美奈子にそっくり**だったらしい！）。

と、ここまでは**エロゲーの主人公**のようなハートフルな少年時代だったのだが……。

都井は頭脳明晰だったので、都会の学校へ進学しようとした。だが、祖母に反対され、さらに

結核をわずらって進学を断念。都井は優秀な頭脳を生かす道を閉ざされ、ニート生活に入る。さらに、最萌えの人・**姉の美奈子が嫁いでしまった**ことが、都井に暗い影を落とすことになった。

都井は病気を患っていることもあり一向に働かなかったが、同人小説を書いて子供たちに読ませるのが趣味で、作家志望だと口にしていた。だが田舎にこもっていたため、作家にはなれなかった。都井が書いていたものは小説といっても子供向けの冒険小説で、今で言うライトノベルだった。しかも他の作品をベースにしていたらしく、つまり都井が行っていた創作活動は**オタク同人誌の走り**だった。はっきり言って、新しすぎた。

都井は悪友に誘われて風俗で童貞を喪失した後、「村で行われている夜這いなどの隠された男女関係を調査して、村民のエロ関係相関図を作成し、そのネタを使って女を追い込む」という**鬼畜ゲームの主人公も真っ青**の鬼畜道に目覚めてしまい、村中の女たちと次々と強引に肉体関係を結ぶ。だが、結核で徴兵検査に落とされたことで一気に立場が転落、まったく女に相手にされなくなる。さらに、関係を持っていた女が都井を裏切り、村中に都井の悪口を言いふらしたため、村八分状態に追い込まれる。

都井は女たちに深い恨みを抱いて一九三九年に「**津山30人殺し**」を決行。日本刀や猟銃を携えて、自分をフった女と、女を独占している金持ちイケメンを皆殺しにしようと村人を大量虐殺し、最期は自決した。都井は、どうせ死ぬなら阿部定[※]のようなでっかいことをやってやる、と豪語していたという。そして、本当に阿部定を超えるでっかい悪行を実行したのだ。

※阿部定
一九三六年、阿部定という女が、愛憎のあまり男の性器を切断したという猟奇事件が当時巷の話題に。その2年後、都井睦雄は「阿部定よりも大きなことをやってやる」と言って津山30人殺し事件を起こした。大島渚監督『愛のコリーダ』は阿部定事件をモチーフにしている。

というわけで、ほぼ同時代に地方の農村に生きながら、片やいまだにファンの多い「童話作家」、こなたいまだに猟奇小説や猟奇映画に登場する「連続殺人鬼畜」。**まったくもって人生のエンディングが異なっている二人**なのだが、共通点は非常に多い。

・田舎の農村出身の長男で割と裕福
・病弱
・引きこもり
・片や妹萌え、こなた姉萌え
・作家志望だが、田舎暮らしが祟ってまったく芽が出ず
・片や生涯真性童貞、こなた金を払うか追い込みをかけなければ相手にされないモテない男。いずれも生涯恋愛経験ゼロ

このように、二人とも**パソコンの美少女ゲームの主人公みたいな設定**なのである。というか、今の世の中なら、間違いなく学校で「オタク」と呼ばれ、「げんしけん」※みたいなサークルで同人誌を作っているタイプなのだ。当時はオタク文化がなかったから、賢治は童話を書き、都井は少年小説を書いていたわけで、平成の日本に生まれていれば間違いなくライトノベルか漫画を志していただろう。

しかも、姉または妹といつも一緒で、友達にも疑われているという萌えなシチュエーション。

※「げんしけん」
木尾士目の漫画。『アフタヌーン』（講談社）連載中。オタクサークルの日常を描いて大ヒット。げんしけんとは「現代視覚文化研究会」の略語だが、つまりオタク部のことだ。アニメ化された。

で、どっちも、モテない。賢治は電波系のストーカー女に追いかけられたことがあるが、いわゆる恋愛はついに一度もできなかった。都井も風俗に行くか、「へえっへえっへえっ」と追い込みをかけるばかり。女のほうから誘われた関係もあったらしいが、それもセフレ関係。で、その女が都井を裏切って村人に売ったために、都井は鬼畜化したのだ。

二人ともナイーブなオタク性格だったために、文章からは**「弱い人間」だけが持っている悲しみ**が伝わってくる。賢治の童話『よだかの星』は、キモメンでケンカも弱いダメダメな鳥・よだかが、ジャイアンみたいな鷹に「名前を変えろ」と脅され、自殺を選ぶという悲しすぎる話だ。

> 一たい僕（ぼく）は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけたようで、口は裂（さ）けてるからなあ。それだって、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巣から落ちていたときは、助けて巣へ連れて行ってやった。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすように僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑ったっけ。
>
> （宮澤賢治『よだかの星』～『宮澤賢治全集』収録　筑摩書房）

よだかは、善意の塊のような優しい心を持っているにも関わらず、外見がキモいために周囲から差別され続ける。しかし、ジャイアンのように横暴な鷹に逆らって闘おうという発想は、心優しいよだかにはない。それどころか、自分が虫を殺して食べていることを嘆き悲しむのだ。

（ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行ってしまおう。）
「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。私のようなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでしょう。どうか私を連れてって下さい。」

（宮澤賢治『よだかの星』～『宮澤賢治全集』収録 筑摩書房）

こうして、よだかは三次元世界での生を自ら放棄し、「遠くの遠くの空の向う」の世界で、憧れていた美しい「星」に生まれ変わるのだ。

子供の頃、『よだかの星』を読んだときの衝撃はいまだに忘れられない。エエエエ、生意気な鷹を殺す話じゃないのかYO？　**よだかは最後まで何もしてないじゃないか？**とびっくりしたものだが、最近やっと、何もせずに自ら妄想の世界を選んだよだかの気持ちが分かってきた。

だって、鷹を殺しても、よだかは浮かばれないのだ…どうせ醜いのだから……。

世界を滅ぼしても、僕が死んでも、どうせ一緒だ。
だったら、僕が死ぬほうがいい。

かの大槻ケンヂ先生[※]は小説『新興宗教オモイデ教』[※]で、主人公にこんな思想を語らせた。同様に、よだかもまた、「僕が死ぬほう」を選んだのだ。賢治が何事も成しえず孤独に死んでいった影には、「だったら、僕が死ぬほうがいい」というオタク的な心優しい悟りの境地があったのだ。

これに対して、都井の遺書は、どうだろうか？ **都井は、世界を滅ぼすほうを選んだ。** 新潮社OH！文庫『津山三十人殺し』に都井の遺書が全文掲載されているので、抜粋してみる。

（筆者注…結核で寝込んでいたときに）西川とめの奴に大きな恥辱を受けたのだった。（中略）病気のため、心の弱りしところに、かような恥辱を受け、心にとりかえしのつかぬ痛手を受けたのであった。

（筑波昭『津山三十人殺し―日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社）

とめは都井とデキていたのだが、都井が鬼畜野郎だという悪評が立ったため、自己保身のために都井と手を切り、都井の悪口を村中に言いふらしたらしい。各人の証言が錯綜しているため真相は藪の中ではあるのだが、都井が追い込みセックス型鬼畜つまり**エロリビドー過多鬼畜**から**大量殺人鬼畜**へとクラスチェンジしてしまったきっかけが、この女の裏切りだったことは間違いなさそうだ。

それは僕も悪かった。だから僕はあやまった。両手をついて涙を出して、けれど、かやつ

※大槻ケンヂ
ミュージシャン、作家。バンド「筋肉少女帯」で活躍。代表的なアルバムは『月光蟲』『断罪、断罪、また断罪』。代表曲は『イワンの馬鹿』『踊るダメ人間』。その後、「特撮」を結成。作家としても『新興宗教オモイデ教』などを執筆。アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』やPCゲーム『雫・しずく・』など、九〇年代のオタクサブカル界に絶大な影響を与えた。現在は怪獣ブースカのぬいぐるみに囲まれて暮らしている。

※『新興宗教オモイデ教』
一九九二年。大槻ケンヂ著。角川書店。ビジュアルノベルやセカイ系ライトノベルの全ての元祖というべきカルト青春小説。

は僕を憎んだ。事ごとに僕につらくあたった。僕のあらゆることについて事実のないことまで作り出してののしった。僕はそれがため、世間の笑われ者になった。僕の信用というか、はた徳というか、とにかく人に敬せられていた点はことごとく消滅した。(中略) 僕は悲しんだ泣いた。幾日も幾日も。そうして悲しみのうちに芽生えてきたのは、かやつに対する呪いであった。これほどまでに、かくまでに、僕を苦しめ憎むべき奴にさげすむ、かの女にどうせ治らぬこの身なら、いっそ身を捨てておもいしらせてやろう。(中略) 憎めば憎め、よし必ず復讐をして、かやつをこの社会から消してしまおうと思うようになった。

(筑波昭『津山三十人殺し—日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社)

愛が裏返り、怒り・恨み・妬み・嫉みに変質していき、「復讐」という鬼畜ルートへと都井は突き進んでいったのである。

元来非常に過激な性格だった賢治が生涯、引きこもりのまま平穏な人生を過ごすことができた最大の要因は、**妹萌え**にあると俺は考えている。賢治の妹は、一度は結婚したが、病気を理由に実家に戻ってきたのだ。その上、賢治より先に病死してしまった。この、妹を一度取り戻したにも関わらず結局喪失してしまったという辛い体験が、賢治のその後の引きこもり人生を決定付けたのではないだろうか。賢治は、生きながらにして、**妹がいるであろう二次元の妄想世界へと旅立っていった**のだ。よだかが、遠い空の向こうの世界へと旅立っていったのと同じに。

これに対して、都井は姉萌えだった。しかも姉は結婚してしまい、都井から去った。実は都井は一度姉の見合いに反対して縁談を潰しているのだが、二度目は反対しなかったようだ。どういう心境の変化が都井に起きたのだろうか。本当は姉に「やっぱりお見合いはやめます」と言ってほしかったのだろうか……。

だが姉はあっさり嫁いでしまった。姉を失って萌え魂を喪失した都井は、「こんなに辛いなら、愛などいらぬわー！」と歪んだ聖帝サウザーのごとく、**愛のかけらもない村の女たちとの鬼畜エロ生活に突入**する。元々夜這いが頻繁に行われている村だったので、モテない都井でもセックスぐらいはできたのだった。しかし、追い込みをかけるなどして悪行三昧だった都井は女たちの憎しみを買い、その憎しみに対してさらに都井が憎しみを募らせる、という悪循環。

してみると、生涯童貞をかたくなに貫き、童話を書いて萌え踊り、エロ浮世絵でハァハァしていた賢治は、「どうせ愛されないなら、三次元では何もしない」という**実に賢明な選択肢**を選び続けたということになる。

いや、普通に見合い結婚すればええやん、と言われそうだが、賢治も都井も結核をわずらったため、後年にはもう見合い話もなくなっていたはずだ。特に、病弱故に徴兵検査に落ちるというのは、当時としては人間失格の烙印を押されたに近い。まともに仕事もしていないニート生活で、趣味は同人活動。顔もキモい。性格は激しくてＡＤＨＤの疑いあり。そして病気持ち。これだけアレな要素が揃っていて30歳を超えれば、もう結婚など不可能だ。後は、ニートとして実家の資産を食い潰すしかない。

「生涯独身、生涯モテない」という人生最大の分岐点に達した賢治と都井。

賢治は、「脳内の妹に萌え続ける」というよだかの星ルートを選択した。ここで重要なのは、賢治は実在の妹にハァハァしたのではなく、童話や詩作の中に妹をモデルとした萌えキャラを創造したということだ。現実の妹を押し倒したりしたら、近親相姦エロ少女マンガ『僕は妹に恋をする』※みたいなドロドロの展開になってしまう！　そこで賢治は、妹萌えの衝動を、三次元の実在の妹から二次元の妄想の妹キャラへとうまく昇華させたわけだ。フロイドは**リビドーは芸術に昇華される**と言ったが、賢治は三次元への執着を断ち切り、萌え心を見事に昇華したのだ。例えば、『銀河鉄道の夜』に登場するカムパネルラ――主人公ジョバンニの親友だが、子供を助けるために水死してしまい、ジョバンニと一緒に銀河鉄道に乗ったにもかかわらずジョバンニを捨てて彼方の世界へ去ってしまうという悲しいキャラ――がそうだといわれている。当然、もっと直接的な、妹の死を嘆く詩なども残している。賢治の心を蝕んだ「病気による人生の挫折」と「最愛の妹の死」…これらの三次元世界では絶対に癒されない悲しみ。だが、賢治は、**妄想する＝二次元の世界を作る、というオタク行動によって、鬼畜化という悲劇を阻んだ**のだ。

これに対して、都井は「鬼畜になる」というルートを選択した。せっかく小説を書いていながら、萌えキャラを創造するというコースを選ばなかったのだ。恐らく、そういう方法論を思いつかなかったのだろう。都井は、男のちんちんを切り取って有名になった阿部定のように、三次元の世界でせめて犯罪者としてでも名を残す道を選択した。

そもそも、恋愛衝動、性欲への対処方法が、二人の価値観・辿ったルートの違いを如実にあら

※『僕は妹に恋をする』青木琴美著。小学館。兄と妹の肉体関係ありの恋愛を描く。この兄がまたイケメンのDQNで……。

わしている。賢治は二次元世界の純愛を選び、都井は三次元世界のエロ女体を選んだのだ。
賢治がかたくなに女を拒んだのは、おそらく、三次元のエロ女体の味を知ってしまうと、己が鬼畜化するのではないかという恐怖を抱いていたためだろう。パソコンもDVDも何もない当時、三次元を遠ざけつつ性欲を満たすには、浮世絵ぐらいしか選択肢がなかったようで、賢治先生のエロ浮世絵コレクションは、膨大な量に上ったといわれている。たぶん、**俺の家にあるアダルトDVDよりも多い**YO！
で、都井の遺書にはまだまだ続きがあって、

そのほかに僕が死のうと考えるようになった原因がある。寺井弘の妻マツ子である。
（筑波昭『津山三十人殺し―日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社）

まだ他の女が!!!

病気に僕がなってからは心がわりして辛くあたるばかりだ。はらがたってたまらなかったがじっとこらえていた。あれほど深くしていた女でさえ、病気になったと言ったらすぐ心がわりがする。僕は人の心のつめたさをつくづく味わった。（中略）ある日マツ子がやってきた。僕は何時も睨みあっていずに、少し笑顔で話してもよいがなと言ってやった。するとマツ子の奴は笑顔どころか睨みつけた上鼻笑いをし、さんざん僕の悪口を言った。ゆえに自分もはらをたて、そういうなら殺してやるぞと脅し気分で言った。ところが、かやつは殺せるもの

なら殺してみろ、お前ら如き肺病患者に殺されるものはおらん、と言って帰っていった。（中略）それほどまでに人をばかにするなら、ようし必ず殺してやろうと深く決心し（後略）

（筑波昭『津山三十人殺し—日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社）

こんなことで深く傷つくナイーブな性格のオタクが鬼畜の真似事を三次元でやってしまったら、結果は悲劇になるであろうことは明らかだ。**ＤＱＮなら、女にこんなことを言われても何とも感じないばかりか、さらなる暴力で応戦したはず**なのだ。

都井は明らかに、ルート選択を間違ったのだ。次々と女に裏切られた都井は怒り狂い、復讐のために肉体を鍛え上げ、借金をしてまでも銃器をかき集め、重武装を開始する。

（前略）養生した。それは養生したのは少しでも丈夫になって、きゃつらに復讐してやるためにだった。（中略）そうして神様に祈った、どうか身体を丈夫にしてくださいまして、きゃつらを殺させてください。きゃつらを殺しましたらその場で命を神様にさしあげますと、まったく復讐に生きる僕だった。ずいぶん無理をして起きもし、また歩きもした。ひたすら恨みに燃えて動悸の高い心臓を抑え、病気が出ていた胸をおさえて。ところが不思議に治るかんねんをすてたら、今までのような心配がなくなったせいか、少しも快方に向かわなかったのが次第によくなっていった。

（筑波昭『津山三十人殺し—日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社）

驚くべき精神力で結核を治した都井は、和製『タクシードライバー』への道を一直線に突き進む。実は、これだけ回復していれば（回復どころか、恐ろしいほど金を使って栄養を取ったために、プロレスラー並みのガタイと体力を手に入れたらしい）、きちんと仕事につくことも可能だったのだが、都井はもう戻らない。すでに都井にとって三次元の世界は、「復讐」を成し遂げるための最終ステージと化していたのだ。妄想で満足すべき「復讐」を、三次元で実行するために非現実的な努力を続ける都井は、**すでに二次元と三次元の区別を見失っていた。**

その時のうれしさ、これなら西川のやつらやマツ子の奴にも復讐できると思った。
（筑波昭『津山三十人殺し―日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社）

復讐するは我にあり！とばかりに、都井はある夜、ついに復讐を決行。詰襟を着て頭に鬼の角のような懐中電灯を2本差し、手には猟銃、腰には日本刀、ポケットに短刀、大量の銃弾を身にまとって完全武装した姿で村中を暴れまわり、30人もの村人をまとめて殺した都井は、重武装のまま丘を駆け上がってそこで自決したのだ。この坂がまたとてつもなく急勾配で、武装した病人が登っていけるようなものではないという。実際に津山まで行って取材した柳下毅一郎[※]先生が言ってるので、間違いないYO！

つまり、この瞬間、都井は間違いなく日本で最強の男になっていた。『タクシードライバー』というより、鍛えすぎて『ランボー』[※]になっていたのだ。一晩で30人もの人間を殺し、己は手傷を

※柳下毅一郎
映画評論家、特殊翻訳家。洋泉社の『映画秘宝』に創設時から参加。主な著書は『愛は死より冷たい』『殺人マニア宣言』『興行師たちの映画史』など。訳書に『ケルベロス第五の首』（国書刊行会）やバロウズの諸作品などがある。また、町山智浩と「ファビュラス・バーカー・ボーイズ」という映画評論コンビを結成している。

※『ランボー』
シルベスター・スタローン主演のアクション映画。ベトナム帰還兵の最強戦士ランボーが排他的な町でさんざん差別されて逆ギレし、たった一人で戦争を始める。「米軍にはこんなに強い兵隊がいたのに、なぜベトナムで負けたのか……」と疑問が。

負わずに心臓破りの坂を重武装で走りぬけ、丘まで登っていったというのだから、もし徴兵していれば敵地でどれだけ活躍したことやら。

しかし、もし今の日本だったら、都井はどうなっていただろうか？　都井の自宅にパソコンがあれば、きっと都井は『Ｔｏ　Ｈｅｒａｔ』のマルチあたりの萌えキャラに癒されて、引きこもりとして幸せに暮らせたはずなのだ！　いや、まあ、それはそれで「キモーイ」「キャハハハハ」「ニート野郎が来た！」と村の女たちに馬鹿にされたかもしれないが、それでもパソコンモニタの前には都井を癒してくれる萌えキャラが存在してくれたはずなのだ。

「萌え」というものは、**都井のような愛されない人間を救うために絶対に必要な信仰**なのであって、なんぴともそれをキモーイなどと笑ってはならない。なぜなら、モテない男たちから萌えキャラまで取り上げてしまったら、必ず都井のような**復讐の鬼**が生まれてくるのだから。むしろ、**モテない男は、心の安寧を得るためにどんどんオタク化するべき**なのだ。都井だって元々は姉に萌え狂っていたのだから、もっともっと萌え燃料を与えられていれば、こんなことはしでかさなかっただろう。モテないために手を出した「女への追い込み」だって、エルフの名作鬼畜ゲーム『鬼作』[※]でもやっていれば、実行せずに済んだはずなのだ。

現代の日本には、**喪闘気を解消するインフラが整っている**。そのため、都井のような「オタク系から一転、鬼畜コースへ」というルートを辿る人間は、確実に減っているだろう。オタクは妄想力があるので、二次元で暴れればだいたい満足できてしまう人種なのだ。逆に言えば、現代に

※『鬼作』
エルフのＰＣゲーム。伊頭鬼作という鬼畜主人公が大会社に潜り込んで女性たちを追い込んでいくというピカレスク・エロ・ロマン。

おいてこれだけ萌えが流行っているということは、それだけ三次元の女によってとりかえしのつかない打撃を受けている男がたくさんいるということなのかもしれない。

何しろ、恋愛資本主義の肥大化によって、モテない男は都井や賢治が生きていた頃よりも悲惨な状態に追い詰められている。モテない男の救済措置となっていた見合い結婚はほとんど滅亡した。風俗に通っても「素人童貞」と罵られる。しかも女は、一部のモテる男にしか興味を示さない。なんとかしようとすると、大量の金が必要になってしまう。モテる男とそうでない男の格差は、広がる一方なのだ！

賢治と都井の分水点は、実に微妙なものだ。賢治だって、一歩間違えれば自分が教えていた学校の生徒たちを襲撃して**「イーハトーブ30人殺し」**という伝説を築いていたかもしれない。

そう、萌えは、「鬼畜にはなりたくない」という人の良心が生んだ、いや、生み出さざるを得ないものなのだ。だからオタクには、心の優しい男が多い。「電車男」で感動しているような負け犬予備軍女は、「彼は優しい人なんだから、オタクをやめれば魅力的よ」とか愚にもつかないことを抜かすだろうが、それは逆だ！

心が優しいから、オタクになったのだ！

自分が傷つけられていても、人を傷つけたくないから、オタクになったのだ！

そんなオタクを恋愛資本主義の荒んだ競争社会へ引き戻して脱オタさせても、女が妄想している「優しいＤＱＮ」のような都合の良い男は得られないだろう。むしろ、萌えの力で塞き止めら

れていたルサンチマンが噴出して、都井のような鬼畜が生まれてくるかもしれない。まあ「都井登場」は大げさにしても、DV[※]を振るうようなプチ鬼畜が大量に発生するだろう。

男はオタクだからこそ優しくなれる。恋愛資本主義に男が参加すれば、DQN化する。オタクには愛があり、恋愛資本主義には愛がないからだ。人間はオタクと鬼畜、いずれにもなれる存在なのだ。そして、オタクこそが、正解の選択肢を、愛を選んだ人間なのだ。

都井の遺書の最後は、こんな一節で締めくくられている。

実際弱いのにはこりた、
今度は強い強い人に生れてこよう、
実際僕も不幸な人生だった、
今度は幸福に生れてこよう

（筑波昭『津山三十人殺し―日本犯罪史上空前の惨劇』新潮社）

都井睦雄は、弱い人…オタクのままで生きるべきだったのかもしれない。彼が「牝なんてのは、肉壷だぁ」と思って笑っていられる本当のDQN鬼畜…ナチュラルボーン鬼畜であれば、女に何を言われようが、ここまでボロボロに傷ついたりはしなかっただろう。

心の優しい男は、**みな**、**オタクになっていくのだ**。

もはや、恋愛は死んだ。21世紀、男はオタクへの進化を開始したのだ。

※DV
ドメスティック・バイオレンスの略。「家庭内暴力」。アメリカで問題になっていたが、最近、日本でもDV被害が増えてきている。

『タクシードライバー』は何故、モテない男のヒーローなのか？

七〇年代を代表する名作映画『タクシードライバー』は、**モテない俺がこの世で一番好きな映画**なのだが、この映画は、全世界のモテない男・ボンクラ・オタク・ダメ人間にとってのバイブル的な作品として崇め続けられている。

主人公のトラヴィス（ロバート・デ・ニーロ）はニューヨークのボロアパートで独り寂しく暮らしている不眠症のベトナム帰還兵。どうせ眠れないので夜中にも働けるタクシードライバーの仕事をしてひっそりと生活費を稼いでいるが、客以外の人間との接触はまったくなく、ほとんどタクシーの運転席に閉じこもっている引きこもりも同然。趣味はポルノ映画館でエロ映画を観ることと、電波な日記をつけること。

トラヴィスは引きこもり生活を続けるうちに、彼女が欲しいと熱望するようになり、

「引きこもって生きているのは馬鹿げている、行動を起こすべきだ！」

と、ある日、大統領候補の選挙ボランティアをやっているインテリ女のベッツィをナンパする。もうこの時点で、後の鬼畜化への道筋ができつつあることを見逃してはいけない！　**引きこもりよりも行動が大事だ、という三次元至上主義が、トラヴィスの鬼畜化の最大の原因となる**のだ。

だが、無学で無教養なトラヴィスが、リベラルなインテリ女のベッツィと恋愛できるわけがなかった。ベッツィは、最初、トラヴィスに対して「ヘンな人だけど、まあ面白いかも」という感じで接しているのだが、トラヴィスがポルノ映画館に誘ったことで「キモッ！」とドン引きし、

絶交してしまう。

いや、まあ、当たり前といえば当たり前なのだが、トラヴィスは別に悪気があったわけではなく、彼にとって遊び場所といえばポルノ映画館しかなかったのだ。つまり今ふうに言えば、**最初のデートがいきなり秋葉原での「まんだらけ」**※**とコスプレ喫茶のハシゴでした、**という感じなんだYO！　で、相手は、エルメスみたいな独身30女だYO！　知性の皮を被り、純朴な男を捕まえて、「大人のキス、できる？」とか抜かすビッチなんだYO！

この『タクシードライバー』は七〇年代のニューヨークが舞台だが、それから30年近くを経て、ついに日本…ことに東京が、ニューヨークの当時の悲惨な状態に追いついたといえるのだ。日本でも八〇年代に恋愛資本主義が勃興し、一方ではフェミニズムが台頭した。その結果、今の独身30女の世代は、フェミニズム的価値観に基づいて自己の権利を要求しつつ、男には恋愛資本主義の観点から法外な経済力や高望みなイケメンぶりを望むようになってしまった。どちらか一方だけでも合格できる男はほとんどいないというのに、両方要求されてもそんな男、いるわけがない。いたとしても、少数なので女には行きわたらないというわけだ。で、『だめんず・うぉ〜か〜』のような「男をひたすら恋愛資本主義の視点から勝手に採点してダメ出しする」という、恋愛の崩壊現象としか思えない本が売れたりするのだ。

『タクシードライバー』だって、トラヴィスは顔がイケメンだったからベッツィをデートに誘い出すところまでは成功したが、**もしトラヴィスの顔がデ・ニーロじゃなくて俺だったら、**そもそ

※まんだらけ
漫画やオタクグッズ、おもちゃなどを扱う古書店。店員がコスプレしている。中野ブロードウェイが本拠地。秋葉原にも進出した。

も秋葉原まで連れ出すことすらできなかったはずだ。そんなわけで、恋愛資本主義とは完全に無縁なオタク生活を送っていて女とのデートの仕方も知らないトラヴィスは、現代日本のオタク大軍団にとっての写し身なのだ。

…で、大人のインテリ女、恋愛資本主義とフェミニズムにドップリ漬かったリベラル女のベッツィにフラれたトラヴィスは、次に、**13歳の少女娼婦アイリス**（子役時代のジョディ・フォスター）と出会う。

ロリコン、キター!!

…という展開には**ならず**、トラヴィスはむしろ激怒する。アイリスのような子供を騙して売春させているポン引き野郎どもに、嫉妬と正義感と怨念の入り混じったルサンチマンを抱くようになるのだ。ここでアイリスとギシアンやっていれば、大人の女に失望した男がロリに走ったというだけの凡庸な映画で終わるのだが、**真のオタクは、目先のセックスへの欲望には流されない**。
つまり…トラヴィスは、悪党に騙されて売春させられている少女アイリスに、**萌えた**のだ!
性欲よりも、ポン引きへの怒りが先走り、アイリスを助けねば!という正義感が炸裂する。
いや本当に。
トラヴィスは軍隊あがりなので行動も発言もＤＱＮ臭いが、三次元の醜さを呪い、理想の世界

を妄想し続ける彼の魂は**完全なオタク**だ。まあ、どっちかというと戦争オタク・ミリタリーオタク系だが。元々、モテない自分の境遇に対するルサンチマンから無駄な正義感を溜め込んでいたトラヴィスだったが、アイリスを救う（というかポン引きのＤＱＮどもを皆殺しにする）という目標を得て、クライマックスの暴走劇へと走り始めるのだ。

トラヴィスを動かしているのは、単なる純粋な正義感ではない。元々はオタクらしい優しさや理想を持っていたトラヴィスだったが、ニューヨーク暮らしでの度重なる「げ…現実はおっかねえ！」という幻滅体験、ことに**女に全然モテない**という体験の積み重ねによって、内面に塞き止められた愛が、鬼畜の魂に変質してしまっているのだ。トラヴィスの全身は、すでに喪闘気に覆われていた。

そもそも、アイリスだって、トラヴィスに、

「家に帰れ！　君がつきあっている連中は、最低の人間の屑だぞ！」

と暖かい愛に溢れる説教をされても、

「アーハハハ」

と笑ってるだけなのだ。アイリスがちびっ子でなければ、トラヴィスも激怒して、ちゃぶ台をひっくり返していたことだろう。しかし、大人のベッツィに対しては、フラれただけで「最低の女だ！」とキレたトラヴィスだったが、もっと酷い扱いを受けているアイリスには、キレるどころか、ますます、

「俺がなんとかしなければ！」

と決意も新たに萌えてしまうのだった。やっぱり年がずっと下だからだろう。マジ切れするのも大人気ないというか。……**同い年はダメだ！　同い年の男女は、赦し合わない！**

ともかく、ＤＱＮに騙されて破滅の道を一直線に辿っていく女の子を見て、心を痛めないオタクはいない（たぶん）！　たいていのオタクは心が優しいのだ。ただ単にトラヴィスがベッツィやアイリスとセックスしたいだけだったら、さっさとタクシーの中に監禁してスーパーフリーな行為に及んでいただろう。それに、ベッツィにキレた時にも、「地獄へ落ちろ！」と怒鳴るだけでなく、実際に暴力を振るっていたはずだ。トラヴィスが求めていたのは、愛だったのだ。

だが、**恋愛資本主義のフォーマットをまったく知らないトラヴィス**は、恋愛資本主義に子供のアイリスまでもが洗脳されてしまっているニューヨークでは、決して女に相手にされないのだ。ＤＱＮどもは、女に稼がせた金で毎日面白おかしく暮らしているというのに！

いくら愛を説いても、誰にも聞いてもらえない。これは…まるで、まるで、秋葉原のオタクそのものではないか！

っていうか、俺だよ！　トラヴィスは、俺なんだ！

なぜＤＱＮのヒモに騙されて売春なんかやっているのか、愛はどこへいった？　オタク文化を理解しようともせず、聞きかじりのコピペ知識をひけらかして賢しらぶりやがって、愛はどこへいった？　それよりも何よりも…俺よりもＤＱＮどもがモテているという現実が、ゆるせねえ！

あんな、女を肉便器としか思っていない屑連中、愛を持たずに生まれてきた化け物のような連中が、俺をせせら笑いながらセックスしまくっているんだ！　やっぱり女はみんな、オロカモノで、愛など知らない連中なのだろうか？　それとも、ＤＱＮさえいなくなれば、女は愛を知ることができるのだろうか？

トラヴィスはそんな葛藤の果てに、

「三次元の世界のほうが、俺の理想の二次元世界に合わせるべきだ！」

と結論づける。

『マトリックス』のネオに先駆けること20年、行動するオタク、「現実こそ間違っている！　俺の妄想こそが真の現実だ」と叫ぶ行動派オタクの誕生だ！

「もはや我慢ならん、屑ども！　ここに正義の男がいる！　絶対に許さん！」

トラヴィスは、ニューヨーク中の悪徳を体験させられてその全てを内面に抱え込んだ結果、己の喪闘気を防ぐことができなくなり、テロリストとして暴れることを決断する。そして、

ルート１　馬鹿女ベッツィに仕返しするべく、ベッツィが支持している大統領候補を殺す

ルート２　かわいそうなアイリスを救出するべく、ポン引きＤＱＮ軍団を皆殺しにする

というルート選択を迫られる。いや、**どっちにしても鬼畜**なんだけど。

トラヴィスはまず大統領候補を狙うが、無理そうだと気づくとあっさり諦め、次のルート…ア

イリス救出劇というかＤＱＮとの大銃撃戦を選択。やはり本命はＤＱＮだったのか、今度はやる気まんまんだ。そして、伝説ともなった売春宿での血みどろの殺し合いを決行するのだった。

一人対多数！　絶対的に不利だったトラヴィスだが、ベトナム帰還兵というキャリアと日々のオタク的鍛錬の成果が出て、ＤＱＮポン引き軍団を皆殺しに！　で、ついに鬼畜になってしまったトラヴィスは「あーあ、やっちまった。もう、ここらへんでよか」とばかりに自殺しようとするが、銃弾が尽きて死に損なう。

ここでトラヴィスが死んでいれば悲惨なアメリカン・ニューシネマ※なのだが、トラヴィスは生き延びた。しかも、アイリスを救おうとしていたことが良い方向に誤解されて、トラヴィスは少女をＤＱＮから救った英雄になってしまうのだった！

この『タクシードライバー』では多くのことが示唆されている。

・内向的で善良なオタクは、恋愛資本主義に漬かっているキャリアウーマン女（負け犬）には理解されない。**オタクは、妄想と欲望にまみれ、知性に乏しい馬鹿だと思われている**
・若い女の子は、セックスが上手いＤＱＮが好きなので、**セックスも迫らずに真面目な説教を始めるオタクを馬鹿にする**
・女に仕返ししようとすると、ストーカーから鬼畜への**破滅ルート一直線**になってしまう
・だが**「萌え」の心**が、ルサンチマンによって鬼畜に変質したオタクの愛を、昇華してくれるかもしれない

※アメリカン・ニューシネマ
一九六〇年代～七〇年代、アメリカで製作された反ハリウッド的な映画。従来のハリウッドムービーのお約束から外れた作品が多く、『俺たちに明日はない』『真夜中のカウボーイ』など、主人公がみじめに挫折していくアンハッピーエンドが多かった。

『タクシードライバー』は映画なのでトラヴィスはＤＱＮを皆殺しにしたが、もちろん実際にこんな事件を起こしたら町の英雄扱いなどありえない。実際にオタクがこういう状況でできることといえば、やはり、**アイリスをモデルにした脳内キャラクターを創造**して、二次元の世界で正義と愛を実現することだろう。というか、『タクシードライバー』という映画そのものが、ＤＱＮと女に怒り狂ったモテないオタクたちによる「**妄想世界**」の創造そのものだったのだ。だから、『タクシードライバー』は永遠にモテないオタクたちのバイブルなのだ。

ちなみに、トラヴィスが周囲の誤解から英雄になった後、ベッツィは掌を返したようにトラヴィスに「**女の潤んだ目線**」を送ってくる。予想に反して突然「街のイケてる男」になったトラヴィスを、今さら誘惑しようとするのだ。

嘔吐！　嘔吐！　嘔吐！

そもそもトラヴィスを袖にしたのはベッツィのほうだったというのに、なんという自分勝手な。しかも、ベッツィは、別にトラヴィスの内面を理解したわけではない。ただ単に、トラヴィスが世間で英雄扱いされるようになり、恋愛資本主義における商品価値がアップしたから、未練が出てきただけなのだ。「逃した魚は大きい」という奴だＹＯ！　内心では、相変わらず無学なトラヴィスを馬鹿だと軽蔑しているくせに、ただ、社会的な知名度がアップしただけで……。

あさましや、あさましや！　みよ、これが女の性だ！

この時の**ベッツィの潤んだ瞳の汚らわしさ**を、俺は一生忘れられないだろう。まさしく、女の正体見たり！

しかし、トラヴィスはもう、ベッツィを見てはいなかった。もはや彼の目は、脳内にいる萌えキャラとしてのアイリスしか見ていないのだ。ＤＱＮとの大銃撃戦と、その後の世間の勘違いによって、**トラヴィスの妄想は三次元を征服した。**だからトラヴィスにはもう、三次元の女は不要なのだ。いや、ベッツィのほうが逆に、トラヴィスの強烈な妄想に引きずり込まれているのだ。

俺は断言するが、仮に俺が何かの間違いで——どっかの油田を掘り当てたり、アメリカの宝くじで三百億円ぐらい当たったりして——大金持ちになったりすれば、今までオタクを馬鹿にして俺を脳たりんの阿呆だと軽蔑してきた女が、わらわらと俺に近寄ってくるに違いない。いや、そんな経験ないから知らんけど、絶対そうなるＹＯ！　高校時代に同じクラスだったわね、とか、わけのわからん奴に言われたりして。

金はなくとも、テレビとかに出て有名人になったりしても、同じパターンになるだろう。なるなる。三次元のアナログ女ってのは、そういうものなのだ。男を商品としてランクづけることばかりで、内面は見ない。それが恋愛資本主義に漬かった女のやることなのだ。**ステイタスの高い男を捕まえることで、何もせずに自分のステイタスを上げて、勝ち組ぶろう**と……。

見栄。打算。どこにも、愛など、ない。

また、アイリスのような若い女の子がＤＱＮにホイホイとついていき、真剣に心配してくれて

いるオタクを嘲笑するという現象は現代の日本でも起きている。結局、彼女たちの多くにとっては、「恋愛」イコール「セックス」なのであり、**男と付き合うということは、セックスをするということでしかない**のだ。恋愛資本主義が拡大した結果、少女マンガが「恋愛とはセックスだ」と教え込むための媒体になってしまい、「ヤラハタ※だと恥ずかしい」という気がふれていると思えない転倒した価値観を女の子たちに刷り込んでしまった。これはもちろん、若いうちから女の頭の中をセックス漬けにすることで、恋愛資本主義の忠実な歯車にしようという目論みに過ぎないのだが、その結果、女を肉便器としか思っていないＤＱＮがますますモテ、女を恋愛対象としてみているオタクはますますモテないということになったのだ。

しかも、オタクの理想主義は、八〇年代にフェミニストたちによって、

「男の身勝手な幻想を女に押し付けているだけ」

「実に幼稚でマザコン的」

と断罪されてしまった。アイリスがトラヴィスを馬鹿にするのも、トラヴィスが娼婦を買っておきながらセックスしようとせずに説教するからだ。「本気になったら説教しちゃうのが男なんだよ」とは岡田斗志夫先生の言葉だが、しかし女が求めるものは男の真心に満ちた言葉などではなく、「**昔、少女マンガやドラマで刷り込まれた**」**素敵な愛のセリフ**なのである。それが本心かどうかなど、どうでもいいのだ。トラヴィスがモテないのは、彼がそんな恋愛資本主義のフォーマットに興味を持たず、**自分独自の恋愛美学**を持っているからだ。トラヴィスの説教は、女に「アーアーきこえなーい」とスルーされて終わるのだ。

※ヤラハタ
処女・童貞のまま20歳に到達してしまうこと。恥とされる。

負け犬や負け犬予備軍たちには「幼稚」と言われて相手にされず、若い子には「キモイ」と言われて相手にされない。愛深き故に、女に愛されない、悪循環。荒んだ今の世界では、オタクは純真なるが故に、馬鹿扱いされるのだ。そんな世界に生きるオタクの悲哀が、『タクシードライバー』には詰まっているのだ。

鬼畜の現代的な形・ストーカー犯罪の誕生

日本が『タクシードライバー』のニューヨークに追いついたのは最近のことだが、実は七〇年代にすでに天才漫画家・ジョージ秋山先生が「愛なき時代の到来」を予言するかのような数々の名作を残している。それが『銭ゲバ』『銭豚』そして一連の毒薬仁出演作品だ。

『銭ゲバ』およびその外伝の『銭豚』の主人公・蒲郡風太郎は、貧乏故に「金のためなら何でもするズラ！」と守銭奴になった**トラウマ型鬼畜**。悪事を重ねて億万長者になるが、さらなる苦悩に突き落とされることになる。顔がキモメンなので、いくら金を稼いでも愛を得られないのだ。それどころか、金が貯まれば貯まるほど、その金を目当てに女が寄ってくる。キモメンの彼自身を愛する女は現れず、金がなければ誰にも相手にされず、金を稼げば会う女すべてが売春婦と化して金をせびってくる。『銭ゲバ』の最終回で、すべての野望を達成して資本主義社会の勝利者になった風太郎は、ふと、自分が妻と子に囲まれて、なんでもないささやかな家族生活を営んでいる姿を妄想する。息子に「父ちゃん！」となつかれ、休日にはムシキング※のイベントに息子を連れて行く。そんな、実にささやかな幸福が、風太郎には永遠に無縁のものなのだ。資本主義社会

※ムシキング
お子さまの永遠のアイドル・カブトムシなどの昆虫をテーマにしたカードバトルゲーム。セガ。

の勝者となった彼も、「恋愛資本主義」においては金に頼らなければ女に触れることもできない無残な敗北者に過ぎない。実は自分が**生まれながらの敗北者**であり、**すべてが徒労であった**ことに気づいた風太郎は、「私は、人生に勝った」と遺書を残して自殺してしまう。

そして風太郎の遺志は**毒薬仁**に引き継がれる。

「オリはよう、オリは誰なんだよう！」

歌舞伎町で日夜、道行く馬鹿女たちに魂の説教をかまし続ける毒薬仁は、**俺の永遠のヒーロー**だ。貧乏な生まれで、もちろんキモメン。一般資本主義では負け組、恋愛資本主義ではそもそもエントリー資格すらない。そんなナチュラルボーン負け組な生い立ち。あまりにモテないので、「もうオリには暴力しかない！」とばかりにヤクザになって、金の力で女を抱いたりするが、やっぱりまったく満たされない。本当は愛に飢えているシャイで純真な男なのに、顔があまりにもキモメンなので、女はみんな声をかけられただけで「ひーっ」と逃げてしまうのだ。そのくせ、金をちらつかせると、あっさりと股を開く性根の醜い女たち。あさましく残酷な女たちの姿を見て傷ついた毒薬先生は、**悲しみを怒りに変えてますます荒れ狂う**のだ。

先生は歌舞伎町で拡声器片手に怒り、嘆き、悲しみ続ける。

■毒薬仁
（ジョージ秋山『くどき屋ジョー』小学館）

「人間は心…ざけんじゃあねーよう、オーバカヤロウ！ 人間は顔だよなあ！ そりゃあ**このオリが一番よく知ってるのよ！**」

「その頃、神田川つう歌が流行ってたんだよなあ！ ほりでよう！ わけーっ男と女が同棲するのが流行っててよ！ 石けんかたかたならしてよ。みんな行くんだよなあ赤い手ぬぐいマフラーにしてよ！ 夜もふけて十二時になりゃあオリはよう、**つめてえせんべい布団**でよ、他の部屋の奴らは**湯上がりのあったけえピンクの肉布団**でよ、オリはくやしくてくやしくてよう、まんじりともできねえでよ、そん時思ったんだよなあオリはよう**きっと悪い奴になる**んだってなあ！」

（ジョージ秋山『くどき屋ジョー』小学館、太字は筆者）

涙なくしては読めない毒薬先生の魂の辻説法は誰にも聞いてもらえない。毒薬先生は『恋子の毎日』※で恋子にフラれたあげく鞭でシバかれたり、『くどき屋ジョー』※でイケメン野郎のジョーに女をかたっぱしから持っていかれたり、『組長の娘』※でやっと彼女ができたと思ったら、またイケメンに取られそうになったり……と、愛を求めてやみくもに歌舞伎町をさまよい続けるのである。

八〇年代の恋愛資本主義の勃興と拡大によって、**「モテない男が、決して手に入れられないもの」が、「セックス」から「恋愛」へと移り変わった**。恋愛の資本主義化、およびバブル経済崩壊の結果、セックスは空前のデフレスパイラルの突入。女子中高生でもホイホイとやってしまうという、ジャンクフード並みのコンビニ商品になってしまった。

※『恋子の毎日』
ジョージ秋山の漫画。一九八五年。ちょっと変わった恋子とヤクザのサブちゃんの恋愛を描く大人のラブコメ…だったのだが、途中から毒薬仁先生が登場して恋子に惚れてしまい、滅茶苦茶になる。最後はサブちゃんが毒薬に「お前は俺なんだよ！」と言い出して、わざと殴り倒されるという展開に。

※『くどき屋ジョー』
ジョージ秋山。一九八六年。普段はルンペンだけど、実はイケメンで、女を口説くしているジョーが主人公。しかし、途中から、キモメンで女にモテないライバル・毒薬仁が出てきて、滅茶苦茶になる。様々な作品に登場する毒薬仁の初登場作品と推定されている。

※『組長の娘』
ジョージ秋山。二〇〇〇年。徳間書店『アサヒ芸能』で連載されていた。ヤクザの組長の娘が主人公だが、途中から彼女に惚れた毒薬仁太郎が出てきて滅茶苦茶になる。単行本は1巻で止まっており、毒薬が登場する後半が読めない状態のままだ。

その一方で、モテない男にとっては「恋愛」はどんどん入手困難なものになっていった。風太郎は七〇年代において、いちはやくそのことに気づき、金の力では真の勝利…愛を得ることはできないと悟って自殺したのだし、毒薬もまた「スンズク（新宿）の帝王」というビッグな身分に成り上がっていながら、何をどうやっても女の愛を得られない自分の惨めさに苦悩し続けた（毒薬は恐ろしく無神経そうにみえる顔だが、**神経性の心臓病を患っている**）。

この価値観の変遷のなかで、「**ストーカー犯罪**」という概念が生まれたのだ。

かつて、モテないくせに女の子にしつっこく迫る男は、「**岩清水君**」と言われていた。岩清水とは、あの梶原一騎大兄の名作純愛劇画『愛と誠』※に出てくるモテない脇役君で、眼鏡・文系・インテリという「梶原漫画では絶対に主役を張れない三要素」をすべて兼ね備えたオタクキャラだ。この漫画では主役の誠とヒロインの愛が相思相愛関係で、脇役の岩清水は、それを知っていながらしつこく愛に言い寄るという役どころ。

ところが、さすがは梶原先生。この、下手したら笑われ役や嫌な悪役で終わりそうな岩清水君を、「ケンカは弱いが、誰よりも、もしかしたら主人公の誠よりも純真な愛情の持ち主」として描き切ってしまった。岩清水は愛に永遠不滅の名台詞を言い放つ。

「**きみのためなら、死ねるっ!!!!!!**」

※『愛と誠』
梶原一騎原作、ながやす功作画。『少年マガジン』で連載され、大ヒットした大時代的恋愛劇画。

■元祖「きみのためなら死ねる」の岩清水君
（ながやす巧、梶原一騎『愛と誠』第3巻 講談社）

誰もが思いつくが、誰もが言葉にすることのできない、情熱度MAXの純愛ッ！　ベジータのスカウター※が破裂する勢いの絶愛だッ！

しかし、そんな心美しい岩清水君は、カウンターカルチャーの逃げ場としての貧乏恋愛が廃れ、恋愛が恋愛資本主義の商品になっていった八〇年代に入ると、

「ねずみ男※のように女につきまとう、気持ち悪い男」

というお笑いキャラに成り下がってしまった。

具体的には、小林まことの『1・2の三四郎』※に、ねずみ男状態で登場するヘンな男・岩清水君のことだ。

いくら情熱的に愛を説いても、**女のほうにその気がなければ変人扱いされる世界**が来たのだ。

恋愛資本主義による「モテ系」と「モテない系」の二極化・区別・差別が始まったのだ。これは、恋愛市場において、女が絶対的な「売り手」であり、男は立場の弱い「買い手」に陥ったことと関連している。元々、男が女を口説くというのが恋愛の王道パターンではあったのだが、八〇年代には恋愛資本主義の勃興によって女は誰も彼もがかぐや姫のごとき高望みを開始し、男はそこそこイケていてもアッシーとかメッシーといった下僕扱いを受けるという厳しい時代が訪れた。

※ベジータのスカウター
『ドラゴンボール』のベジータは当初、目に「スカウター」というサングラス状の機械を取り付けていた。このスカウター、相手の戦闘力を測定して数値で表示してくれるというスグレモノなのだが、あまりにも強い奴を調べると爆発してしまうのだった。

※ねずみ男
水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』に登場する脇役。こすからくて信用できない性格。妖怪と人間のハーフらしい。

※『1・2の三四郎』
小林まことの漫画。格闘技マニアの高校生が様々なスポーツで活躍し、プロレスラーになるまでを描く。『少年マガジン』で連載されていた。続編も多数。

女が経済的に自立し、男にすがらずとも食べていけるようになったことも関係しているだろう。
フジテレビでとんねるずの司会による『ねるとん紅鯨団』※がオンエアされていた頃が、この恋愛バブルの絶頂期だった。恋愛は大量生産・大量消費するための商品になり、男が女に「お願いします！」と突撃しては、フラれて次の女にまた突撃を繰り返す、そういうモノに変質してしまったのだ。

こうなると、岩清水君のように、女に純愛をひたすら捧げて諦めないタイプのオタク系は、恋愛資本主義における恋愛の消費サイクルにとって、**効率の悪い邪魔者**でしかない。一人の異性を一途に思い続ける…こんなオタクが主流になったら、恋愛資本主義のシステムは動かなくなってしまう。

だからまずは「根暗」という差別語によって、岩清水系オタク男は女と接触できない「モテないゾーン」に強制移動された。恋愛してよい男は「根アカ」と呼ばれる、ねるとんの出演者のような**セックス中毒の頭の軽い男**だけで、重くて真面目で誠実な男は「根暗」と呼ばれてロックアウトを食らったのだ。で、その後、さらに都合の良い言葉が見つかった。言うまでもなくそれが「**オタク**」だ。オタクという人種は、「外見はデブで眼鏡でキモメン。性格は陰湿で根暗で幼稚。趣味はロリコン」というこれでもかといわんばかりの圧倒的なマイナスイメージを捏造され、押し付けられた。さらに九〇年代になると、とうとう犯罪者である「**ストーカー**」へと格下げされた。

ストーカーと呼ばれる人間が増えた最大の理由は、「恋愛」が手に入らない人間が増えたことに

※『ねるとん紅鯨団』一九八七年から一九九四年にかけてフジテレビ系でオンエアされていた集団お見合い番組。バブル時代の象徴だ。

他ならない。ストーキングとは、一方的な・強制的な恋愛である。かつては、セックスが手に入らない人間が多かったために、性犯罪といえば「強姦＝強制的なセックス」が主流だった。しかし、今の日本ではむしろ、「ストーキング＝強制的な恋愛」のほうが問題になっているわけだ。

左のグラフを見ていただきたい。少年による強姦はアダルトメディアや風俗産業の隆盛とともに激減している。言うまでもなく、セックスしたいという欲望の消費が容易になったからである。むしろ、今では**セックスしたがらない男（オタク含む）が増えている**ことが問題視されているぐらいだ。

■少年犯罪における強姦検挙件数の推移
法務省『犯罪白書』平成14年版のデータ。アダルトメディアが普及していなかった1960年代がピークで、以後は減少している

ならば、「萌え」の開放によって愛情の消費が容易になり、ストーカーが減るのではないだろうか？　何度も書いたように、トラウマ型鬼畜とは、愛が塞き止められて裏返ることで生まれてくるものなのだから。恋愛できない男たちを放置し、恋愛資本主義の世界の中でひたすら差別し続けるのであれば、鬼畜が増加し、ストーカーがどんどん増え、この世は闇になってしまうかもしれない。

そこに登場したのが「萌え」ムーブメントである。男たちは、オタクとなり妄想力を磨いて「萌え」を身につけるというまったく異なる方法論を採用することで、鬼畜にならず、ストーカーにもならない生き方を見出したの

だ！

ストーカーとは、三次元世界で愛を得られないにも関わらず、その現実を認めようとしない生き方のことだ。フラれてもフラれても無視して、自分の妄想の恋愛を相手に強制することだ。

しかし、二次元なら。**二次元の萌えキャラには、ストーカー犯罪は成立しない！** どうせ恋愛とは、自分の恋愛妄想を相手にいかにして押し付けるか、という**洗脳合戦**に過ぎない。モテる男とは、女を人とも思っておらず、平然と洗脳してしまえる男のことで、モテない男とは、愛する女性を自分の都合の良いように洗脳することがどうしてもできない心優しい男のことなのだ！

いやまあ、単に顔の優劣でモテる・モテないが決まる割合のほうがぜんぜん高いのだが、たまにイケてないのに妙にモテるＤＱＮとかいるでしょ？　あれは強引に洗脳してるんだＹＯ！　で、ストーカーというのは、洗脳できる能力がないのにいつまでも洗脳しようとし続ける人間なのだ。

だが、二次元での萌えなら、こんな悲劇は起こらない。特に、男側は女を人間扱いしているが、女のほうは男をペット程度にしか考えていないという「池鶴関係」のからくりが分かれば、「なぜ、どうして、掌を返して俺をキモがるんだ？」とトラウマを背負わされてストーカーになってしまう危険性を大幅に減らすことができるのだ。

しょせん、三次元では、

・イケメンがしつこく迫る…情熱的で素敵、ギシアン
・キモメンがしつこく迫る…おまわりさん、ストーカーです！

という具合に、顔の美醜や経済力によって、ストーカーであるかどうかが判定される（よっぽど行動がヘンなイケメン…つまり顔はイケメンでも中身がキモメンな男なら別だが）。だが、二次元なら、顔や経済力に関わらず、愛は受け入れられる。受け入れられれば、愛が溜まって腐り、喪闘気に変質してしまう恐れもない。むしろ、オタクへの進化を拒絶して、三次元でストーカー化していく男のほうが、救われないのだ。喪闘気が強まっていけば、いずれは文字通りの鬼畜になってしまうかもしれないのだから。

2——「萌え」は進化する

三次元のリアリズムを取り入れた「劇萌え」と『下級生2』騒動

モテない男・あるいはモテるんだけどいろいろあってアナログ女に絶望した男に示される二つの選択肢、「萌え」と「鬼畜」。そのいずれを選べばよいのかは、賢明な読者の皆様にはもはやご理解いただけたはず。

だが、一口に「萌え」と言っても、かわいいぷにキャラを見て胸をときめかせるだけが萌えではない。萌えにもいろいろな位相があって、どれが上位でどれが下位というわけではないが、おおむね、

・**キャラ崇拝型**…ぷにキャラのCGやフィギュアに、胸☆トキメキ
・**ストーリー癒し型**…萌えキャラとの恋愛ストーリーに笑い、泣き、心癒される
・**脳内会話型**…脳内の萌えキャラと会話して、心満たされる
・**「劇萌え」型**…三次元世界のイヤなリアリズム、悲劇的トラウマ要素を積極的に二次元に取り入れ、より二次元世界とストーリーの強度・純度を高める

などがあげられる。

例えば、萌え業界を席巻したフィギュア本企画『週刊わたしのおにいちゃん』※は、キャラ崇拝型の萌えに分類できる。

恋愛ゲームやライトノベル、萌え漫画などのストーリー型から入った場合も、大抵はキャラ崇拝に移行する。つまり、ゲームを買ったら次はフィギュアだ！　はぁはぁ、ということになる。

三つ目のいきなり脳内キャラと会話をはじめる脳内会話型は、インターネットのＷｅｂサイトなどで時々流行する。最近はその手のサイトはあまり見られなくなったかもしれないが、同人誌や同人小説などの創作は、脳内会話型とストーリー型の融合発展形と言える。

最後の「劇萌え」型は、まだまだ主流とはいえないマイナーなジャンル。だが、漫画が「劇画」という三次元のリアリズムを取り入れて成長していったのと同様に、萌えも劇萌えという一見萌えのアンチテーゼにも思える分野の出現と融合によって、原初的な偶像崇拝の世界から、より広大な二次元神話世界の彼方へと飛翔する力を得るに違いないのだ。

ただし、うっかり三次元の**嫌なリアリズム**を取り入れてしまったことで、**エラい騒ぎ**になることもある。例えば二〇〇四年にエルフがリリースしたＰＣゲーム『下級生2』は、学園（たぶん高校）を舞台にした同級生・下級生・女教師との恋愛をテーマとした王道的な恋愛アドベンチャーゲームだったが、登場する女の子キャラの「非処女率」がやたら高いことがユーザーの間で話題となった。

これは、『下級生2』が、「女子高生の非処女率が高まっている」という三次元におけるリアリズ

※『週刊わたしのおにいちゃん』メディアワークスが刊行した妹フィギュア付きムック。二〇〇三年には『もえたん』とともにＡｍａｚｏｎで売り上げランキングの一位から六位を独占して話題になった。

ムを取り入れた結果だと思われるが、ユーザーの多くは、
「三次元に処女がいないからこそ、二次元に処女のヒロインを求めているんじゃないか！」
と憤ったのだ。特に、メインヒロインにして主人公の幼馴染という鉄板的王道キャラのたまきたんが、どこの誰とも知れないイケメン医学部生に寝取られてしまい、処女を奪われたばかりかヤリまくられるという衝撃的な「**ネトラレ**※」展開が一部のユーザーのひんしゅくを買った。

萌えワールドでは、「姉萌え」や「母萌え」など、年上属性のキャラに対してはあまり処女性は求められないが、「妹」や「幼馴染」といった同年代・年下属性のキャラにおいては、処女性がひじょ～に重視される。『下級生2』のたまきのネトラレぶりは、そのような従来の萌えワールドの文法を壊すものだった。

故に、2ちゃんねるのゲーム板を中心に、ネット上で「たまき非処女祭り」が開催されるという事態になった。ついには憤りのあまり『下級生2』のDVD－ROMを叩き割る勇者まで現れた！　自分で購入したゲームを「中古の不良品（たまきが非処女だったから中古品！）」という理由で叩き割る漢の中の漢ッ！　**大山倍達※の自然石割り以来の衝撃**だったYO！

さらに、嘆き悲しむ大勢のユーザーが、ネット上で首を吊って**バーチャル自殺**※した！

かくいう俺も、プレイ前はたまきたんのビジュアルに萌え萌えだっただけに、たまきたんが馬鹿医大生と乳繰りあっているのを目撃してしまったときには、主人公に完全にシンクロして「くっ…なんか、すげー悔しい感じがするぜ。」と歯噛みしてしまった。

なんか、**この台詞だけ読むとあまり悔しそうに見えない**かもしれないが、血の涙を流し、唇を

※ネトラレ
彼女や彼氏を他人に奪われること。NTR。エロゲームでネトラレが発生すると多くのプレイヤーは悲しみに暮れるが、最近では「ネトラレ属性」に萌えるプレイヤーも現れ始めている。

※大山倍達
極真空手（国際空手道連盟極真会館）の創設者。マス大山。大山総裁。従来の空手は実際に打撃を当てない「寸止め」ルールだったが、大山総裁は実際に打撃を当てる「フルコンタクト」ルールを採用。若い頃は牛と闘ったりした。梶原一騎が原作を手がけた大山総裁の伝記漫画（後半は弟子の話になる）『空手バカ一代』は一大極真ブームを巻き起こした。

※バーチャル自殺

フワーリ

噛み破って地団駄を踏んでましたYO! しかし、萌えが三次元の嫌なリアリズムを取り入れることによってより雄々しく(女々しく?)進化していく過程において、

「もはや、同級生の幼馴染といえども、処女ではない!」

という三次元の法則を二次元に取り入れることもまた、必要なのである。ただし、その方法論を決して間違ってはいけない。

同じく、同級生のヒロインがヤリマンに近い非処女という設定のゲームに『SEX FRIEND』(コードピンク)というそのまんまなタイトルの作品があるが、こちらは同じ設定でもファンに支持されまくった。というのは、ちゃんとヒロインの早瀬美奈ちゃんがどういう過去の経緯によって非処女になり、いろんな男とセックスを重ねてきたか、という背景が設定されており、美奈ちゃんの心理描写が丁寧に描かれるからだ。美奈ちゃんはある事情で性的なトラウマを抱えていて、恋愛することができなくなり、わざと男とセックスフレンド関係を結んでせつな的な快感に溺れているのだ。

しかし、主人公の俺が頑張れば、美奈ちゃんの心を溶かして、身も心もラブラブになれる!

「美奈ちゃんの暗い過去もひっくるめて、全部が、好きだあああっ! 癒してあげたいっ愛してあげたいっ! 美奈は俺の奥さんッ!」

と萌え狂った人も多かった。っていうか**俺は死ぬほど萌えた**ね!

つまり、実は非処女かどうかが問題なのではない。『下級生2』が失敗したのは、たまきのネトラレルートをどうやっても回避できない(いくら努力しても報われない)という設定、そして、

相手の馬鹿医大生と対決するチャンスがない（いくら嫉妬しても復讐の機会がない）ということ、そして、なによりも、たまきに「純真な愛情」が感じられない、ということにあった。ありていに言えば、**三次元にいっぱいいいそうな、むかつく女**なのだ。

なにしろ、どうゲームを進めてもたまきはＤＱＮにネトラレる。そして、ＤＱＮはたまきとさんざんセックスしたあげく、飽きて捨てて去っていく。すると手ぶらになったたまきが主役のところにやってきて「**手コキは嫌い？**」などと言い出すのだ（まあ、よく考えれば、三次元だと、「幼馴染がＤＱＮにネトラレ、そのまま彼女は帰ってこなかった。**終わり**」というのが関の山なので、それを思えば、贅沢な怒りなのかも……）。

「オタクって、処女にこだわって、キモッ**！**」

という声もあるだろうが、我々は単に処女膜1枚にこだわっているのではない。オタクは、金や欲得から開放された純粋な愛、永遠の愛、そういうものを求めているわけなのだ。なので、たまきが非処女という設定で怒っているわけではなく、たまきが「ＤＱＮにホイホイとついていってハメられまくり、捨てられたら俺のところに戻ってきてセックスにふけろうとする」という三次元にいそうな感じのＤＱＮ女であることに腹を立てたわけなのだ。

美奈ちゃんのように、きちんと内面に心があって、葛藤があって、トラウマがあって…という**人間らしい**女の子であれば、むしろ非処女属性は**強烈な萌え要素**となる**！**

また、せめてたまきが脇役だったら、「こういう子もありかもね」で済んだのだが、純愛がテー

マだったはずの『下級生2』のメインヒロインがこれでは、「タイトルと違う」と言われても仕方がないのだ。もしくは、医大生のDQNと主人公との間に、たまきを巡る戦い・争い、そして俺の愛の勝利!みたいなドラマでもあれば。DQN女・たまきが「私が間違ってたわ。これが愛、愛なのねー! ごめんなさい、本田君、ごめんなさい……!」と、**己がヤラハタになることを恐れて適当に処女を捨ててしまったことを反省**し…みたいな感じの話にしてくれれば、三次元のイヤなリアリズムを二次元の萌えパワーで克服・超克するというカタルシスが得られたのだが……。

単に、嫌な三次元のリアリズムをそのまま二次元に持ち込むだけでは、「萌え」にはならない。「劇萌え」とは、三次元のリアルなトラウマを、二次元という無限の妄想力が溢れる空間の中で、無理やりに克服していこうという精神の運動なのだ。つまり、**オタクは、三次元に存在する、そのへんのDQN女を愛したいとは、元々思っていない**のだ。三次元にいない、恋愛資本主義に心を侵されていない、真実の愛を知っている萌えキャラを求めて、二次元にやってきたのだ。

萌え対象の弁証法的発展

とはいえ、猫か犬みたいに、俺に無条件になついてきて愛してくれるというキャラだけでは、いまいち納得がいかない場合もある。これはそれぞれのオタク個人の感性やトラウマ度の深さによって異なるのだが、無条件に愛されるという形の萌えだけでは、**絶対に癒されない傷**というものがある。例えば俺なんかだと、ゲームをやっていて、ヒロインの女の子が俺(主役)に向かって、

「かっこいい顔だね」

と言った瞬間に、パソコンを窓から投げ捨ててしまう。

いらないいっ！　いらないいっ！

与えるだけの愛っ！

三次元でキモメンとして蔑まれる俺が、いまさら二次元で「かっこいい」と言われたところで、虚しいだけだっ！　それでは、意味がない！　それじゃ、二次元は、三次元をただ引き写しただけの逃避場所ではないか！　二次元とは、キモメンの俺が愛される世界であるべきだ！　そうだろう！　二次元は、三次元のような腐った世界であってはならないのだ！　俺の顔を愛するのではなく、俺の心、俺の精神を愛してくれるキャラを求めているんだよ、俺は！

そう。多くの萌えオタクは、すでに、**「二次元における萌えの困難性」**に相対しているのだ。つまり、二次元で萌えキャラとの間に愛を成立させるには、まず最初に、

・俺がイケメンになる

という方法論がある。これなら、確かに俺は愛されるだろう。

しかし、それでは、単に俺の顔が愛されるだけなのであって、しかも三次元での俺とはまった

く別の俺になってしまう。それに、この女、もし俺が三次元でのキモ顔をそのまま二次元に持ち込んだら、はたして俺を愛するのか？　三次元の、男をしゃっつら※でしか判断しない愚かなアナログ女と同様に、俺を「キモッ」と否定するのではないのかな？　どうなんだろう……。などと、悶々と「二次元キャラが本当に俺を愛してくれる優しい心の持ち主なのか」と悩み続けることになるのだ。

あ、今、

「二次元キャラなんて、お前の妄想なんだから、どうでもいいだろ！」

と思ったな？

バッカモーーーーン！

■ちゃぶ台がえし

※しゃっつら　「顔」のこと。山田風太郎先生が作中でよくこの言葉を用いた。

二次元の萌えキャラは、全員、俺の脳のなかで生きているんだよ！　俺の脳細胞の1個1個の中に、彼女たちは実在する！　だから俺が死んだら彼女たちも死ぬっ！　俺にとって、俺の脳は実在する現実の世界だ！　しかも、三次元の腐った世界よりも大切な世界だ！　**俺にとっては、俺の脳内こそがリアルワールド**なんだよ！

はぁはぁ…怒ったら疲れちゃった……。

そもそも、「男が顔で判断される」などという世界は、三次元だけでたくさんだ。二次元世界まで、そんな腐った世界にしてしまっては、いけない！

そこで、萌えワールドでは、主人公がイケメンという設定は徐々に衰退して、主人公はごく普通の男、という設定が主流となっていった（さすがに主人公がまったくモテないキモメンという設定はまだ少ないが、いずれ主流になるはずだ）。その代わりに考え出された設定が、そう、**「宇宙人」**とか**「ロボット」**という属性。

つまり女の子キャラがいわゆる人間とは異なる種族の生物（ロボットが生物なのかどうかはさておき）であれば、腐った三次元の女どもが持っている「恋愛資本主義」という価値観とはまったく異なる、もっと純粋で人間の心を大切にする価値観の持ち主であっても不思議ではない！

宇宙人やロボットにとっては、俺の顔などは関係ない。「地球人ってこんな顔なんだ」ぐらいの意味しか持たないだろう。俺だって、人間以外の動物の顔など、見分けがつかない。ブサイクな猫がいても、「猫」としか認識しないから、猫の顔の美醜に関わらず純粋に猫に萌えられる。それと同じだ。

・異世界の女の子なら、俺の顔は問題にしない！

古くは、高橋留美子の漫画『うる星やつら』に登場するヒロイン・ラムちゃんを参照していただきたい。ラムちゃんは浮気性でまったくモテ要素のない主人公・諸星あたるにベタ惚れしているが、もちろんあたるの顔を愛しているわけではない。ラムちゃんは元々地球を征服しにやってきた宇宙人なので、地球人とはまったく異なる感性の持ち主なのだ。**四川料理の一万倍ぐらい辛い料理しか作らないし**。そういえば、ラムちゃんって、なんであたるが好きなんだっけ？　俺も忘れちゃったＹＯ！

まあ、ラムちゃんは古すぎるので例えとしてはあまり良くなかったが、もう少し新しいところだと『ＴｏＨｅａｒｔ』に登場するメイドロボ・マルチなんかも、

「ロボットであるが故に、純粋な愛を持っている」

というキャラだ。このゲームには他にも女の子がたくさん出てくるのだが、一番ユーザーに支持されたのがなんとロボット！　メカだよメカ。

マルチはロボットでありながら人間と同じ感情を持っているという設定。ただし、人間と異なり、薄汚い嫉妬や欲望のような汚れた気持ちはまったく持っていない。生まれたばかりの赤子のように純真なのだ！　だからこそ、主人公の俺を誰よりも純真に愛してくれるのだ！　俺がマルチに愛を注げば注ぐほど、マルチも愛し返してくれるのだ。まあ、そういうわけで、萌えワールドにおいて「俺がイケメン」という設定の次にトレンドになったのが、「**女の子が人外**」という設

定だったわけである。
　しかし、ここで俺たちは、ふと気づいてしまう。
「ちょっと待って……。**宇宙人なんて、いないいじゃん！**」と。
「いや、三次元には宇宙人はいないかもしれないが、二次元ならいてもいいんじゃないか？」
「でもな…三次元にまったくベースとなるモデルが存在しないキャラクターってのは…どうなんだ？」
「馬鹿っ！　ベースもドラムもあるかっ！　宇宙人はいる、宇宙人はいる、宇宙人はいるっ！
そう唱え続けて妄想しろ！　お前には、萌えぢからが足りないのだ！」
「でも、それだと、三次元で受けた心の傷を…腐った三次元の価値観を、二次元世界で克服したことには、ならないんじゃあ…もっと三次元に近い設定にして、その中で三次元の恋愛資本主義という間違った価値観を否定したいんだよ、俺は！」
　というわけで、二次元世界への、三次元的リアリズムの輸入と克服、というのが、萌えワールドにおける次なる課題となっていった。そこで登場したのが……、
「**姉**」！
「**母**」！
「**妹**」っ!!!

つまり、「家族」だ。1人の兄と12人の妹が、謎の妹ケ島に引きこもってひたすら擬似恋愛するというアニメ版『シスター・プリンセス』※を観ていただきたい。

そう、俺は気づいたのだ。俺が三次元での「キモメン」という設定を二次元に持ち込んだままで萌えキャラに愛されるには……、もはや「同級生」や「幼馴染」という設定では、リアリティを感じられないッ！　しょせん幼馴染など、たまきのごときDQN好きの非処女ばかりよ！　そんな三次元への絶望が深まれば深まるほど、二次元における「恋愛」の成立の可能性も、どんどん厳しくなってしまうのだ。

だが、妹や姉だったら？？

「家族」なら、とりあえず**口ぐらいはきいてくれるかもしれない**。いや、ずっと家族として一緒に暮らしていれば、顔とか経済力とかそういう**恋愛資本主義の呪縛から逃れた「家庭」という世界の中で**、真実の愛を得られるかもしれないではないか！　三次元でそんな事態になるとそれはそれで困るが、二次元なら、家族愛が恋愛に成長するということもありえるのだ！

そうなのだ。萌えワールドで、空前の妹ブームが起こり、姉や母やしまいには弟までが萌え対象になった最大の原因は、実は、「**萌えのリアリズム化**」だったのだ。つまり、萌えワールドは、恋愛資本主義の価値観を打ち破るべく、「俺が愛される世界」の構築をひたすら続けているわけだが、その中で、

1　俺がイケメン（初期の萌えワールド。まだ**恋愛資本主義のコピー**に過ぎない）

※『シスター・プリンセス』メディアワークスの『電撃G's magazine』の読者参加企画に端を発してゲームやアニメへと展開されていった一連の妹世界モノ。12人の妹が登場する。

← 2 あの子は人外（恋愛資本主義を打ち破る価値観を、**SFやファンタジーから輸入**してみた）
← 3 妹に萌える（恋愛資本主義に毒されず、かつ、三次元にも存在するシチュエーション＝「**家族**」**を発見**した）

という**二度にわたる萌えのターニングポイント**があったのだ。だから、妹萌えというのは、単なるロリコン（子供ならあるいは…という、人外設定と三次元リアリズムの折衷案）とは異なり、

家族＞＞＞＞＞＞＞＞恋人

という萌えワールド独自の価値観を内包しているのだ。

そもそも、恋愛資本主義においても、恋愛のゴールは家族であり、結婚して子供を産み育てることにある。これは、恋愛を家族関係へと移行させることで、本来は一過性のものである恋愛関係を永続化させようという試みである。萌えワールドもまた同様に、恋愛の永遠性を試行錯誤した。その結果、「恋人が、同時に、家族」というアクロバティックな萌え関係を創造したのだ。

そう、「恋愛」という神話は「家族」の形成によって完結する。三次元のアナログ世界から二次元デジタル世界へと侵入してきた「他人との恋愛の困難性」が、「**家族間恋愛**」という解決手段を発明させるに至ったのだ。

平たく言えば、

「俺はキモメンでオタクで貧乏だけどよう、妹や姉ちゃんだったら相手にしてくれるかもしれないよなあ！」

という非常～に情けないアレなのだが、三次元世界がますます、「ＤＱＮとイケメンばかりがモテ、オタクとキモメンはまったくモテない」という二極化を進行させている以上、二次元においてもオタクがモテるための条件がだんだん狭く厳しくなっているわけなのだ。

しかし、この、オタクが発見した「家族関係と恋愛関係との並立」は、実は日本を救う大発明なのかもしれない！　二次元で発明された妹萌えが、三次元の荒地をも救うかもしれないのだ！

このことについては、詳しくは第4章で述べる。

とにかく、萌えワールドでは、恋愛資本主義が壊してしまった「恋愛」だけでなく、これまた崩壊の一途を辿っている「家族」すらをも、妄想力によって復興させようという動きがあるのだ。しかも、その二つの運動が合流し、「家族萌え」「家庭内恋愛」というまったく新しい世界を二次元に現出させているのである！　一見、ただハァハァしているだけの萌えワールドだが、実はこのように**ヘーゲル**※**的な弁証法的発展を続ける精神の偉大な実験場**なのだ！

萌えは、人間の魂の革命運動だ。恋愛資本主義が思考停止して死に絶えつつある間に、いちはやくオタクに進化した面々は、恋愛資本主義に代わる新しい価値観とシステムを脳内でまっさきに構築しつつあるのだ！

※ヘーゲル
ドイツの哲学者。ドイツ観念論の大家。正・反・合の三段階からなる「弁証法」を提唱した。ヘーゲルによると人類の歴史もまた弁証法に基づき、奴隷制度から合理的な国家へと発展していく精神運動だとされる。代表著作『精神現象学』。ヘーゲルの観念論的弁証法に唯物論を持ち込んだのがマルクス・エンゲルスの唯物史観。

『ONE』から『CLANNAD』へ～「家族」をデジタルで構築する試み

恋愛資本主義に侵食された三次元世界から消え果ててしまった純粋な愛は、経済や顔の優劣に侵されることのない二次元だからこそ、実現できる。恋愛ゲームの世界で異色を放ちつつメジャー化した作品群に、Tacticsの『ONE』、および『ONE』のスタッフが作ったKeyの『Kanon』『AIR』『CLANNAD』という「泣きゲー四部作」がある。

従来、PCの恋愛ゲームは「エロゲー」としての要素が強く、シナリオ重視のゲームは少なかった。シナリオを練り込んでいるゲームにおいても、ストーリーのテーマは「恋愛」と「セックス」の2本柱だった。だが、これらの作品では、セックスという要素がほとんどスルーされ、「恋愛」のみが至上の価値を持つものとして扱われた。つまり、恋愛至上主義ゲームというか、「純愛ゲーム」なのだ。一応18禁ゲームという建前があるからエッチCGも言い訳程度に入ってはいるが、明らかにそれはエロゲーという形式を維持するために**とりあえず入れているだけ**で、クリエイターたちの表現欲は「純粋な恋愛」を描き切るところにあった。

『ONE』の主人公は、かつて妹と死別したトラウマを抱えたまま、思春期を迎えている。彼…いや、もう、ここでは「**俺**」と言わせてもらおう！　『ONE』の主人公の俺は、かけがえのない妹を失って、もう、この世界に生きる意味を見失ってしまったんだよう！　宮澤賢治のごとく、俺は、日々を虚しく過ごしながら、妹がきっと待っているであろう「えいえん」の世界…つまり、

空想の世界の住人になることをなんとなく予感している。三次元の荒んだ現実に絶望し、二次元の妹世界を夢見るオタク…つまり、俺自身なんだよ、こいつは！

『ONE』というゲームが新しかったところは、そのゲーム世界の構造が、「三次元」と「二次元」、「現実」と「空想」、「アナログ」と「デジタル」…言い方はいろいろあるが、とにかく、

「あっち側の世界」と「こっち側の世界」

に分断されていることにある。すなわち、このゲームは「ゲーム世界への飛翔を夢見るプレイヤー」の日常を描くという、一種の**メタゲーム**なのだ。

こんなノーフューチャーな俺だから、まともに女の子と恋愛することなど、できやしない。幼馴染に告白されても、その幼馴染をDQNどもに輪姦させて嫌われよう、などという自滅プレイをやりたくなってしまう。そんな俺。

そういえば三次元世界の俺も、幼馴染の従妹をラケットでぶん殴って血だるまにしてしまい、それから女の子が恐ろしくなっちゃったんだっけ。女が怖いというか、自分が怖いんだ。人を傷つけたいな。人を傷つけたいな。だけどできない理由は、やっぱりただ自分が怖いだけなんだな。

そんな俺には他人から愛される資格がない…と、あの日からずっと思い込んでいるのだ。俺はもう赦されない。生きる値打ちがない。この気持ち、分かってもらえるだろうか。やっと俺にも

生まれ変わるチャンスがきた、と思った瞬間に、

トカトントン

と耳元であの音が鳴る。

デヴィッド・シルヴィアン風※に言えば、王様になるチャンスが来たー!と思った瞬間に、心の中でゴーストが暴れだして、すべてを台なしにしてしまう。(BGM/Japan『Ghosts』)

モリッシー風※に言えば、やっと僕にもチャンスが来た!と思っても、心の中で何かが邪魔をして、結局何もできずに終わってしまうんだ。(BGM/The Smiths『There's a Lights that Never Goes Out』)

そう……。

俺には、幸せになる資格など、ないのだ。人を愛する能力もない。その意欲すらない。妹が死んで以来、俺の心は、「えいえん」の世界へと旅立ってしまったのだ……。もう、あっち側の世界には、戻れない。そして、俺の身体も、いずれは「えいえん」の世界へと吸い込まれて行くのだ。俺は、この醜い三次元の…現実の世界を、捨てるんだ。だから、もう、誰も愛さない。誰とも係わり合いになりたくない。どうせ誰も本当に俺を愛してはくれない。いや、そんなことより……。この俺自身が、他人を愛せないのだ。そんな気持ちは、もう、妹が死んだ時に、捨ててしまった。俺は人間の心を忘れた。でも、DQNにもなれないよ。どうすればいいんだろう、俺は……。

そんな、氷のように凍てつき愛を見失った俺の心を、春の暖かい日差しのように優しく照らして溶かしてくれる人が現れた!

※デヴィッド・シルヴィアン
ミュージシャン。イケメン音楽家・引きこもり派。一九七六年に「ジャパン」を結成。当初はビジュアルイメージが先行していたが、徐々に独自のスタイルを確立。八〇年代にはYMOとの交流などが始まり、テクノの大御所に。ジャパンの代表作『Tin Drum』に収録されている『Ghosts』は世界の「こっち側」の人間にとってだけ名曲。ジャパン解散後も活動中。

※モリッシー
イギリスのミュージシャン。キモメン音楽家・引きこもり派。「ザ・スミス」のヴォーカリスト。マザコンでゲイで引きこもりで右翼。ブサイクで貧乏な負け犬男の悲哀を美しく歌い上げるという世界初の「キモメンロッカー」として一世を風靡したが、モリッシーの肥大し続けるエゴに辟易したのか相棒のジョニー・マーが逃げ出してバンドは解散。現在もソロ活動を続けているが、歳を取ってますますキモくなってきた。代表作はスミス時代の『The Queen Is Dead』。

その人の名は、**川名みさき先輩**。

ああ、せんぱーいっ！　はぁはぁはぁ。

みさき先輩は学校の上級生のお姉さんなのだが、一見、あまりお姉さんらしくはない。むしろ天然というか、ちょっと頼りないところもあるかもしれない。特技は「痩せの大食い」で、オバQ※よりも大量の飯をペロリと平らげる。そんなお茶目なみさき先輩だが、実は幼い頃に失明してしまったというハンディを背負っている。**正直、俺は、一瞬ひいた**。い、いくらゲームでも、障害者萌えってのは、アリなのかと。**なんか悪いことをしているような気がするぜ！**と。

しかし……、そんな俺の躊躇そのものが、**差別意識を裏返した偽善**だったのだ。目の見えない先輩を意識して、妙に優しくしようと気を使いまくった俺は、うろたえて、

「俺…目が不自由な人と話したことないから、どんなふうに接すればいいのか分からなくて……」

と思わず言ってしまった。

すると、先輩はしょんぼりとうなだれた。そして、悲しそうに呟いた。

「普通でいいと思うよ……」

ああ、ああ。先輩っ……。

俺が、俺が悪かった！　いつのまにか先輩を「自分とは違う人間」として扱っていたんだ、その偽りの優しさを、先輩は敏感に見抜いたのだ。三次元の女たちは、どいつもこいつも男のしゃっつらと金ばかりを見て、俺の心なんか見ちゃいねえ！　だが、先輩は違った！　先輩は俺の心

※オバQ
漫画『オバケのQ太郎』の主人公。正ちゃんの家に住み着いているオバケ。大飯食らいで、いびきが大きいが、オバケのくせにたいした特技がない。作者は藤子不二雄。

ささいなことは問題じゃない！　**ここでツッコミを入れるな、俺の邪悪な心ッ！**
だけを見てくれるのだ。よく考えると、先輩は俺の顔を見ようにも見られないわけだが、そんな

みさき先輩と出逢って、俺は**初めて、人の心の優しさに触れられたような気がした**。ひょっとして…これが「萌え」なのか？　先輩と話しているだけで、俺の冷え切った心が、なぜかぽわーんと暖かくなるのを、俺は感じていた。そんなこんなで「先輩と恋人同士になりたいかも…でも…でも…俺みたいなへたれに、先輩のサポートができるのだろうか…ああ…俺は偽善者だ…ダメだ、ダメだ！」と迷っているうちに、正月が来た。

友達からの年賀状を整理していると、なんだか汚くてほとんど読めない、落書きみたいな妙な年賀状が一枚混じっていた。

「なんだこりゃ？」

俺は、その汚い年賀状をゴミ箱に捨てようとした。

ところが……、実はその年賀状は、**目の見えない先輩が、俺のために一生懸命書いてくれた年賀状**だったんだよ!!　な、なんだってーーー!?

その事実を知った俺のショックは、計り知れないものがあった。何が萌えだ、何が恋だ！　俺は…俺はやっぱり、他人を愛せない偽善者っ……！　心の冷たい人間なんだ……！　生きる資格がない…生きられない……。やっぱり、この世界では、俺は生きられない……。恋なんかじゃない。目の見えない先輩に優しく接することで、「俺は善人だ」という優越感に浸っていただけの、

偽善ボランティア！

糞だ！　俺は糞野郎だ！　神戸が地震で滅茶苦茶になった時に、ボランティアと称して乗り込んできた奴らの中に大勢混じっていた、腐れ偽善者ども…**家から焼け出されてボロボロになっている女の子をナンパしてセックスして、とっととヤリ捨てて帰っていく**、そんな屑どもと…死ぬほど呪ったあの連中と、俺が、実は同じ屑同士だったなんて！

ああ…俺は自分より弱い女性しか相手にできない、腐った男だったのだ…内心、みさき先輩を、自分より下の人間だと馬鹿にしていたのだ……！　同じ人間なのに……！　女は俺のキモイ顔を愛さないとか何とか言っていながら、自分こそ、他人を差別していたのだ！　俺は…俺は…最低の人間だ……。

ところが！

みさき先輩は、そんな最低な俺を暖かく抱きしめて、全てを赦してくれた。

せんぱい…せんぱいっ！

うわーーーん！

こんな優しい人に、俺は生まれて初めて出逢った。俺は先輩の腕の中で、いつまでも泣いた。泣いているうちに、心が晴れ晴れと澄みわたっていくのを、俺は感じていた。

俺は、みさき先輩の深い愛に、先輩の優しい心に触れて、癒されたのだ。**俺は復活した。**（BGM

/The Stone Roses『I am the Resurrection』)
三次元の世界に、こんなに優しい人がいたか？　いや、いない！　**一人もいなかった！**　30年も生きてきて、女は誰一人、俺を赦そうとはしなかった。
母も、先生も、同級生も、先輩も、同僚も、後輩も、誰も彼もが俺を憎み、罵り、否定した。俺の顔が**ブサイク**だったばっかりに……。
みさき先輩だけだ！
みさき先輩だけが、俺を赦してくれた。俺に生きろと言ってくれたのだ！　いっさいの欲得なしに、俺を愛してくれたのだ。
みさき先輩がパソコンのモニターに映っているだけのCGだろうが、どこかのオッサンが考えたキャラだろうが、盲目だろうが、そんなことは関係ない！

みさき先輩は俺の脳の中で生きている！

俺が求めていた「愛」が、ここにあるんだ！　三次元の女たちは、どいつもこいつも、男の顔、金、顔、金、顔、金、顔、金ばかり愛しやがって、俺の傷ついた魂を救ってくれなかった！　それどころか、傷つきボロボロになっている彼女たちを俺が救おうとしても、顔が醜いという理由で、俺を罵り、恐れ、嫌がり、嘲笑した。愛されないだけならまだしも、愛することすら、関わり合いになろうとすることすら、拒絶されてきたのだ。

イケメンだけが、男なのか。
肉壷扱いが、愛なのか。
同情さえも、キモいのか。
俺の心が凍てついて「もう生きられない」と絶望していたのも、当たり前のことなのだ。その日から、みさき先輩は、俺の彼女になった。みさき先輩は、俺の**「脳の中の恋人」**だ。俺はみさき先輩に出会ってから、もう二度と、自殺を考えることはなくなった。俺が悪いんじゃない。みさき先輩のような優しい人がいない、三次元の世界のほうが、間違っているんだ。俺は、みさき先輩のためなら、生きていけるッ！　俺はみさき先輩と出会い、「萌え」を体験することによって、この腐った三次元の世界をも生きていく勇気を手に入れたのだ！
『ONE』の衝撃は俺に、とりあえずエロCGさえ何枚か入れておけば後は何をやっても許されるエロゲー（PC美少女ゲーム）こそが、にっかつロマンポルノ※の系譜を引く新しい表現の実験場だ！と確信させた。

※にっかつロマンポルノ　かつて、にっかつロマンポルノは若手新進映画監督の登竜門的な存在だった。エロシーンさえ入れておけば後は非常に自由だったので作家性を発揮しやすかった。

『ONE』のメインスタッフはその後、TacticsからKeyに移籍し、『Kanon』『AIR』『CLANNAD』を製作した。
『Kanon』は『ONE』の世界観を引き継いだストーリーで、やはり過去に取り返しのつかない喪失体験を味わって自分自身を見失ってしまった主人公の俺が、「うぐぅ」という名の少女と出会うことで贖罪ロードを突き進む。いや、うぐぅじゃなくて、月宮あゆたんなんですが。俺は

「うぐぅ」って呼んでるんだＹＯ！

基本的には『ＯＮＥ』と一緒なのだが、『ＯＮＥ』ほど重くなくてファンタジー風味だったため か、超ヒット作に。エロ要素を抜いた一般向けバージョンがコンシューマーに移植されたり、テレビアニメが放映されたり、と「うぐぅ」キャラが多方面に展開され「エロゲーのメディアミックス展開」の魁となった。いやまあ、このゲームもエロ要素は限りなくゼロなのだが……。

この『Ｋａｎｏｎ』は、ＰＣにおける恋愛ゲームの一つの到達点となった。**うぐぅの話をあまり書くと激しくネタバレになるので直接プレイしてみてほしいが、一時はうぐぅと観音菩薩様の区別がつかなくなった男が秋葉原に大量発生**したものである。って俺だけど。うぐぅ依存症の男って、『かってに改蔵』※にも登場してたね…そういえば。

『Ｋａｎｏｎ』には、衝撃的なキャラクターが続々と登場する。まだ一九九九年だったのに早くも**リストカット少女**を登場させたし…もちろん、単にエグい設定でびびらせようとしているわけではない。Ｋｅｙは「**家族の崩壊**」「**家族の再生**」という新しいテーマを掲げてきたのだ！

ありていに言えば、「恋愛」という従来のエロゲーが追求してきたテーマは、『ＯＮＥ』のみさき先輩のエピソードによって**完成**されている。これ以上はない。だが、まだ癒されていない傷が、オタクたちにはあるのではないか？　それは…「**失われた家族**」だ！

と、Ｋｅｙのスタッフが考えたかどうかは知らないが、『Ｋａｎｏｎ』では真琴という少女を中心に、家族愛の姿が描かれる。真琴はどこからともなく湧いてきた記憶喪失の家出娘なのだが、俺は真琴を自分の家に置いて家族として接することになる。しかし、家族の一員として家になじ

※『かってに改蔵』
久米田康治のオタク風刺漫画。全26巻。『Ｋａｎｏｎ』依存症になって、部屋中にうぐぅのアイテムを無数に飾り立てている男が登場した。

んできた真琴は突然重い病気にかかり、徐々に記憶も言葉も失っていく……。目の前で大切な家族が壊れ、死んでいく。言い表せないトラウマ体験ッ！

次の作品『ＡＩＲ』では、主人公の俺は何もできないヘタレチキン、いや、**ヘタレカラス**だった。カーカーと鳴きながら、自分が愛する少女が原因不明の病気で衰え、死んでいくさまをただ見つめ続けることしかできない。なにしろ、ゲームなのに、途中からずっと彼女が死んでいくのをぼーっと見せられるだけで、選択肢を選ぶ場面がないんだよ！　これ、ゲームじゃないのかＹＯ？　これじゃ、三次元だろ！　**「何もできない俺」**を、忠実にゲーム化しないでくれよ、ウワーーーーン！

そして、何もできない傍観者の俺に代わって少女を救うのは、彼女の母親だった。延々と母と娘の深い愛の姿が描かれ、『ＡＩＲ』は終わっていく。これはさすがの俺も呆然とするしかなかったね！　もはや恋愛じゃないじゃないか。つーか俺の入る余地がないじゃないか。『ＡＩＲ』はつまり、恋愛ゲーム風の体裁を取っていたが、実は「家族ゲーム」だったのだ。どこまでも行くぜ、Ｋｅｙは！

最新作『ＣＬＡＮＮＡＤ』は、『Ｋａｎｏｎ』と『ＡＩＲ』を融合させた、巨大な物語となった。つまり、主人公の俺が、学校で恋愛して、彼女と結婚して、就職して、仕事して、彼女が子供を産んで、そして死んでしまう…俺の元には、最愛の妻が産んだ娘だけが遺される…しかし、俺は

娘を捨てて逃げ出してしまう。
俺は父親に愛されずに育った。母もいない。俺には「家族」がいなかったのだ。そのことが、ずっと俺のトラウマとして残り、心の底に拭いがたいよどみとなっていた。
やっと、好きな人に出会って、家族を築くことができた。自分自身の家族を。それなのに、俺の子供を産むために、妻は死んだ。俺は耐え切れなくなった。そして、自分の娘を、捨てた。親が俺に対してやったのと、同じように……。
数年後……。俺は、自分の娘と向き合う決心をした。だが、遅かった。娘もまた、俺の目の前で死ぬ運命にあったのだ。
恋愛、結婚、愛する家族の死、そして子供。恋愛資本主義社会の人生ルート…というか、人間が三次元世界において辿らなければならない人生ルートを、『CLANNAD』はそのまま二次元世界内でシミュレートしたのだ。
人間一人の半生を緻密に描いた『CLANNAD』は、当然、**膨大なテキスト量**を必要とした。『AIR』(二〇〇〇年)から『CLANNAD』(二〇〇四年)まで、実に4年ものインターバルが必要だったのも、無理はないだろう。ちなみに、どうせエロシーンなんか要らないんだから、とばかりに、『CLANNAD』は最初から一般向けゲームとして登場した。
『CLANNAD』をプレイした俺は、「**邯鄲の夢**」という故事を思い出した。
昔、中国の盧生という若い男が、結婚し、出世し、五人の子供をもうけ、80歳で孫たちに囲まれるという人生を過ごした。ところが、目が覚めたら、若い自分に戻っていた。盧生は、人生そ

のものを一瞬の夢の中で体験していたのだ。
『CLANNAD』は、三次元の世界で俺が決して体験できないであろう「恋愛」「結婚」「家族」「その死」をジェットコースターのように俺の目の前につきつけ、ショックを与えまくってくれた。『CLANNAD』は、妄想力を発達させたオタクにとっては、決定的な「体験」であり、「人生」そのものなのだ。もう、わざわざ三次元で無理やり結婚しなくても、『CLANNAD』のようなリアルな二次元世界があれば、それで充分なのではないだろうか。どうせ、脳の中で起きていることは、二次元であろうが三次元であろうが、同じなのだから。
『セカチュー』で泣いている場合ではない。**恋愛ゲーム界は、邦画の百年先を突っ走っている！** 今すぐ『CLANNAD』をプレイして、衝撃を受けろ！　そして**愛を取り戻せ！**　高度に妄想され、体系化された巨大な二次元世界は、三次元よりもリアルで、そして価値があるのだ！

もはや、恋愛だけでなく、結婚も出産も、俺たちにとっては生涯無縁なものになりつつある。俺はもう35歳。たぶん結婚なんか一生できないだろう。俺は家庭というものを一生持てなかった。幼い頃に父に捨てられ、母も俺が十代の頃に死んだ。ただ形だけ残っていた家も、地震で潰れて焼けた。仕事も失い、一文無しになった。その上、キモメンでオタクでニートなので、女に見向きもされなかった。あまりにも長い間、キモメン差別を受けてきたために、もう三次元の女には愛情を感じることができない。三次元の女には、憎しみしか感じられない。人を愛したり、愛されたり、ということが、まったくできない。どういうものなのか分からないし、想像もできない。

しかし、そんな俺でも、二次元なら恋愛だってできるし、結婚もできる。子供も育てられるのだ。誰かを愛したい、愛されたい、それなのに俺にはどうしようもない、という苦しみを、二次元が癒してくれる。俺の三次元における35年の人生よりも、みさき先輩との一瞬の脳内での出会いのほうが、俺にとっては大切な思い出であり、忘れることのできない体験なのだ。

俺はみさき先輩と一緒に、二次元を生きているのだ！

俺は、はたから見たら、白昼夢を観ているブサイクなオッサンに過ぎないだろう。だが、妄想しているときの俺とみさき先輩は、『となりのトトロ』でトトロが草木をニョキニョキと生やしているシーンを踊りながら見ているサツキとメイなのだ。

夢だけど、夢じゃない！
夢だけど、夢じゃない！
夢だけど、夢じゃない！

そうとも…これは…現実だよ！
俺とみさき先輩の二人で、現実にしていくんだ！
『ルサンチマン』でタクローが月子ちゃんに言ったように！

『ToHeart』のマルチにみる「萌えイマジン論」

■「二人で現実にしていこう！」（花沢健吾『ルサンチマン』第3巻 小学館）

もう何度も話題に上がったLeafの学園恋愛ゲーム『ToHeart』だが、この作品には、非常〜に重要な思想が登場する。『ToHeart』で一番支持されたキャラクターが、なんと並みいる人間の女の子を押しのけてロボットのマルチだったことはすでに触れたが、マルチが誰よりも萌えられた理由は、マルチが人間のダークサイド…邪悪な心をまるで知らない無垢な存在だったからだ。

「こんな人間いるかよ！」と叫びたくなるような、ダークサイドのない善意と愛情だけの存在、それがマルチ。人間であればちょっとどこかが足りない子だが、ロボットだから許される。

人間だったら友達だけど〜ロボットだから〜ロボダッチ〜。※

「悪意のないロボットは、人間と同等の存在なのか」という問いかけは、大昔からSFの世界で

※人間だったら友達だけど〜ロボットだから〜ロボダッチ〜
昔々、『イマイのロボダッチ』というプラモデルのシリーズがあった。そのCMソング。主役の「タマゴロー」という卵型ロボットを中心に大量のロボットが登場する壮大なスケールのロボダッチサーガがあったのだが、現在では完全に忘れられている。ただしこれは筆者の脳内に残っている記憶の中の歌で、実際の歌詞は少し違うらしい。

は繰り返し語られてきた。つまり、ダークサイド…心に闇を持たない善意だけのロボットを作っても、そのロボットは人間とはいえないのではないか。人間が勝手にでっちあげた、都合の良い作り物に過ぎないのではないか、という葛藤である。

手塚治虫先生の『鉄腕アトム』も、すでにそういうテーマを抱えていた。アトムは正義の心しか持たず、悪の心がない。それ故に、アトムは人間より劣る存在だ…というのだ。手塚先生自身、アトムが悪の心を持たない人形であることに苦悩していたフシもあり、最後はアトムを殺してしまった。手塚先生は劇画の台頭によって一時的にスランプに陥ったのだが、実は本人自身が、すでにアトムの不完全性——悪を知らないアトムは人間とはいえず、『鉄腕アトム』という作品自体子供だましに過ぎず、劇画に取って代わられてしかるべき存在である——をよく分かっていたのだろう。それ故、手塚先生は、劇画の魂…「悪の心」を取り入れて『アラバスター』※や『ザ・クレーター』※といった作品で悪の主人公を描きまくるようになり、ついには**悪の心と萌えの魂を併せ持った真に人間らしいキャラクター＝『ブラック・ジャック』**を生み出して、劇画と漫画の融合を果たし、漫画の神様として復活したのである！

石ノ森章太郎※も、『人造人間キカイダー』※でこの問題を取り上げた。主人公のロボット・キカイダー＝ジローは「良心回路」という善の心だけを持ち、悪の心を知らないために、ひたすら苦しみまくる。アトムはまだそれほど悩まなかったが、ジローはこれでもかというぐらいに悩みまくった。そして、敵ボスのハカイダーによって悪の心「服従回路」を埋め込まれたジローは、善と悪の両方の心を持った「人間」に進化する。しかし、その結果、ジローは自分の兄弟を皆殺しに

※『アラバスター』
手塚治虫中期の作品。『少年週刊チャンピオン』で、一九七〇年という手塚のスランプ期に描かれた。主人公の黒人青年ジェームスは、怪光線を浴びて半透明の不気味な怪物・アラバスターになってしまう。以来、美しいものを妬み憎むようになったアラバスターは、美人や偽善者を次々と消し去る悪党となり…。手塚先生の「キモメン魂」が炸裂した問題作で、「酷すぎる」とひんしゅくを買った。『ブラック・ジャック』の前身ともいえる作品だ。

※『ザ・クレーター』
『アラバスター』の直前に『少年週刊チャンピオン』に掲載された手塚治虫の一話完結形式の連作。

※石ノ森章太郎
漫画家。元は「石森章太郎」だった。集団戦闘ヒーロー漫画の元祖『サイボーグ009』で人気を博した。さらに変身ヒーロー漫画の走り『仮面ライダー』を手がけ、特撮ヒーロードラマのプロデュースでも名を成した。また雑誌『COM』で発表した実験的作品『ジュン』は多くの漫画ファンに影響を与えた。『009』の完結編『天使編』の執筆が始まると噂されはじめた頃に逝去。

するという原罪を背負ってしまうのだ。

ジローは最後につぶやく。

「俺は人間になることができた。だが、これからずっと、善と悪の葛藤に苦しみ続けるだろう」

く、暗い…重い……。

善と悪、愛と憎しみ、萌えと鬼畜。人間の心は相反する二つの感情に分裂している。こんな悲惨な状況の中で、ロボットの精神とは、どうあるべきなのか…というテーマは、かくも暗く重く語られてきた。しかし**『To Heart』は、長年にわたるこのロボット論争にスゴイかたちで終止符を打った。**

マルチを作ったとおぼしき科学者風の男と主人公の俺は、ある日、公園でハトに餌をやりながら、ジョン・レノン※もびっくりの思想を「発明」するのだ。それは……、

「すべての人間がマルチに萌えれば憎しみの連鎖は終わり、世界は平和になる」

というものだった！ な、なんだってー？

主人公の俺は、マルチというけがれのない純粋な愛情の持ち主と触れ合うことによって、心癒され、優しい人間になることができた。じゃあ、もしかしたら、すべての人間がマルチ（女の子の場合はマル夫）を人生のパートナーにできたら、どうなるんだろう。あらゆる人間がマルチによって癒されれば、愛が裏返って鬼畜になる危険性はなくなる。すべての人のトラウマがマルチ

※『人造人間キカイダー』石ノ森章太郎原作の特撮ヒーロードラマ。ドラマ版はハッピーエンドだが、原作では主人公のキカイダー・ジローが自分の兄弟や友達を皆殺しにして終わるという救いのないラストを迎える。

※ジョン・レノン ビートルズのリーダー。凄くヤバい人。ビートルズ解散後は妻のオノ・ヨーコと共にソロ活動。平和活動を行うなどして物議をかもした。5年の間「ハウスハズバンド」（専業主夫）となって音楽活動を休止していたが、活動を再開した矢先の一九八〇年十二月八日、射殺された。

によって解消され、**世界には心優しい人間だけが生きることとなり、すべての争いは終わる。**
ジョン・レノンは、国境のない世界を想像しろ！と、**妄想力による平和革命**を訴えた。だが、そのレノンも、かつて愛と平和を説いたキング牧師※やガンジー※と同様に、暗殺されてしまった。この三次元の世に、愛などない。憎しみが、三次元の世界を支配している。誰もが憎しみの連鎖に苦しみ、悲しんでいる。ただ愛と平和を夢想するだけでは、世界は何も変わらなかった。愛を説いた人たちは、みんなみんな、**愛を憎む鬼畜によって殺されてしまった**のだ。
だが、すべての人間がマルチに萌えられれば？　すべての人間の心の傷が癒され、愛に満たされた暮らしを平等に送ることができる、そんな世界が訪れたら……。もちろん、マルチでなければならない理由はない。セリオさん（マルチの同僚ロボ）でも構わないし、川名みさき先輩タイプのロボでも良いわけだ。とにかく、ありとあらゆる人間が、萌えによって救われれば……。
『ToHeart』は、**とてつもなく偉大な思想を開陳した歴史的作品**なのである。

「ニジゲン」

三次元の女なんて、いないと思ってごらん。
やってみれば簡単なことさ。
二次元には顔の美醜なんてない。
二次元には愛しかない。

※キング牧師
アメリカの黒人公民権運動のリーダー的な存在だった牧師。マルコムXが暴力革命派だったのに対して、キング牧師は非暴力を唱えた。「I have a dream」で始まる名演説を遺した。活動の最中、暗殺された。

※ガンジー
「非暴力・不服従」という独特のインド独立運動を指導したカリスマ。インド独立という念願は果たしたが、宗教対立に巻き込まれて射殺された。

すべての人間が萌えるために生きてると思ってごらん。
三次元に恋愛なんて、ないと思ってごらん。
難しいことじゃない。
女を奪い合う理由なんてないし、
差別なんてものもない。
すべての人々が妄想の中で生きていると思ってごらん。
君は俺のことをオタクだというかもしれない。
でも俺は一人じゃない。
いつか君も俺たちの仲間になって、
世界中がオタクになればいいと願ってる。

Imagine All The People Livin' for MOE ……　アハーアアアアー。

『マトリックス』の変遷と『イノセンス』

デジタル恋愛の世界に足を踏み入れ、妄想力を鍛え抜けば、いずれはアナログ女よりもデジタル萌えキャラのほうが「萌える」という境地に達するだろう。とはいえ、生半可な妄想では、なかなかそこまでは……。俺にしたところで、まだ萌えという山の三合目をウロウロしている状態だ。真に萌えを極めれば、道を歩いても決して三次元のアナログ女に辿りつかなくなる。護身が

完成するのだ。
さて、「**アナログ女より、萌えキャラのほうが大事だ！**」というブッダ（目覚めた人）に進化した偉大なオタクの師匠として、まずは映画『マトリックス』三部作を監督したウォシャウスキー兄弟（とくに兄貴）をピックアップしたい。
『マトリックス』は、マシンガン撮影による弾除けアクションシーンで日米のオタクを虜にしたが、この映画が真に革新的だった点は、映像美ではなくそのテーマにある。主人公のアンダーソンは、うだつのあがらないボンクラサラリーマンで、ほとんど社会の負け組。「**社内ニート**」と言っていい存在だ。かろうじて定職があるから暮らしていける状態だが、いつリストラされるか分からない。ほぼ30歳ぐらい・負け組・彼女いない（童貞？）のアンダーソンの唯一の趣味は、インターネットと、あやしいクラッキング。※胡散臭い面々に、犯罪スレスレのデータを売ったりして小銭を稼いでいる。日本で言えば、会社から戻るなり、ずーっと2ちゃんねるに張りつきつつ、エミュレータ※やらＤＶＤの違法バックアップなんかしたりして、それをこっそり売った金を小遣いにして同人誌の購入資金に…とかそんな感じ。ちなみにアンダーソンのコテハンは「ネオ」。普段は「越後」のようにフツーの本名で呼ばれているイケてない男が、ネットでは「ラインハルト」を名乗るようなものだ。
そんなボンクラなアンダーソン（**自称**ネオ）だが、ある日、トリニティという伝説のコテハン美女に巡りあい、**童貞喪男の悲しさで**ホイホイと誘われるがままについていってしまう。もちろん美味しい話などあるわけがなく、アンダーソンは社会の転覆を企む**変な黒人男のグル**※にまんま

※クラッキング
他人のコンピュータに不正にアクセスし、データを盗んだり改ざんしたり破壊したりすること。

※エミュレータ
テレビゲームなどをパソコン上で動かせるようにするプログラム。

※グル
コミュニティにおける精神的な指導者。元はヒンズー教の「導師」から来ている。

とオルグされ、

「ともに社会と闘おう！」

とアジられて訳の分からない革命団体に巻き込まれてしまうのだった！　さっそく翌日から、反乱分子となったアンダーソンは体制側の秘密エージェントである謎の黒眼鏡黒服の男たちに狙われるように……。

…と、ここまでは、ほとんど**ディック※の小説みたいな展開**なのだが、ここからウォシャウスキー兄弟節が全開。なんと、アンダーソンが暮らしていた世界は、すべて、コンピューターが作り上げたバーチャル世界だったんだよ！　な、なんだってー!!

「**この三次元の世界こそ、ニセモノ**であり、機械が作り出した嘘っぱちなのだ！　**本当の現実は、どこか別の世界に隠されているんだ！**」

というルサンチマン溢れるアナーキズム。※

「そうだそうだ！」

と、全世界の自称ネオ（ボンクラたち）が涙を流しながら頷いたことは、言うまでもない。しかも、映画のラストでは、ボンクラの帝王マリリン・マンソン※が大音響で流れるし。

で、アンダーソン…いやネオは、映画の中盤、目を覚まして現実の世界に帰還する。その「現実」というのが、ボロい船に乗って廃墟と化した街でタコ型のマシーンと闘い続けているという『ターミネーター』※みたいな世界。いや、**こっちの世界のほうが妄想だろ！**と突っ込みを入れたくなったが、とにかく、この第一作『マトリックス』を製作した時点でのウォシャウスキー兄弟

※ディック
カルトSF作家。現実と非現実の境界の曖昧さをテーマにした作品を得意とする。『マイノリティ・レポート』『ブレードランナー』（原作『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』）『トータルリコール』（原作『追憶売ります』）など映画化作品多数。

※アナーキズム
無政府主義。国家などの権力を否定して個人によるヒエラルキーなき社会を実現しようという思想。

※マリリン・マンソン
アメリカのミュージシャン。アメリカの負け組のカリスマ。アンチクライストな人。山海塾みたいな白塗りパフォーマンスで有名だがメイクを落としたら多分ただのオタク。

※『ターミネーター』
アメリカ映画。一九八四年製作。監督ジェームス・キャメロン、主演アーノルド・シュワルツェネッガー。低予算だったがシュワちゃんの悪の魅力炸裂で大ヒット。なお2本ある続編ではシュワちゃんは正義のアンドロイド役を演じた。機械に支配された世界で人間がレジスタンス活動をするという点で『マトリックス』と同じ。

の頭の中は、

・この「俺はモテないボンクラサラリーマン」という**糞つまらない現実は、実はマシーンが作り出した妄想**

・美女と一緒に『漂流教室』みたいな終末世界でマシーン相手に戦闘している**SFオタク世界のほうが、本当の現実**

となっているんだよ！

俺たちオタクの妄想世界こそが真実で、恋愛資本主義に洗脳されてギシアンやってる連中は、全員、マシーンに洗脳されて夢を見せられているだけなんだよ！　テレビ局＆広告代理店という名前のマシーンにな！！　ラスボスの名前は、絶対、**電通**だＹＯ！

で、ウォシャウスキー兄弟によると、本当の「現実」はオタクの妄想が結実したような**ゲーム脳**※**バリバリの世界**だから、ネオは、プレステのゲームみたいなソフトをちょろっと遊ぶだけで、カンフーの達人になれるんだよ！　な、なんだってー？

いや、やっぱ、こっちの世界が妄想だろ、と再三再四にわたって言いたくなるが、マトリックスのバーチャル世界ではわざわざケンカするために腹筋や腕立てをしなければならないことになっているのは、マシーンが人間を支配しやすくするためなのだ！　真実を知ったネオは、だから、マシーンが作った恋愛資本主義の世界の中でも、マシーンなみに最強なのだ。

※ゲーム脳
テレビゲームをやりすぎると、ゲーム脳という痴呆によく似た恐ろしい脳になってしまうという。こういうのは新しいメディアが登場すると必ず湧いてくる学説（?）で、以前は「ロックを聴くと馬鹿になる論」なんてのもあった。最近でも「ネット依存症」や「フィギュア萌え族（仮）」なんて言葉が発明されている。

「俺は強い！」という妄想力が強ければ、ネオは本当に最強になれる。映画の終盤、世界の構造が剥き出しの状態で見えるようになったネオは、ついにマシーンを超える戦闘力を得て、空を自由に飛びまわるスーパーマンに進化してしまう！

妄想が、（マシーンの作った）現実世界を支配した！

映画『マトリックス』は、高らかに「**お前らが現実だと思っている世界も、しょせんは誰かが作り上げた妄想のプログラムによって各人がキャラクターを演じさせられているだけの共同幻想なんだ！**」「俺は俺ルールの世界で生きるぞ！　つまり、**俺はオタクだ！**」と宣言する。

「まだ誰も見たことがない世界を見せてやる！」

映画のラストシーンで、ネオはこう言い放った！　続編『マトリックス・リローデッド』『マトリックス・レボリューションズ』で、果たして、ネオはどんな世界を見せてくれるのか？　誰もが固唾を飲んで期待した。ところが……。

なんと、完結編の『レボリューションズ』でネオは、マシーンとの戦いを**やめてしまう**のだ！

な、なんだってー???

ネオは第一作でアナログ女のトリニティとラブラブになり、第二作の『リローデッド』で童貞を捨てるのだが、第一作では美人だったトリニティたんも、寄る年波には勝てず、すっかり老けたオバサン顔になってしまっていた。トリニティが老けたのが悪かったのかどうか知らないが、

ネオは最終作『レボリューションズ』でマシーンが作ったプログラムの少女…つまり**デジタル萌えキャラ**と出会い、

「プログラムの女の子も、生きているんだ！」

という悟りを開いてしまう。「デジタル世界をテロで破壊しすべての人間をアナログ世界に連れ戻す」という野望を捨てたネオは、マシーンの親玉と交渉して、デジタル世界とアナログ世界の共存を認めさせる。アナログ女とデジタル萌えキャラが共存し、いずれか好きなほうと暮らせる、という平和な世界を実現したのだ！

そう、人間は、デジタル世界で生きても良いし、アナログ世界で生きても構わない。マシーンによる支配が間違っているのは、人間に「自分は現実世界を生きている」と思い込ませて都合の良いように操っているからであり、これこそが**恋愛資本主義の姿**だ。第2章で説明したとおり、そのコード体系が見えてしまっており、「どうせ幻想なら自分で作り上げた方が楽しい」と気づいている存在が「オタク」である。ならば、全ての人間がデジタル世界とアナログ世界の存在を知り、いずれを選ぶかという選択権を持つ（＝オタクになる権利を持つ）ことができれば、それが「革命」となるのだ。

『レボリューションズ』の終盤、トリニティたんはあっさり死んでしまい、三部作のラストシーンは、よりによってデジタル萌えキャラのインド人少女が夕日を眺めて終わり、という意外にもほどがあるものとなった。この展開はあまりにも新しすぎたために多くのファンが「？？？」と失望したのだが、しかし俺には伝わったぜ、ウォシャウスキー兄弟の熱すぎるオタクの魂が！

というのも、『マトリックス』の大ヒットは、**単なるオタクだったウォシャウスキー兄弟に、莫大な富と名声をもたらした。**三次元の世界でウォシャウスキー兄弟が**モテまくった**ことは想像に難くない。しかし、うっかり金持ちになってしまったばっかりに兄貴＝ラリー・ウォシャウスキーは、アナログ女の恐ろしさをイヤというほど思い知らされた。自分の嫁やら何やらにバンバンと裁判を起こされ、**女装癖やＳＭ趣味を暴露されまくった**のだ！　人間の性、悪なり！　アナログ女はおっかねえ、アナログ女は信用できねえ！

だからウォシャウスキー兄貴は「俺はオタクだけど三次元の女にモテたい！」と思って『マトリックス』を作ったけど、**実際にモテてみたら三次元に愛がないことを痛感し、**続編では、

「アナログ女より、萌えキャラバンザイ！」

と、オタクの世界に戻ってきたってことなんだＹＯ！

その後、ラリー・ウォシャウスキー兄貴は、**性転換手術**してリンダ・ウォシャウスキーになる道を選んだ、と噂されている。つまり『マトリックス・レボリューションズ』とは、

「萌えキャラとのデジタル恋愛最高！

アナログ女は二度と俺に近寄るな！

ちんちん取っちゃうぞ！

ザマミロ、ザマミロ！」

という一大恋愛革命だったんだよ！　エエエエ!?

確かに、デジタル恋愛には、ちんちんは不必要だ。妄想力さえあれば構わないのだから。逆に、アナログ女は、愛よりもちんちんを求めてくる連中だから、ちんちんを取ってしまえば、そうおいそれとは近寄ってくるまい。二度とおぞましいアナログ女に財産を横取りされないようにしないと……。ちんちんを取って、はじめて、オタクは護身を完成させられるのだ！

…と、ラリー改めリンダが考えたかどうかは定かではないが、誰も見たことがない世界とは、**アナログ世界で「男」であることを捨てて、デジタル恋愛に命をかけたオタクの中のオタクの姿**だったのである！　映画の中ではネオが性転換したり、ちんちんを取ったりする場面はないが、ネオも『レボリューションズ』の終盤で顔を焼かれてしまう。今にして思えば、あれが、去勢のメタファーだったのかもしれない……。

このような困ってしまうオタク革命映画『マトリックス』に多大な影響を与えたアニメ映画こそが、押井守監督※の『攻殻機動隊』※だ。その押井守監督が同作の続編を二〇〇四年に公開した。なぜか『イノセンス』というタイトルで。しかも、予告編を観る限りでは、恋愛映画？というお洒落な雰囲気。

実はこの映画、プロダクションI.G.※の作品なのだが、スタジオジブリの鈴木プロデューサー※が大々的に宣伝してくれたおかげで、そこそこ客が入ったのだ。ジブリといえば日テレと電通。ジブリ営業軍団は、宮崎駿※監督のロリコン映画を家族映画に仕立てて大宣伝してファミリー層や

※押井守
アニメ監督。メタアニメ映画『うる星やつら ビューティフルドリーマー』で伝説となり、以後、『機動警察パトレイバー』シリーズや『攻殻機動隊』『イノセンス』などを手がける。難解な作風がマニアに人気。無類の犬好き。

※『攻殻機動隊』
士郎正宗のSF漫画。押井守が監督した映画版『GHOST IN THE SHELL～攻殻機動隊』がアメリカで大ヒットし、『マトリックス』にも多大な影響を与えた。

※プロダクションI.G.
日本を代表するアニメ製作会社。タランティーノの映画『キルビル』アニメパートの製作でも知られる。

※鈴木プロデューサー
鈴木敏夫。アニメ製作会社スタジオジブリの名物プロデューサー。難解きわまるマニア向け映画『イノセンス』を大人の恋愛映画として一般層に宣伝するなど、苦労が絶えない。

アベック層を取り込み、動員数をアップする、という「**脱オタク宣伝手法**」を確立している。『千と千尋の神隠し』※は明らかに**少女売春宿のメタファー話**なのだが、「働く素晴らしさを描いた」映画として大ヒット。『ハウルの動く城』は「**ババアはダメだ、やっぱ、若い少女最高！**」というロリータ恋愛映画なのに、「おばあちゃんが元気！」と婆さん翼賛映画のフリをして大ヒット。電通の「脱オタ商売戦略」とは、つまり、恋愛資本主義のフィールドにアニメを引き込んで、オタク市場をスポイルしようということなのだが、『イノセンス』もこのラインに乗ってしまったのだ。

ところが、宮崎監督が、電通ラインに作品が乗ろうが乗るまいが、営業的なアレをまったく無視して好き勝手なロリコン映画しか作らないのと同様、押井守監督もまた、鈴木プロデューサーが何を言おうが、『イノセンス』で自分のやりたいことをやり尽くし、言いたいことを言い尽くした！　だから彼らは偉大なオタクなのだ！　恋愛資本主義のシステムに食われた顔をしながら、内部からシステムを破壊するような作品を作り続けるという**レジスタンス活動**ッ！

『イノセンス』は、未来の世界が舞台。少女型ロボットとセックスする二次元萌えな人々が増え続ける中、主人公のおっさん刑事バトー（40歳過ぎの独身・彼女なし・**犬好き！**という**押井守先生の分身**）が少女ロボット売春事件の捜査に関わる。で、実は某企業が生きた人間の女の子を誘拐して、女の子の「精神」を売春ロボットにコピーし、「リアルな感情を持ったエロフィギュア」を作って売っていたことが最後に判明するのだ。

誘拐されて悲惨な目にあっていた少女を救出するバトー。大団円かと思いきや、バトーは少女

※**宮崎駿**
日本を代表するアニメ監督。アニメ界に美少女萌えを持ち込んだのはこの人。『ルパン三世　カリオストロの城』のクラリス、『風の谷のナウシカ』のナウシカは、多くのオタクの人生を狂わせた。電通・日本テレビと提携するまでは、どれほど名作を作っても小ヒット止まりだったが、提携以後は作る映画ほぼ全部大ヒット。

※**『千と千尋の神隠し』**
二〇〇一年。宮崎駿監督。超メガヒットとなったが、発売されたDVDは何故か映像が赤かった。日本テレビでオンエアされた映像も赤かった。

を一喝！

「人形の気持ちを考えたことはなかったのかーっ！」

お前みたいな生身の幼女より、人形のほうが大事だ！と、さらわれていた子供相手に大説教！

すでにバトー自身、身体をほとんど機械化してしまっている。彼にとって、人間も人形も「人の形をした何か」という意味で同じものになっていたのだ。

なにしろバトーの心の彼女「少佐」は、ネット上に流れている**プログラム**なのだ。「少佐」も元は人間の形をした擬体（機械）の中に入っていたのだが、すでに三次元のアナログ世界を捨て、ネットの中に入り込んで完全なデジタルキャラになってしまったわけだ。そして、バトーはアナログ女にはまったく興味がなく、デジタルデータの少佐相手に悶々と恋をしているのだ！　しかしバトー自身はアナログ世界に身体を残しており、決して少佐と結ばれることはない。そんな、**「デジタル世界に憧れ続ける中年オタク」の悲しみ**を、押井守監督は素晴らしい演出力で描き切ったのだが、予告編に騙されて観に来ていたアベックたちがみんな首をひねって出て行ったことは言うまでもないだろう。恋愛も何も、相手はデジタルデータなんだから。こんなの、萌えオタクにしか分からないYO！

しかも、『イノセンス』に登場するサブキャラ（負け犬のオバサン）が、

「人間が子供を育てるのは、実は**人形遊び**をしているに過ぎない！」

なんて言い出して、子育ての意義まで「オタクごっこ」だと断定してしまうのだ！

『マトリックス』も『イノセンス』も、三次元世界だけが唯一の現実であり、アナログ人間だけが人間であるという常識を否定するための映画、すなわちオタク革命を宣言した映画だと言える。

こんなオタク映画をファミリー向け・カップル向け映画として大々的に宣伝してくれている電通&日テレは、オタクコンテンツを自らのうちに取り込んでいるつもりになっているかもしれないが、長い目で見ればどう考えても恋愛資本主義の崩壊を早めているだけなのだ。なにしろ『イノセンス』上映前には、オタクを排除するためにわざわざ**六本木ヒルズ**でイベントをぶちあげたというのだから、電通のオタクに対する敵意は**並々ならぬもの**がある。「オタク向けのアニメだと思われたら、一般客が来ない」という理由らしいが、一般客層に『イノセンス』を見せてしまうことのほうが、よほど恋愛資本主義にとってダメージになるだろう。

「萌え力」を高めよ！

萌えの効能をまとめてみよう。

・愛情の抑圧による、男の鬼畜化（女のオニババ化）の防止→暴力犯罪の軽減、究極的には戦争の撲滅？

・真の恋愛・真の愛情・真の家族を手に入れることができる→性犯罪の軽減、自殺・鬱の軽減

つまり、人間とくに男を長年にわたって苦しめてきた**「性」と「暴力」という二つの本能的な問題から、人間を解放してくれる**、それが萌えの持つ力だ。

二次元の脳内世界に、三次元の世界のようなリアリティを持たせるためには、二つの方法論がある。

1　妄想力を鍛えて、二次元の情報が入力されたときにあたかも三次元の情報を受けたかのごとく過剰に反応する神経系を確立する

2　二次元世界の情報量を人為的に増やし、三次元に近づける

「1」が、萌えの「力」を鍛えるための基礎鍛錬ならば、「2」のアプローチは萌えの「技」を磨く研鑽といえる。

もちろん、大山倍達先生が「**技は力の中にあり！**」と仰ったように、極真カラテと萌えの極意は、やはり個人の脳内鍛錬による日々の妄想修行にある！　いくら科学が発展して二次元世界が三次元に近くなっていっても、「どうせ漫画だろ？」と頭ごなしに二次元のリアリティを感じることを拒絶するような態度では、萌えの道は究められない！（道なのかよ!?）

故にオタクは日々、萌え妄想を膨らませて、脳を鍛えておかなければならない。もちろん、萌えの「技」の発展は、このところ加速度的に進んでいる！　かつて、二次元といえば、絵画と小説しかなかった。絵画は一枚の静止画であり、断片的な視覚情報を提供してくれるだけだった。

小説は物語を伝えてくれはするが、視覚情報に欠けていた。そこでオタクの元祖ともいうべき先人たちは、様々な表現方法を開発した。

まずは「映画」だ。映像が動く！　人間の情報処理能力の4割を、視覚情報が占有しているという。つまり、動画とは、あらゆる二次元メディアの中でも最強の表現手段なのだ。さらに、映画はトーキー化され、音声をも手に入れた。トーキー化によって、映画は、視覚情報と聴覚情報をリアルに再現することに成功した。その後も、カラー化やシネスコ化による視覚情報力の強化や、サラウンド化による聴覚情報力の強化も果たされたが、おおむね、「動画と音声」の2本柱によって映画は二次元メディアとして完成を見たといってよい。

ところが日本においては、**手塚治虫という異能の天才が戦後に出現**したために、映画とは少し方向性が異なる二次元メディアが発達した。手塚先生はまず、実写映画ではなく、ディズニー映画のようなアニメーション映画を製作しようとした。そう、手塚先生は、ハリウッドのリアルなパツキン女優よりも、記号化された「絵」であるバンビたんやミッキーマウスたんに萌えたのである！　しかし、あまりにも個性的な天才すぎたためにアニメ会社とは合わず、先生は仕方なく（？）漫画を描き始める。当時の漫画は『のらくろ』※の系譜を引いた子供向けの作品が主流だったが、手塚先生はいきなり漫画の世界にハードSFやドストエフスキーを持ち込んだ！　これにより、漫画は小説に代わる新たな二次元メディアへの進化を辿ることとなったのだ。漫画は映画・アニメと比べると、「絵が静止している」「音声がない」という点で情報力としては大きく劣るのだが、手塚先生の妄想力が「漫画で『罪と罰』※を描き切る」という不可能を可能にしたのだ！

※『のらくろ』
戦前に連載されていた田川水泡の漫画。野良犬の「のらくろ」が猛犬連隊に入隊して戦場で次々と手柄を立て、出世していく。単行本のタイトルも『のらくろ上等兵』『のらくろ伍長』『のらくろ軍曹』『のらくろ曹長』『のらくろ小隊長』『のらくろ少尉』と、どんどん偉くなっていく！　今でいえば『島耕作』シリーズみたいなもの。戦局の激化とともに、のらくろは満州に渡って連載打ち切り。長らく行方知れずとなっていたが、戦後に続編が描かれた。のらくろは猛犬連隊が解散となったために野良犬に戻り、保険の外交、旅館の番頭、私立探偵など職を転々。最後にようやく結婚して喫茶店のマスターになったのだった。大河ロマンだ！

※『罪と罰』
ドストエフスキーの小説。ロシアの貧乏学生ラスコーリニコフは強欲な金貸しの老婆を殺して金を奪うが、罪悪感に悩み苦しむ。ラスコーリニコフは、貧しさゆえに売春婦になってしまった娘・ソーニャに罪を告白し、そして魂の救済を得る。つまり、「風俗嬢萌え」小説。

また手塚先生がディズニーから発展させて自ら開発した「萌えキャラ」（鉄腕アトムとか、レオとか、初期手塚作品のまるっこい可愛いキャラクターたち）は、その後の萌え漫画界・萌えアニメ界の全てのルーツとなった。

手塚漫画が日本における萌えワールドの最初の革命だったとすれば、第二の革命となったのが、**デジタルゲーム**の登場だ。初期のパソコンゲームは16色の貧相な静止画像と短いテキストが表示され、しょぼいＦＭ音源のＢＧＭが流れるだけの粗末なメディアだったが、それでも革命的だったのだ。分かりやすく言えば、映画や漫画、アニメは、受け手が一方的に情報を提示されるだけだった。しかし、ゲームでは、プレイヤーが自らの意思で情報を選び取ることができる。死語になってしまったが、**インタラクティヴ性**があったのだ。もちろん、その後、パソコンゲームにはフルカラー表示やアニメーション、音声、ポリゴン表示、などの強化がなされ、情報量はどんどん増していった。

さらに、第三の革命・インターネットの普及によって、ネット上に複数のプレイヤーが同時に存在する**文字通りの二次元仮想世界が誕生**した。また、二次元キャラの情報を互いに交換しあうことによって、あたかもキャラクターが実在するかのような共同幻想を作ることも可能となった。

ネットワークゲームの誕生によって、あと、二次元に欠けている情報といえば、

・触覚

・嗅覚

だけになったと言っても過言ではない。

そして触覚については、漫画『ルサンチマン』のタクロー先生のごときボディスーツを着用することによって、いずれは解決されることになるだろう。なお、嗅覚は、他の感覚に比べてあまり重要ではないと言われている。むしろアナログ女の匂いがイヤ！という人も多いだろう。実際、三次元世界だって香水やら何やらで体臭を消す方向に進んでいる。ゆえに二次元世界とはむしろ嗅覚を排除していく「**脱臭文化**」となるかもしれない。

■ボディスーツ
未来の二次元人はボディスーツに身を包んで、二次元世界内で五感を体感することが可能となる

触覚問題が解決した時こそ、三次元のアナログ女が不必要になる。俺の勝手な試算では、あと10年！　あと10年で、二次元は三次元を完全に凌駕するっ！　その時こそ、なだれを打ったようにすべての男（ＤＱＮ除く）がオタク化し、我らオタクが天下を治める時となるのだーっ！

ちなみに、なぜ「あと10年」かというと、『ルサンチマン』が10年後の世界を描いているからな

んですが。**これ絶対予言書だよ！**　花沢健吾先生は、**10年後からやってきた未来人**なんだよ！

何しろ、この漫画によると、10年後には**渋谷がオタクタウン**になってるのだ。109ビルの中にオタクが殺到して、好きな萌えキャラの人工知能ソフトを買い求めていくのだ！　これは俺が15年前に予感していた未来図と、まったく合致しているっ！

俺も、秋葉原はそのうち国家権力によって無理やり解体され、オタクは一時根城を失ってさまようが、いずれ歴史のターニングポイントがやってきて、雪崩現象のごとく男の総オタク化がはじまるとともに、渋谷が巨大オタクタウンになると考えていた。『ルサンチマン』には、そんな俺が幻視していた「来るべき世界」が描かれていたのだ！

■ドロンパビル。「本田のひきこもる城」ともいいます

ちなみにその頃には、**俺は渋谷の道玄坂に「ドロンパビル」という巨大なビルを設立する計画**だ。資金は一円もないけどな！　メイド漫画喫茶、総合格闘技の道場、コスプレ風俗店、アニ

メ映画館、アニソンカラオケ、ドジな看護婦さんが勢ぞろいの病院、へっぽこロボットが背中を流してくれる温泉、ボディスーツ貸し出しの萌えゲームセンターなど、ビルの中だけで一生暮らせる**「オタクのグランシャトー」**※を建造する所存です。ビルの外観は『オバQ』のドロンパを模したミサイル型で、壁はもちろんピンク色。

なお、ドロンパビルを運営する会社名も決まっていて、**「バケラッタワールド」**といいます。どうです、こんな渋谷、素敵やん。全世界のオタクの聖地になること、間違いなし。外貨稼ぎまくりで、日本経済は永久に安泰だ！

※グランシャトー
大阪は京橋にある大人のレジャービルだっせ。サウナでさっぱりエエ男。恋の花も咲きまっせ。一つのビルの中に料理店・サウナ・クラブ・パチンコ屋などの娯楽施設が全部詰まっていて、一日中ビルの中で遊べるという仕掛け。

……。

はっ？　す、すいません。なんか一瞬、妄想の世界に旅立ってしまっていました！

話を戻すと、萌えは人の心を救い社会を平和にするばかりか、経済効果も抜群。全世界がネット化によってオタクだらけになるから、日本はオタクの聖地として全世界を文化的に支配することができて、まさに良いことづくめなのだ。

「魁！　オタク塾」の卒業生たちが世界を動かす日は近い！

もちろん既得権益の持ち主である恋愛資本主義の勝ち組勢力とか、女であることを武器にして美味しい汁を吸ってきた負け犬・オニババ・それらの予備軍の攻撃は、しばらくの間強まることだろう。

だが、勝つのはオタクだ！

二次元メディアの強化、仮想現実の構築に執念を燃やしてきた**人類の科学の歴史は、二次元を征服し、オタクを生み出すためにあった**のだ！　地球の重力に魂を引かれたオールドタイプに、今すぐ叡智を与えることはできない。ならば、捨ててよし！　オタクは、広大なマトリックスの裂け目の向こう…俺がいうところの「こっち側の世界」へと移住するべきなのだ。引きこもりとかニートとかフィギュア萌え族（仮）とか言われてもキニシナイ！　**二次元世界が三次元世界よりも上位に座る時代**が到来しようとしているのだ！

そんな訳で、第4章では、「萌えオタクこそ、これからの勝ち組」と題して、21世紀を生き延びるための心得をいくつか提案しておこう。

第4章

★「萌えオタク」こそ、これからの勝ち組

1——起こせ！「萌えレボリューション」

キモメンは生きるために今すぐオタクになろう

時代は、これから、オタクの天下になる。

「アナログからデジタルへ」

これは、人間のほとんど本能とも言うべき欲求であって、**我々人間は、ありとあらゆる事物をアナログからデジタルへと置き換えずにはいられない生物**なのだ。解剖学者・養老孟司先生が、名著『唯脳論』で明らかにしたように、この世界（自然的な意味での世界ではなく、人間の社会という意味での世界）が、すべて人間の脳が作り出した幻想（フィクション）によって成立している。すなわち！　現実だと我々が思い込んでいる三次元世界もまた、人間の妄想力が生み出した「二次元」的な空想が、三次元世界へと逆輸入されて作り出された**バーチャルな世界**に過ぎないのだ。

自動車も人間の妄想から作り出された。

ファッションも人間の妄想から作り出された。

恋愛も人間の妄想から作り出された。

そして、「萌え」もまた、人間の妄想から生まれ、これから三次元の世界をリロードしようとしているのだ。
養老孟司的に表現すれば、「社会は暗黙のうちに脳化を目指す」ということなのだ。俺的解釈では、脳化とは、つまり、デジタル化である。現在ではアナログが主流になっている恋愛もまた、デジタル化されることになる。「萌え」は、いずれ三次元世界をも構造改革してしまうだろう。
もうすでに、
「俺は…みさき先輩に俺の愛を全部捧げる！　もう三次元の女などいらんっ！　終われッ！」
と、まあ、俺みたいにイクところまでイッてしまって脳内彼女や脳内妹や脳内妻や脳内メイドさんと二次元で楽しく暮らす萌えオタクも大勢いるわけだが、今の段階ではまだ旧来の恋愛資本主義世界というものも滅びずに現存している。オタクへの風当たりがまだ厳しい現在において、いかなる人生を選び取っていけばよいのか。この章では、その提言をしておきたい。

まずは男陣営だが、これは、はっきり言って、イケメンとキモメンとに大きく分かれる！　えぇですか。三次元では、イケメンとキモメンは、別の人種に分類されてますんや。ですから、イケメンとキモメンでは、オタクとして生きていくための心得もまったく違いますんや。っていうかイケメンのほうが圧倒的に自由度が高く、キモメンに選択の自由はおません。
まあ、フツメンとかブサメンとか、微妙な中間層というのも大勢いるわけだけど、話が細かくなるので、ここではエイヤッと、

・モテ系＝イケメン

・モテない系＝キモメン

の真っ二つに分類させていただきます。当然、俺はキモメンね。だから、キモメンへの提言のほうが、リアルで役に立つと思いますよ。とほほ……。

さて、キモメンが三次元世界に片足を残しながら生きていく場合、行く手には非常に注意しなければならない危険な罠が多数用意されている。例の「フィギュア萌え族（仮）」といった差別用語がマスコミでばんばん流されていることからも明らかだが、三次元の恋愛資本主義者たちは、「健全な精神はイケメンに宿り、**キモメンには変質者の精神が宿る**」という間違った心身一元論を信じている。そして、奴らは、キモメンを見ると「こいつは鬼畜犯罪者予備軍だな」という先入観で接するから、次第に、本人もだんだんその気になってしまうことがある。

「ようし…ようし！　そこまで俺を鬼畜扱いするなら、**日本一の鬼畜になってやる！**」

都井睦雄が津山30人殺しを決行した理由は、「自分を、女を殺す度胸もないダメ人間と侮蔑し嘲笑した女たちへの復讐」だった。だいたいにおいて、生まれつき暴れるのが意味もなく好きだというナチュラルボーン鬼畜タイプ以外の鬼畜犯罪者は、幼少時から青年期にかけて周囲から植えつけられたトラウマが原因となってついに大爆発する、というパターンが多い。特に、キモメンにとって、**恋愛資本主義に脳をやられているアナログ女は地雷**のようなものだ。きっと、キモメ

ンの男なら、思い当たる節がいくつもあるだろう。もはや記憶の奥底に封印してしまったトラウマもあるはずだ！

例えば…ネットに溢れかえる馬鹿アナログ女どものブログを見よ！　そこには、キモメンを心の底から侮蔑して嘲笑しまくる、醜いアナログ女の正体がこれでもかと露出しているのだ。

俺が見た中で一番凄かったのが、女子高生か何かのブログで、手前どもの写真をさらし上げて、この暴言。

「ウケル話が25歳にもなって童貞。あんた青春期に発情は無かったのかって聞きたいわ。私が思うにこいつ、**風俗にでもいってシロウト童貞を捨て、変質者にでもなって童貞捨てるしか道はない**」

ああーっ、あああああーっ。風俗では素人童貞は捨てられないのではないのか？　という突っ込みはさておき。

ＤＱＮ女にとっては、

・キモメン童貞＝変質者
・キモメンが風俗に行く＝変質者
・キモメンが人を愛する＝変質者

つまり、顔が醜い男は、何をやっても、何をやらなくても、変質者扱いなのだ。生きている限り、存在する限り、そこにいる限り、キモメンは変質者扱いされ続けるのだ！

これでは、

「ようし…ようし！　そこまで言うなら、日本一の鬼畜になってやる！　**お婆ヤン、こらえてつかあさい、睦雄はキモメンの神様になりましたけんのう**」

と立ち上がってしまうジャパニーズ・トラヴィスが現れても仕方がない。仕方がないどころか、恋愛資本主義社会は、市場にとってたいして役に立たないキモメンを挑発して暴れさせて、もっともっと追い込もうとしているのである。つまり、キモメンが暴れたら、それこそDQN女どもの思う壺、イケメン絶対主義を掲げる恋愛資本主義の思う壺なのだ！

恋愛資本主義では、女による男の顔面評価は絶対！　しかも、この屈辱に立ち上がって自爆テロリストになったら「それ見たことか、やっぱり顔がキモい奴は心もキモい」と喜ばれてしまうのだ！　では…周囲のアナログ女に押しつぶされて鬼畜になるのを防ぐためには、どうすればいいのか？

もう言うまでもないだろう。

二次元の住人になるんだっ！

「**現実を見ろ！　俺たちにはもう、二次元しかないんだ！**」

アニメを見ろ！　同人誌を読め！　ゲームで遊べ！

「俺がこのキャラと恋愛するとしたら」と、ひたすら妄想しろ！

萌える妄想力を鍛えて、二次元キャラが「俺の脳内世界で、生きている」という真理を感じられるようになれっ！

そうすれば、行き場をなくした愛が変質して、喪闘気になってしまい、鬼畜化するという危険性は大幅に軽減される。二次元キャラの優しさに触れろ！　癒されろ！　罪を懺悔せよ！　彼女はきっと、君を受け入れてくれるはずだっ！　三次元の女に、愛を求めるのはやめるんだ！　三次元のことを考えるのは、しばらく待て！

二次元に没入しまくり、そのまま萌えを極めて、俺みたいに**難攻不落の脳内俺ワールド**を築き上げてしまっても良いし、とりあえず二次元で幸せをかみしめながら、いずれ訪れる三次元世界での「**萌えレボリューション**」を待つのも良いだろう。

「萌えレボリューション」とは、三次元世界を支配している恋愛資本主義が崩壊して、「萌え」の魂が従来の「金とセックスと食い物で成り立つ恋愛」＝「商品としての恋愛」に取って代わり、至上の価値を持つ時代が到来する、その時を指している。ありていに言えばオタクが増えて増えて増え続け、そして恋愛資本主義に向かって「ＮＯ」と叫び続ければ、革命は成就するはずなのだ！　オタクが人口の過半数を超えた時、日本は革命される。恋愛資本主義が瓦解し、**オタク本位主義**が三次元世界をも支配することになる。

そうなのだ。三次元世界に愛を取り戻すために、必要とされている勇者ども、それが「**アナログ女に、ＮＯと言えるオタク**」なのだ！　だから、今、暴発してしまってはいけない。時期を待つのだ……。今は、萌えて忍ぶときなのだ。

実は、2ちゃんねるの独身男板で例の「電車男」スレが進行している影で、「**どうせモテないなら、キモメール送ろうぜ**[※]」というスレが爆発し、「リアル電車男」軍団が大量発生した。キモメール、つまり、気持ち悪い変質者メールを好きな女の子に送信することで、キモメン扱いからさらにワンランクダウンして、正真正銘の変質者になってしまおう、という**キモメン自爆運動だ!**

泣いた。俺は泣いた!

キモメールを大学のサークルの子や職場の同僚に送りつけたモテない男たちは、待ってましたとばかりに一斉に包囲されて袋叩きにされ、コミュニティから追放されてしまうという無残な戦死を遂げていった。

一人、また一人……。周囲から、モテない男、キモメン、どうせ変質者、と嘲笑され、いわれなき差別を受け続けた男たちが、「それなら、本当にキモメンになってやる!」と自暴自棄に暴れだし、準備万端整えていた敵にあっけなく退治されていく……。

しかし、みんな、もう少し待つのだ。恋愛資本主義はもう、青息吐息の状態だ。アナログ女の価値は、もはや暴落の一途を辿っている。「電車男」のように「負け犬が年下のオタクを捕まえて都合のいいペット男に改造する」という物語が捏造されたのも、オタクを恋愛市場に引き込まないと、女があぶれてしまって市場が成立しないからなのだ。むろん、恋愛市場が崩壊したのは、言うまでもなく俺のようなオタクが恋愛市場を自ら捨て、二次元に移民したからだ。オタクは、

※キモメール
まずはメールで女を褒めまくる。で、女から「そんなに褒めてもなんにも出ないよ」という返信が来たら、ここぞとばかりに「愛液が出るじゃないか」とレスをする。本気でキモがられること請け合いだ。

一見「恋愛市場から逃げる」という敗北者のような行動を取っていた。それ故に酒井順子は、

今時の男性というのは、「女性があまりに強くて怖いから、近付くことができない。それだったら、何も文句を言わないバーチャルの世界の女の子の方がラクでいい」と、女性に対して腰が引けているもの。

（二〇〇四年十二月十四日　読売新聞夕刊）

と、オタクを「真の敗北者」として嘲笑する。酒井は自分を負け犬と言っておきながら、実は自分を敗者だとは考えない。本当に負けたのは、自分たち女から逃げ出したオタク男だ、と信じているのだ。

確かに我々は、闘わずして恋愛市場から去った。しかしそれは、女が怖いから逃げたのではない。オタクは、喪闘気を溜め込んで、都井睦雄のような鬼畜となり、女を傷つけるという人生を選ばなかった。二次元の世界で萌えキャラと恋愛して喪闘気を昇華し、人間らしい優しい心を守りながら生きていこう、という善意に満ちた選択を行ったのだ。

ああ、しかも、「何も文句を言わないバーチャルの世界の女の子」とは、なんという無理解、無知なのか。

俺がみさき先輩を好きになったのは、先輩が、障害者だからといって自分を特別扱いしようとする俺に対して、

「私だって、普通の女の子なんだよ……」

と俺の心の醜さに傷つけられ、力なくうなだれて、文句を言った瞬間だったのだ。あの時に、俺は分かった。みさき先輩は、まぎれもなく生きている。生きた人間だ。俺の脳の中で、みさき先輩は生きている、心があるんだ！と。

そもそも、男は、力に訴えれば誰だって、女をスーパーフリーの和田サンみたいに肉壷扱いできるのだ。俺だってトラヴィス目指して日夜ガチガチ鍛えてるしね（オタクは一般的なスポーツを苦手としているが、なぜか格闘技・プロレスだけは別枠扱いで大好きだったりする）。その気になったら、**負け犬女なんか30秒で殺せる**ＹＯ！

しかし、オタクは、どれだけ女に傷つけられても、和田サンにはならない。スーフリＤＱＮ族にはなりたくないのだ。なぜなら、オタクは女性を人間として尊敬しているからだ。愛したいのだ。愛してほしいのだ。スーフリＤＱＮ族になって女性を肉壷扱いするよりも、フィギュア萌え族になって女から嘲笑されているほうが、まだマシだ。そう思えるのが、オタクの優しさなのだ。

だが、恋愛資本主義にどっぷりとのめりこんで欲望を肥大させ続けた負け犬には、もう、そういうオタクの心の優しさを理解することもできないのだ。オタクを「無知で何も知らない、自由に手玉に取れるペット」ぐらいにしか見ていないから、ＤＱＮ男に改造することしか頭にない。いわば、負け犬女は、肥大する恋愛資本主義社会で勝ち残るために**無意味に巨大化した恐竜**のようなものだ。それに対して俺たちオタクは、かよわいように見えるが、実は新たなデジタル環境

に適応するべく**大脳を発達させ続ける哺乳類**なのだ。ＮＨＫスペシャル『地球大進化』※を見れば明らかなように、どちらが生き残るかは言うまでもない。

恋愛資本主義では、結局、恋愛もまた商品でしかないから、異性を自由競争によって奪い合うことになる。男も女も、金や権力や容姿の力で、異性の心を支配し、屈服させ、セックスを強いる。それが恋愛資本主義における「支配＝服従型恋愛」だ。

これに対して、オタクの二次元世界では、恋愛とは、平等で対等の関係である。

そう…オタクの取った道は「**非暴力・不服従**」**というガンジー主義**だったんだよ！

な、なんだってー？

女を支配することも女に支配されることも望まない心の優しい男は、みな、続々と「平等な恋愛」や「真に愛する人との幸福なセックス」や「ウソ偽りのない本当の愛」を求め、腐敗しきった恋愛市場を捨て、オタクになり続けているのだ。今、この瞬間にも！

オタクは、戦わずして勝つ道を選んだ。恋愛資本主義は女の商品としての価値を吊り上げながら女の一方的な売り手市場を形成していたが、大勢の男がオタク化して市場から逃亡したことで、今では逆に女が男を捕まえなければならなくなっているわけだ。『ａｎａｎ』も『ｎｏｎ・ｎｏ』も、いまや、「男たちがセックスしたがらない！」「どうすれば男をその気にさせてセックスできるのか」という特集を組む始末だ。ＤＱＮが相手にできる女の数も結局は有限なので、すでに「Ｄ

※**『地球大進化』** ＮＨＫの科学ドキュメンタリー番組。正式には『ＮＨＫスペシャル　地球大進化　46億年・人類への旅』。原始地球における生命の誕生からホモ・サピエンスの登場までをハイビジョン映像で俯瞰。ＤＶＤビデオも販売されているが、ハイビジョン放送の画質には遠く及ばない。

80年代

キモメン　女　キモメン
イケメン
キモメン　キモメン

［男が余っていたために
女の一方的な買い手市場］

現　在

DQN　SEX!!
女女女女女
負け犬軍団　Can't SEX!!
オタク　No SEX!!

［男が二極化し負け犬が大量発生］

■かつての恋愛資本主義と、男が二極化している現状
女を人間扱いする心ある男はオタクに、女を肉壷扱いする心ない男はＤＱＮに

ＱＮには**中古品**と相手にされず、オタクには**萌えないゴミ**と思われている」という立場の、市場から完全にあぶれてしまった女が増えている。むろん負け犬がその代表格だ。

だが、なんとこれは、まだ恋愛資本主義の崩壊の序曲に過ぎないのだ！　三次元世界においても、商品としての「恋愛」が、純愛の末裔であり進化系である「萌え」に敗北する瞬間が、もうすぐやってくるのだ。

萌えレボリューションの到来は近い。三次元世界が萌えに逆占領されるその日まで、二次元で鋭気を養い、力を蓄えるのだ……。

度々登場する漫画『ルサンチマン』の主人公タクロー先生は、三次元ではまったくうだつのあがらないキモデブハゲオタの30親父だったが、二次元で脳内彼女の月子ちゃんとラブラブな生活をしているうちに、

二次元〉〉〉〉〉〉〉〉〉（越えられない壁）〉〉〉〉〉〉〉〉〉三次元

という悟りを開いた。

それまで三次元の女…長尾さんには頭があがらず卑屈な態度を取り続け、

「あたし、あんたみたいなタイプ、生理的にダメなのよ！」

とまで言われても何も言い返せなかったタクロー先生。そのタクロー先生が、月子ちゃんの愛を手に入れたことで、生まれ変わった。

二次元の女なんかと恋愛していて虚しくないのか、と長尾さんに説教されたタクロー先生は、

「お、俺は、月子ちゃんを愛しているんだー!!!」

と二次元恋愛宣言！　それに対し長尾さんは、

「キモデブのくせによくも！」と激怒するのかと思いきや！　そんなタクローが、男前に見えてしまうようになったのである。エエエエエエ。

長尾さんは典型的な「30歳・独身・彼氏なし」という負け犬の中でも負け組に属するかよわい女性だったので、**DQNに弱かった**のだ。トホホ…どうも、だめんずの気がある。結局、女は自分をなめた態度を取ってくる男に弱いのだ。

岡田先生の言う、「余裕のある態度の男に弱い。

■タクロー先生、長尾さんに宣言
（花沢健吾『ルサンチマン』小学館『ビッグコミックスピリッツ』二〇〇四年十二月六日号掲載）

余裕がある男は、女をなめてるだけなのにね」というあの「**DQNモテモテの法則**」が発動したんだYO！

あーあー。もっとも、タクロー先生のようなオタクはたいてい人に優しいから、長尾さんは不幸にはならないと思いますが。で…そんな感じで二次元に正妻を作ったタクロー先生は、三次元にも長尾さんという2号さんを持つことになったのであった。**タクロー先生、男らしい！**

まあ、その後、長尾さんはエルメスよろしくタクローに脱オタを迫り、月子ちゃんと別れさせようとしはじめるのだが…本来であれば、脱オタ要求は断固拒絶するべきだろう。とにかく、そのうちそういう世界が本当にやってくるから、もう三次元の女のことは気にするな！　男がかたっぱしからDQNとオタクに分かれてしまえば、女だっていいかげん目を覚まして、オタクの素晴らしさが分かるはずだYO！

俺の知り合いのコスプレショップの店長さんは、奥さんもオタクなのだそうで、常々、「俺は、お前より、『ToHeart』の志保ちゃんのほうが好きだ。目の前に志保ちゃんが現れたら、即、志保ちゃんに乗り換える！」

と言い続けることでアナログの嫁さんに、

デジタルの志保ちゃん〉〉〉〉〉〉〉〉（越えられない壁）〉〉〉〉〉〉〉〉アナログのお前

というヒエラルキーを植え付け、慣れさせてしまったそうです。
お、オタクらしいっ！！！！（涙）これがオタクだーーーっ！

いずれにしても、さらに情勢が進んで今よりももっとオタクが有利になったら、いよいよもって女たちは「脱オタしなくても構わない」と言い出すはずだ。「アナログ女によるオタクの奪い合い」という逆転現象が起きる。その時にどうするかは各オタクが自分で選択すればよいことだ。あくまでデジタル一本を貫くもよし、デジ・アナのハイブリッド恋愛を試すもよし。
「お前より、みさき先輩のほうが俺には大事だあああっ！」
と言い張っても怒り出さない、そんなアナログ女が出現すれば、二次元至上主義の我輩も、**「兄」と「妹」**として付き合ってやってもかまわぬぞえ。毎朝、ゴミさえ出してくれれば。
さあ、今こそ堂々と胸を張って二次元の萌えキャラと恋愛するのだ！　萌えこそが時代の最先端、人類が前頭葉を進化させた果てにようやく到達した究極の悟りの境地、男にとっての「約束の地」なのだ！

イケメンならば、アナログ女を「萌え」プログラムに書き換えてリロードしろ

さて、三次元でもモテ系のイケメンオタクはどうすればいいのか？　この項目は俺と何の関係もない話題なので寝転がってハナクソをほじりながら書き進めていくが、ウソは書かないよぅ。
大丈夫、大丈夫。

羨ましいことに、イケメンオタクは三次元と二次元とを『マトリックス』のネオのようにホイホイと自由自在に往復することができる。つまり、二次元でも恋愛できるし、三次元でも恋愛できるのだ。

ここで、

「三次元で恋愛できるなら、オタクにならなくていいだろ！」

と言いだす奴は、何もわかっておらんっ！　お前は、**二次元より三次元のほうが値打ちがあるとでも思っておるのかっ！**　オタク失格じゃああ〜っ！

しゃっつらがイケメンだろうが何だろうが「**二次元〉〉〉〉（越えられない壁）〉〉〉〉三次元**」という真理に気づいた人間は、みんな、偉大なオタクなんだYO！　三次元でイケメンに差別されたからって、二次元でイケメンオタクを逆差別してはいかんのだYO！　オタクに、二次元に、顔面の貴賤なしっ!!　むしろ、三次元の恋愛資本主義でも勝ち組になれるのに、あえて二次元という茨の道に立たされている世界を選択するというのは、実に男らしいぢゃないか！

…なんだけど、イケメンオタクにも悩みがあって、それは、やはり、

「三次元の女に脱オタを迫られる」

「三次元の女にオタクをカムアウトできない」

というものらしい。

しかし大丈夫。悩むことはない。だって世界は「二次元＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞三次元」となってるんだから、常に二次元を最優先して考えればいいんだYO！　つまり、三次元の女を、恋愛資本主義の呪縛から開放して、オタクワールドに引き込んであげればいいのだ。

これは、**人助け**だ！

アナログ女は、ブランドもののファッショングッズで身を固めて、イタ飯を食って、ワインを飲んで、高級な車に乗って…という恋愛資本主義プログラムを刷り込まれて踊らされてはいるが、そんな生活に真の幸福・真の愛・平等な恋愛関係など存在しないことは、『ファイトクラブ』のタイラー・ダーデンに痺れるオタクマインドの持ち主ならすでにご存知のはず。このままでは将来負け犬・オニババになってしまうかわいそうな彼女を、恋愛資本主義の支配から解放してあげるのだ！

「そんなものに金を使う暇があったら、同人誌を買え！　ネコミミをつけろ！　メイドさんになれ！」

と逆洗脳して、三次元女を萌えキャラ化してしまえばいい。俺が三次元女にこんなこと言ったら基地外呼ばわりされそうだが、イケメンが言えば、言うこときくだろ…たぶん…ハーア……。

まあイケメンのオタクは、そうやって三次元の女をガンガンと洗脳から解き放って同志を増やすという活動にいそしんでほしい。俺みたいなキモメンじゃ、女に何を言っても聴いてもらえな

いからね……。だから、頼むよーがんばってくれよー。ああーっ、あああああーーーっ。
一昨年にアニメ化された『成恵の世界』※というオタラブコメ漫画がちょうどそういう話で、主人公の男が顔はかわいいのだが脳内はまことに香ばしいオタク。成恵ちゃんという彼女ができた彼が、成恵ちゃんを自分の部屋に連れ込んで最初にやったことが、

「魔法少女の変身シーンのムービーを見せて自慢する」

という自爆テロ行為だった。
いきなり、

二次元の魔法少女＞＞＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞＞＞三次元のお前

という揺ぎない信念を彼氏に見せられた成恵ちゃんは、怒り狂って「こんなオタク、もーやっとれんわ！」と逃げるのかと思いきや、

「むきー！　こんな女には、負けていられないわ！」

と、**夜なべをして魔法少女のコスプレ衣装を作り**、彼氏の前で悩殺魔法少女コスプレショーを開催！
で、香ばしいオタクの彼氏は、

「す、スゴイよ！　成恵ちゃんっ！」

と、コスプレで萌え度をアップした成恵ちゃんにますます萌え狂うのだった。こうして二人は

※『成恵の世界』
丸川トモヒロ著。角川書店の『月刊少年エース』で連載されているラブコメ漫画。ヒロインの成恵ちゃんは宇宙人と地球人のハーフなのでセンスがちょっと独特だ。アニメにもなった。

末永く萌え萌えなお付き合いをしましたとさ。めでたしめでたし。

最初にテレビでこの話を観たとき、こんなアホな話、現実にあるわけないだろっ！と俺は思ったのですが、どうやら、イケメンのオタクなら、こういった事態がありうるらしいんだよね……。

また、男もどんどんDQNとオタクに二極化されているのだが、実は女もDQNとオタクに二極化されてきているらしく、最近の女の子にはコスプレ喫茶でメイドさんの格好をして働いたり、同人誌買ったり、というオタクも増えているようだ。なかには、**「派遣メイドさん」**※というサービス業で働く子もいる。これ、風俗じゃなくて、ほんとにメイドさんとして派遣されて部屋の掃除をするという仕事なのだ。つまり本物のメイドさんなのである！

二次元にしか存在しなかった「メイドさん」という職業が、「メイドさん」という人種が、三次元に逆輸入されたのである！　そう、もはや、二次元が三次元を逆に侵食しはじめているのだ！

「DQNに乱暴にヤラれて捨てられるよりも、オタクに萌えられるほうが、もしかしたら幸せ？」

「女性誌に踊らされてブランド品を買い続けるよりも、萌えコスプレしているほうが、もしかしたら楽しい？」

という新たな価値観が、非DQN系の女の子の間に、広まりつつあるのだ。今はまだ、二次元の価値観を三次元に逆転送できる力を持っているのはイケメンオタクだけだが、今後ますます三次元が二次元に侵食されて文字通りの「二・五次元」とでもいうべき状態になれば、「キモオタ＝

※派遣メイドさん
メイド服専門店の『キャンディフルーツ』が行っているサービス。メイドさんだけでなく、執事もついてくるらしい。

変質者」という間違った恋愛資本主義のルールは打ち倒され、キモメンオタクもイケメンオタク同様に（同様とは言わずとも、現状よりもかなりマシなレベルで）三次元にも適応できるようになるかもしれない。

そしたら、俺にも、俺専用三次元メイドさんが現れるのかなあ……。二次元メイドさんには一個、弱点があって、それは、**部屋を掃除してくれない**ということなのだ。**この一点において**、三次元メイドさんには、立派な存在理由があるっ！と、俺は声を大にして言いたい。

だれか、俺の部屋を掃除してくださーい。

もちろん、現行のメイドさん派遣サービスは、業者にお金を取られるので俺は頼んでいない。タダで働いてこそ、「俺専用メイドさん」だろっ！　エッ？　タダで働かせたら、それは「**俺専用奴隷**」なんじゃないか、だって？　そ、そうかも知れないですね…まあ、そんな細かいことは気にするな！

なお、この本は負け犬・オニババを中心に女どもを総攻撃！という有様になっているが、俺が叩いているのは「恋愛資本主義」のシステムそのもの、「恋愛＝顔＋金＋セックス」という恋愛資本主義の価値観そのものなのであって、負け犬たちは、いわば『マトリックス』のバーチャル世界に登場してくる、マシーンにプログラムを「現実」だと思い込まされている一般市民みたいな

ものなのですYO。だから、恋愛資本主義の洗脳が解けて、真の萌え世界に目覚めたオタク女は、われわれの味方ですYO！　まともな意味での恋愛（金や顔と愛を等価交換する、不平等な恋愛ではなく、人間の自由意志に基づく平等な恋愛）だって、洗脳が解けた人間同士であればできるかもしれない。つまり、負け犬が恋愛資本主義の手先になってオタクを攻撃してくるから、仕方なく応戦してるんだYO！

話を戻すが、イケメンオタクの場合、三次元では恋愛資本主義ルールのまま暮らし、二次元で萌えルール生活、という二足のわらじも、それはそれで構わないだろう。岡田斗司夫先生のように、三次元では「自由恋愛主義市場」つまり恋愛資本主義で勝ち組となり、二次元も制覇、という恋愛二冠王もアリかもしれない。

…俺には無理だがな…くくっ……。でも、いいよ、俺にはみさき先輩がいるから！

みさきせんぱーい！　好きじゃあああーーーっ!!

みさき先輩、僕と結婚してくださあああーーーーいっ！

アナログ女と交際・結婚する際の注意点

二次元こそ、真実！　二次元の彼女こそ、永遠の伴侶！

僕の脳内妻を紹介します。川名みさき改め、**本田みさき**です。

とはいえ、二次元彼女にはまだ、「**部屋のゴミを捨ててくれない**」「飯を作ってくれない（作ってくれるけど、**食べても満腹にならない**）」という弱点が残っている。あと10年もすれば部屋のゴミ出しも二次元彼女がやってくれる世界が訪れるはずだが、とりあえず、二次元彼女がいるにも関わらず、種々の理由でアナログ女とも付き合う羽目に陥った場合、どうすればいいのだろうか？

というわけで、ここでは「オタクに三次元のアナログ彼女ができてしまった場合」の対処方法について、考えてみたい。

三次元を捨て去った俺に何の関係もないこのような問題を考えるのは実に骨が折れるのだが、周囲にけっこう悩んでるオタク仲間が多いので、こっそり「アナログ彼女に突きつけるべき三か条」をお教えしておこう！　デジタルと違ってアナログは**メンテナンスが大変**なんだＹＯ！

■結婚しました

1 「オタク趣味を捨てない」
2 「オタクアイテムを始末しない」
3 「財布を渡さない」

この三つの条件をアナログ彼女に認めさせるのだ。これはつまり、「オタク生活永続のための必須条件」だ。1は言うまでもない。2も同様。勝手に大切なアイテムを捨てるような女はオタクの楽園を破壊するので追放するべきだろう。3は、財布を握られるとオタクグッズに散財できなくなるからだ。エルメスのように脱オタを迫り、『セーラームーン』※の同人誌にケチをつけるような女とは、断固として交際・結婚してはならない。ちなみに「電車男」は30過ぎのオッサンか負け犬女が半分妄想で書いたかもしれないと俺は疑っている。**いまどきの若いオタクが『セーラームーン』の同人誌なんか集めてるはずがない。**『プリキュア』※だろっ！　しかし俺と同年代のオッサン・オバハンにとっては、いまだに同人誌といえばセーラームーンなんだよ！

とにかく、オタクにとっては「二次元＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞三次元」であることを徹底的に教えて理解させなければ、いつ何時脱オタさせられるか、わかったものではない。だからまあ本当は、最初っからオタク同士で付き合うのが一番平穏だ。ただ、オタクといっても、下手したら萌えオタクじゃなくて腐女子だったりする可能性が高いわけで、そうなるとまた別の意味でウンザリさせられるかもしれない。腐女子の話は長くなるから割愛するが、俺は、彼女らはいわゆる萌え系のオタク男とはまったく異なる、絶対に分かり合えない別次元の人種だと考え

※「セーラームーン」
『美少女戦士セーラームーン』。原作・武内直子（講談社）。女の子たちがセーラー服姿の戦士に変身して悪と闘う。九〇年代にアニメ化されて大ヒットし、その後もミュージカルや実写版ドラマが製作され続けている。

※『プリキュア』
『ふたりはプリキュア』。二〇〇四年からテレビ朝日系列で放映されている子供向けアニメ。女子中学生のなぎさとほのかが戦士に変身して悪と闘う。

ている。むしろ、恋愛資本主義に漬かってるけど、まだそれほど頭が固まっていない非オタの女の子をリロードしてオタクにしてしまうほうが良いだろう。
次に、オタクがついうっかり三次元アナログ女と結婚する羽目に陥った場合には、どうすればいいのか？　これこそ俺には何の関係もない話だが、過去に「オタク×アナログ女」が結婚して成功した例がいくつかある。そこから導き出した定理が、これだ！

「オタクのDNAは、継承される！」

すなわち、生まれてくる子供にオタク英才教育を施すのだ！
手塚治虫先生が漫画の神様になったのも、父親が当時としては珍しい映画マニアで、幼い頃から自宅でひたすら映画を観て育ってきたからだ。映画千本ノック！　しかも、宝塚歌劇※という性倒錯した萌えワールドまで刷り込まれた手塚先生は、
「男も女もどうぶつも関係ない！　僕は、かわいいものなら何にでも萌えていいんだ！　ロボットでも！　植物でも！」
という萌え史上に残る偉大な悟りを開き、アナログ女という呪縛から萌えを開放して「**無差別属性萌え**」の開祖となった。これぞまさしくオタク英才教育ッ！
岡田斗司夫先生もまた、幼い頃から自室に備え付けた超巨大リアプロ※でゲームをいそしむオタクエリート生活を過ごされたという。子供の自室に巨大リアプロって、俺、漫画『エリートヤン

※宝塚歌劇
一九一四年に阪急グループ総帥の小林一三が創設した女性のみの歌劇団。大地真央などの女優を輩出。女性を中心に、熱狂的なファンが多い。

※リアプロ
リアプロジェクションテレビ。スクリーンの裏側から映像を投射して映し出す方式のプロジェクターで、アメリカや中国では大画面テレビの本命として人気。安価で大画面。プラズマや液晶が先行してきた日本では、ようやく認知されはじめたばかり。

キー三郎』※でしか見たことないYO！　オタクの中のオタクは、多くの場合、幼い頃からオタク教育を施されて超一流になったわけだ。

そういえば野球界のイチロー、ゴルフ界のタイガー・ウッズ、音楽界のモーツァルトなど、親が狂ったようなオタクで、子供にその魂を教え込んで…というタイプの天才伝説は、数知れない。

そういうわけで、偉大なオタクを生み出すために、あえてオタク同士アナログ結婚をして子供を作り、**オタクスパルタ教育**を施すという生き方は、日本の国益と家族の経済生活のために役立つといえるだろう。

俺自身はみさき先輩とデジタル結婚してるのでアナログ女と結婚する気はないが、**アナデジ重婚**というのもいいんじゃないだろうか。**己のオタク魂を次世代に託す**、それもまた良き哉、良き哉。

俺が父親になったら、息子を無理やり左利きに矯正するね！

「ばかものおっ！　右手で飯をくうなあっ！」

「だって、父ちゃん、俺、右利きだYO！」

「オタクは左利きが有利なのだ！　左手でマウスを操作できれば、オナニーするための右手が空くだろうが！」

「でも、父ちゃん。左利きなら、左手でオナニーするんじゃないの？」

「だ、だまれえっ！　屁理屈をこねるなあっ！」

※『エリートヤンキー三郎』阿部秀司の漫画。講談社の『ヤングマガジン』で連載中。オタク系少年・大河内三郎が周囲の誤解からヤンキー軍団の総長に祭り上げられて酷い目にあう。

がっちゃーん

■ちゃぶ台がえし

萌えパワーを増強するための「アナログ恋愛＝超回復」論

これまで何度も、

「実は人間にとっては『二次元＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞三次元』が真実であり、二次元は三次元の代替物などではない。むしろ、三次元を構成しているすべての要素は、もともと二次元の妄想だった観念が三次元に転送されたものに過ぎない。つまり二次元のほうが真の世界なのだ」

という話をしてきたが、三次元にもそれなりの利用価値はある。あるオタク仲間に聞いたのだが、なにかの漫画の名言に、

「セックスなんて、エロゲーをやるためのシミュレーションですよ！」

という素晴らしい言葉があるそうだ。なるほど……。

つまり、二次元でより強烈に萌えまくるためには、三次元世界でデータを収集しておくことも必要、ということですな。二次元の萌えキャラは、三次元のアナログ女がモデルとなって、そこから進化してきたものだ。**猿からホモ・サピエンスが進化したのと同じに**（おい）。だから、脳内の二次元キャラをよりリアルに成長させていくためには、二次元キャラのオリジナルとなっているアナログ女に関するデータの収集をある程度しておいたほうがいいかもしれない。

従来、二次元は三次元をシミュレートしたものに過ぎないといわれてきたが、もはや時代は、三次元が二次元を構築するためのシミュレーションの場として利用されるという逆転状態になりつつあるわけだ。

また、これは俺の自論だが、「**燃料としてのアナログ恋愛**」という考え方もある。つまり、三次元世界において、アナログ女に与えられたトラウマが、二次元世界における新たなる萌えパワーとなるのだ。

燃料投下——女の「言葉の暴力」キターー！

↓

萌えパワー炸裂——やっぱり俺にはみさき先輩しかいないっ！　せんぱーいっ！

という好循環ッ！（悪循環じゃないのか、という声もあるが）

筋力トレーニングでは「**超回復**」という理論がある。筋トレとは、実は、自分の身体の筋肉にわざと負荷をかけることによって破壊する活動なのだ。「筋肉を鍛える」のではなく「筋肉を壊す」のである。するとどうなるかというと、破壊された筋肉は、数日の間に破壊される前よりもより太い筋肉として強化されて復活する。これが「超回復」だ。この「筋肉の破壊」と「超回復」をローテーションで効率よく続けていくことこそが、筋力トレーニングなのだ。もちろん、あまりにボロボロに壊してしまうといけないので、適度な負荷をかけることが重要なのだが、とにかく筋肉は痛めつけることによって強化されていくのだ。

　人間の妄想力…萌えぢからも、実は、これと似たようなところがある。つまり、まったく心に傷を負っていないピカピカの状態では、あまり萌えぢからは湧いてこない。ところが、アナログ女に「キモッ」とか罵られることによって心に深い傷を負った状態になると、この傷を癒すために、妄想力が増大し、萌えレベルがぐっと向上するのだ。すなわち、萌えもまた、苦難に直面して傷つくことで、よりパワーアップすると考えられる。

　これを俺は「**萌えの超回復理論**」と適当に名づけた！

　萌えの超回復トレーニングでは、まずは三次元のアナログ女にわざわざ関わり合ってあえて傷つけられる。あまり

①～④のプロセスを繰り返すことで妄想力が鍛えられる!!

■萌えの超回復理論
俺はまだギブアップしていないぞ！　俺をもっともっと苦しめてみろ！
この苦しみが、萌えぢからになるのだ！

ボロボロにされるとやりすぎになるので、適度に傷つけられた時点でさっと引き上げて、二次元に引きこもろう。で、傷ついた心に充分な萌えアイテム（アニメのＤＶＤとか、フィギュアとか、同人誌とか、ゲームとか）を投与して、魂の超回復をはかるのだ。萌えアイテムは、筋トレにおける**サプリメント**に該当する。筋トレでは、回復期間にアミノ酸などのサプリメントを補給することで、超回復の期間を短縮するなどして効率化を図っている。萌えアイテムは、このサプリメント同様に、傷ついた心を素早く癒すために必要となる。これを何度か繰り返していくうちに、「二次元＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞三次元」という境地にどんどん近づけるだろう。

だから、「どうも最近、萌えレベルが下がってきたな」と自覚症状が現れたり、オタク仲間に置いてけぼりを食わないように急激な萌えドーピングを行いたくなったら、あえて傷つけられるために、アナログ女と関わり合いになってみるのも良いかもしれない。もちろん、くれぐれも心の傷つけすぎには注意したい。ハードすぎるトレーニングは、かえって逆効果になる。

なお…もはや説明するまでもないが、この「萌え超回復理論」は、**俺個人の体験から生み出した理論**である。俺は、三次元の女に傷つけられれば傷つけられるほど、脳内世界にいる二次元の女の子に萌えるんだよなあ！

人間は、自分が傷ついてはじめて、他人の心の痛みを理解し、共感できるようになるのだ。例えば、俺は小学校時代、重度のアレルギーが原因で、女教師に給食を無理やり食わされるたびにゲロを吐いていた。で、そのせいで、ますます女教師に虐められ、クラスの女の子たちにもキモがられ…というバッキー※のリンチＡＶのような地獄の日々を送っていた。

※バッキー
バッキービジュアルプランニング。水責め拷問のようなエグいビデオを作っている鬼畜系ＡＶメーカー。昨年、女優に大怪我を負わせたかどで逮捕者が出た。

で…結局、女教師に虐待されてボロボロになっていく俺を癒してくれる女の子は、現れなかったよ。三次元の小学校にはな……。誰も彼もが俺をばいきんまんのように差別したよ。**ウンコを見るように俺を見てよ。**

そんな俺だから、アニメ『おジャ魔女どれみ』※の引きこもり登校拒否少女・長門かよこタンが、学校の門の傍まで来た瞬間に、

「うっぷ。げろげろのげー」

と吐いてしまう姿を見て、「ああああああ…かよこタン……」と泣きながら萌えることができる。

俺が萌えマスターの階段を登れるような二次元人間に進化できたのは、三次元女の罵詈雑言、言葉の暴力の嵐のおかげともいえるのである。

試練がオタクを磨く!

俺を傷つけてくれた三次元の女たちのおかげで、俺はいちはやくオタクに進化できた。で、二次元で愛に満ちた幸せな暮らしを送れるわけなのだ。

最近、俺は護身完成してしまったので、魔法の力「**D．T．フィールド**」を自分の周囲に張って三次元女を完全にシャットアウトできるようになったが、たまにはD．T．フィールドを開放して、三次元女の言葉の暴力を浴びる必要があるのかもしれない。

……まあ、もう充分すぎるぐらいに浴びてきたが。この本もボロクソに言われるのかなぁ。もっともっと俺を罵って蔑むがいい、アナログ女どもめ！　その憎しみが、俺を萌えさせるのだ！アナログ女が俺を罵れば罵るほど、俺は巨大になる。罪もないのにアナログ女に蔑まれて倒れて

※『おジャ魔女どれみ』テレビ朝日系で一九九九年から二〇〇三年にかけて放映されていた魔法少女アニメ。現在もOVAが製作されるなど人気が高い。原作は東堂いづみ（講談社）。

いった無数の萌えオタクたちの魂が、俺をハイパー化させるのだ。
みんな、俺の身体を使えーーっ！
二次元ばんざーいっ！

妖精を目指すのもまた良し

逆に、いっそ、一生涯にわたって完全に三次元を捨ててしまうという選択もある。むしろこれが一番オタクらしいっ！　一生涯を二次元に捧げる男の道、真の魔法使い・真の妖精への厳しい道、それが**童貞道**ッ！

童貞を貫く強靭な意志力によって、自らの脳内世界を巨大な建築物のごとく創造し続けた偉大な天才たちは数多い。ちょっと調べただけでも、第３章で詳細に紹介した童話作家にして詩人の宮澤賢治大先生の他、音楽家ではベートーベン、哲学者ではニーチェ、科学者ではニュートン、哲学者ではカントといった超大物が、皆さん生涯童貞を貫いたといわれている。もちろん童貞を貫いたといっても、アナログ女に対するアナログ童貞を守ったということであって、各自がそれぞれの**脳内宇宙**において理想の萌えキャラとデジタル恋愛していたことは**間違いない**のである。

宮澤賢治が童話の中に、自分の妹をモチーフにした萌えキャラ（『銀河鉄道の夜』のカムパネルラなど）を投入していたことはすでに述べたが、ベートーベンの『運命』のジャジャジャジャーンというひたすら濃い旋律も、萌えエナジーがスパークしまくっている『第九』の『歓喜の歌』も、ベートーベン大先生の童貞魂が炸裂していると考えるのが妥当だろう。

童貞の天才は、エネルギー過剰・情熱MAXな作品を残すことが多い。ニーチェの実存哲学も過激極まりないものだった。何しろ、西洋人でありながら突然「神は死んだ」と宣言したのだから、**ニーチェ先生がモテなかったことは容易に想像できる。**

ニーチェはキリスト教を「弱者のルサンチマンから生み出された奴隷道徳」であり、人類を衰亡させる原因として糾弾した。人間は神を捨て、自らの意思で生きる「超人」へと進化しなければならない、というのがニーチェの思想の根幹だったが、これは言うまでもなく、神との契約関係に基づいたアナログ女との関係を捨て去り、自らの意思で脳内世界を築き、二次元キャラと萌えまくる「オタク」への進化を予言していたわけである（そうか？）。

さらにニーチェは「**永劫回帰**」という恐ろしい思想を持ち出す。永劫回帰とは、人間は死んでもまだ消滅することができず、世界は永遠に繰り返す、というものだ。つまり、ニーチェは「俺はモテない。故に超人に進化しなければならない。しかし、世界は永遠に繰り返される、つまり俺は永遠にモテない。超人は、俺は永遠にモテないという定めを受け止められる偉大さを持たねばならない」と無茶なことを考えて、結局、発狂してしまったのだった。

このニーチェの「俺は永遠にモテない」という永劫回帰の恐ろしい思想は、後年、**手塚治虫先生が『火の鳥』の主題に取り上げて全面展開**した。しかし、まあ、「永遠にモテない」だなんて、なんと恐ろしい思想なんだ……。この恐怖に耐えられる妄想力を持った新しい人間こそが、ニーチェのいう「超人」だったんだよ！　すなわち**超人とは、オタクのこと**なんだ！　**人間は、「オタクに乗り越えられるべき存在」**だったんだよ！　な、なんだってー？

ことほどさように、アナログ童貞を貫けば、すべてのエネルギーが二次元世界に注ぎ込まれるので、そこに天才の境地があるかもしれないのだ！　手塚先生も一応お見合い結婚はしたものの、多忙故に奥さんとはほとんど会えず、ひたすら仕事三昧。ついに生涯、アナログ恋愛に縁がなかったらしい。だが、そんな先生だったからこそ、『火の鳥』という「モテない永劫回帰」の超大作を描くことができたのだ。

逆に、アナログ世界でモテるようになったばかりに、**オタク魂を失って潰れてしまう**というケースも、けっこう多い。顕著な例としては、庵野秀明※とか、庵野秀明とか、庵野秀明とか！　永井豪大先生も、**童貞を捨ててからパワーが落ちた**と囁かれている。もちろん、アナログ世界での生活とまったく無縁に二次元で才能を発揮し続けるツワモノもいる。だから人によりけりなのだが、もし自分が「アナログでモテたら、オタクとしては枯れるかも」という疑いのあるタイプであれば、大願成就のためにあえて童貞を貫き通すという偉業を目指すのもいいだろう。

※庵野秀明
元アニメ監督。ガイナックスの設立当時から参加し、『トップをねらえ！』『ふしぎの海のナディア』『新世紀エヴァンゲリオン』の監督を務める。その後、実写映画監督に転向して『キューティハニー』などを手がけるがパッとしない。

エルメスを買い漁る人生より、萌えられる人生のほうが幸福だ

さて、来るべき恋愛資本主義の崩壊、オタク本位主義時代到来に備えるべき男の生き様は、これで固まった！　次に、恋愛資本主義に未来がないことに気づいている賢明な女性たちに、生き残る道を提示しよう。

彼女たちには、恋愛資本主義を捨てて、オタク界に移住するという生き残り方法がある。オタク界では、お互いに萌えられれば愛が成立する。世間には「オタク＝ロリコン」という決め付け

があるが、これはマスゴミが捏造したウソに過ぎない。いやまあロリ属性は大人気ですが。しかし複雑に多様化している萌えワールドには、ほとんどありとあらゆる萌え属性が存在するのだ。

■年上なら**姉キャラ**

年下のオタクに対しては、姉属性が有効だ。お姉ちゃんになりきり、弟をかわいがるのだ。姉属性と一口に言っても理解できないと思うが、**負け犬系キャリアウーマンの真逆**に位置するキャラクターだと考えれば一発で理解できるだろう。

例えば、

◎　母性愛・姉性愛全開で、**甘やかす**→萌え！
×　男を厳しく、口うるさくシメる→萎え…

◎　経験はそれなりだが、**弟一筋**の貞操観念の持ち主→萌え！
×　男性との肉壷関係を自慢して「大人の女」をことさら強調する→萎え…
（こういう女はオタクには「男の肉便器にされて悦んでいる馬鹿女」に見える）

という感じだ。むろん、恋愛資本主義に漬かっているバカな姉は姉として認められないので、**海外旅行・ブランド・グルメは全部ＮＧワード**である。

「そうは言っても、ドップリそんな女になっちゃってるし」
とお嘆きのあなたは、自分の姉萎え属性を逆手に利用すればいい。
「お台場なんて本当は何も楽しくないの。ねえ、**秋葉原に連れて行って！**」
とか何とか言えばもうオタクはイチコロですぞ！　ウンザリするほど秋葉原を連れまわしてくれることでしょう。

■年下なら**妹キャラ**

年下なら話は簡単で、「**お兄ちゃん**」**と呼んであげるだけ**でオタクの愚息は昇天。きっと「妹のためなら、死ねるッ！」と感動することだろう。また、オタクは普段、自分のためにしか金を使いたがらないが、妹におねだりされるとホイホイ買ってしまうことが多い。たぶん。「妹」はまさに魔性！　基本的に女嫌いのオタクも、なぜか、**妹というだけで全て許してしまう**。

ちなみに韓国では、年下の女性が年上の親しい男性に「お兄ちゃん（オッパ）」と呼びかけるのが一般的らしく、韓国の男は、一人でも多くの年下女性に「お兄ちゃん」と呼ばれるべく頑張っているのだそうな。

韓国の無限のパワーの源は、妹萌え！

日本も今すぐ、韓国に見習って、腐った恋愛資本主義を終わらせ、妹萌えを男女関係の根幹に据えるべきだ。そうすれば非婚問題・少子化問題もすべて解決するし、男はみんな妹のために奮い立って、かつて「エコノミック・アニマル」と呼ばれたやる気マンマンな時代が蘇るはずだ。

今の日本がダメになっているのは、「萌え」が足りないからだ！

つまり、女の脳が八〇年代に腐ってしまったために、愛を見失った男がみんなやる気を喪失しているのだ。俺だってアナログ女は大嫌いだが、ツンデレ系の妹が現れたら、そりゃもう、妹のために粉骨砕身で働く所存ですよ！　とはいえ、俺の頭の中にはすでに、**本田悠ちゃん**という**脳内妹**が住みついており、このヒョードル※クラスとも言うべき**最強の妹**を打ち負かすほどの萌えな妹が三次元に現れるとは思えないので、やっぱダメだろうな。

■俺の脳内妹を紹介します

ステイタス	
名前	本田悠
職業	学生
趣味	水泳
兄の呼び方	「お兄ちゃん」
得意技	三角締め、オモプラッタ
戦闘力	９２
知力	３４
野望	１００

そして、妹やら姉やらといった属性の新しさは、「家族」であるという点にある。従来、三次元世界では「恋愛」からスタートして「結婚」、「家族」へと辿り着くというルートが選ばれてきたのだが、もはやこのルートは崩壊している。すでに東京圏では誰も結婚したがらないし、たまに

※ヒョードル
エメリヤーエンコ・ヒョードル。PRIDEヘビー級チャンピオン。ロシアの格闘術「サンボ」の使い手だが最大の必殺技はパウンド（グランドでの連打）という怪物。柔術マジシャン・ノゲイラを2度も降した。

結婚してもすぐ離婚してしまう。**三次元世界は、「恋愛」と「家族」を「恋愛結婚」というルートで結びつけることに失敗した**わけだ。なぜこうなったのかは本書を読んだ方にはすでにお分かりだろう。恋愛結婚した夫婦においては、両者の関係はしょせん「他人」であり、愛を永遠に保証してくれるものがもはや存在しない。そのため、容易に関係が壊れるのである。

だが、二次元世界では、「家族」同士で「恋愛」関係へ突き進むことで、恋人でありながら同時に永遠に「家族」であり続けるという新たなルートを開拓する実験が行われている。兄＝妹関係や、姉＝弟関係などだ。これを三次元に移植すれば良いのだ。もちろん実際の家族で恋愛しろと言うわけではない。そう、赤の他人同士が、姉＝弟とか兄＝妹という擬似家族関係を築くのだ。**「彼女よりも妹！」という新たな男女関係ッ！**　恋愛関係はすぐに情熱が醒めてしまったりセックスに飽きたりして数年しか続かないと言われているが、家族関係なら永遠に続くというわけだ。

■顔がきついなら、**ツンデレ系**

ツンデレ系って何だよ？といぶかしがる方も多いだろうが、ツンデレとは、

・交際前、もしくは人前では、ツンツンしている
・交際スタートすると、もしくは二人きりになると、デレデレしてくる

という性格の萌えキャラを意味する。オタクは三次元世界で、**ひたすらいろんな女にツンツン**

され続けたあげくデレデレしてもらえなかったので（っていうか俺のことだけどな！　ああああーーっあああああーーーっ！）、「ツンデレ」というのは見果てぬ憧れ、**永遠の夢**なのである。

そう、中学高校でブルマ・スク水の女子に相手にされなかったために、いまだにブルマ・スク水に見果てぬ童貞もとい憧憬を抱いているのと、同じに……。ちなみに僕の妹の悠ちゃんはツンデレでスク水で巨乳で、しかも妹です。**完璧だっッッ！**

オタク界では、必ずしも、ロリロリ顔だけが萌え対象ではない。むしろ、ツンデレは**鉄板の人気属性**なので、エロゲーに三人のヒロインを入れるとしたら、たいてい、

1　オーソドックスなヒロイン

2　ツンデレ

3　ロリ

という構成になる。もちろん「ツンデレなロリ」のような複合キャラもいるが、とりあえず目が吊っていればツンデレの素養は充分と太鼓判を押しておきたい。また、歳食ったキャリアウーマン系なら、あまりメジャーではないが「ツンデレ姉」という合わせ技的なポジションもある。

■地味目なら、**癒し系・委員長系**

キャリアウーマンっぽくもないし、顔も地味。妹になれるほど若くないし、姉というほど年上

でもない。**ぶっちゃけ文化部でした**。この本で叩かれてるブランド狂いの「負け犬」とは何の関係もないYO! ただ、地味~に暮らしてたら、売れ残っちゃっただけ! そんな、はっきり言って何の萌え属性もなさそうな…もとい、堅実な性格のアナログ女は、どうすればいいのか?

簡単だっ!

眼鏡だっ!!!! 眼鏡をかけるのだっ!!!

それだけで、あら不思議。萌えアイテム史上最強と呼ばれる「眼鏡っ子」属性が、あなたのお手元に。俺個人は眼鏡に興味はないが、とにかく、多くのオタクが眼鏡に萌え萌え。ヨン様に萌えてるオバハンだって、半分は**眼鏡が目当て**だよ。**ハリー・ポッターも眼鏡だし**。

「地味」というマイナスの性質が、眼鏡一つで「眼鏡っ子」に。さらに、どんな性格であろうが、眼鏡さえかければこのようなボーナス特典までついてくるのだ!

性格がおっとりしてる場合→「癒し系」
性格がきつめの場合→「委員長系」
性格が抜けてる場合→「ドジっ子」

どうだろう。誰だって、どれかに該当するはずだ。しかも、**ちょっとぽっちゃりしていても、「眼鏡っ子なら仕方ないな……」と許される**というメリットもあり、まさしく眼鏡は魔法のアイテムといえる。

また、浮気男やＤＶ男や**浮気してしかもＤＶ男**といったＤＱＮを掴み続けているだめんずも、オタク界に移住すると居心地がいいかもしれない。なにしろ、オタクは女に優しい（そうでなければ、すでにＤＱＮになっている）。そりゃ、これだけ数が多ければなかには妙なのもいるけど、ほとんどのオタクは妄想力が炸裂しているかわりに三次元と二次元の区別がついている**（小心者ともいう）**ので、ＤＱＮ行為を取ることは少ない。特に、**浮気が脳内で完了する**のは、大きなメリットだろう。

　阿呆な女はオタクを脱オタさせようとするが、脱オタさせたら二次元で浮気できなくなるので、当然、三次元で浮気を開始するに決まっているのである。しかも脱オタすると男は自然にＤＱＮ化していくケースが多いので、

「あれっオタクだった時にはモテそうになくて浮気の心配がなかったのに、脱オタさせたら、なんか今までの男と変わらなくなった……」

　という具合に**元の木阿弥に陥る**危険性も高い。特に元々顔がイケているオタクの場合、三次元でもイケそうだと妙に自信をつけ、今までの反動から三次元の女を食い荒らそうとする奴も出てくるだろう。

負け犬よ、目を覚ませ

　さて、男に続いて女のオタク界への移住が進んだとしても、最後まで拒み続けるのが負け犬たちだろう。酒井順子は「このまま生きていけ」と結論したが、実際に負け犬の人生を続けていく

とどうなってしまうのだろうか？
　あっあー、ヤレヤレ。キモオタの俺が言ったって、どうせ「ブサイク男の遠吠え」と鼻でせせら笑って真面目に聴きやしないのが分かってるのにいちいち提言するというのも実に面倒だな。ドッコラショ。
　負け犬の理想とされている「キャリアウーマンとしてバリバリと金を稼いでマンションを買って、若くて貧乏な男の子をペットとして囲う」という生き方は、**恋愛資本主義における勝利者の姿**であり、確かに「金の力で男を支配する」というのは**資本主義の世界における勝ち組そのもの**といえる。

　おめでとう、おめでとうッ！
　だが、言うまでもないが、そんなことができる負け犬女は、全体のごくごく一部だけである。
　国税庁の調査によると、女の平均年収はピークの30代でも三百万円。年収八百万以上のサラリーを受け取っている女性は、全年齢を合わせても、全国で約33万人しかいない。これじゃ、若くてイケメンな男を囲うなんて、なかなか……。老けたキモメンなら囲えるかもしれんが。

年齢	平均年収（男）	平均年収（女）
20歳〜24歳	２７５万円	２３６万円
25歳〜29歳	３７８万円	２９４万円
30歳〜34歳	４６２万円	３００万円
35歳〜39歳	５５８万円	２９４万円

■国税庁調査による、年代別平均年収（2004年調べ）

　今の不景気な世の中では、よほど仕事ができないと、たいして収入は増えない。しかも、恋愛資本主義に洗脳されていると、その少ない収入をすべて、消費に使ってしまっているはずだ。ブランド品を買いあさり、グルメに奔走

し、海外旅行で外国に円を散財。で、気がつけばほとんど貯金もないまま、30歳過ぎちゃった……。というのが、恋愛資本主義に利用されるだけ利用されて商品価値を失い、中古品になってしまった大多数の負け犬女の顛末なのだ。残酷なことを書くようだが、これが偽らざる現実ですから。**人間ってのは、現実を認識しなければ、その現実を改革することができないんだYO！**

それにしても、男には『ルサンチマン』とか『最強伝説黒沢』のように、負け組が辛い自己分析をして再び立ち上がるための現実認知作品があるというのに、女にはほとんどないな……。※

女人、ついに往生しがたし！ プギャーッ！

というわけで、くらたまや酒井順子みたいな偉そうな勝ち組になれる女は、ほんの一握りなんですYO。騙されてるんですよ、あなたたちは。30過ぎると、オッサンとの不倫も機会が激減するしね……。オッサンが不倫相手に選ぶ女の年齢は、だいたい25歳ぐらいが人気らしい。はっきり言って**男は不倫の相手にする女なんて肉壷ぐらいにしか考えてないんだから**（相手の女性を人間として尊敬しているなら、不倫の対象にするわけがなく、すぐに離婚して結婚ということになるはずだ）、従って若い子がいいに決まってるのだ。

で、『オニババ化する女たち』で負け犬のオニババ化論を説いた三砂ちづるは、

こういう言い方をすると本当に失礼なんですけれども、大した才能もない娘に「仕事して自分の食い扶持さえ稼げればいいんだよ」とか、「いい人がいなければ結婚なんてしなくてもい

※（現実認知作品が）女にはほとんどないな……。鈴木由美子先生は例外ですよ！ かつて『白鳥麗子でございます！』でスーパーお嬢様をヒロインにしていた鈴木先生だが、歳を重ねるごとに扱うヒロインの属性が「ストーカー」「整形美人」「ババア」「ブス」とどんどんハードコアな方向に突っ走っており、そろそろ白鳥麗子様の続編を読みたくなってきた。

いんだ」というようなメッセージを出してしまうことは、その子にとってものすごい悲劇の始まりではないかと思うのです。

（三砂ちづる『オニババ化する女たち　女性の身体性を取り戻す』光文社）

と、大部分の「負け犬」が実は**金もなく男にも相手にされない**という文字通り悲惨な状態に陥っていることを嘆いているわけだ。彼女たちは、「女はキャリアウーマンになってバリバリ稼いでガンガン自己投資すればイケメンの男が現れて幸福になれる」という恋愛資本主義の大嘘にだまされたわけだ。ウソというか、まあ「自由競争」の世界なのでごく一部には勝ち組もいるわけだが、ほとんど全員が敗者であることは間違いない。**甲子園の高校野球大会を考えてみて欲しい。1チーム以外、全部敗者でしょ**。だいたい全国の何千というチームは甲子園にすら来られずに消えてるわけで。自由競争とは、そういうものなのだ。

負け犬が悲惨なことになった理由は、30過ぎてもいまだに自分が「恋愛資本主義」という「プログラム」を植えつけられて踊らされているだけで、実は精神の自由など持っていないことにまだ気がつかない…あるいは、すでに負けているのに決して敗北を認めようとせずに恋愛市場にしがみつき続けようとする、その自己洞察能力の欠如ぶりにある。

評論家の荷宮和子は著書『なぜフェミニズムは没落したのか』で、「八〇年代」の「強い」女性像…自分で稼いだ金を好きに使い、自由に恋愛してセックスする、という「フェミニズムっぽい気分」の女の栄光を、もう一度取り戻さなければならない！と主張する。

八十年代とは、日本に生まれた女が、こんなふうに感じることのできた、史上初めての時代だったのである。
「お金さえあれば女でも生きていける」
（中略）
「自分探し」のためにではなく、何よりもまず、「お金」こそが目的だったのだ。
（荷宮和子『なぜフェミニズムは没落したのか』中央公論新社）

しかし、八〇年代に導入された「フェミニズムっぽい気分」とは、つまり、女に自立を促して働かせ、ガンガンと恋愛のために消費させて搾り取るという恋愛資本主義に刷り込まれた「甘い夢」に過ぎなかったのだ。**要は、八〇年代的な気分とは、『東京ラブストーリー』の「カンチ、セックスしよう」というホナミの言葉そのものだったんだよ。**

あんたら、メディアに洗脳されてただけですから！　残念ッ！

荷宮和子が負け犬女なのかどうかは知らないし興味もないが、まさに、この「好き勝手にセックスさせろ、恋愛させろ、金稼がせてモノを買わせろ」という**欲望ダダモレの女**こそが、**負け犬の正体**であり、つまり、**永遠の「八〇年代気分」女**なのだ。

まだフェミニズムを貫いているというのなら、筋が通っている。知性も磨かれる。社会の改革という大きな目的もある。だからそれはそれでひとつの侍だろう。だが、「フェミニズムっぽいもの」（女は強いという気分だけを持ち、自分の権利だけを主張する）と、「恋愛資本主義」（無限の消

費、無限の快楽追求）が合体したら、どうなるのか？
男を顔と金とセックス技術の上手さだけで判断し、ペットのように飼いならそうとする、おそるべき負け犬軍団が誕生してしまうわけだ。そのような負け犬は、最後にはホストに通うしかなくなる。「断固許せん、オニババ論」を読売オンラインで掲載し、『G＋』でアンチオニババ論番組まで作った鈴木美潮記者はその後、『スーパーテレビ』のホスト特集の放送にかぶりついた！」という「ホストクラブ考」を掲載した。

一番よかったのは、クラブ「愛」本店ナンバーワンの城咲仁さんが（コラム参照）、関東近県の若い女性がバイト代をためて数か月に一回やってくるのをもてなす場面。彼女は、有閑マダムや風俗で働くお姉さんたちのようにお金をもっておらず、いわゆる「太い客」ではないわけです。もちろんドンペリもブランデーもいれられない。そして、仁さんはナンバーワンだから、そのテーブルの滞在時間は本当に短い。
でも、その中で、彼女がアイスクリームが好きときいて、店のものにアイスを買いに行かせ、サプライズで彼女にアイスをプレゼントするわけです。そして、終電で帰る彼女を店の外まで送ってあげる。もちろん、それが仕事だから当然、といえば当然なのですが、なんとなく、モザイクがかかっていながらもうれしそうな彼女の表情が見えた気がしました。
（Ｙｏｍｉｕｒｉ Ｏｎ－Ｌｉｎｅ『鈴木美潮のｄｏｎｎａどんな』二〇〇四年十二月十日）

あーあー。だから、それが**ホストの仕事**なんだって。
このコラムを読んだり、番組を観て本気にした大勢の負け犬が「ホストっていい人じゃない！」と勘違いして突撃することは、想像に難くない。20代にDQN男に肉体と時間と金の全てを搾取された（自分では男にモテるいい女だったと思い込んでいる）負け犬が、30代に突入して、**今度は若いイケメンホストに搾取されまくる**。
救われないッ！　実に、救いのない世界ぢゃあないか……。
負け犬が「このままじゃオニババになるぞ！」と先輩に説教されて逆ギレし、大暴れしたあげく、結局行き先はホストクラブ。もっと稼いでいる女は、ダイレクトに若いイケメンを囲う。この流れが、今後のひとつのトレンドになるだろう。一番の稼ぎ時になけなしの金をホストに貢ぎ続けた後、いったい、どうするつもりなのだろうか？
はやくオタク界にいらっしゃーい、と呼びかけてあげたい心境になる。しかし…40歳でオニババ化することを運命づけられたこれらの負け犬は、オタク世界の住人としてリロードできるのだろうか？　40歳に到達していなくても、すでに「オニババ論」にキレてオニババ化している負け犬軍団は多数いる。特に、インターネットがいま、恐ろしい！
「顔と金で男を選んで何が悪い！」
と居直った**ばけもの**どもが、ネットでブログを続々と開設して、己の醜い虚栄に満ちた欲望を垂れ流しまくっている。おお、おお、おそろしや、負け犬ブログの世界。それは、俺のような心優しいオタクが読んだら、ショックで卒倒してしまいそうな、奇怪でおぞましい負け犬どもの**妖**

怪百鬼夜行ッ！

ネットには、そういう負け犬だけを集めている独身女性専用ブログ「**化け犬・jp**」というものがある。「化け犬」には、大勢の負け犬が集まっていて、「もっと金が欲しい」「イケメンで金持ちの男が欲しい」「海外旅行したい」「株で稼ぎたい」などなど、負け犬の欲望がバリバリ全開になっている。なんだか一見負け犬のパラダイスのようにみえるが、**実はこのブログ、ネット金融企業のファイナンスオールが運営しているのだ**。そう、負け犬にもっともっと金を使わせるために、「化け犬」を立ち上げて負け犬を集め、煽っているのだ。ＩＴｍｅｄｉａの記事によると……、

近い将来、ユーザーと共同で編集したBlogも掲載する予定。「年金節約のため海外に住もう」「**男性人口が多い国へ見合い旅行に行こう**」「**競走馬を買ってみよう**」「**精子バンクを使ってみよう**」「相続した家を建て替えて負け犬仲間で一緒に住もう」などといったテーマで、負け犬女性の人生設計に役立つBlogの掲載を考えている。

金融関連の有料セミナーや、男性との出会いを目的にしたパーティの開催も計画する。

（ＩＴｍｅｄｉａニュース二〇〇四年十一月二十六日、太字は筆者）

負け犬を一生涯負け犬のまま引っ張り続け、文字通りゆりかごから墓場まで金を使わせ続けようという……。しかも、運営者側から、こんな愚痴まで言われる始末！

スタートから一カ月弱がたち、集まったユーザーは約320人。20-30代の独身女性がほとんどだ。ただし、年収は400万円以下が6割と最も多く、**当初想定していたよりも高収入層が少なかった。**

（ITmediaニュース二〇〇四年十一月二十六日、太字は筆者）

本書の読者ならすでにお分かりだろうが、金を稼いでいる負け犬などごく一部で、ほとんどは稼ぎがないのだ。**もはや搾取しようにも搾取する金がない**わけだ。

負け犬、ついに往生しがたし！　プギャーッ！

うーん、こんなどうしようもない負け犬がオタク界に参入するには、どうすればいいんだろう……？　まあ、そうですなあ。姉キャラ、母キャラで生き残れ、と言っておきましょうか……。

キャリアウーマン系は「短髪・ツリ目・気が強い」という「ツンデレ系」三種の神器が揃ってる人が多いと思う（多分）ので、「ツンデレ姉」なんていいんじゃないでしょうか。松坂大輔君※を捕まえた日テレのアナウンサーみたいな感じで。あの人は**まだ若かった**けど……。

しかし、姉キャラが通用するのは、せいぜい30代前半まで。40歳近くになっちゃったら、もう、居直って「母キャラ」しかないでしょう。マザコンのオタクを探しましょう。なにしろ、母萌えのオタクは、確実に増えているッ！　ただし姉キャラにしても母キャラにしても、母性愛と優しさがなければ萌えられないわけで、単に年上というだけでは「**萌えないゴミ**」と断じられるのが

※松坂大輔　西武ライオンズのピッチャー。柴田倫世アナと結婚。

オタク界の厳しさ。

それに、恋愛資本主義が「**セックス回数**」だの「**恋愛経験**」だのに価値を置くのに対して、オタクは「**純潔**」「**純愛**」「**永遠の愛**」に価値を置くので、やっぱ、合わないだろうなあ……。

とりあえず、人間には、二次元と三次元、オタク世界と恋愛資本主義、好きなほうを自分の意思で選択する自由がある。この本は、「この世には三次元の恋愛資本主義社会だけでなく、二次元のオタク世界というものも存在する」という真実を人々に訴えて目を覚まさせようとしているものであって、すべての人間に脱三次元を迫っているわけではない。負け犬が一生三次元にこだわり続けるのも、それはそれで自由。一生ホスト通い、良いでしょう。イケメンはいいですよねイケメンはね。

だが、アーアーきこえなーい、と恋愛資本主義からの脱洗脳を拒み続けて一生不自由なまま踊らされ続けるのは、実に哀れ、としか言いようがないのである。

負け犬の皆さん、目を覚ましてくださーい！

2――オタクの未来予想図

オタクは社会に認知され、「モテ趣味」になる

さて、長々と**妄想**…もとい自論を語ってきたが、そろそろまとめに入りたいと思う。

まず、二〇〇五年以後の10年の間に、恋愛資本主義市場（あかほりシステム）は廃れ、オタク市場（**ほんだシステム**）への**民族大移動**が起こる。これは定説です。宇宙の定説なのです！　10年の間に、オタクの同志たちが日本の各企業・政府機関等に続々と潜り込み、各部署を切り回せる実権を握ることになります。さすれば、旧あかほりシステムが内側からオタク軍団に侵食され、乗っ取られることになるはず。

今後、秋葉原が仮に萌えオタクを追放したとしたら、**10年後には秋葉原はＤＱＮがうろつくゴーストタウンに。**かわりに、渋谷がオタクの聖地になっていることは間違いなし。そう、オタクのほうがモテ趣味になるのだ。無論、妄想力を解放して二次元の世界に飛翔してしまえば、三次元でモテようがどう思われようが関係ないのだが、少なくとも三次元の非オタ系から意味もなく攻撃されるようなことはなくなるだろう。

いずれにしても、歴史的なオタク革命前夜の今が一番弾圧の厳しい時代。しかし、時代の歯車

は、決して逆回転することはない。必ずやオタクが「錦の御旗」となり、**「萌えれば官軍」**と誰もがオタク化する時代が来る。さすれば、我々はオタクの先達。オタク元老院入りも夢ではない。

みんな、しばらくの間の辛抱だ。韓信[※]のように、**DQNの股を潜ってでも、生き延びろ、**生き延びるんだ！

※韓信
漢と楚が天下を争っていた時代の武将。若い頃、DQNに脅されて「股をくぐれ」と言われ、黙ってくぐって命拾いしたため、「股夫」と笑われていた。楚に仕えるが才能を認められなかったために漢に走り、将軍に抜擢される。途中から別働隊となって中国北部を転戦し、「背水の陣」などの計略を駆使して中国の三分の一を統一した。しかし論客が独立を勧めたにも関わらず漢に仕え続けたため、最期は謀反人として処刑された。

恋愛関係から萌え関係へ

恋愛資本主義では、愛情がモノや金に換算される「商品」として扱われていた。そのために、家族は崩壊し、愛は消えうせ、人々の心は『マッドマックス・サンダードーム』[※]のDQN連中のように荒み、優しい男たちは女を捨てて秋葉原へ旅立ち、女はDQNに捕まって辛酸を舐めさせられるという悲惨な時代が到来してしまった。

だが、オタク革命が成立すれば、モノや金ではなく、その人自身に萌えられるかどうかが重要になる。本来の意味での恋愛が復活するのだ。

例えば、恋愛資本主義では、女が持っている男への好感度のパラメーターがこのような感じで増減する。

※『マッドマックス・サンダードーム』
一九八五年。オーストラリア映画。ジョージ・ミラー、ジョージ・オーグルヴィー監督。メル・ギブソン主演。荒廃した未来世界でのバイオレンスなアクション活劇で『北斗の拳』の世界観にも影響を与えた。

例1　男の顔で好感度アップ

「見る」

←

「かお」
←
「イケメンだった！」
←
「好感度が　50あがった！」

例2　男が持ってるお金で好感度アップ

「調べる」
←
「財布」
←
「1000まんえん　入っていた！」
←
「好感度が　40あがった！」

例3　有名人の男は好感度アップ

「話す」
←

「しごとの　わだい」
←
「**お笑いタレント**だった！」
←
「好感度が　70あがった！」

例4　オタク男は好感度ダウン

「話す」
←
「しごとの　わだい」
←
「『**妹ゲーム大全**』**というオタクムック**を　へんしゅうしている　といいだした！」
←
「好感度が　70さがった！」
←
「携帯から　彼の番号を消しますか？」
←
「はい」

しかし、オタク社会が到来すれば、女の態度が一変する！　例えば……、

例1　妹萌えは好感度アップ

「話す」
←
「**僕の妹になってください**　とお願いされた！」
←
「好感度が　30あがった！」

例2　オタク知識で好感度アップ

「話す」
←
「しゅみの　わだい」
←
「『R．O．D』※の**スカパー！版最終回**と**DVD版最終回**の**相違点**について教えてくれた！」
←
「好感度が　30あがった！」

※『R．O．D』
『R．O．D -THE TV-』。紙使い三姉妹が神田神保町で本にまつわる事件に立ち向かう。この作品に限らず、テレビ放映時には様々な理由から省略・簡易化されたシーンが、DVDに収録される際に修正されることが多い。

例３　オタクスキルで好感度アップ

「話す」

←　「しごとの　わだい」

←　「**プ◎キュアの同人誌**を描いてますＹＯ！　といわれた！」

←　「好感度が　30あがった！」

例４　コスプレで好感度アップ

「着る」

←　「**メイド服**」

←　「萌える　といわれた！」

←　「好感度が　40あがった！」

というわけで、

・恋愛資本主義的な「勝敗」を競う必要がなくなり、本当に一緒にいて心が安らぐ相手を選べる
・過剰な消費活動が不要になる（コスチュームぐらい？）
・金はそこそこあれば良く、金の有無で好感度が上下しなくなる
・共通のオタ趣味について会話することで好感度が上がるので、内面が重視される
・共通のオタ趣味を持つので、良好な関係を続けやすい

などなど、オタク世界の到来によって得られるメリットは実に多い。

恋愛資本主義はしょせん、**人間に優劣をつけるための「競争」としての恋愛**を人に強いるシステムなので、男も女も、周囲の評価を上げるために好きでもない・気が合うわけでもない相手を選んでしまう。その結果、どんどん不幸になる。次はもっとランクの高い相手を…と言い出して泥沼にはまる。気がつけば30歳、失点を取り返すためにますます高望み……。こんなふうにシステムに踊らされた空虚な人生は、もう送る必要がなくなる。

妄想勝手のオタク世界なら、自分の心を、自分の意思を取り戻せるのだ。オタクになれば、恋愛もまた、自分の意思で自分のためだけに行うことができる。もちろん恋愛する気がなければ、しなくても構わない。他人の目を気にして、好きでもない相手を追いかける必要などなくなるのだ。

「自立した個人同士の恋愛」の失敗

八〇年代以後、「自立した個人同士の恋愛」という一見平等主義的な恋愛像が蔓延した。しかし『だめんず・うぉ〜か〜』を読んでも分かるように、そんなものは幻想なのだ。いや自立するのは自由だが、完全に自立してしまえばどうなるか?

本当に自立していれば、そもそもパートナーなど必要ない。結局、個人の完全な自立などは、幻想だった。その結果、「自立しているつもり」の中途半端な人間ばかりが増え続けた。30過ぎて子供も産んでいるのに、子供を自分の親に預けて、自分は男漁りの恋愛三昧。あるいは、旦那にDVされる腹いせに、自分が産んだ子供を虐待。そんな荒んだ人間ばかりになってしまう。

いや、実際、そうなりつつある。

みんな、金八先生※の説教を聴き直してほしい。

「人が人を支えると書いて人間!」

恋愛資本主義が「個人の自立」を説いたのは、すべての人間を王侯貴族のごとき消費者に仕立て上げるためだったに過ぎない。だがその結果、人間関係、ことに家族関係が成り立たくなってきた。

そもそも、人間関係がない、一人きりの世界に生きるということは、無限の孤独を意味する。

※金八先生
TBSが誇る人気学園ドラマ『3年B組金八先生』。武田鉄矢演じる坂本金八先生と中学生たちの交流を描く。

人間は一人では生きていけない。絶えず、他者による自我の確認を行わなければならない。だから、家族やパートナーが必要なのだ。しかし、自立した個人同士が立ち会うと、結局は相手を赦さずにいちいちケチをつけてダメ出しするというだめんず・うぉ～か～関係になってしまう。その結果、どんどん孤独になる……。

そういえば、負け犬はよく犬猫を飼う。一見孤独でクールな生活をしている『イノセンス』のバトーも、家に戻ると犬マニアだ。アンチ・クライスト的な天衣無縫キャラで売っていたアンディ・ウォーホール※の死後、彼の家にキリストを拝むための敬虔なクリスチャン部屋が隠されていたことが分かったという。**「自立した個人」を演じれば演じるほど、人間は孤独になっていく**のだ。自立した大人の女を演じている負け犬も同じこと。

そんな寒い世界の中で、「恋愛」や「家族」を追い求める萌え衝動こそは、恋愛資本主義によって破壊されてしまった人間の関係性を回復しようとする本能的な欲求なのだ。

「萌え～」ですべてが赦される、そんなユルい関係、素敵やん？

「男は子供っぽい、幼稚だ」とか目を吊り上げる負け犬女&予備軍は、そろそろ「自立しなければいけない症候群」から脱却するべきだYO！　**あなたが自立して手に入れたものは、恋愛資本主義の立派な消費者という立場だけ**だったんだYO！

「萌え～」で赦しあう関係って、素敵やん？

ジョン・レノンも『Woman』で、「男は誰も心に子供を飼っている」って言ってたやん？

それを「幼稚だ」と女が断罪した瞬間から、この悲劇が始まったのだ。もしかしたら、ジョン

※アンディ・ウォーホール　アメリカの現代美術家。マリリン・モンローのシルクスクリーンポートレートで有名。ルー・リードが所属したヴェルベット・アンダーグラウンドのプロデュースやカルト映画製作なども手がけた。

・レノンが凶弾に倒れた、一九八〇年十二月八日こそが、この三次元の世界から愛が消えた瞬間だったのかもしれない。

そして、愛なき現代において、萌えは、二次元で生み出され、いずれは三次元世界をもリロードして新たな男女関係の基礎になるべき偉大な発明なのである。

オタクは自信を持って世界を変革せよ！

そういうわけなので、オタクはもう、迷いを捨てて、ひたすら萌えて萌えて萌えまくればいいのだ。**オタになれ。もっともっとオタになれ！**

しかしオタクと一口に言っても、事態をややこしくしているのが、**旧世代オタク**（俺も元々こっちだけど、つまり、三次元と二次元の間であれこれ葛藤する系列）と、**新世代オタク**（萌え直進派）の分裂現象だ。

萌えばんざい！と言われだしたのはここ数年のこと。それまでは、長年にわたって、オタク自身が「三次元＞＞＞＞＞＞二次元」だと思い込んでコンプレックスを抱えてきた。葛藤の始まりともいえるのが、第2章で紹介したアニメ『超時空要塞マクロス』における**萌えキャラ・ミンメイと、負け犬・早瀬未沙**※**の扱い**だ。

このアニメこそがそれまでSF主導だったオタク業界に「キャラ萌え」を持ち込み、文字通りのデカルチャーとなったわけだが、しかし、実は『マクロス』の主人公・輝は、アイドル歌手にしてメインヒロインのミンメイとは結ばれず、職場の上司の早瀬未沙とくっついてしまう。アイ

※早瀬未沙
設定では19歳だが、その立ち振る舞いからして、ブライト・ノア（19歳）やミライ・ヤシマ（18歳）らと同様、説得力はない。

ドルはしょせんアイドル。俺とは違う世界の存在なのさ…という作り手のオタクの嘆きが、聞こえてきそうだった。

ミンメイに比べるとかなり萌え度が落ちる未沙は、小まめに輝の部屋を掃除するなどして、地味にポイントを稼ぎ続けた。**やっぱり掃除してくれるとねえ**。

しかし、『マクロス』が「キャラ萌え時代の始まり」を本当に告げるのであれば、言うまでもないが輝は萌えアイドル・ミンメイをゲットするべきだったのである。なのに当時のオタクの自意識は、

「いやアイドルなんて二次元の存在だし、しょぼい負け犬でも、部屋を掃除してくれる三次元女のほうが」

というふうに、逡巡して折れてしまったのであった。

魁ゆえの限界。

シャア・アズナブルがニュータイプとしては中途半端なまま終わったのと同じパターンだろうか。以後、旧世代オタク（庵野秀明や江川達也※など）は、偉大かつ巨大な萌え作品世界を自らの才能で築き上げておきながら、その自作の萌え世界を現実の下に位置づけてしまい、最後の最後には二次元にしがみつくファンを断罪して終わってしまう、という裏切りとも言うべき行為を繰り返し続けた。

特に、オタク界に甚大なダメージを与えたのが、『新世紀エヴァンゲリオン』の完結編（テレビ版の最終2話と、2度にわたる映画版ね）だった。庵野秀明監督は、『ガンダム』を超える素晴ら

※江川達也
漫画家。エロと説教が得意。代表的な作品に『BE FREE!』『東京大学物語』など。

しい萌えワールドである『エヴァンゲリオン』を築き上げておきながら、

「オタクどもよ、三次元の現実に帰れ！」

と言い捨てて、作品世界の全てを破壊してしまったのだ。

そして、そのショックでバタバタと倒れていったファンを尻目に、自らはさっさと実写映画監督としてデビューし、オタクから**「サブカル」**へのランクアップをはかったのだった。

オタクが社会に認知されかけた瞬間に、当の庵野秀明自身が、

「オタク、気持ち悪い！」

とやらかして、**自分だけ逃げた**わけである。

このエヴァ騒動によって一時、オタクは「萌え」と「サブカル」に大分裂した。「萌え」系オタクは、エヴァでいえば綾波レイや惣流・アスカ・ラングレーなどの萌えキャラにハァハァしていた純粋オタクの系統であり、「サブカル」系は、オタクよりも恋愛資本主義の側に擦り寄ってオサレ系を目指した連中だ。だが、あれから数年、どうなっただろうか？

そう、**サブカルは市場として成立せず、萌え市場だけが拡大した**のだ。サブカルは短期間で事実上滅び、講談社のノベル雑誌『ファウスト』※のような「半萌え・半サブカル」形態によってかろうじて命脈を保っているばかりとなった。

これは当然の帰結といえる。

オタク文化そのものが「二次元＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞三次元」という前提によって威力を持てる妄想の文化である以上、サブカルが「三次元＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞二次元」とやらかし

※『ファウスト』講談社の文芸雑誌。同人ゲームで名を成した奈須きのこを囲い込むなど、オタク界へのアピールは凄いが、誌面はオサレであり全然オタクスピリッツを感じられない。

キムタク
ヨン様
月9
あやや
娘。
大槻ケンヂ
グラビアアイドル
文化人
一般人
ナゴム
ギャル
百匹
サブカル界

■恋愛資本主義市場におけるサブカルの位置

たら、オタクの大勢がサブカルから離脱するのは時間の問題だった。残るのは、壁の「あっち側」…恋愛資本主義に未練のある一部のオタクだけだったのだ。しかも、恋愛資本主義においては、サブカルなどは、上の図のように**下層のマイナーな市場**にすぎない。

いわば、去年の大河ドラマ『新選組！』※において、新選組を離脱した伊東甲子太郎が薩長中心の倒幕派閥においては余所者待遇を受けたのと同じである。

「はぁ？　何してるの、こんなところで？　あんたら、オタクなんでしょ？」

という感じだ。

サブカル化したオタクは、恋愛資本主義の底辺に追いやられる。生き延びるために恋愛資本主義に媚びた作品を作っても、オタクにはそっぽを向かれるし、恋愛資本主義市場のマジョリティにもオタク呼ばわりされて放置される。故に、サブカル市場は、成立するほどの基盤を持つことができなかったのだ。

これに対して、萌え系のオタクは**独立した市場**を持っている。

萌えることに逡巡のないオタク新世代は、「**仮想現実のほうが現実よりも価値がある**」ことに気

※『新選組！』二〇〇四年に放映されたNHKの大河ドラマ。脚本は三谷幸喜。主人公の近藤勇は香取慎吾が演じた。隊士たちをみると、土方歳三が山本耕史、沖田総司が藤原竜也、斎藤一がオダギリジョー、山南敬助が堺雅人とイケメン勢ぞろい。

づいていた。エヴァショックを払拭するかのような「萌えばんざい！」「にじげんでもいいぢゃないか　をたくだもの」という高らかな宣言となったのが、マルチを生み出した『ＴｏＨｅａｒｔ』だったのであり、さらには萌えパワーで三次元をも変革できるはずだ！と恥ずかしげもなく訴えた『Ｋａｎｏｎ』だったのだ。

オタク漫画『妄想戦士ヤマモト』※は、「二次元＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞三次元」という**「妄想至上主義」**を本気で叫び続けるオタク・山本一番星の生き様を描き切ってしまった名作だが、彼は多くの名言を残している。なにしろテーマソングが、

ミカリンがかけていた～おおきめ眼鏡～
オレのためだと思っているが～
生身ダメでも～イイじゃないか～
フィギュア・ドール買えばいい～
引きこもるオタクの胸には～
萌え萌えのかけらが欲しいのさ～
ラララララ～ラララララ～
ラララ～おおきめ～眼鏡～

（小野寺浩二『妄想戦士ヤマモト』第一巻 少年画報社）

※『妄想戦士ヤマモト』小野寺浩二著。少年画報社。アサッテの世界に逝ってしまったオタク野郎ヤマモトの戦い（？）を描く。

だもん。
あまりにも早過ぎて（第一巻は二〇〇一年発売）、かつ、掲載雑誌が少年画報社の『月刊アワーズライト』というマイナーな雑誌だったために半分忘れられてしまった『妄想戦士ヤマモト』だが、この作品こそが、「萌え至上主義」というまったく新しいオタク、ニュータイプの誕生を堂々と宣言した歴史的作品であったのだ。

オタクはもう迷うな、萌えろ！
作り手のオタクももう迷うな、萌えろ！
妄想こそが三次元を変革する唯一の武器なのだ！
もっと妄想を！
妄想によって、世界に愛を取り戻すのだ！

妄想をつきぬけて歓喜に至れ

——ベートーベン（編注・言ってません）

あとがき

なぜ、ここまで俺が恋愛にこだわるようになったのか。
それは、元を辿れば「家族」の問題にはじまっている。

俺の母親は、男兄弟のいない家の長女に生まれたばかりに、祖父母に「家」を守るために強要されて、恋人と無理やり別れさせられ、好きでもなんでもないどこの馬の骨とも知れない男と見合い結婚させられた。その男が、マスオさんのような入り婿になることを承知したからだ。
しかし、この男が、また、どうしようもない人間の屑だった。
夜な夜な母を殴り、息子…つまり俺を虐め、家族を滅茶苦茶にしたあげく、母と幼い子供二人…俺と妹を捨てて、さっさと家を出て行ってしまった。この男は、それきり、母に一文の養育費も払わず、さっさと別の女と結婚した。
この俺の父親は、実は、自分自身どこの誰の子とも分からない私生児だったのだ。父親に捨てられた男が、大人になって自分の息子を虐待し、そして捨てたのだ。自分が親から与えられたトラウマを、自分の子供に植えつけたのだ。
愛のない結婚、愛のないセックスにより、憎しみが生まれる。そして、憎しみが憎しみを呼び、

永遠に憎しみの連鎖が続く。
母は、小さい子供二人と、年老いた祖父母を一人で食わせるために、水商売に手を出して文字通り死ぬまで働き続けた。その結果、40歳前に癌になって倒れ、数年にわたってさんざん苦しんだあげく、骨と皮だけにやつれはてて死んだ。
母は死期が近づくと、
「どうして、好きでもないあんな男と見合い結婚してしまったのか。自分の人生は失敗だった。どうして好きな男と恋愛結婚しなかったのか」
と、病院のベッドの上でずっと歯軋りをしながら泣き喚いていたよ。
なんだか「いいお母さんじゃないか」と言われそうだが、もちろん、そうではない。そもそも「好きでもない男と…」なんて、つまり、「お前は要らない子供だった」と言ってるのと同じだ。実際、好きでもない糞みたいなDQN男に孕まされて産まされた俺などを、母がまともに愛するわけがなかった。俺は映画『サイコ』のノーマン・ベイツそっくりな、または、同じことだがエド・ゲインみたいな育てられ方をした。
母は男を憎みきっていた。そのため、俺は男らしさを全て否定され、女の子として育てられた。俺が女の子と親しくすると、母は気が狂ったようにヒステリーを起こして、その女の子が二度と俺に近寄らないように様々な邪魔をした。母は、俺が貰ってきたラブレターを取り上げて、その子の前で引き裂いて捨てた。俺が連れてきたガールフレンドをカルト宗教に勧誘して逃亡させた。
そして、自分の部屋の奥にあったトイレと、トイレへと続く廊下の部分を部屋のように改装し

て、棺おけのようなベッドの中に俺を押し込み、24時間監視し続けた。
俺にとっては妹と二人でいられるときだけが心の安らぐ時間だったのに、それも取り上げられたのだ。
俺の「部屋」はベッドの両脇が壁になっていて、母の部屋とアコーディオンカーテンで仕切られ、部屋から出るためには母の部屋を通らなければならず、うっかり顔を合わせるとマッサージをさせられたり、さんざん母の玩具にされる日々が続いた。何年も続いた。
ここに書けないようなこともあった。
たまたま、近所に灘中学、灘高校があり、俺は成績が良かったので受験しようとしたが、母に「金がない」と反対されて公立のＤＱＮ学校に入れられた。
金なら、腐るほどあったのだ。母は、若い女をキャバレーに抱え込み、大金を稼いだ。そしてその金をすべて、自分の洋服と髪型と靴と下着と香水とカツラに注ぎ込み、俺には犬の餌みたいな食事しか与えなかった。
俺の朝飯は、エースコックのワンタンメンだった。俺は、インスタント食品以外はほとんど何も食べられない人間に育った。
16歳の頃、俺はようやく知恵がついてきて、自分が世間一般でいうところのまともな人間として育てられていないことをやっと理解した。学校に行っても、まともな学生のふりができず、虐められるばかりだった。耐えられなくなって、死のうとした。だが母は俺を連れ戻して棺おけ部屋に俺を閉じ込めて監禁し、

「お前には人間の心がない！」
と罵った。俺は引きこもった。死ぬ気力もなくなった。
棺おけみたいな部屋に引きこもって、じっと、テレビを観ていた。第一次アニメブームの時期だったので、テレビでは、いろいろなアニメが放映されていた。アニメの中で、いろんな女の子たちが、逆境に苦しめられ、不幸に耐えていた。
『銀河漂流バイファム』のカチュアは、地球人と異星人のハーフだったために、どちらからも差別され、自分の行き場所を求めて宇宙をさすらっていた。結局、地球に戻る勇気がなく、仲間たちから逃げるように宇宙の彼方へと去っていった。
『とんがり帽子のメモル』のマリエルは、病弱でサナトリウムに引きこもり、小人さんだけが友達だった。やっと男の子と恋愛できそうになったとたんに、フラれてしまい、結局は小人さんだけが残った。最終回で、私は小人さんさえいてくれればいい、とマリエルは笑った。
『機動戦士ガンダムZZ』のプルは、身寄りのないクローン人間だった。主人公と出会い「お兄ちゃん！」となつくが、主人公は実の妹にしか興味がなかった。プルは主人公を守ろうとして、自分のクローンと戦って死んだ。だが翌週にはもう忘れ去られてしまった。
俺は思った。恋愛によって、彼女たちは救われるはずだと。愛。愛さえあれば、家族がいなくても、母親が鬼みたいな狂女でも、俺は人間らしく生きていけるはずなのに。なぜ、愛がないのか。アニメの世界にもない。現実にもない。どこにもない。愛だけがない。怒り、憎しみ、苦しみ、呪い、妬み、嫉み、すべてがあるのに、愛だけがなかった。優しさだけがなかった。

俺がアニメキャラと俺だけが暮らす二次元世界を妄想しはじめたのは、誰も愛のある世界を俺に見せてくれなかったからだ。俺は、棺おけ部屋の中でぼんやりと、萌えキャラとの愛のある生活を妄想した。その妄想だけが、俺を死なずに生かしてくれた。

幸いにも母が死んだため、俺は母の生命保険金を頼りに大検塾に通い、東京の大学へ進んだ。呪われた家から逃げ出して、やっと人間らしく生きられる…はずだった。

だが、だめだった。

現実世界の女は、顔の良い男、金を持っている男、車を持っている男、そんな男だけを漁っていた。俺が上京した当時は、ちょうど八〇年代後半から九〇年代初頭にかけてのバブル期にあたっていて、タイミング的にも最悪だったのだろう。

その後、いろいろなことがあったが、結局、俺は三次元の女とは恋愛できなかった。女は、誰も彼も一様に、しゃっつらだけ綺麗にしていても、心が冷たかった。平然と人を傷つけ、踏みにじる言葉ばかりを、俺は聞かされ続けた。俺は、絶対に、愛のある家庭を築かなければならなかった。さもなくば、独身を通すしかなかった。

愛のない家族。愛のない家庭。それが、どれだけ子供に悲惨で辛い思いを与えるのか、俺は知っていた。

だから、愛のない女とは、関わりになろうとしなかった。そうやって一人ずつ愛のない女を消していくと、結局、三次元には、一人も残らなかった。

大学時代、遊べるだけの金が残っていて、ゴテゴテと着飾ってグラムロックのバンドなんかをやってフラフラしていた頃には、ちょろちょろと近寄ってきたり、酷いのになるとストーカーになる女もいたが、大学院の面接で教授と大喧嘩して追い出され、ストレス食いで太り、地震で家が潰れ、仕事もなくし、一文無しになったとたん、俺の周りにいた女は蜘蛛の子を散らすように一人残らず逃げ去った。

地震のショックで俺はもう一生立ち直れない、っていうかもう死んだほうがいいだろ、と思ったが、結局、『同級生2』という恋愛ゲームをプレイすることと、俺の脳内妄想世界を『ＳＦＦ』というタイトルの小説に書きとめることで、俺はまた生き延びた。またしても、脳内の萌えキャラ妄想が、俺を無理やり生かし続けた。あたかも俺の生命が、自分自身を生かすために、次々と妄想を生み出しているかのようだった。

アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』には、まるで俺のように母親に愛されず、殺されかけたトラウマを抱えた少女、アスカが登場した。俺は今度こそ、このアニメの世界の中で、アスカが恋愛によって救われる、と信じていた。だが、監督は裏切り、アスカは何度も何度もアニメの中で殺され続けた。俺はまた、アスカを愛によって救うという妄想を構築しなければならなくなり、薄暗いアパートの部屋の隅っこにうずくまって日夜自分のＷｅｂサイトを更新し続けた。

心に癒されないトラウマを持った少年と少女は、分かり合えるのだろうか。愛し合えるのだろうか。

親に虐待された人間は、親になれるのだろうか。

親に愛されなかった人間は、自分の子供を愛することができるだろうか。他人を愛することができるだろうか。

俺が悪いのか。男が悪いのか。母が悪いのか。母を捨てた男が悪いのか。母を憎んだ俺が悪いのか。俺がいるのに、イケメンのヤクザを連れ込んでギシギシアンアンやっていた母が悪いのか。

俺は、自分と女が、愛し合えるのだろうか、やっぱり無理なのだろうか、それでも俺は本物の愛が欲しい、と渇望し続けて、Ｗｅｂサイトでアスカを主役にした小説を書いた。だが、女は誰一人、俺を理解しなかった。罵り、喚き、そして俺の名前や作品のアイデアを勝手に盗んだ。

俺と同じ名前のヒロインが少女漫画雑誌に登場したのを見たときに、もう、何を言っても、女には伝わらないのだ、と俺は思い知らされた。

30歳近くになった頃…三次元の世界に愛がなく、女が愛を忘れ、俺の母のようなオニババばかりになってしまっているのだとしたら、俺は子供を持つべきではない、と漠然と考えはじめていた。

二次元の世界さえあれば、俺はトラヴィスや都井睦雄のようにならずに、ノーマン・ベイツのようにならずに、他人に迷惑をかけずに生きていける。

俺の消えない怒りは、二次元の萌えキャラが癒してくれる。

そう思って静かに生きてきたのに、突然、女たちが、

「自分が男に相手にされないのは、男が私たち女にビビって逃げてオタクになったからだ！　お

前らは、今すぐオタクをやめろ！」
と、俺たちを攻撃しはじめたのだ。
こんな馬鹿なことがあるだろうか。
俺を拒絶したのは、金とセックスと食い物と男のしゃっつらにしか興味がない女たちじゃないか。
俺は、俺は、暴力を振るわなかった。俺は耐えた。目の前の馬鹿女を叩きのめしたい衝動に耐えた。俺はいつ人殺しになってもおかしくない人間だ。俺にはどうしようもない鬼畜の魂が植えつけられている。俺が静かに他人を傷つけずに生きていくには、引きこもってじっと妄想しているしかなかったのだ。
ところが、女は、それすら赦さないという。
俺だけじゃない。俺と同じ魂を持つ、心優しく生きたがっている、愛を求めて妄想の世界に生きているオタク男たち全員が、軽蔑と嘲笑と搾取の対象にされているのだ。
だから俺は勝手に、心が優しすぎてこんな目にあってもなおも何も言わずに黙って耐えているオタクのみんなに成り代わって、この三次元の世界、恋愛資本主義が支配する世界に「ＮＯ」を突きつけずにはおられなくなったのだ。
愛されずに人殺しになる人間がいる。
その一方で、愛されなくても、オタクになって、おとなしく生きる人間がいる。
なぜ、誰にも迷惑をかけずに生きる道を選んだ俺たちが、なおも差別されなければならない。

非難されるべきは、愛のない恋愛、愛のないセックス、愛のない結婚、愛のない子作りをしている連中なのではないのか。

朝日新聞の松尾慈子記者が、「ａｓａｈｉ・ｃｏｍ」で連載中のコラム『松尾慈子の漫画偏愛主義』で、妹萌え漫画『恋風』のレビューを書いていた。

その内容は、もちろん妹萌えのオタク男を「現実の女が強く、経験豊富なために、男性が純愛幻想を抱けなくなっているのかもしれない」と馬鹿にするものだ。もう何百回も繰り返された紋切り型の「女が怖いから男が逃げた」論なのだが、これは女がいつも言うことなので、もうどうでもいい。

松尾慈子はしたり顔でこのように書いている。

妹萌え男性のコメントとして「僕らは恋人という他人よりも家族がほしいのかもしれない」とあるのをどこかで読んだが。いま、自分の家族が完璧な円満家族でないのと同様に、「自分をどこまでも受け入れて、守ってくれる完璧な家族」なんてどこにもないはず。妹萌えはどこか「完璧な家族幻想」と似ているような気がする。通じているのは「ありのままの自分を受け入れてくれる幻想」かな。

（ａｓａｈｉ・ｃｏｍ『松尾慈子の漫画偏愛主義』二〇〇四年十月二十二日）

実はこの「妹萌え男性」とは俺のことで、この発言は読売新聞二〇〇四年九月二十四日夕刊の

記事に掲載されたものなのだが、松尾慈子は俺を匿名扱いして、その上で新聞記者という立場から言いっぱなしで批判するという実に汚い真似をしているのだ。
いや、それはさておき、俺が切れたのは、

「自分をどこまでも受け入れて、守ってくれる完璧な家族」なんてどこにもない

この発言だ。
俺は、俺は、女たちから、こういう愛のかけらもない冷酷な言葉しか、聞いた事がない！
なぜ女はこんなにも冷酷になってしまったのか。
なぜ、賢しらぶって、この世界が憎しみと苦しみに満ち満ちている現実をさも当然のこととして受け入れていられるのだ。
人間が、お互いを赦しあえる家族を求めて、何が悪い。
人間が、愛に満ちた家庭を夢みて、何が悪いのだ！
俺は、自分の子供を顧みずに男を漁り歩くような女は赦せない。
アナログ女は、八〇年代バブル以来、母親になることを放棄したのだ。女は、「永遠に女でありつづけようと欲した」のだ。
それこそ、幻想でしかありえない話だ。
時間とともに年老いていくアナログ女が、永遠に女として男に愛され続けるなど、ありえるわ

けがない！
幼稚で愚かなのは、お前たち女のほうだ。
神が死んだこの現代で、唯一の価値を持つもの。それは愛だ。愛以外にはない。
金じゃない。
顔でもない。
ファッションでもない。
地位や名誉でもない。
愛はどこに消えたのか？
もし二次元にしか愛がないのであれば、俺は、一生、二次元だけで暮らし続けても構わない。

20世紀初頭の経済史家ヴェルナー・ゾンバルトは、『恋愛と贅沢と資本主義』という著書の中で、資本主義が発展したのは、実は女が贅沢を好んだためである、と主張した。マックス・ウェーバーは資本主義はプロテスタントの禁欲的倫理観から発生したと考えたが、ゾンバルトは、そのような男たちの勤勉さによって生み出される過剰な富は、結局は女を喜ばせるために消費されつくすのだ、と九十年以上も前に言い切っていたのだ。つまり、恋愛の大衆化と、資本主義の普及とは、実はコインの裏表である。全ては欲深な女が悪い、と……。

だが俺は、まだ、そこまで言い切る決心がついていない。今は確かに恋愛と資本主義が融合し

て、世にも醜い心を持った女たちが大量発生し、心ある男はみんなオタクになりつつある。だが、これは、一時的な現象なのだと、真の悪は女性ではなく、恋愛と資本主義を融合して愛を金儲けの道具に貶めた連中なのだと、俺はまだ信じたい。

俺たちオタクが妄想し続ければ、いつか、二次元の「萌え」が、三次元にも流れ込み、悲惨な家庭・悲惨な子供が二度と現れない、そんな世界が来るはずだ。

母に愛されず、父に捨てられたリバプールのマザコン妄想男、ジョン・レノンの『Ｗｏｍａｎ』の一節をもって、本書の締めとしたい。

Woman please let me explain
I never meant to cause you sorrow or pain
So let me tell you again and again and again
I love you now and forever

電波男

二〇〇五年三月一日　第一刷　発行
二〇〇五年四月一日　第二刷

著者 ―――――― **本田透**

発行人 ――――― **和田淳子**
編集人 ――――― **斎藤俊（書籍第2編集部）**
発行所 ――――― **株式会社　三才ブックス**
東京都中央区京橋3-14-6　斉藤ビル
TEL 03-3535-7331　FAX 03-3567-6435
振替　00130-2-58044

装幀 ―――――― **岩瀬聡**
カバー・扉イラスト―― **花沢健吾**
本文イラスト ――― **旦那壱號**

印刷・製本 ―――― **廣済堂**

ISBN　4-86199-002-5

★家族とともに

本田透

Honda Toru

妻——川名みさき
妹——本田悠
妹——涼宮茜
妹——藤堂加奈
メイド——なぎさ

1969年神戸生まれ。早稲田大学卒。出版社勤務の後、フリーライターとなる。
1996年よりWebサイト「しろはた」（http://ya.sakura.ne.jp/˜otsukimi/ ）を運営。『新世紀エヴァンゲリオン』をネタにした「日刊アスカ」は一部に多大な影響を与えた。2004年に「キモメン王国」の建設を宣言し、モテない男達の聖地となっている。現在は脳内の妻や妹との会話を中心にコンテンツを更新中。
最近の企画・執筆に、ムック『魁!録画塾』『妹ゲーム大全』『鬼畜ゲーム大全』（インフォレスト）、書籍『妹★コレクション』（二見書房）などがある。
ちなみに「本田 透」というペンネームは某少女マンガが連載される前から使用している。